その背に黒の羽根を

Nerine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その背に黒の羽根を

【Ｎコード】
Ｎ１２３８Ｙ

【作者名】
Ｎｅｒｉｎｅ

【あらすじ】
「力を貸してくれるかい？」　捻くれ少女の前に現れた１人の男。彼の頼みは、救世主でありながら悪になれという、死しか残らないようなものだった。求める立場は共犯者。しかし、真っ赤な世界で地球の為に戦うことを選んだ彼女は、旅の途中で気付いた。青い星がとっくに異世界となってしまったことを。だったら、と悪魔は囁く。「嫌いだから壊し、必要だから壊し、気に入らないから壊そう」と。精霊と人間による過酷な戦い、と単純に言えればどれだけの存在が嘆かずに済んだのだろうか。これは、とある世界で語られるべ

きだった歴史の奥の真実を辿る物語。（異世界トリップファンタジー）　＜1／7　あらすじ変更しました。＞

※所々、人道的・道徳的に露骨な描写の場面が出てきます。
苦手な方は、ご注意下さい。

プロローグ

物語によくある、主人公が突然異世界に行っちゃう所謂トリップ。
そこでは大抵、何か主人公に役割とか秘めたる力があって、仲間に出会って物語が進んでく。

そして最終的には、役目を終えてめでたしめでたしとか、誰かと愛し合ってめでたしめでたしとか、元の世界に戻れてめでたしめでたしとか。

とにかく、その主人公は状況も分からずに強制的に巻き込まれて、でも、徐々に覚悟を決めて冒険をしていく。最初は疑われたとしても、結局は聖女とか救世主とか謡われて。

まぁ、王道だよね。私も好きだよ、そういう話。

ただ、現実に自分に起こるなら絶対にごめんだ。

だって、あまりに贅沢じゃないか。争いの中でも自分の手はあまり汚れず、贅沢だ。

そもそも、自分の世界に関係が無いなら、私にしか出来なくてもお断りだね。だって、訳も分からず突然呼ばれて勇者になってくださいとか言われても、今までの生活全てを奪った相手にいいですよって言える?どんだけお人よし、いや、馬鹿だよと。

だから私は、例えそれで世界が滅んで、自分が巻き込まれたとしても絶対に頷かないね。

そう、私はそういう人間だ。俗に言う、可愛気の無い女。まぁ、私の場合それ以上のレベルだけど。

兎に角、何が言いたいのかというと、王道じゃなくて良かったってことと、楽しみだってこと。

なってやろうじゃん、世界に追われる破壊者ってやつに。何も知らない奴らを嘲笑いながら、ただ自分の為だけに。

残念ながら、正義感とか使命感とか、そんな大それたモノは持ってないんでね。

そして、屍の上で私は歌う。

『私は私の為に私を捨てよう
後ろ指を差され
石を投げられ

刃を突きつけられても

共犯者には償いを求め
他人には嘲笑いを与えて
私の手は赤く
背には醜い黒の羽根が

捨てるは己
手に入れるは、全てだ』

つまらないのは、満たされているからだ

今日もまた平凡な1日が終わる。

周りがざわめきながらこの後のことを相談し合ったり、ただ笑い合ったりしている中、1人ごちて鞄を手に教室を出る少女が居た。

名を河内紗那（かわうちさな）という少女は、いつも通りファミレスのバイトに励んで、21時には上がり22時には家に帰り着く。

日本人の特徴である黒い髪は腰まで長く、瞳も同じく黒い。一般レベルの高校の2年生として学校に通う、本当に普通の少女であった。ただし、少しばかり複雑な家庭で、尚且つ少し独特な性格と体質を持ってはいるが。

バイトで疲れた身体を引きずりながら暗い家へと辿り着くと、紗那を迎えたのはリビングのテーブルの上に無造作に置かれたお金だった。

「律儀なのか、なんなんだか。わざわざ預け入れなきゃいけないこっちの身にもなってほしいわ」

というか、こんなにあっても困るんだけど。そう言いながらそのお金を手に取った紗那は、暫く黙ってそれを見ていた。

彼女は父親と母親、そして自分の3人家族であった。過去形であ

るのは、当の昔にその両親は家に寄り付かなくなり、今やその繋がりは金銭面だけだといえるからだ。
しかし、それを悲しいとか寂しいとか思わないのが、紗那という少女である。

本人はそれで良いと思っているし、むしろそう思うのがダメなのだろうかと疑問に思っている程。

つまんない奴、可愛げのない奴、可哀想な奴、寂しい奴。

紗那と関りを持った人は、決まってそう言う。彼女にも少なからず友達はいて、関係を持った異性だっていた。しかし、現在それは全て思い出であり、他人になってはいるが。

「お風呂、入ろう」

高校生が持つには聊か多すぎる金額を財布へと仕舞った紗那は、荷物を無造作に近くのソファーへと置いて風呂場へと向かった。
そうして脱衣所へと辿り着き、制服を乱雑に洗濯機の上へと放りながら考え事をする。

子供の頃はそれなりに愛嬌のある普通の子ではあったが、今ではあまり表情が出ない。年々、両親の仲が険悪になっていくのと同時に真逆に成長していったのだ。

しかし、それが関係していたのは明白だったが、本人曰く原因では無いという。やっと素でいられるようになった、というのだ。

色々な人に聞き飽きるほど捻くれてると表される子ではあったが、紗那はそんな自分が嫌いではない。

ただ、最近何度も思い出すのが、高校生に上がる少し前、近くの公園で出会った人物。その人だけが、紗那を優しい子だと言っていた。

『君は、優しさというものをちゃんと分かっているんだね』

そう言って、無駄に整った顔で笑っていた。

ほんの数日前まで忘れていた記憶だというのに、何故かここ最近、その人物の記憶ばかりが紗那を占める。

全裸になり、シャワーを浴びて1日の汚れを落として、その間に溜めていた湯船に身体を沈めながら、紗那はうーんと唸った。

「確か、この世界を好きかと聞かれて……」

本人にとって、この行動は無意識であった。

気付けば何故か、記憶を掘り起こして唸る毎日。まるで何かの前兆のようだ、と感じている。

「色々話した最後に、何だっけ。んー？」

チャポンっと目の前の水を無意味に掬いながら、さらにその人物の会話を思い出そうと頭を捻る。しかし、一番重要な部分を思い出せずにいた。

仕方なく、その人物の姿からおさらいしていこうと、掬った水を戻して鼻の下まで身体を落とした。

ブロンドの肩までかかる綺麗な長髪に、透き通るようなブルーの瞳。正確な身長は知らないけれど、細身の身体付きが印象的だった。ただ、そこらの俳優よりも格好良い容姿のくせして、口調がなよなよしているのが紗那には勘に触って苛々した覚えがある。

「ひっさしぶり～ん。いっやぁ、見違える程に育っちゃって、まぁ！」

紗那は思考の海に沈みすぎていて気付いていなかった。ただ1人であったはずの風呂場で、自分以外の声が響いたことに。

「それで、君ならとか何とか言われて、確か最後に」

「もし僕に限界が来たら、力を貸してくれるかい」

喉元まで出かかっていた答えが突然他者により告げられはっとした。

そうだ、そう言われたんだと瞠目する。だけど、深入りすれば後戻り出来なくなる気がして、追求しなかったんだと当時の心境も思い出した。

「今でも、この世界は好きかい？」

何故ならあの時も、こんな風に寂しく笑っていたから。

と、そこでやっと、紗那は自分の思考の可笑しなところに気付いた。はたと目を瞬き、ゆっくりと横に視線を向ける。

「やっほ～。やっと気付いたぁ？」

「は？　……はぁ？！」

驚きに思わず立ち上がり、口をぱくぱくさせて言葉にならない声を上げながら指を差したその先には、今の今まで紗那の頭を占領していた人物と寸分違わない男が居た。

ただし、浴槽の縁に顎を乗せ、明らかに鼻の下を伸ばして沙那の身体を上から下まで隅々観察していたが。

「女の子の成長は著しいねぇ」

「っ！？　こんの、変態！」

そして、男が発した言葉に自分の姿を思い出し顔を真っ赤に染める。

次には叫びながら、素晴らしいフォームで繰り出された右ストレートが、男の顔面へと炸裂した。

「うぼぅふっ！」

嫌らしい視線に思わず出た手がしっかりと現実だと教え、でも羞恥が大きすぎたからか、沙那は混乱していてしっかりとした思考が出来ない。

「あぁ！　お風呂に鼻血が！」

風呂場には、紗那のズレた悲鳴が響き渡った。

再会は崩壊への幕開け

「なんであんたがここに居るの?!　しかも、風呂場!」

「いや〜、良いパンチだったなぁ。でも普通、あそこは平手でしょ〜ぅ」

リビングには、かなりの温度差のある2人による会話が繰り広げられていた。

あの後、紗那は男が気絶している間に慌てて風呂場から脱出し、服を着てリビングに避難をした。しかし、そこには気絶していたはずの男が暢気に寛いでいる姿があったのだ。

確かに、手加減無しで顔面ど真ん中を殴りつけた筈なのに、その顔には傷が全く無かった。

「とにかく答えろ!」

只でさえ状況が掴めないというのに、男ののらりくらりとした調子に会話は儘ならず、紗那は苛立ちで普段では有り得ない大声を上げる。

しかし、男はゆったりと笑ってソファに座っているだけで答えようとはしない。

このままじゃ埒が明かないと、紗那は深い溜め息を吐いた。

「……はぁ、もう良い、分かった。取りあえず家から出て行け」

玄関を指差しながら、心の中では警察を呼ばれないだけマシだと思えと悪態をつく。しかし、返ってきたのは予想外の言葉だった。

「呼ばないのは面倒くさいからでっしょ～？　嘘は駄目だよん、嘘は」

「だって、被害届けとかなんだとか――　え、いや、そうじゃなくて！　あんた、今……」

ソファの背の上に肘を置き、仁王立ちしている紗那に身体を向けて男が言った言葉は、確かに正解だった。紗那は、情け以前に手続きが面倒くさい理由で通報をしたくないと思っていた。しかし、それを言葉にしていない。

出会った当時も、男に対して胡散臭さを抱いていたが、今はそれ以上に可笑しいとやっと気付いた。

驚愕とも恐れとも取れる表情で震える唇からは、何も言うことが出来ない。

変な話ではあるが、紗那のとある理由で絶対の自信が持てる危機察知能力ともいえるもので男に警戒はしていない。

しかし、紗那の家は高級といってもおかしく無いマンションの為、セキュリティーがかなりしっかりしている。まず不法侵入出来ない造りであり、しかも戸締りもしっかりしていて、さらには風呂場に

どうやって入ってきたのだろうか。
家そのもの自体に入れたとしても、風呂場に入ってこられたらさすがに思考の海に沈んでいてもまず気付くだろう。なのに、音すら聞いた覚えがなかった。

そんな紗那の戸惑いが分かったのか、男はしてやったりと哂う。
そして、自身の隣をぽんぽんと叩いて座るように促す。

戸惑った末、紗那は男から離れてソファぎりぎりの位置にゆっくりと腰を下ろした。

「……何の用？」

暫く、落ち着く為にか唇を浅く噛み視線をさ迷わせ、こめかみをとんとんと叩いた紗那は、ぽつりと睨み付けながら男に言った。

今度は、逆に男が瞠目する番だった。紗那にしてみれば、当然の問い。危険が無いと判断した上で男がこの場にいるのは、どう考えても自分に何かしら用件があるからだと考えたのだ。しかし、男からしてみれば、簡単にそこに辿り着けるその精神が不思議である。

「君は、変わる所か更に強くなったみたいだね。嬉しいけど、残念だよ」

そして、どこか悲愴を漂わせる表情で、のらりくらりな喋り方ではないものでそう言った。それが、紗那には意味深な言葉に感じられ、再び混乱を抱かせる。

その姿は、出会ったあの時と同じであった。

変わったのは、自分の身体が縦に成長したぐらいである。悔しいかな、男は著しい成長と言ったけれど、紗那の体型は年齢にしては凹凸が少ない。いや、少なすぎる。

自覚している身にとって、気にしていないとは言ってもコンプレックスに感じてはいたことであった。

だが、目の前の男は記憶と何もかもが同じであった。見た感じ20代後半に思えるので、2年以上経っていても成長は止まっていて当然かもしれないが、服装すらだ。

尚更胡散臭さが増した。そんな事を思われているというのに、男は気にした様子もなく、黙って紗那に視線を向けている。

しかし、男は徐にソファの前のガラステーブルの上にあったテレビのリモコンを手に取り、えらくゆったりとした仕草でその電源を入れた。

すると、当然部屋にはテレビからの音声が響いていく。

わざとらしくゆっくりと、数字の通りにチャンネルを変えていく画面を、紗那は怒ることなく見つめた。

『次は、世界中で多発する自然災害についてのニュースです』

と、男の手が一つのニュース番組で止まる。

途端訝しげに眉を顰める紗那だが、男はまだ何も言わない。

『アメリカでの竜巻、オーストラリアでの山火事等に続き、昨日中国で大きな地震が発生しました。幸い、日本への津波の心配はありませんが――』

それは、最近不自然な程頻繁に発生する災害についてのもので、現在世界中で最も注目されている話題についてだった。
専門家の中では、地球滅亡の危機だなんだと騒いでいるらしい。

しかし、だから何だというのだろう。何か用があるのかと言って、答えのないままにこれを見せられるが、まさかこんなものが関係するとは思えない。

しかし、心の中でそう思い至った直後、だから何だという憤りを込めて男を見れば、バツが悪そうに眉を下げて苦笑していた。

「えへっ！　察しが良いねぇ」

「……はぁ」

男に常識は通じないのだろうと薄々思ってはいたが、だからどうしろと言うのだ。自分はただの女子高生であり、男が会いに来たのにはこのニュースが関係していたとしても、出来る事は何も無い。

しかし、男が何事もなく去るなんて考えられず、紗那は深く深く溜め息を吐いて目の前に手を翳し、待ったをかけて立ち上がった。

「え、聞いてくれるの？　って、ちょっと～、何処行くの～ぅ？」

「コーヒー淹れるの」

頭を抱え、ふらふらとした足取りでキッチンへと向かう。
背中では男が何かを言っているが、兎に角今は落ち着ける何かが欲しいと紗那は思った。結果、大好きなコーヒーを淹れることにしたのだ。

インスタントコーヒーを用意して、常備しているポットでお湯を注ぐ。かなりのコーヒー好きである紗那は、豆から挽いて淹れることの方が多いのだが、今日ばかりはその元気が無いらしい。

立ち上る湯気からは、いつものには劣るが、それでも良い香りがする。

「わ～、僕のぶ」

「で、私に何をさせたいの」

手に持つカップは当然1つ。それが分かっていながら催促してくる男を無視して再び座り直した紗那は、一刀両断そう問うた。

「聞いたらもう、後には引けないよ？」

その瞬間、男からも紗那からも、いい加減な雰囲気は消え去る。真剣な顔で聞き返してきた男に、紗那は笑った。

「でも、あんたにはもう私しかいないんだろ？」

この時にはもう、紗那の心は決まっていたと言っても間違いではないだろう。彼女は、得体も名も知れない変態の為、全てを守ろうとして破滅に導いた、弱くて怖がりな男の為に悪になる道を選んだ。

出会った時とは違い、男が浮かべる笑顔が苦しみからだと気付けない程、紗那は餓鬼ではなかった。

「君は、異世界というものは存在すると思うかい？」

紗那の言葉に目を見開いた男は暫く固まり、目元をふっと和らげた。

そして、そう言う。

「そりゃまた、いきなりだね。でもまぁ、別にあっても不思議じゃないでしょ。」

今度は紗那が思案し、自信なさげに答えた。当然だろう、異世界とは本の中のファンタジーだ。こんな真面目な場面で出てくる言葉とは思えない。

でも、紗那は馬鹿にするでもなく、考えて答えを返した。

世の中は自分が見たものだけが全てではないんだと、教えられるまでもなく知っているのだ。

狭い世界に浸っていれば、狭く感じて当然だ。だけど、紗那にとって自分の世界は狭くとも、それに浸ってる気は無いので世の中は広い。

何故なら、好きなもので溢れているから。たとえ、愛は知らなくとも好きで溢れている。

「ははっ、とにかくこれ読んで。その間に、僕はお風呂で寛いどくから」

「待て待て待て。大事なことに手を抜くな」

好きなものを思い浮かべ、自然と微笑む紗那に男は目を細める。

そして、彼女の出した答えが嬉しいのか、小さく笑い声を上げた。

しかし、あろうことか男は、異世界があると言った次にはＡ４サイズの３枚の紙を紗那に手渡して立ち上がる。
慌ててあげたつっこみも無視して、勝手知ったる他人の家よろしく颯爽と風呂場へと行ってしまった。

「……はぁ。まあ、良いや」

怒っても無駄だと悟った紗那は、ふぅっと息を吐いて頭を抱え、少しばかりぼーっとした。でも、それは本当に僅かの間で、よしっと小さく声を出して気合を入れて立ち上がり、新しくコーヒーを入れ直して放置してあった学生鞄から適当なノートとペンを取り出す。

そして、先ほど渡された紙とそれらを持ち、ダイニングテーブルに移動した彼女は、溢れる疑問や要点を素早く纏められる用に手にペンを持って、クルクル回しながらとうとう紙を読み始めようとした。

しかし、いきなりだんっと全力で机を叩き、どすどすと足を踏み鳴らしながらかなりの速さである場所へと向かった。

ばたんっと壊れるぐらいの勢いでドアを開けば、そこにいたのは見覚えの無いアヒルの玩具で遊びながら湯船で寛ぐ男。

「読んで欲しかったら、耳障りな鼻歌を止めろ！　集中できないから！」

「きゃあ～～！　変態っ！」

「ソレ、千切るよ？」

「ごめんなさい」

繰り広げられたのは、なんていう漫才とつっこみたくなるようなやり取り。

冗談の通じない紗那の鬼の形相に恐れを為したのか、男が全力で謝れば、次は無いと静かに言って扉は閉められた。

どうしてか、見られた男の方が顔を赤らめて悶えていたのは余談としておこう。

悪魔が笑えば、

『愛しの紗那ちゃんへ☆』

始まりは、なんとも脱力する言葉で書かれていた。
しかし、量はＡ４サイズの紙に機械的な言葉でびっしりと、そして内容は紗那が想像していた以上に複雑でシリアスなものだった。
こんなものを口じゃなく、文面で伝えてくれたことに紗那は結果的に安堵する。

「頭、パンクしそう」

気付けば、当に日付が変わっていた。あまりの衝撃に立つこともできず、肘を立てて頭を抱える。
だけど、意外にも疑問や質問はあまりなく、横のノートはほとんど空欄だった。

書かれていた内容は、今現在の状況とこのままでいけば辿ってしまう結果。そんな情報ばかりだったのだ。

「問題なのは、私にどうして欲しいかだね」

とはいっても、だいたいの予想はついている。文面からは、準備

をさせようとしているのが見て取れていた。

「とにかく、まずは頭を整理させなきゃ」

だからといって、動揺や混乱をしないわけではなく、むしろスケールが大きすぎてキャパシティーオーバーであったりはするが。

紗那は、男が未だ戻ってこないのは、まるでこちらを窺っているようだと感じながらも、自分なりに紙の内容を纏めることにした。

男の言っていた異世界は「アピス」という名で、そこは地球と似たサイクルを持つ存在らしい。

しかしアピスでは、地球には無い所謂魔法が存在し、人々の生活の要となっている。さらに、地球が自然サイクルを基盤としているように、アピスでは精霊という存在と量が基盤になっていた。

魔法はその精霊の力を借りることによって使え、それぞれの属性を持つ。火や水といった、地球で伝説・伝承とされる精霊のイメージで良いと言える。

渡された紙には、そのアピスについてと、そこに築かれている国の大まかな世界情勢等が延々と書き連ねられていた。

「めちゃくちゃファンタジーじゃん。あれだね、妄想力を侮ってたわ」

ただ、紗那にしてみれば、これだけであればそんなのもあるんだな、程度で終わっていただろう。重要なのは、そこから先である。

そのアピスでは今、精霊がどんどんと数を減らして危機的状況に陥っているらしい。原因は単純明確、人間の争いにより大地が血に染まったからだ。

精霊は穢れに滅法弱く、どこの世界でも、人間は欲に溺れて争いを生み出すのだろう。そのせいでバランスが崩れ、世界が崩壊するレベルにまで陥った。

しかし、ここまできても、紗那にしてみれば他人事である。いや、地球からすれば他世界事だ。

ただそれは、地球とアピスが一心同体な関係でなければ、だが。

男というか文面曰く、アピスが消えれば地球も消える。それが、あの謎に多発していた自然災害の原因であった。

こんな事を信じる奴の方が神経を疑われる。いくら異世界があっても不思議はないとは思えても、だからといって、一心同体な世界が滅亡しかけてるせいで地球も危なくなってますよと言われて信じられるか。答えは否だ。

だが、紗那には男がこんなスケールのでかい嘘を言って自分をどうしたいのか見当はつかないし、そもそも男自体に説明できない行動をされている。

「読んでくれた～？」

取りあえず文面の情報に整理が出来た頃、見計らったかのように男は戻って来た。

人の気も知らずに暢気に冷蔵庫のミネラルウォーターをがぶ飲みする姿に、紗那はこれでもかというぐらいに殺意を覚えるが、そこはぐっと我慢をした。

「んで、私は何をすればいいの？」

代わりに、紙の上から机をコンコンと指で叩き説明を求める。

「いいの？　君のことだから、大体の見当はついたんでしょ～？」

「見当は、ね。でも、具体的な事は全然。だから、結論はだせないし、そもそもあんたの考えが分からない」

分かっているのは、どういった理由にしろ男が自分を選んだということだけだった。だからこそ、紗那には話を聞く権利がある。

その上で決定を下していくのだ。何を選び、どう覚悟をするのか。

仮にこれが下手な冗談であれば、紗那は男の綺麗な顔を原型を留めないぐらい殴ってやろうと決めていた。部分的に嘘が含まれているならばそれ次第で、地球が関係あるのかどうかという一番重要な部分が万一嘘であったなら、生きるのが嫌になるぐらい痛めつけて殺してやろう、とも。

「うっわ～、やりかねないねぇ」

気配を察したのか、はたまた心を読んだのか。男はひきつった顔でそう言った。そして、紗那の向かい側に腰を下ろす。

「さて、結論からいうとね？」

「タンマ。その前に、ひとつ」

肘をついて手を合わせ、顎の下へともっていった姿は異様な程絵になり、男の瞳からは今までにないぐらい素晴らしく真剣さが溢れていた。

しかし残念なことに、そう、凄く残念なことに、だ。

紗那は大きく溜め息を吐いて、その倍息を吸い込んだ。

頭の中で、こいつのシリアススイッチは何処ですかと、誰に問うでもない質問をしながら。

そして、腹に力を込めて叫ぶ。

「いい加減、服を着ろっ！」

「うへ？あ～、忘れてたぁ」

ヘラヘラ笑いながら自分を見た男は、腰にタオルを巻いただけの姿だった。

「あぁもう、ここが家なのに無性に帰りたい」

紗那が思わず零した愚痴には、同情を禁じ得ない。

「さてと、こっからは真面目にいこうかなぁ～」

しかし男は対してダメージを受けず、紗那が不憫に思える。しかし、本人は気付いてはいないが、自分でも自覚しているはずの無表情っぷりが、男の前では普通の少女と変わらないものになっていた。

男はサッと片手を軽く払う動作をした。すると、ほぼ裸であったのが一瞬で服を纏う。すっと細まった視線に、紗那も自然と同じものになる。

男もどうやらふざけた”フリ”を止めたらしい。

それが分からないほど紗那は無頓着では無いし、元々人を信用しない性格でもある。

「まずは質問、あるかな？」

「世界の仕組みとか情勢に疑問を持ったところで、どうでもいいし何の意味もない。質問は、全部聞き終わってからじゃないと意味がなさそうなのだけだし、後でででいいよ」

その答えに満足そうに男が頷いた次の瞬間、世界は一変した。

見慣れた部屋も、今の今まで座っていたテーブルも、飲みかけで冷めてしまったコーヒーも。何もかも、全てが。

目が痛くなるほどに真っ白で窓も扉も一つも無い、まるで延々と続く空間の様な部屋へ。部屋だと思えたのは、男が斜めに身体を倒した、寄りかかる体勢をしていたからだ。

「確か一度も、名乗っていなかったね」

男の服装も変わっていた。黒いズボンに白いシャツという格好だったのが、今では頭に月桂樹の冠をし、物語に出てくる神官のような真っ白い1枚の布のような服。その姿で、男は微笑んだ。

紗那にとって吐き気しか感じない、何もかも優しく包みこむような慈愛の満ちたソレ。

「私は君達人間に、神と呼ばれる存在だ。君は、選ばれた」

交差した視線の中で、紗那は内から溢れだしてくる感情に呑まれていった。

止めどなく、大量に溢れてくる感情。

気持ち悪い。

きもちわるい。

キモチワルイ。

気付けば拳を力の限り握り占め、激しい嫌悪をそのまま視線に宿す。

「分かった、帰る。今すぐ、ここから、家に、帰してっ！」

怖気づいて出た言葉では無い。腹が立ったからだった。それはもう、身体が震えるぐらいの怒り。

しかし、紗那がどれだけ激しく睨み付けても、自称神様は微笑んだままだった。

「どうして？」

身長の差で見下ろされた視線は慈愛に満ち、綺麗なバランスの良い血色の通った口を少しばかり動かして、そんな質問をしながら。

神様は、紗那を試そうとした。

「そんな下らない質問をして馬鹿な真似をするのなら、私は帰る」

「君じゃなきゃ救えなくても、かい？」

それに対し、紗那は鼻で笑った。

私に責任は無い、もしそうなら選んだカミサマが悪いのだとのたまう。

紗那は偽善者でも、優しさに満ち溢れる人間でも無かった。でも、誰がそれを責められようか。

いくら自分のせいで人が死ぬかもしれない、見捨てる気かと詰め寄られたところで、はっきり言って関係無いのだ。しかも、目の前でそれを見せ付けられるならまだしも、知らない場所で知らない人間が。

自覚も、現実味も、問題の重要性を感じることも、平和な日本で暮らす少女にそれを求める事自体間違っているといえよう。

しかも、お人よしな性格であったならまだしも、紗那はそれとは程遠い、寧ろ悪いと言われる回数の方が多い性格をしている。

「もう一度言う。こんな真似をして私を試すのなら、帰せ」

試されるのは何より嫌いで、見下されることにも腹が立つ。

しかし、今にも殴りかからんばかりの怒りを抱えている紗那に、カミサマは更なる追い討ちをかけた。

「じゃあ質問を変えよう。ここに来た時点で拒否権がなければ、ど

うする？」

瞬間、紗那の目が零れんばかりに大きく開かれた。

我慢の苦手な彼女にとって、今が限界である。これ以上の”戯言”を聞かされればきっと、神様であろうが関係なく拳が飛ぶだろう。

「たとえそうでも、結局動くのは私だ。拒否しても強制されたなら、たとえ世界が滅ぼうと、自分が巻き込まれようと、私は動かない。絶対に！」

そして、鼻で笑ってやるんだ。私を選んだお前に、ざまーみろと。

紗那はそう言って、怯むことなく笑った。それは平凡な女子高生がする顔では到底なく、まるで悪魔のように妖艶で歪んだ姿であった。

「くっ、あはははは！いや～、やっぱ最高だよ！」

剣呑とした雰囲気は、カミサマの発した大きな笑い声に消失した。それこそ大口を開け、笑いすぎて咳き込んだり引き笑いになったり、しまいには床を叩いて悶絶する始末。

結局、カミサマはしっかりと紗那を試し、そして見事に合格をした。してやられた紗那は当然怒り、未だに笑い転げるカミサマにつかつかと歩み寄る。

「っち、逃げんじゃねぇよ」

「いや、ほんと、ごめんって～！」

繰り出した拳は、寸前で危険を察知したカミサマに避けられて空を切る。慌てて弁解を始めるも、紗那の怒りは収まらなかった。

「でも、仕方無いじゃないか。これは僕のというより君の為。君が生き残れる可能性を図る為のものだったん――痛いっ！」

「一発逃げたからって油断するな。」

追撃が見事、カミサマの右頬に命中する。だが、風呂場でのもの

に比べればその威力は可愛いものだ。

２人の間にはいつの間にかテーブルとイスが現れていて、カミサマは殴られた部分を擦って容赦がないな～と文句を言いながらも座るように促す。

白いこの部屋では当然それも白であり、どういう原理か影が見えなければ視覚では捉えることが出来なかっただろう。促されるままに座った紗那は、何故自分の影は無いのか疑問をもって頭を捻りながらも、目の前に腰を下ろしたカミサマへと視線を移した。

そこにはもう気持悪い微笑みを携えた者はおらず、代わりに申し訳なさ満点の苦笑が浮かんでいた。

紗那は聞き零してなどいない。カミサマは確かに、生き残れる可能性を図る為と言っていた。それは逆に、これからの選択の先には死が伴い、さらに危険性が高いということだ。

その真意を今、カミサマは告げようとしている。

しかし、それだけではまだ足りないと紗那は呟く。決断に必要な情報がなさすぎる、と。

だからだろう、紗那は先ほどとはまた違う挑戦的な笑みをカミサマに向けた。

「僕は、崩れ始めたのをただ見てたわけじゃない。なんとか抑えようと、今まで全力を尽くしてきた」

カミサマはぽつりぽつりと、本当に悔しそうに言葉を落としてい

く。それを、紗那は無表情で聞いていた。

「でも、限界だった。残る手はもう、1つしかない」

「最後の手段で、あんたが一番避けていたものだね？」

それを言うと、カミサマは頭を押さえて項垂れる。それでも紗那は微動だにせず、淡々と思った事を口にした。

隙間だらけの作りかけのジグソーパズルにピースがどんどんとはまっていく感じで、穴だらけの予想が埋まっていった。

それに対しカミサマは、君は本当に聡明だねと呟いた。しかし、その顔はどこか残念そうで、褒めているとは思えない。

そういった態度は、紗那にとって苛立ちしか生まなかった。

「君にだけはさせたくなかった。君は僕の一番のお気に入りで、好きな子だから。でも、君以上に相応しい人間が見つからなかったんだ」

ただ、この言葉だけは、紗那にも込められた気持ちが分からない。その好きはラブなのかライクなのか、ラブだとしても、それは異性に対するものか、はたまた子供に対するものなのか。

もしラブだとしても、紗那にとってその感情はどうでもいいことであるので、結果意味のないものになってしまうが。

ただ不思議と、なんとなくだが異性に対するラブだと感じる。しかし、聞いたとしても答えが返ってくることはないだろう。

「僕にとって、2つの世界は全てなんだ」

「そして世界も、あんたが全て」

先程の言葉に紗那は結局反応を示さず、話は確信へと迫っていくように思えた。

紗那は自然と、そういう答えを導き出している。自分達は、彼を殺すことで今を生きていられるんだろうと。

だけど、今まで聞き手に回っていた紗那は、ここに来て頬杖を付きつつカミサマに問いかける。

「ねぇ、私に何をして欲しいの？」

あまりに冷静で冷めた問い。だが、紗那が知りたいのは、カミサマの気持ちや今までの苦労では無い。

何をして欲しくて、何をするべきで、どういった方法で、どんなリスクがあるかどうかだ。

隠すのも言い逃れも、誤魔化しも後回しも当然許しはしない。それに、中途半端な態度が寧ろ、辿り着く最期を明らかにしてしまう。

「君に、世界を救って欲しい」

カミサマはたじろぎながら乞う。

「どうやって？」

しかし、間髪入れずの言葉に目が泳ぐ。それを見逃すような馬鹿はここにはおらず、カミサマは知らずぐっと拳を握った。

「アピスに全部で１０ある精石を、残らず全て壊して欲しい」

「それはどういったもので、どんな役割があって、どれ程の価値があるものなの？」

また返ってきたのは、応否ではなく問いだった。一体、このような場面でこんな行動が出来る少女が地球とアピス合わせてもどれ程いるのだろうか。

どんな人生を歩み、どんな経験をし、どのような目で世間を見れば、ここまで冷静に物事を判断しようと思えるのか。

正直、人間味が薄いとも感じるが、しかし、カミサマは紗那がこういう少女だというのを知っている上で選んだのだろう。それ自体には驚かず、寧ろ彼女のお陰でこの場が成り立っていると思っているかもしれない。

そして、カミサマはおずおずと、今の質問に答える為彼しか知らない歴史を語り始める。

だがそれは、紗那にとって実に下らなく愚かとしか評価出来ないものであった。

それは遥か昔に交わした契り。始まりの詩。

人々がまだ固い石の上で寝起きし、命懸けで食を求め、本能で子孫を残していた時代。そこは、精霊に満ち溢れていた。

人は精霊に感謝し、精霊は人を愛し、そうやって命は巡った。

そしてある時、それぞれの属性の中で最も力をもった精霊たちが、人間にある祈りを抱いた。愛を、形として与えた。

――愛する命よ、その幸せが永劫であるよう、豊かさが心を満たし続けるよう、我等を捧げる。

精霊王とよばれるその精霊達は、代わりにとある約束を結ばせた。

――我等の一部である精霊達を、決して穢れに染めてはならない。あれらは、我等であり世界そのもの。これを違いし時、全ては無に帰し、柱は崩れる。

そして１０の精霊王は、１０の精石へと姿を変え、約束通り人々に豊かさを与えた。

水は、枯れることのない癒やしを。
大地は、溢れる優しさを。
雷は、発達した技術を。
陽は、満ち溢れる勇気を。
海は、雄大な糧を。
空は、自由な翼を。
風は、屈しない心を。

星は、導きを。

そして光が希望を与え、闇が包容した。

次第に人々は国を築き、しかし徐々に豊かさに溺れた。人は、たった一つの約束を違えたのだ。

そして今、終わりを迎えつつある。

契りを忘れ、それに気付くことなく、ただただ、欲に支配されながら。

それを彼等は嘆く。我等はただ、愛していただけだと――

「人間は約束を違えた。だからもう、精霊王が精石である理由は無い。人間が豊かさを求める資格はもうないんだ」

そう長くはない話を終え、カミサマは深く息を吐きながら静かに涙を落とした。

透き通るようなブルーの瞳から零れ出る透明な雫は、きらきらと輝

きながら陶器のような滑らかな肌を伝い白いテーブルを音もなく叩く。

その姿は名画の様に美しく、しかし紗那の目には酷く滑稽で無様に映った。

何故なら、精霊王が豊かさを与えた理由は至極下らなく、そもそも求めることに資格など必要ないと思うのだ。

単純に、精霊王は過ちを犯しただけで、カミサマは分かっていなかっただけ。

そう紗那には感じられ、呆れた感情しか浮かばない。

「下らない。だから何だっていうのさ。あんた達はただ認めようとしないだけで、現実から目を背け続けた結果、後が無くなっただけじゃない」

同情も労いも無く、紗那は当然の如く吐き捨てる。しかしそこで、カミサマが初めて感情を顕わにした。今の今までは、いかに紗那をその気にさせようかという思惑を感じる行動ばかりだったというのに、整った顔を怒りで赤く染めてテーブルを叩く。

「裏切ったのは、君達人間じゃないか！！　人間のせいで、世界は危機に陥ってるんじゃないか！！　それを下らないだと？　僕がどれだけ必死だったか！」

それだけ努力し頑張ったということなのだろう。しかし、紗那にとってみればそんな言い分通用しない。彼女はアピスの人間では無く、寧ろ地球の生物は全面的に被害者なのだ。仮に地球での温暖化、環境汚染、そういったものも世界を蝕んでいたとしても、今回に関

しては無関係といって可笑しくないだろう。

だから、紗那にしてみれば自分の言葉が図星で、恥ずかしくて、悔しくて、悲しくて、認めたくなくて。だから、みっともなく喚いている様にしか受け取れない。

それに、今必要なのは誰が悪いだとか、誰の責任だとか、誰のせいだとかじゃないだろう。カミサマは、何一つ見ておらず、分かっていないのだ。

それでは気付けないし、認めなければ先へ進めるわけがない。

「だとしても、私には関係ないね。確かに人間が元凶だけど、きっかけを作ったのは精霊王で、それを黙認していたのならあんたも立派な共犯だ」

なんて冷たい言葉を吐くんだ。何も知らない第三者であれば、紗那を責め立てたかもしれない。しかし、紗那に迫られている選択は、そんなことを気にしていられる次元ではない。今ここでカミサマを慰めたところで、世界は絶対に救えないのだ。そして、何も抱くことができない。

「私が、共犯？　……ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！！」

逆上したカミサマはさらに怒りを増し立ち上がり、避ける間もなく無抵抗な紗那の胸倉を掴んだ。そして無理やり立ち上がらせ、テーブルに押さえつける。

衝撃で背中に痛みを感じ、紗那は顔を顰めた。

何も捨てれず、何も見ず、それでは何も背負えないというのに。

綺麗な顔は醜く歪み、自分を見下ろしてくる視線は射殺さんばかりに鋭い。だけど紗那は、変わらず冷めた目を向けるだけだった。

自分が間違っているとは思わない。たとえ殴られようと、それこそ殺されたとしても、今の言葉を撤回する気はないという強い意思が込められた目。

求めるのなら失う覚悟を、守るのなら奪う覚悟を。その覚悟が何も無いから喚くしかできないのだ。そう、赤ん坊のように。

しかし、紗那が相対しているのは、決して赤ん坊では無いのだ。

「いい加減にしろ！！　失う覚悟も、奪う覚悟も、見捨てる覚悟も何にも無いあんたが、何かを求めるなんて烏滸がましいにも程があるんだよ！　何が違うっていうんだ。今のあんたは、欲に溺れた人間と何も変わらないじゃないか！」

負けじと掴んだ胸倉を引き寄せ、唇が触れ合うぎりぎりの距離で吼える。

紗那が願うのは、起こった事実と行ないを認め、その上でやるべき事を決めるということだった。

後悔や懺悔を慰めるなんて後からいくらでもできる上、自分がやる必要は無い。

なのにだ。精神はどろっどろに甘く、足場はぐらっぐら。そんな相手と下らない堂々巡りを先ほどから繰り返し、結果時間だけが過ぎていく。

本人からしてみれば、怒り狂いたいのは自分の方だと憤慨したいぐらいである。

身体を支えてくれているのは背中で足は空中で揺れ、しかも胸倉を容赦なく掴まれているせいで感じる息苦しさからいい加減解放さ

れたかった紗那は、全身でカミサマを突き飛ばした。突然の衝撃に対応できなかったのか、カミサマは覚束ない足取りで彼女から離れる。

起き上がった紗那は、締められていた喉を擦り小さく咳をしながら、片手をテーブルに置いて体重をかけた。

カミサマは、更なる叱責がくるだろうと思っていた。
数度咳をして呼吸が落ち着いたのか、鋭い視線が彼へと向く。

しかし、予想に反して掛けられた言葉は、優しく切なく響いたのだった。

「大丈夫。私が染まるから。だからあんたの気持ちを、何を一番守りたいのかを教えて?残念だけど、全部を守るなんて無理なんだよ。過ぎたことは仕方がない。仕方がないから、学ぶんだ。学ばなきゃ、いけないんだよ」

繰り返さない為に。だから、言って?

囁かれた言葉は叱責よりも衝撃的で、カミサマはよろめきながら目を見開いた。紗那には当然、心を読む術など無い。だからこそ言葉が必要で、言葉は力を持つ。

「僕は……でも、そうしたら君は」

あぁ、なんて馬鹿なヒトだ。なんて弱いヒトだ。
紗那は心で叫ぶ。自らは悟り、そしてついさっき気付いたというのに。

彼女は、とっくの昔にカミサマのせいで汚されていた。覚悟もせずにした行ないにより犯した罪から逃れるなど、到底許されないのだ。

これだけは言いたくなかったと思いながら、それでも言わずにいられないこの状況を作り出した目の前の人物に、心の底から溜め息が漏れた。

「この2年、私はあんたに振り回されてきた。奇麗事ばっか色々言ってたけどさ、あんたはちゃっかり私が使いものになるよう仕向けてたんだ。そうだろ？」

それはもう、車に牽かれそうになったり、頭上から物が落ちてきたりは紗那にとって日常茶飯事だった。それどころか凶悪犯に出くわしたり、強姦魔や強盗に襲われたりだってした。

体質だと諦めていたそのトラブルへの遭遇率は全部、今日からの為にこのカミサマが起こしてきたことだったのだろう。危険を察知し、回避し、対処できる経験を培わせるために。今までのやり取りでそう思い至り、カミサマが唇を噛み締めて反論しない姿から確信する。

「また、繰り返すの？　そうやって中途半端なままで、今度は全てを失うつもりか？」

冗談じゃないと叫んだ姿は、相当な苦労をしてきたのだと思わせた。

好きだと言い、そのくせ都合の良い”神の試練”とやらを経験させるその行為を、ずるいと言わずなんとするか。自身は汚れず、ただ求める姿に何を見出せるというのか。

その考えはとてもお綺麗で、その姿勢はとても愛しい。一見、誰もが大切で優しさの塊みたいなお綺麗な精神は、結局は自分の為でしかないというのに。

「あんたはただの、エゴイストだ」

責める為でも諭す為でもなく、無意識に零れた言葉は聞き取ろうとしても難しいぐらい小さいものだった。だけど、カミサマは心が読めるらしい。なので、しっかりと伝わってしまっているかもしれない。しかし、紗那はそれで構わないと思った。

彼の行為は許せるものでは決して無い。ただ、ややこしいもので、それが必ず好き嫌いに直結するかといえばそうとは限らない。

「あれは、悪いと、思ってる。あんなことになるなんて、思ってなかったんだ」

暫くの間、2人は静寂に支配された。しかし、若干青ざめた表情で呟くように零したカミサマの言葉でそれは壊される。

「分かってる。先に言っとくけど、責めたくてこの話を持ち出したんじゃないから」

抜け出せない泥沼状態に思わず零した溜め息は、カミサマの肩を大げさに跳ねさせた。それを見た紗那は、自分まで泣きたくなる焦燥感に駆られる。

しまいには頭痛までしてくる始末で、テーブルにかけた体重はそのまま、こめかみを押さえる。

「許す許さないだったら、私はあんたを許さない。だけどさ、好き嫌いでいったら好きだよ？　気付いた今でも」

「……何で？」

カミサマにとって、その言葉は予想外だった。どうやったらそんな考え方ができるのか、カミサマであるはずの自分にも理解が不能だ。

だから問うた。何故、と。だけど、紗那からしてみれば理由など無いのだ。ただそう思うだけ。

「私は物事は頭で分析して捉えるけど、好き嫌いだけは感覚まかせなの。だから、理由なんてないよ」

あれはこうだから好きとか、これはああだから嫌いとか、そうやってわざわざ理由を付けるのは紗那にとってとても面倒くさくて無意味に思えた。

面倒くさがりで捻くれ者な自分にとって、なんか好きだな、なんか嫌いだなぐらいがらしくて楽で良い。

それは恐らく、したいからする、したくないからしないといった感情と同じだろう。

「あんたもさ、少しぐらい適当になっていいんじゃないの？全知全能じゃないんならさ」

「ねぇ、さっきから言ってることがどんどん分からなくなってきてるんだけど」

カミサマのつっこみは当然だろう。紗那自身、自分が何を言いたいのか良く分かっておらず、言葉が上手くまとまらないでいた。

だろうね、私も分かんないと正直に言えば、カミサマがおかしいくらいポカンとした顔になる。

紗那は一生懸命なつもりだった。自分の出来うる限りで、届けようとした結果であった。

んー、つまり何か言いたいのかっていうと。そう前置きして暫く色々と考える。感情のままに話したお陰か、始めよりは大分まとまってきた感じがし、そしてあぁそうか、と自分で納得していた。

「結局私が言いたかったのは、あんたは人がカミサマにしただけで、別にカミサマでいる必要は無いでしょってこと。カミサマだからこうでなきゃいけないとか、ああしなきゃいけないとか。あんたの中は、そんなプレッシャーや義務感で蝕まれているんじゃないの？だから、私の声が届かない」

それを聞いた時のカミサマの顔は、本当に見物だっただろう。

ようやく紗那の言葉が届き気付いたのか、カミサマは水に打たれたように動かなくなった。そして徐々に驚愕の表情を浮かべ、それが後悔へと変わり、歓喜に震え、遂に揺れが止まる。

その百面相する姿は、止まっていた時が再び動き始めたかのようだった。

「僕は、神じゃなくて、いいのか？」

縋るような震える声で問うたことは、本来紗那に答えられるようなものではないだろう。何せ、大人が赤ん坊に質問するのと変わら

ない上にとてもとても重要なことで、たかが16年程度生きただけの少女に出せるものでもない。

しかし、紗那は柔らかく笑って簡単に言ってのける。

「なりたいのなら目指せばいいんじゃない？　だけど、あんたは元々地球とアピスの二つの世界が実体化しただけなんでしょ？　なら、カミサマでなくていい。やりたいことを、したいようにすればいい」

それは別に、あんたも生きているなら当然持っている権利なんだから。

根拠も何もないからっぽな言葉に思えるが、カミサマにとってそれは思いがけない救いだった。

「そして決めて。あんたが最も守りたいものが何か」

そうして紗那は、さらに屈託無く笑う。その姿はとても愛らしく朗らかで、まるで天使のように温かいものだった。

天使は微笑む（後書き）

神様をカミサマと表現しているのはわざとです。

「ねぇ、君は世界が好きかい？」

幾度もの険悪なムードを乗り越え、二人は苦笑した。
カミサマの目元は少し赤らんでいて、紗那は彼が近付いてきた際にそっと右側のそこを指で撫ぜる。

それで良い、と頷きながら。

残るピースはほんの僅かとなっていた。

「好きだよ、とても」

だって、この世界には好きなものが溢れている。
紗那の境遇は、お世辞にも幸福だとは言えず、色々な闇を見てきていた。
それでも迷わずそう言える彼女の心は、捻くれているからといって汚れていると簡単に言っていいものなのだろうか。

「なら、僕の願いを聞いて欲しい」

紗那の手に擦り寄り自分の左手を重ね、目を閉じながらそうカミ

サマ……いや、世界は願った。
彼女は照れくさそうにはにかみつつも、頷かない。
そこは、強さと言っていい気がする。
無条件に頷かない精神はお人好しではないが、だからといって冷たいとも思えない。しっかりと、現実と向き合っている姿そのものではなかろうか。
それに、紗那の中ではまだ最大の疑問が解決していなかった。何故自分が選ばれたのかという、その理由が。
「精石を壊して、精霊王を目覚めさせればいいの？」
世界は目は閉じたまま頷く。頬と左手に伝わる温かさを、心の底から愛しいと感じながら。
「ただ、精石は人間にとって何よりも大事なものなんだ。だから君は、地球とアピス、２つの世界の救世主でありながら、悪にならなきゃいけない。アピス全土の人間が君を敵とみなし、そして敵として立ち塞がるだろう」
それが最も重要な、知りたかった“理由”であった。
世界は、紗那の右手が震えるのを感じた。
恐怖に怯え、何故自分がと恨みを抱いたのかもしれない。
そっと、拒絶を覚悟して目を開ければ、少し下に落とした視線の先に、左手で口元を押さえ目を見開いて呆然とする少女が映った。
痛々しい姿だった。贖罪の念に溺れそうになる。だけど、自分の

言葉はどうやったって言い訳や取り繕いにしかならないだろう。ぐっと右手で拳を握り、震える唇をこじ開ける。

「断るのなら、今の、内っ！」

だが、全てを言い終わる前に握っていた手を振り払われ、どんっと突き飛ばされる。絶望感に打ちひしがれながら相手を見れば、口元の手はそのまま、もう一方は腹部を押さえていた。

若干前に身体を傾け、テーブルに寄りかかることで必死に立っているようだ。

さらに申し訳なさがこみ上げてくるが、言葉と温もりどちらも拒絶されたばかり。右手が空しく上がるだけで、喉は動いてくれなかった。

そんな時だ。紗那の肩が一際大きく震え、がばっと突然顔が上がる。

「っ、ぶはっ！　あはははははは！」

白い空間に、盛大な爆笑が響き渡った。

当然、世界は状況が飲み込めずキョトンとするが、紗那は口元を押さえていた筈の手も下げ、どう見ても腹を抱えて笑っている。

しかも、世界の呆然と固まる姿までツボに嵌ったのか、指を差してひーひーと笑い、最終的には力尽きたのか蹲りながら床を叩いて咳き込んでいた。

世界にとっては紗那のその反応が予想外であるが、実は彼女にと

っては自分が選ばれた理由がそうだったのだ。

死の危険があるのは、十分理解できた。某国の白い屋敷を１０回単身で襲撃するのと同じぐらいハイリスクであり、野良猫１００匹の中に放り込まれる１匹の鼠という状況が分かりやすい例えだろう。

だけど、それで怖気づく人間性を、紗那は持ち合わせていなかった。

「いいねぇ、その、救世主なのに悪の響き。めちゃくちゃワクワクするんだけど！　これは確かに、私以上に相応しい奴はいないわ」

未だ尾を引くのかクツクツと笑いながらも、紗那は嬉しそうにそう言う。

まさかのワクワク発言に唖然としてしまった世界は、何やら不穏な空気を感じてブルリと身体を震わせた。

「な、何？　え、というか、ワクワクすんの?!　普通はここで嫌いとか怖いとか、え？　え?」

混乱が最高潮に達して無駄にオロオロする世界を見つめながら、紗那が言った言葉。この時ばかりは、世界に心を読む余裕は無く、当然聴覚で拾うことも無理だっただろう。

「ご愁傷様。面白そうでも、一人で責任を負うつもりは無いからね？」

悪魔な顔と、天使の顔。果たして本当の紗那という少女はどちらなのだろうか。

「で、まだ答えを言って無いんだよね。聴きたいならまず、私の質問に答えて欲しいんだけど?」

紗那の笑いが収まれば、今度は世界が相当な衝撃だったのか混乱してしまい、暫く会話がままならなかった。

でも、爆笑するのも仕方ないじゃないかと紗那は憤慨した。なにせ、世界に選ばれた理由がよりにもよって捻くれているからだ。

これを笑わずにいられるか、というのが本人の心情である。

「何回か聞いたけどさ、あんたは一番何を守りたいの? 人間、精霊、世界、それともその他?」

しかし、そんな和やかともいえる雰囲気はその言葉で欠片も残さず消え去った。今の質問が、どれだけ悪役台詞で残酷なものか本人は自覚している。

世界も心の内を理解したのか、絶句して答えを言えない。

流石に甘ちゃんな精神がすぐにどうにかなるとは考えていない紗那は、ニヤリと笑って無言で催促した。

この間にも、今までの散々な時間の間にも、彼女の好きなものは現在進行形で壊されている。彼女にとっては下らない理由で、しかも世界も違う奴等によって。

それは、男に犯されるぐらいに気持悪く、我慢ならないことだった。

「往生際が悪いね。あんたはさ、人に悪になれと言いながら、自分は善でいるつもり？」

気付いたのなら容赦しない、と紗那は目で語る。傍から見たら始めからそんなことしていないと思うぐらいの冷たさではあるが、甘い言葉は誰でも吐ける。だけど、何度も繰り返すが、そんなことを言って許される次元の問題ではない。

「僕は……」

そもそも何故、紗那は世界を追い詰めてまで答えを先延ばしにし、諭すような言葉ばかり言っていたのか。それはとても単純で、しかし彼女にとっては一番重要なもの。

求めていたのは、唯一これから自分がしていくことを正当化できる共犯（せかい）者であった。

恐らく、ただ救世主になれ、勇者になれと求めていたのなら、性格からして鰾膠（にべ）も無く断っていただろう。その栄誉に、紗那は価値を見出せない。

「いや、君の言う通りだ。あれも大切、これも大切じゃ何も守れない。君はやっぱり、優しいね」

嬉しそうに笑う世界に、胸が少しばかり痛んだ。彼は、何をもってそう思うんだろうか。自分が優しいのならば、人類みんな優しいと言える。

自分の思惑も知らずにいる世界に苦笑を返すのが、紗那にとって精一杯であった。

「僕は、世界を守りたい」

僅かながら葛藤を抱いている間に、世界は紗那の手に堕ちていた。これで彼女は、世界を救うという大義名分の下、破壊の限りを尽くせるだろう。

「なら、私は奪う覚悟を」

迷いを捨て去るべく頭を小さく振り、紗那は自身の胸に手を当てて言った。

そして、ゆっくりと腕を動かして再び近付いて来ていた世界を指差す。

「あんたは、見届ける覚悟を」

それに頷いた世界は、バサリと服を翻して目の前の人間を見下ろす。彼を見上げてくる瞳には、揺らがない不思議な力があった。

「河内紗那に命じる。世界を、救え！」

「……仰せのままに？」

畏まった世界への正しい返答が分からず、語尾が上がって疑問形になってしまった紗那。一瞬の間の後にくすくすと笑い合った姿は、どこにでもいる男女だった。

しかし、恐らく紗那が辿り着く先は地獄で、世界を待ちうけるのは生き地獄だろう。それを悟ってるのは、紗那だけであった。

特別な力も才能もない只の女子高生。ただ、世界が声を大にして言いたいことが一つ。本人は顔も併々凡々だと言うが、実際にはかなり目鼻立ちがすっきりしていて整っている。残念ながら、女性的では無くかなり中性的で、美少年と美少女の境の不思議な位置ではあるが。

とにかくだ。争いの無い世界で過ごしてきた紗那にとって、武器となり得るのは捻くれた根性と冷静な頭のみだけだろう。でもそれが、最も誇るべき力でもあると世界は思っている。

「じゃあ、準備したいから一旦帰して？」

「えぇ！？　何でそんなに切り替えが早いの？　ていうか、あんまりこっちの世界のものを持っていけないんだけど。……いや、はい。拒否権は無いみたいですね」

今だって、最大限今の状況を生かそうと頭を働かせ、半ば脅しを含めながら行動している。それが到底、平常な精神の人間であれば出来ないことだと、紗那は気付かない。

強かに、狡賢く、姑息に生き残る為であれば、彼女はどんな事でもするだろう。

「ね、ねぇ。今更だけどさ、行ったら二度と地球には戻れないんだけど」

大きな存在なくせに、たった一人の少女におどおどと恐る恐る聞いてくる情けない奴が共犯者だから、尚更気が抜けないはずだ。

「分かってるっつーの。そんなの本当に今更だわ」

「そんな軽く……死ぬかもしれないんだよ！？」

纏わり付いてくる大きな荷物を足蹴にしつつ、紗那はまた笑う。変態と捻くれの相性は、どうやらあまり良くないらしい。でも、ある意味バランスは取れているのだろう。

まさしく悪役の笑いに見えるソレは、世界に毎回ダメージを与える。

「上等じゃん。そこでゴキブリのように図太く生き残ってやるのが面白いんだよ」

「うわ、まぁ、だから君なんだろうね」

勇ましい相棒を手に入れた世界は、諦めに似た笑みを返して徐に手を差し出した。意味が分からず頭を傾げた紗那だが、素直にその手に手を乗せれば、自然な動作で甲にキスをされる。

「あんまり時間もないし、１日しかあげられないよ？　お別れも、ちゃんとしておいで」

小さいリップ音の後に告げられた言葉。世界が視線を合わせれば、期待してはいなかったが照れた顔があるわけでもなく、むしろきょとん目を瞬かせる紗那がいた。彼女は、そんなことが頭に全然なくて、不覚にも表情に出してしまったのだ。当然呆れられ、淡白すぎるのは美徳じゃないよと叱られる。

それでも、別れを寂しいと思う理由がなかった。

「まぁ、それはそれとして。はい、これ」

「ん？」

降り注ぐ非難を含んだ視線から逃れるため、１枚の紙を押し付ける。それはノートを切り取ったもので、良く見ればびっしりと細かく色々なものが書かれている。紗那がリビングで書類を読んだ時に、こうなることを見越して準備していたものだった。

「うえぇぇぇ！　こんなに！？」

中身はすべて、世界に準備して欲しいもので埋め尽くされていて、しかし、如何せん量的にも内容的にも鬼すぎた。

流し読みで一通り確認した世界は、あまりの無慈悲さに眩暈を覚える。

そして当然、全部は無理だと抗議をしたのだ。

「叫ぶな、喚くな。それでも最低限なんだから。あ、後、私の性別変えたりとか出来ない？」

「出来るわけないじゃんっ！　言っとくけど、成長させるのも無理だから！」

世界からすれば当たり前の反応だというのに、紗那は耳を塞いで心から使えねぇ奴と毒を吐く。しかも舌打ち付きとくれば、ショックに固まるのは無理もない。その間紗那はと言えば、さらにこれからのことを頭をフルに回して考えていた。一体、どれだけ準備を重ねる気なんだろうか。

「あ、後一つ。あっちで違和感の無い名前、男と女どっちも考えて

おいて」

「え～っ、もう一杯一杯なんですけど！」

「黙れ、やれ。適当にやったら知らないから。……まぁ、その代わり、私もあんたの名前考えといてあげるから」

文句を垂れまくる世界とそれを容赦なく退ける紗那。やっと泥沼状態から抜け出したというのに、2人は騒がしく会話を続けていた。

そして、紗那は地球での最後の1日を迎える。寝る暇が無いと気付くのは、家に戻ってコーヒーを用意し終わった時であった。

こうして、漆黒の羽根を生やした邪悪な天使は誕生した。行うのは、平穏の破壊。しかし、今はまだ、それを知る者は誰も居ない。

――幸せとは無縁の旅を語る物語が始まった。

最大の罪、それは君を愛したこと。

「あぁぁぁぁー！　勿体無い！」

夢見たいな一夜が明け、睡眠を切実に欲求してくる重たい頭で必死に準備をし終えた紗那の前で響いたのは、彼女を苛立たせる天才の悲鳴にも似た叫びだった。

「あぁもう、煩い！」

「だ、だって、だって髪！　せっかくの髪が！」

世界が騒いだ原因は、叫んだ言葉の通り紗那の髪にあった。昨日までは流れる美しい腰までの長さだったというのに、彼女の変わりようはかなりのものだ。

只のショートヘアーならまだしも、今の髪型は明らかに男のもので驚きも倍増である。

ただし皮肉な事に、中性的な顔立ちが右の前髪だけわざとらしく長く残す形でウルフカットにしているその髪型により引き立ち、普通とは違った意味で似合っていた。

人の頭を指差して口をぱくぱくさせるなど、失礼にも程があるだ

ろとぼやいてもこの時ばかりは世界に通用しなかった。

「もー、これから何が起こるか見当もつかないんだから、男として動いたほうが得策でしょうが。ってことで、準備してくれたよね？」

幸い、声も低くもなく高くもない。男としては少し高いかな、女としては少し低いかなという印象を人に抱かせる。本人も、まるでこうなるのが前提で産まれてきたみたいだとあまりの都合の良さに笑っていたところだ。

「あ、うん」

そんな中、世界は淡く、紗那が準備する間に心変わりするのを期待していたのかもしれない。そんな様子がまったく見てとれ無い彼女に、悲しそうな顔をしていた。

紗那にとって、別れはする必要が無かった。

部屋に戻った時には朝になっていて、切り替えの為にと用意したコーヒーと軽い朝食を手早く味わった後は、今まであまり手を付けずにいた両親からのお金やバイト代を注ぎ込み、街で必要な物を揃えるのに奔走した。

そして、学校に一方的に退学届けを押し付け、携帯を解約し、家にある自分の物を出来るだけ処分していく。手元に残ったお金は全て銀行からおろし、短い手紙と共にダイニングテーブルの上へ。

可能な限り地球に居た痕跡を消し去った後に残ったのは、ベッド等の粗大ゴミだけであった。

発つ鳥、後を濁さず。

そう言えば聞こえが良いが、紗那自身未練を断ち切りたかったのかもしれない。実際、長年すれ違い続けて色々な感情を抱いていた両親に対しては、『自業自得だよ』と捨てゼリフを贈っていた。

「ほら、さっさと昨日の場所に行くんじゃないの？　デル」

「デル？」

「言ったでしょ？　あんたの名前、考えといてあげるって」

一度、静かにリビングを見渡した紗那は、照れたように言った。デルフィニウムの花からとって、デル。美容室で髪を切ってもらっている最中読んでいた雑誌に花言葉が載っていて、これしかないなと決めた名だった。

きっかけを聞けばなんて安直な考え方だと思うだろうが、我ながらぴったりだと紗那は無い胸を張る。

「デル……デルフィニウム、かな？」

世界……デルも察したらしく、ここでまで意地悪をしなくていいじゃないかと言いつつも嫌では無いのか、どこか嬉しそうにはにかんでいた。

名は、何よりも鎖となる。そこに込められる想いが大きければ、大きいほどに。

「嫌味な名前だけど、まぁいいさ。じゃ、行こうか」

明けっぱなしのカーテンの先では、真っ赤な夕日が沈み始めていて、部屋をその色に染め上げる。逆光のせいで眩しく、目を細めながら差し出された手を取った紗那にとって、そこから見た景色が地球での最後となった。

彼女が持って行ったものは、変装用のカツラやカラーコンタクト、そういったものだけで思い出の品は一切無い。この後、社会でどういった扱いを受けるにしろ、二度とコンクリートの地を踏むことは叶わないのだ。でも、それで良いと本人は心から思っている。

全てが終わった時、責められるのは紗那だけだろう。デルはおそらく、色々な者から優しく慰められる。

君は悪くない、そんな感じで。

「まっ、こんなもんか」

「もっ、だめ、無理っ！　過労、死、する～！」

再び昨日と同じ部屋へと連れて来られた紗那は、あれこれとデルに指示を出して漸く出発できる状態になっていた。

アピスには黒髪、黒目は居ないらしく、まず、短く切った髪を違和感の無いシルバーに、瞳をゴールドに変えさせ、さらに用意させたあちらでの旅装束に着替える。それから、当然言語を理解し話せるようにと、読み書き言葉もチート上等と習得させた。

他にも執拗に細かい作業を頼んでいったが、それは追々説明していくとしよう。その結果が、今の状況である。

疲労困憊で床に伏せて青い顔をしているデルと、高鳴る気持ちが抑えきれずにテンションが上がりぎみの紗那。かなりの温度差だ。

脅して出してもらった姿見に映るのは、日本人の要素は欠片も残っていない目つきの悪い青年。クルリとその場で回転し、全身をチェックする仕草は流石に女のものではあるが、スタイルはそれにしては寂しく、身長をとっても１７０ｃｍとかなり高いので不信な点はどこにもない。ついでを言えば、本人もびっくりの美青年だ。

どこかミステリアスで、エキサイティング。年上に好かれそうなタイプである。

「で、あんたは何時までダレてんの？」

「あれだけ酷使されたら、疲れて当然だよ～！？」

あまりの理不尽さにデルが起き上がって訴えるも、今のテンション最高潮な紗那に勝てるわけがない。普段でも難しいが、それだけ叫べれば十分元気でしょと切られてしまう。

さらに、横暴だ悪魔だという文句を喚かれるが、それは褒め言葉にしか思えず、紗那はシカトして最後の仕上げに取りかかった。

まず、黒い布とピアスが一体となっているマスク紛いのものを付けて目から下を隠し、加えて、さらに大きな布を特殊な巻き方、まるで素人とは思えない手つきで素早く髪からマスクの上、肩まで覆っていく。

すると、イメージとしてはアラビアのような、マントを靡かせる男が出来上がった。

晒されているのは金の瞳のみで、怪しさ満点である。日本でこんな格好をして歩けば、即通報か職務質問されること間違い無しだ。

「うっわ、めちゃくちゃファンタジー……！」

自分で作り上げたというのに、紗那は普段からは想像できない程にはしゃいで楽しそうにしていた。

ここまで徹底的に顔を隠すのは、当然これから先予想が付かない事ばかりが待ち受けているだろうからだ。デルに教えられた限り、文化も文明も、何もかもが常識外ばかり。出来る限り目立たず、悟られず、紗那は動いていかなければならない。

「で、私の名前は？」

「その質問を待ってたよ～ぅ！」

全身の最終チェックを施しながら軽く聞いたことに、デルは馬鹿みたいに大げさに反応した。思わず眉を顰める紗那だったが、最早その表情を見た目で窺い知るのは不可能であり、デルが気付くことは無かった。

「女の子の時はリサーナ。覚えやすいよう、紗那から考えましたん！」

嬉々として発表するデルであったが可哀想に、紗那は今一の反応。あまりに安直で悪趣味だと彼女は思った。

しかし、それすら気付かないデルである。2人のテンションは、まったくの真逆に変わっていく。

「んで、男の子のはサイード！　これはなんか、ピカッときて決めました～」

「うっわぁ……」

紗那は心底デルに頼んだのを後悔した。さっきのリサーナもだが、それ以上にサイードとは。アニメの1話で死ぬ脇役感がムンムンで、どうにも不安に駆られたのだ。

流石に言葉まで呟かれたら気付いたのか、そんな紗那の反応がお気に召さず、デルはいじけて床に突っ伏した。気のせいじゃなく、嗚咽も聞こえてくる。

しかし、そこで申し訳無いとは思わないのが紗那だ。良い加減デルも覚えればいいものを、許せる範囲を超えてふざけるデルに苛立ち、そうすれば考える前に手が動く。

「ごめんなさい、もうふざけませんっ！」

まぁ、ギリギリで身の危険を感じたデルが察知するのだが。殴りそこない舌打ちをする音には、気付かないフリをするのが得策なのだろう。

こうやって、一見緊張感など皆無なやり取りを続ける2人であったが、デルはずっと緊張が空回りしている状態で、紗那はそれを無視する形で空気を保たせていた。しかし、それももう終わる。

事前にやるべき事はすべて済ませたのだ。後はもう、ただ突き進むだけ。

「実はね、もう1つ、用意してるんだ」

「さすが、分かってるじゃん」

2人はまったく正反対の笑みを交わし、どちらともなく抱き合う。傍から見ればどうやっても怪しくはあるが、そんなことは見る者がいなければ関係無い。デルの身体は、小刻みに震えていた。

「……ルシエ。これから先、僕は君をそう呼ぶよ」

か細い声で言われた言葉に、紗那は頷いた。

リサーナ。それは、紗那という地球にいた一人の少女の存在と記憶を留める戒めの名。

サイード。それは、地球にもアピスにも居場所がない、それでいてどちらにも属するという証明の名。

「デルも相当嫌味な奴だね。魔界の王ならまだしも、そんなところから取るなんて」

「ルシエには負けるさ」

紗那も名に込められている意味が分かったのか、少し悔しそうにはにかむ。布に隠されて見えなくても視え、デルは受け取ってくれたことに喜びを感じた。

ルシエ。それは罪を示す名であり、存在を知らしめる名でもある。

「ま、私にぴったりだね。んじゃあ、せっかくだからそれにプラスしよっかな」

どれも授かったばかりで、馴染むまでに時間がかかるだろう。それでも、リサーナは騙す際に何度も口にし、サイードは隠れたり奪ったりする際、この中で一番口にしていくだろう。

そして。

「破罪使、ルシエ。うん、これが一番ぴったりだ」

その罪すらも壊す使い。破壊するだけじゃ飽きたらず、破壊そのものを呼びこむ使者。アピスの歴史に深く刻まれるであろう、新しい”彼女”の名。

「これまた、捻くれた字(あざな)だねぇ」

つい先ほど贈られ初めて口にした名は、もう2度と会うことのないだろう人へと渡る。お互いの名だけが、恐らくこの出会いを絆へと変えてくれるはずだ。口にし、される度に。

「じゃあ、いってらっしゃい。捻くれるのも程ほどにね？」

「さよなら、脆弱エゴイスト。まっ、私はしたいようにするだけだよ」

何時だって別れとはあっさりとやってくる。

彼女の足元から黒い光が現れ、それが蛇のようにうねりながらそ

の身体に巻き付き始めた。真っ白な場所で見える黒は毒々しく、そのまま身体は黒い空間へゆっくり引きずり込まれていく。しかし、彼女は焦らない。

2人はお互い静かに見つめ合い、自然と顔を引き寄せる。最初で最後の、布越しのキスだった。

布は、まるで鉄格子のように想いと熱を隔てる。

しかし、それでも2人は深く熱く、互いの罪を別け合い擦り合う。

彼女は、そのさらに下にひっそりと込められた想いだけを汲み取らずに、とんっと軽く相手の身体を押した。

たったそれだけで、簡単にその距離は開けてしまった。

ラブとライクは、似ているようで決して交わらない重みの違う想いだ。悲しいかな、それが2人の差であった。

「じゃ、暴れてきますか！」

名残惜しさを隠せずに儚い笑みを浮かべるデルに、彼女はマスクの下で笑顔を返し大きく手を振った。最後に、ある言葉を負わせながら。

そうして、地球に存在していた河内紗那という一人の少女の短い生涯が幕を閉じた。

「じゃあ、まずは一番楽な場所に飛ばすね～？」

「ふざけんな、一番難易度高いところだろそこは！」

それが、２人が交わした最後の会話だった。

河内紗那が最後に世界に負わせた言葉。

それは、「絶対に、許さないから。」という、あまりにも残酷で切ない想いだった。

普通すぎて、萎えました

「うっわ……、まじで有り得ない！」

そんな気持ちで、旅はスタートした。

アピスは、精石の恩恵を受けて築かれた１０の大国で分かれている。故に其々が持つ領土は厖大（ぼうだい）で、国が認めた街や村以外では、個々の自治や統一されたものに加えて定められた法に基づき生活している。

国が１つづつ至宝を持っているのだから、過去の地球のように幾度と無い戦争とは無縁だと思うかもしれない。しかし、残念ながら、国間全てが良好な関係であるとはいえず、何度も精石を巡った争いが巻き起こってきた歴史がある。

その中でも、最も野心に囚われ他国にちょっかいを出してきたのが、陽の国「ムスイム」である。

灼熱の大地に築かれたこの国は、潤いや涼を求めて長年に渡り水の国に戦いを仕掛け、そして何より民を省みてこなかった。

結果、現在では国庫も火の車で、国としてまだ成り立っているのが不思議なぐらいに衰退していってしまっている。

そんな国で、デルの力によりとうとうアピスに降り立ったルシエ

は、さっそく頭を悩ませていた。
自分の意見も聴かずに勝手な判断で場所を決め、それを指摘されて慌てたからか、一番動きずらいと考えていた国に送られてしまった。

それが、ルシエの言い分である。予定では、陽の国の隣にある風の国からスタートしようと思っていたらしい。

というわけで、異世界に来てルシエが最初に抱いた感想は最悪だった。

一般論を言ってみれば、中々にその神経は斜め上を遥かにいっているのだが、たとえルシエに諭したところで、自分の感覚はおかしく無いと言われてしまうだろう。
しかしだ。あの黒い空間に全身が沈み、次に目を開けたときに死体が転がっているのを見て最初に、テンションがた落ちだわと思うのは人間性としても道徳的にもどうなんだろうか。

まだそういった光景ばかり見て生きてきているなら分からなくも無いが、ルシエは今日初めて人の死に体を見たのだ。ならば、はっきり言えるだろう、それはおかしいと。

「とにかく、ここじゃまともに話が出来る奴がいるかどうかも怪しいな」

さらに言えば、その切り替えの早さもだ。異世界の第一歩を踏み出す前に、ルシエはサイードに変わっている。
口調だけではなく、仕草、思考、その全てが事前に作り上げた人物になっているのだ。

周りは土造りの家で、突然場に現れたルシエを出迎えたのは死体だけの路地裏だが、通りに出れば道端に浮浪者がしゃがみ込み、飢えに蝕まれた人が溢れている。それを見る瞳に、何の感情も映らない。

気を抜けばごろつきに襲われるその国で、ルシエはサイードとなり、異世界での一歩を踏んだ。

「いらっしゃい」

かろうじて店となっているボロ屋に、愛想の無い挨拶が響いた。訪れたのは黒で全身を包んだ、何者か分からない旅装束の男。男は一瞬、あまりの無愛想な店主の物言いに眉を顰めるが、それは外見分からない。

しかも、店にいた人間の誰も、どっかのめんどくさいおばちゃんから即クレームくるぐらい態度最悪だな、という感情を抱いていたとは悟れないだろう。当然、この男が異世界人だとも考えない。

「何か食事を貰えるか？」

サイードは今にも折れそうな心許ない椅子に腰掛けながら、カウンターの店主に言った。だが、店主は頷くでも動くでもなく、怪しげに彼を見てくる。仕方なくマントに隠れた腰に付けているお金を入れた袋を示せば、やっと用意に取り掛かった。

しかしその瞬間、彼以外の店に居た客の視線がサイードに集まる。

店にはそぐわない張り詰めた空気に怯むことなく、冷静に、サイードはさっさと済まして立ち去るべきだなと判断していた。どうにも長居するべきではないのは確かだ。

「ほら、こんなもんでいいか？」

「あぁ、すまない」

１０分ほどして出された食事は、ほんの少しの干し肉を何か野菜と炒めたものとほとんど具の無いスープという、食事とは言えないぐらい質素なものだった。

しかし、この国では仕方がないことなのだろう。むしろ、店を開けていられる程の蓄えがあることを驚くべきなのかもしれない。

「兄さんは旅人かい？」

店主は、ごろつきでは無いと判断したからか、はたまた金を持っているからか、初めよりは愛想良く話し掛けてきた。

サイードは内心、自分が男に見えているのに安堵する。さらに、背後のあからさまな視線から気を逸らせる点でも、店主に感謝した。

「ああ。旅をしながら本を書いているんだ」

「また物好きな事を。でも、悪い事は言わん。この国は早くでたほうがいい」

勿論、答えた内容は嘘である。サイードの全身を隠す格好が、いくらこの世界ではそこまで不信感を持たれないとしても、怪しいこ

とに変わりはない。そんな姿で、冒険者してますだとか言ってしまえば、下手をすればさらに追求されかねないだろう。

それに、冒険者というのはギルドハウスという場所で登録をしないと本来名乗れない。ちなみにギルドハウスとは、ギルドという冒険者のグループを支援する機関を始まりとした、冒険者のコミュニティーである。

地球でのファンタジー小説等によくある、依頼を受けたりなんだりという役割もあるにはあるが、それよりも、冒険者の管理、土地の情報、武器や防具の店や宿の紹介を主とした大きな情報屋といった方が正しいだろう。

何より、冒険者とならず者、犯罪者の区別をする役割を大きく担っているのだ。正規の冒険者であれば、ギルドハウスが発行した身分証明書を持っているので、その予備知識をしっかり蓄えていたサイードは、わざわざ怪しさを残した理由を作ったのだ。
訝しむが、何か訳ありなんだろうなと思わせる嘘を。

サイードは、店主との世間話の中から多方面の情報を得ていった。

途中、食事をする為に布とマスクを外した際、店主が黙るという出来事はあったが。

「……何か？」

「あ、あぁ。いや、綺麗な顔をしてると思ってね」

男に対して、それが褒め言葉になるかどうかはさておき、あれほど準備していたというのに、何故こうも簡単に晒したのか不思議で

ある。

「一応、褒め言葉として受け取っておくかな」

「あー、男が綺麗って言われても嬉しくはないもんな。まあ、それよりもだ。尚更早く出て行かないと、攫われて売られちまうぞ？」

理由は、簡単だった。忘れていたのだ。冷静に受け答えをしてはいたが、内心ではしまったと焦っていた。流石に、気を引き締めていたとしても、今までの生活にまったく無かった事に対しては、人は無意識に普段の動作をしてしまう。

サイードは、再度頭に刻み込んだ。”自分”が何なのか、何をしようとしているのか。

「ははっ、忠告、感謝するよ」

幸い、店主が実は何かの手練だったというイベントは無かった。

見た目通り、これといった味付けの無い微妙な食事が終わったサイードは、マスクをつけ布を巻き直し、カウンターに金を置いた。当然、お金に関する予備知識もばっちりなので、ベタな展開はない。

５円玉に似た銅貨を3枚、３シリクを支払って立ち上がる。

ちなみに、この世界の貨幣は金貨、銀貨、銅貨の３種類で、金貨はメリク、銀貨はナリク、銅貨はシリクと言う。１メリクは５０ナリクで、１ナリクは１００シリクだ。相場を考えれば、今の料理で３シリクは高すぎるのだが、そこは今の陽の国の状況を考えれば仕

方がないのだろう。

「行くかい？　気を付けてな」

「あぁ。貴方も」

軽い挨拶を交わし、片手を振って店主と別れて扉に手をかければ、店にいた他の客もあからさまに席を立つ。

それが分かりながらも、サイードは気にするでもなく出て行った。横目でその人数を確認しながら。

「……この国に来たばっかりに、可哀想にな」

その背中に店主がかけた言葉を、サイードが薄い笑いで返していたのを知る者はいない。哀れみから出たものだったんだろうが、このイベントは彼にとって好都合だった。

店にいた客、ごろつきの目的は、金か身体か。

砂埃が舞う閑散とした道を少し歩き、サイードは止まる。

「あんまり、目立ちたくは無いんだがな」

「ちっ、気付いてやがったか」

後をつけていたごろつき達もそれに習い、雑魚キャラ台詞を堂々と言ってのけた。サイードが振り返った瞬間、ごろつきは彼を囲むように配置について、いたる所が欠け、錆付いた、切るのも突き刺すのも一苦労に見えるみすぼらしい武器を取り出す。

「何か用か？」

もしこの場に通行人がいたら、一見丸腰で力もなさそうなサイードを哀れな目で見ただろう。５人の男に囲まれた状況で、誰がサイードに期待するだろうか。

綺麗な顔立ちだとごろつき達が知っていればまた違っただろうが、彼等は店主とサイードの会話を全部聴きとれていたわけではなく、見たわけでもない。明らかに、殺して奪う考えでいた。

国営すらままならない状態で、衛兵等の介入は無く、それを当然の如く知るごろつき達は、処罰に怯える必要が無い。

「身包み置いていくってんなら、生かしてやってもいいぜ？」

恐らくごろつき達のリーダ役なんであろう、いくらか筋肉の引き締まった男が、サイードに上目線からそういった。

それを一瞥したサイードは、小さく鼻で笑う。

「断る」

怯えも戸惑いも、一切感じさせない間髪入れない答え。ごろつき達は、こめかみに青筋を立てた。

とはいっても、身包み剥いでしまえば、女だとバレてしまって犯されるだけなので、当然な答えなのだ。

「なら、死ね！」

そんな事情を知らないごろつき達は、雑魚キャラ満載のセリフを吐き、飛びかかった。

「死ぬのは、残念ながらてめぇらだよ」

ごろつきに力量は対して見込め無いとしても、命の奪い合いだ。しかしサイードは、まるで有難いと言わんばかりの立ち振舞いをして、迫る人間に静かに囁いた。

「さぁ、散れ。俺の為に」

そこに居たのは、謎を背負った男――サイード。彼は、地球で平穏だけしか知らない人間とはまた違う。その裏に異世界人という隠された真実があろうとも、踏みしめるのはアピスの大地であり、会話をするのはアピスの人間。

故に、経験や思想、常識は関係ない。

利用されて利用する。

「精霊よ、契約の下我に従え！！」

それは、一瞬の出来事だった。

サイードを5つの心許ない武器が襲い、それに対抗して行動を起こそうとした間際、急に響いた第三者の声と共に飛んできた火玉に全身が包まれ、ごろつき達は断末魔を上げながら地面に崩れた。

それに驚く余裕も無く、サイードは急いで彼等の心臓に、デルに用意させていた小剣を突き刺した。

殆どは小剣を飛ばして対処したが、直接そうした時にごろつきの身を焼く炎が手を掠め、熱さに痛みを感じる。

辺りには人の焼ける臭いが立ち込め、その塊が作った円の真ん中で、サイードは痛みを感じた手をプラプラと揺らしながら第三者を睨んだ。

「何者だ？」

余計な世話をしてくれたものだ、と苛立ちながら予期しない他者の介入による動揺を隠す。

彼にとって今回のイベントは、自分の経験値を上げる良い機会だ

ったのだ。それを台無しにした相手に助けられたと思わず、横槍を入れられたと思って当然だろう。

「手出しは無用だったみたいだなー？」

視線の先に居たのは、ツンツンで真っ赤な髪をした、１６前後のサイードと年の近い青年だった。

「あぁ、お陰で手に火傷を負った」

金の瞳を細めての威圧的な態度に、青年はヘラヘラと笑う。

サイードは、手の痛みが説明出来るのなら力説したいと思った。言うなればその痛みは、体育館でこけて摩擦熱で傷ついた痛みの様に地味なもの。それでも、痛いものは痛い。むしろ、地味だからこその痛みだ。

「それは、あんたがわざわざ火だるまに剣を刺しにいったからだろ？」

「断末魔は嫌いなんでね」

暗に、自分が悪いだろと言う青年にサイードはそう返し、２人の間に得体の知れない者同士が見極めるために作る時間の沈黙と視線が交わされる。

スタート早々、思いがけない事態だった。

赤い髪、そして青年の様に髪と同じ赤い瞳を持つというのは、ムスイムの民の証である。

陽の赤、水の水色、風の緑、大地の茶色、雷の金、海の青、光の白、闇の濃紺。そして、空の白と蒼、星の銀と濃紺。その髪と瞳の色を持つ人間は純血種と呼ばれ、より強い魔法が使えるので重宝される。

だからといって、例えば赤の髪をして水色の瞳をしていれば、その人間は陽の国と水の国の血が通っているとはならず、混血種だと魔法に期待出来ないと蔑まれるわけでもない。

ただしそれは、地球と同じ様に、その時代時代で差別されてしまうことがあり、人種や国の出身者とその背景で変わってはくるが。

何よりサイードが警戒したのは、先程の攻撃が精霊の力を借りた魔法であるという点だ。

現時点で青年は、横槍という手助けをした点で敵とはいえないが、無害ともいえない。

「俺は、ティルダ。あんたは？」

「悪いが、名乗るつもりは無い」

なので、利用価値を見出せない間は、こちらの素性を明かすわけにもいかない。

サイードの返答に、ティルダと名乗った青年は訝しげに眉を顰めた。

「じゃあ、何でこの国に？　見たところあんた、この国のもんじゃないだろ？」

お互いに情報が足りないんだろう。しかしサイードは、青年の物言いに、賭けてみてもいいかもしれないと感じた。少なくとも、ご

ろつきには見えない。

「精石について調べながら、旅をしている。その為にこの国を訪れた」

こういったものに関しての駆け引きや判断は、どうしても経験が必要になってくる。仮に賭けに負けたとしても、今度は戦闘に対する経験も積めるので、サイードにとってはどちらに転んだとしてもメリットはあった。

しかしそれは、負けと判断するタイミングがとても重要であるので、決して簡単なことではない。

サイードの理由を聞いた途端、ティルダは哂った。いいものを見つけたと言わんばかりに。

「なぁ、あんた俺達と手を組まないか？」

「俺達？」

目の前には、ティルダ一人しかいないはずだった。他にいたのは、今やこげた肉塊となったごろつき達だけだ。

しかし、言葉の直後、周囲にあった建物の上や細い路地の隙間から何人もの人間が現れサイードを包囲する。手には、剣や弓を持っていた。

これでは、逃げるのに相当苦労するだろう。しかし、サイードは表面上でも内面上でも焦らなかった。

自分の命がただ危ないかもしれないというだけでは、これといって心が揺れないのだ。

周囲の人間に、今のところ強い敵意が無いのも関係しているのかもしれないが、根っこの部分に、絶対に目的を完遂させてやるという使命感が無いのが一因だろう。

命あるモノ、死ぬ時は死んでしまう。当然なことだけれど、悟りともいえる命に縋らない考え方、責任感の薄さもそうだ。

「俺達は反乱軍でね。戦力はあればあるほど良い。勿論、あんたにメリットもある。詳しい話は、アジトでリーダーとしてもらうから、着いて来てくれない？」

サイードは思った、賭けには勝てそうだと。

そして、マントの下で構えていた小剣から手を離す。ちなみにだが、彼の投擲技術の高さはデルに備えさせたもの。サイードの眼は、以前に比べかなり視力が高くなり、しなやかな腕には一切のブレも生じない。

こういった技術の向上は、デルが脳にその情報を植えつけ、遺伝子を操作したりして可能にさせていた。だから、これから先重要になり必要なのは、サイードが再三求めている経験なのだ。流石に、感覚というものは本人が感じて考えていかなければ意味がない為、他にも備えさせたものはいくらかあるのだが、現時点では宝の持ち腐れに近い状態だった。

「……サイードだ」

怪しさ満点の反乱軍に名乗ることで、申し出に了承した。この国に反乱軍がいるというのは知っている。それが目の前の連中だという確かなものは無いが、もし本当であればこれに乗らない理由はない。たとえ、利用されるだろうと感じても、それは仕方無いと割り

切り利用するのだ。

どうやら運に恵まれた、とサイードは密かに笑った。

通常、ゲームで例を挙げれば、キャラクターのレベルが上がるにつれて攻略しなければならないものの難易度も高くなっていく。それは物語にもいえることで、クライマックスに近付くにつれて、やることもでかくなってくる。

しかし、そういったものは、主人公が認められていく過程で可能になることで、現実はどうかというと、そうではない。身構えていなくとも、いつだって理不尽な状況や諦めるしかない状況に遭遇することが多々あるのだ。

かといって、自分からそういう状況を作り上げるとなればまた話は別だ。

なのにルシエは、考えた上で敢えて難易度が高いものから始めようとしていた。結果的に若干のトラブルがあり、例えるならラスボス一歩手前といえる微妙なスタートにはなってしまったが、何故そうしようと思ったのか。

それは、難易度が高いと判断された理由が関係していた。デルが最もそうだと判断したのは風の国である。それ自体は、ルシエも同様に考えた。

風の国は、アピスで最大の規模を持つ国であり、尚且つ最強の戦力を所持しているのだ。

しかし、ルシエが相手取るのは、ゲームのようにレベルが決められていたり、アイテムを手に入れなければ先へ進めないわけではない。

弱いから適わない、というのは当然あるが、だからといって弱いから出来ないには繋がらないということだ。感情や思考のある人間、しかも集団と戦うのであれば、弱いなりに考えて策略を練り、そうして行動していくことができる。

さらに、これから先、壊した精石の数が増えれば増える程、存在の認知度は上がり警戒も大きくなる。だからこそ、ルシエは最も難易度の高いところを真っ先に攻めて、隙を狙いたかったのだ。

経験も何も無い今の状態で壊せるのであれば、警戒がいくら強くなろうとも力が付いてからでも出来るのではないか。

素人考えなのかもしれないが、否定もできない。

とはいっても、予定が狂ってしまった今、その考えをいくらか組み変えていかなければならないのだが、最初に抱いた最悪な気持ちは、これはこれでよかったのかもしれないと変化していた。

ティルダに案内された先で思わぬ隠れ蓑を手に入れたサイードは、そこからの展開の速さに若干幸先が不安になりながらも、賭けはこれからの自分の行動が勝敗を左右するだろうと確信した。

いくつもの路地を曲がり、一見普通の家の地下にあった反乱軍のアジトで、全てのメンバーから信用してないという視線をもらいながらも、指示された椅子に座ってほくそえむ。

「サイード、会う準備が出来たって！　リーダーのところへ案内するよ」

今回の話をふっかけてきた張本人は、纏わり付いてくる点や言動が微妙にデル属性で苛立ちはするが。

「おーい、サイード？」

目の前で手をひらひらと振って意識を自分に向けようとするティルダに気付きながらも、サイードはわざと反応を示さなかった。

ちなみに今更だが、サイードが人を初めて殺したというのに何故平然としているのか、と疑問は持たないで欲しい。

ルシエは、まともな神経と性格をしていない。故に、ルシエが作り出したサイードもそこの部分は同様であり、だからこそデルに選ばれているのだ。

「今なら顔見てもバレないんじゃね？」

「……死ぬか？」

「じ、冗談だって！　本気にするなよ」

どこまで粘るのか見ていれば、ティルダが余計な事をしようとしたので牽制すれば、大きく慌て取り繕う。流石にここで顔は晒せない。

実際、今の状況は願ってもないものだが、当然これには裏があるだろう。大方、囮や身代わりとかそういうもので、身元不明の人間はそういうのにもってこいだ。

「で、リーダーのところにいくのか？」

「んだよ、聞いてたんじゃん。ほらこっちだ」

慌てるティルダを無視して立ち上がり促せば、少し不機嫌になりながら地下の奥の方へと案内された。このアジト、地下のくせして結構な広さがあり、色々な部屋がある。待機させられていたのは、集合部屋であり食堂でもあったみたいで、他はメンバーの寝室や武器庫なんだろう。

周りを観察しながら着いていけば、ティルダが内情をいくらか説明してくれた。聞くかぎり、内容は万が一漏れても支障が少ないレベルではある。しかし、それでもこの状態でサイードに話すということは、ここに来た時点で逃げるのは無理だということを暗に告げているのだろう。しかし、だ。

驚いた事に、目の前を歩くティルダは反乱軍の副リーダーだという。

サイードは、それを聞きあることに気付いた。途端、ティルダが愉快に見え、バレない様にクツクツと笑う。

その間にアジトの最奥に来ていたらしく、見張りを置いて厳重に警戒された扉があった。明らかに、重要な人物がいると分かる感じで、見張りの男がサイードに威圧的な視線を送る。
その扉からも、腕は本物だという張り詰めた空気が漂っていた。

「悪いけど、武器を全部預けてくれないか？」

「断る」

ティルダにしてみれば、当然の指示だった。しかし、サイードはきっぱりと拒絶し、警戒を強めた見張りとティルダを睨む。

「断るってお前！　こっちは、いつでもお前を殺れるんだぞ？」

「なら殺ればいい」

駆け引きはもう始まっていた。サイードのこの行動は、ティルダは勿論、扉の中に向けての牽制だ。本当にそうなのであれば、そうすればいいと。

高圧的な態度と共に投げつけた言葉に、ティルダは少しばかりサイードを選んだことに後悔し、驚きに動きを止めた。

「……はぁ。ほら、縛れ。それでいいだろ」

相手にそんな提案をされるなど、本来副リーダーとしての力量を問うものだ。自身でも、反省しなくてはいけないはず。しかしティルダは、サイードがマントの上から背中で腕を組み差し出せば、戸惑いながらも素直に従ってしまった。

「なぁ、何でお前は俺に手を組もうと言ったんだ？」

「リーダーの命令。腕っ節のある旅人がいたら、連れて来いって」

成る程、何故こんな未熟な者が副リーダーと名乗っていたのか。ティルダは、都合の良い駒なのだ。先ほどサイードが気付いたのがそれだ。大方、彼が契約している精霊の力が強いからだろう。

「くくっ、ティルダは従順なんだな」

「あぁ、リーダーを尊敬しているからな！」

可哀想に、ティルダは馬鹿にされているのにも気付かない。傍でそのやり取りを見ている見張りのほうが何倍も察しが良く、渋い顔をしていた。それをサイードは一瞥し、マスクの下で口角を上げる。

「少し痛いかもしれないが、我慢してくれ。あと、必要以上に動くなよ？」

縛り終えたティルダは、軽い忠告をして見張りに縄の具合を確かめるよう指示していた。サイードは頷き従いながらも、考え事をする。

平和な世界に生きていたはずの自分の方が、幼い頃から人を殺めているかもしれない奴より歪んでいるのも不思議だが、そういうものも結局、本人次第なのかもしれないな、と。

実際、簡単にとは言わないが、縛られたぐらいでは完全に動きを封じられたわけではない。サイードが出した譲歩案は、確かにマントの下に隠している小剣を取り出せなくはしたが、足は縛っていないから蹴り倒すことも可能ではあるのだ。よって、ティルダの考えは緩すぎる。勿論、見張りの人間も。

そうして、引っ張られるように、開かれた扉をくぐり部屋へと連れられた。

サイードは頭を切り替え、どうやって利用しているのを悟られずに流れを自分に持っていくかに思考を絞る。

「お前がティルダの連れて来た旅人か」

女を1人含んだ4人、サイードとティルダを含めれば6人となった部屋はそこまで広くはなく、真ん中にテーブルを置いてそれ以外は書類が散らばり、壁には武器があるだけで閑散としていた。

テーブルの上にどっしり構えた男は、サイードを見て言う。

褐色の肌に赤い髪、橙色の瞳をし、筋肉隆々でたくさんの傷跡を恥ずかしげも無くさらした上半身裸の30代の落ち着いた男。腕と覚悟は本物だと見て取れ、彼がリーダーのようだ。

他の3人は恐らく、本当の副リーダーと幹部にあたる者だろう。

サイードは彼等を見た瞬間、嫌悪感を抱いき、顔を顰めていた。

「怪しい臭いが、プンプンするわね」

リーダーの横に張り付き、いつでも迎撃できる状態でサイードを観察している中、女が除(おもむろ)に近付いてサイードの顔に手を伸ばす。

いくらか荒れてはいるがすらりと伸びる指に視線を向ければ、美人に分類されるんだろう顔が妖艶に笑う。

近付いてきたせいでこみ上げたのは、我慢ならない吐き気と、こちらでは隠す必要の無い殺意。

「……触るな」

低く、淡々と。凡そ素人とは思えない声が、サイードの口から自然に零れた。

サイードにとって、これほど初見で嫌悪する人間に出会ったのは、初めてのことである。

その言葉により、布に掛かる一歩手前で女の手が止まった。見たくもないくすんだ瞳が、驚きに揺れている。

「これまた、大物を釣ってきたみたいだな。ティルダ、てめぇは出とけ」

黙って様子を眺めていたリーダーは、何故か嬉しそうに笑って邪魔者を除け者にした。

可哀想なティルダは、馬鹿みたいに素直に頷いて部屋を出て行く。

「リル、下がれ。射殺されるぞ？」

クツクツと笑う姿はサイードの抱く嫌悪を助長させ、部屋は剣呑とした雰囲気に支配された。

「サイードとか言ったか？　精石を調べながら旅をしているらしいな」

名乗らないのは、自らを上と宣言しているようなものだ。実際、態度も言葉も偉そうに見える。しかし、それは仕方の無い事だとサイードは我慢して、リーダーの意味の無い言葉の数々を流していった。

やれ精石の情報をやるだとか、報酬はたんまり出すとか。上目線は我慢できるが、舐められるのはそうはいかない。

どうしてくれようか、と思い始めた時、サイードの態度に痺れを

切らしたのか、リーダーの横に立つ男の一人が口を挟んだ。

「聞いているのか？」

「悪い。あまりにくだらなくて、危うく寝そうになっていた」

明らかな挑発。ここは流石というべきか、それに乗ってくる者はいなかったが、全員がサイードの物言いに拒絶を示した。

「俺は、見下されたり利用されたり、ましてや騙されるなんて我慢ならない性質でね。いつになったら、この無意味な時間は終わるんだ？」

腕を縛られ、敵と見なされれば逃げるのも難しい状況だというのに、リーダーに引けを取らない上目線だった。

口元を隠していても、小馬鹿に笑っているのが雰囲気で分かるだろう。さすがに、本人も無意味な時間とは言い過ぎたと思っているようだが。それでも、怯えも一切無く、それは只の旅人であれば聊か不自然な態度だ。何かしら、情報や自信が無いとそんなことは出来やしない。

反乱軍は、直ぐにはサイードを殺さない。いや、殺せない。

何故なら、アジト内部を少しではあるが観察し、メンバーの動きを見る限り、彼等は近々大きな何かをしでかそうとしていると感じたのだ。さらに、切迫している気がするから、それは先延ばしには出来ないんだろう。そんな状態で、タイミングで、外部からの駒を必要としていて、尚且つサイードが選ばれたということは、他に誰も捕まらなかったことを意味するのではないか。

そして、そこまで求めるということは、計画の重要な部分を担っているはず。

まあ、サイードは大体の見当をつけているのだが。

「くっ、くははは！　……何が言いたい？」

本性を晒したらしいリーダーは、テーブルから立ち上がって鍛え抜かれた体を近付ける。至近距離で見た瞳は、サイードには腐ってるとしか思えなかった。

「失敗した時の保険にしたいのなら、すればいい。但し、逃げないのを約束するかわりに、俺も好きなようにさせてもらう。此方は命が掛かっているんだ。こんな妥協案ぐらい、呑めるだろ？」

利用させてやるかわりに利用させろ。暗に、それとも自信が無いのか、という挑発を潜ませながらの、驚く程に直球な交渉だった。

自分でも自覚しているのか、感情的になるのをどうにかしなければならないなと、それがいつか命取りになってしまうだろう、と危惧した様だ。

「信用がならないな」

サイードの要望を聞いた彼等は、挑発に対してではなく、本人に自分達が考えていた用途を悟られたことで、今までで一番警戒を強め、臨戦態勢に入った。それが、肯定を意味すると気付かずに。

しかし、リーダーだけが面白そうに薄ら笑いを浮かべながらも動かない。サイードも動けなかった。今指一本でも動かせば、すぐさ

まその首は飛ぶだろう。

「信用する必要は無いだろ。お互いの目的が明確な分、単純に考えれば良い。お前等は万が一の際に俺の命を使い、俺はお前等が城を落とそうとする際の混乱に乗じて精石を調べる。後はそうだな、力がものをいうだけだ」

相手の表情や動きで、自分の予想が当たっていると確信したサイードは、自信ありげに自らの考えを述べた。

この国は、どう頑張って見ても限界だった。そんな国に潜む反乱軍という存在。その目的が、王の首と国の再建以外にあるだろうか。

そして、実際に見て感じ、考えた結果、サイードは彼等が王を討とうとしていると判断した。そして、保険を欲していると。

万が一、それが失敗したとしても、保険（サイード）をリーダーの代わりに差し出すことで、再び戦えるようにする為に。

身元不明の旅人であれば、いくらでも素性を偽装できるからだ。

正義を掲げながら、やろうとしていることは王と何ら変わりがないということに気付かないままで。そのせいで、サイードはここにいる。

「成る程な。まぁ良い、その話に乗った」

「リーダー！！」

誤魔化しが効かないと判断したリーダーは、先ほどとは打って変わって不機嫌になりながらも答え、仲間に抗議される。それを無視して伸ばした手がサイードの首を掴み、ダンッと大きな音を立てな

がら壁に叩きつけた。
その攻撃が”見えていた”サイードだが、敢えてそれを甘んじて受け入れる。

衝撃により零れた咳は、布に吸収されて気付かれない。動じないサイードにリーダーは動揺することなく、傷跡のせいで若干形の崩れた唇を動かした。

「ただし！　全てが終わってどちらも生き残っていた際は、こちらも好きにさせてもらう。こんなに腹の立つ奴は久し振りだ」

そう言って、彼は笑った。ひどく歪んだ瞳で、サイードにとって吐き気がするほどの正義を翳して。そして、サイードが陽の愚王と同列だと吐き捨てた。

「お前の瞳は、死を招く光を持ってるな？　吐き気がするねぇ。」

あまりに自分勝手な感性ではあるが、それを察したのだけは褒められるだろう。たとえ、自分までその光に呑まれているのを気付かないとしても。

決行は、３日後。最後にそう告げたリーダー達は、用はもうないとサイードを部屋から追い出した。

強い光は時に毒となる

サイードは無意味に考え事をしていた。

今までは教科書やニュースの中の出来事である反乱と、そこに属しながらもどこか希薄な感じであった国。実際に目の当たりにするなんて思っていなかったという気持ちも当然あるが、それ以上に抱いたものがあった。

反乱が愚かな行為だとか、戦争はいけないことだとか、自分は思ってもいないし誰かに叫んで訴えかけるつもりもない。

ただ、だからといって、そこでの罪は正義になり得るのだろうか。そういう疑問を持っていた。

名誉の死。尊い犠牲。

お綺麗に謳おうが、地位を授けようが、何も変わらないのではないか。

その肉を糧に変え、命を繋ぐというのであればまた別だろうが、結局そこにあるのは死と、殺したという事実だけだ。

だからといって、自分が殺した人間を忘れないだとか、罪悪感を持つといったこともないだろう。ただ、だからこそ認めるのだ。殺したという事実と、殺すという行為を。人肉を食べる必要も趣味も

無いし、そういった願望すらもないのだから。

ひけらかすこともなく、誰かに分けることもなく。淡々と自分の中で処理をしていく。

しかし、唯一他人に対しても言えるものがある。

それは善では無い、と。

価値観の違いだ云々言う者は勿論いるだろうが、それを善と偽る奴を絶対に認めない。

自分の家族を守る為に、襲ってきた盗賊を返り討ちにする。

何十人もの罪なき者を快楽を理由に惨殺してきた者を、これ以上の犠牲者を出さない為に討伐する。

忠誠誓った王に仇なす敵を、騎士が殺す。

人が人を殺す理由は千差万別、様々あるが、結局そういった理由は、牛肉、鶏肉、豚肉、鹿肉、種類はあれど、どれも同じ肉であるというのと変わり無い。

サイードは、ベッドと小さなテーブルと椅子があるだけの部屋にいた。当然、地下なので窓は無い。ベッドに顔を隠したままで寝転んでいるその瞳は、何も無い天井を見つめるだけだ。

リーダーとの駆け引きの後、即効この部屋に引きずり込まれ、それからずっとその状態である。様は、暇で仕方無いのだろう。だから、無意味なことばかり考えるのだ。

テレビや携帯があるわけもなく、本も何も無い。部屋に備え付けられている蝋燭の消費具合から、恐らく1日が経過していた。

「これが後2日続くなんて、挫けそう。ていうか無理！」

あまりの暇さに、我を忘れて転がりながら叫んだ言葉は、捨てた筈の人格の口調だった。言って直ぐ気付いたサイードは、慌てて外の気配を窺ってホッと胸を撫で下ろす。

「……危なかった」

聞かれていたら、決して軽くはない心の傷を負っていただろう。だが、今度は別の恐怖が脳裏を掠め、サイードの視線は扉に向けられた。

そう、そもそも監禁されているんだろうかという、恐るべき疑念。反乱軍からしてみれば、我が者顔でアジト内を歩かれるのは当然困るが、それ以上に、サイードが保険であると仲間に知られる事の方が避けたいものなのだ。万が一それが明るみになれば、統率が乱れる原因になってしまうだろう。

全員が全員、同じ感性を持つなど不可能は話なので、自信が無いのかとトップを疑う者が出てきてしまう。

国をひっくりかえすかもしれない計画が、実行間近で内部分裂により失敗に終われば、何の為に彼等は命を賭けているのか。笑い話にもならない。

と、サイードは恐る恐るだが、扉に向かう為に身体を起こしていた。

地味に眼が据わっていたのは、ここで鍵が掛かっていなければ自分が間抜けな事に落ち込むし、開いてなければいないで、また暇を持余すことになるという葛藤からだろう。一歩一歩、着実に近付いていくその距離に、ゴクリと喉が鳴り緊張から額に汗が滲む。

そしてサイードは、震える手でノブを触ろうとした。

「サイード、まだ寝てんのかぁ？　……うぉ、びっくった！」

「絶対、あのマッチョぶちのめしてやる」

寸前で開いた扉に、絶望と理不尽な怒りが芽生えたサイード。目の前にサイードがいるとは思っていなかったティルダが驚いていた。

まさか、こんなところでベタな展開とオチがあるとは、流石の神様でも予想できなかっただろう。とはいっても、神様のキーワードで真っ先に浮かぶのはデルなので、彼なら腹を抱えて笑うだろうが。

きょとんとするティルダを置き去りに、心のままに壁を叩いたサイードは、苛立ちながら大きな動作でベッドへと戻り不貞腐れた。

暫くして、状況を察したティルダが、何度か瞬きをして吹き出す。

「ぎゃはははは！　やっべ、サイード最高すぎる！」

サイードを指差し、腹を抱えながら部屋に入ってきたティルダは、ベッドに向かい合う形に椅子を移動させて座った後も、暫く笑っていた。

「……悪かったな」

誰だって、無理矢理部屋に押し込まれて、逃げるなよと釘を刺されたら監禁されたと思うだろ、とぶつくさ呟く姿は、ティルダの抱いていたサイードに対する印象をかなり変えたのだった。

「なんかクールで取っ付きにくいと思ってたけど、意外に天然なんだな。いやー、笑った！」

「て！？　俺、天然なのか？」

椅子を傾けながら、楽しそうに笑うティルダは年相応に見え、相手をするサイードもその反応だけは可愛らしい。

「天然だろー。後は、顔を見せてくれたら最高なんだけどな」

「断る」

しかし、ティルダのお願いを聞いた途端、そんな雰囲気は紛散した。金の瞳には、きっぱりとした拒絶が見て取れる。

それに押されたティルダは、それ以上追求することは無い。それにしても、ティルダはどことなくサイードに懐いている気がする。本人は、そうなる理由が分からず、単純に面倒くさいという感情しか持たない。

このままティルダの相手をするかどうか、暇つぶしと面倒くささの究極の選択である。

「にしてもさ、サイード。めちゃくちゃリーダーに嫌われてるけど、何したんだよ」

「別に、交渉しただけだ」

しかも話題がリーダーの話になり、絶対零度の微笑みをおもわずティルダに向けていた。この部屋全体が凍りそうな程の冷たい瞳を見た彼は、ヒッと小さく悲鳴をあげ、口元をひくつかせる。

「で、何の用だ？　大好きなリーダーに、俺の見張りでも命じられたか？」

それに気付きながらもフォローせず、結局サイードは暇つぶしを選ぶ事にした。

その言葉は、どうやら図星だったようだ。さっきまでの雰囲気はどこへやら、ティルダは目を泳がせて暗い表情を浮かべる。

壁に寄りかかり、ベッドの上に片膝を立てる形で座ってくつろぎ、それを眺めるサイードは、言うなれば獰猛な獣。哀れティルダは、その獣に狙われた小動物ってところか。

昨日の店から何も口にしておらず、ここでは満足に食事を与えられることもなさそうで空腹なので、言い得て妙だ。

「悪いな。俺があんたを選んだばっかりに」

「別に構わない。俺にもメリットはあるからな」

サイードに視線を合わせず俯いて言うティルダは、この荒んだ国では大分優しい心を持った青年だった。そんな彼が何故、反乱軍にいるのかは謎であるが、サイードにとって今回のイベントには、結果助けられている。

精石がある場所は、事前に全て知っている。

しかし、だからといって、いくら崩れかけている国といえど、そこのトップが居る場所に忍び込んで精石を壊すのは難しい。一人で実行するのと、反乱による混乱に乗じてするのでは、成功率にかなりの差がでてくる。

「サイードってさ、掴めない奴だよな」

そうやって、思いの他自分が行き当たりばったりな行動をしていると気付いて失笑していると、存在を忘れていたティルダがいきなり呟いて現実に引き戻された。明らかに愚痴とか告白とか、そういった類のものを吐き出しますというオーラを滲ませながら、彼はサイードを見ている。

その気配を感じたサイードの眉間に皺が寄るが、彼はまったく気付いてくれない。

「俺、無駄に強い精霊と契約してるから、力だけは半端無いんだよ。だから、副リーダーの地位を与えられてんの。でも、実際は本当の副リーダーがちゃんといて、いいように使われてんだ」

純血種が強い魔法を使える、というのは以前説明したが、その理由は力ある精霊に好かれやすからだ。何故そうなのかははっきりとは分からないが、恐らく精石と関係しているんだろう。

純血ということは、其々の恩恵を多大に受けてきた祖先の血が１種類だけで、精石から授かっている力の純度が高いということになる。

精霊にとっては、自分の属性の王に近いものを感じるから、純血種をより好むのだろう。

「俺、何がしたいんだろ。このままで良いのかな？」

「……」

サイードは、精霊と純血種の繋がりを考え、予備知識と照らし合わせて色々と思案していた。その間にも、ティルダは胸の内を吐露し続ける。

「……聞いてる？」

「あ、終わったのか？」

しかし、相手が相談に乗ってくれている素振りを見せなかったので、半ば中断する形で問い掛けた。するとサイードは、親身のしの字もない態度で、やっと終わったのか感を前面に押し出した。

まさに、唖然。

ティルダにとってしてみれば、かなり暴露したんだろう。馬鹿にされる覚悟で、勇気を振り絞って吐き出したのだ。

流石にこれは哀れである。サイードも、彼の悩みよりも重要な考えをしていたといっても、可哀想だなと思う部分はあった。

事実に気付かなければ楽だっただろうし、気付いてから気付かない振りをするのも楽じゃないだろうから。

「で、それを俺に言ってどうする？　慰めて、同情して、賛同して欲しいのなら、他を当たれ」

しかし、それ以上でも以下でもない。他人事の可哀想の領域から出ることは無い。それに、楽かどうかが重要ではないだろう。

『陽は満ち溢れる勇気を』

良く言ったものである。やはり、腐っているなとサイードは呆れた。

国も、民も、精霊も腐っていると。

「いや、別に、なんか聞いて欲しかったというか……」

尻込みするティルダに対しても、腐る原因だなと思った。

サイードより遥かに場数を踏んでいるだろうに、何の身にもしていない点では、その意見に反論できない。

「俺にお前を語られたところで、何の為にもならない。耳障りなだけだ。そんな下らないものだと尚更な」

サイードは、何故自分に相談をするのだろうかと甚だ疑問であった。デルにしろティルダにしろ、そうして一体何を求めるのだろうかと。

「使われるのが嫌なら、使わせてやるか使えばいいだけだろ。何かしたかったから反乱軍(ここ)にいて、このままでは良くないと分かっているからそう思うんだろ？」

しかも今回は、答えがでまくりな愚痴で、見下すことすら出来ない程だと思っていた。そもそも愚痴とはそういうものなのだが、無駄なことが嫌いなサイードにとっては理解し難いものだった。

サイードはティルダではない。だから、感情の類を知る必要は無いのだ。求めるのは常に、情報や策略。サイードにとってそれ以外は、全て無価値でしかない。

「俺に他人（お前）は決めれない。そんなめんどくさい事、誰がやるか」

ただ、白か黒の感性しか持たないからこそ、相談した相手は決まって言ってくるんだろう。内容にもよるが、求めてもいないのに、突き離しているというのに、それが結果的に背中を押す形となる。

「……俺が、俺を決める？」

思いもしなかったというように、心に刺さった言葉を復唱しながら、ティルダはサイードの金に釘付けになる。

そして、暫く自分の赤を揺らしてぶつぶつ呟き。そして。

「そう、だな……。サイード！」

どこかすっきりした顔をして、消えていた光を再び瞳に宿したティルダは、清清しい笑顔で言った。

ありがとう、と。

それを見たサイードは、あまりの眩しさに目を細めて、嫌いな言葉を投げられたことに苛立っていた。

誇りが無い、それが誇り

あれから、ティルダは何か思うところがあったのかすぐさま部屋を飛び出し、サイードは再び暇を持余すこととなった。その背中を眺めながら、振り出しに戻るのであれば最初から暇を選べばよかった、と後悔する。

しかし、監禁されてはいない分かっているので、先ほどまでと違い、部屋で何もせずに時間が過ぎるのを待つ必要はなかった。

なのでサイードは、部屋から出てアジト内を見回る事にする。リーダーも、サイードがそうするだろうと見越したから、ティルダを見張り役にしようとしたのだろう。まあ、結局彼はその役を放棄したのだが。

アジト内は、2日後に迫った決戦への緊張感に満ちていた。間際で表面上仲間と紹介されたサイードに対しては、視線が突き刺さってくるが。

それを鬱陶しそうに流しながら、無意味にぶらつくと見せかけて、サイードは発見した食糧庫から少しばかり自分の分を失敬した。

シャワーらしきものも見つけたが、さすがにそれは我慢するしかなく、他にも計画の全貌と、城の見取り図までも手に入れていった。

当然そのようなものがある場所は、交代で見張りが付けられているのだが、サイードは自分で見なくても知る手段を持っているのだ。

さらに、その場にいなくても聞く事が出来る。
魔法にもそれに近い術はあるが、サイードのはまた別の、特別な固有の技であった。何故そんな力があるのか、それはルシエが”救世主”だからとだけ説明しておこう。今はまだ、知る場面ではない。
とにかく、その力でサイードは様々な情報を仕入れていった。

有益なものからそうでないものまで、本当に多くを手に入れたが、何よりこのアジト散策により、2日後の計画はほぼ失敗するということが判明する。

そしてサイードは、ティルダが感謝を抱いて懐いていてきたのが、結果的にプラスになったことを笑った。彼の決意も、だ。

なんだかんだで、アピスに来てからサイードはかなり運に恵まれていたのだろう。それに対し、少しつまらないと感じるのは褒められないが。

サイードにとっては取り巻く環境が変化しただけで、自身は何も変わっていないと思っている分、異世界も違うだけで普通に感じられて期待外れな部分があるのだ。

一気に冷めた気分になり、気付けばアジト内でも人気の無い場所に来ていた。
散策しつつも意識は違うところに向けられていたから、気付かずにそんな場所に来ていたのだが、何者かが自分に向ける視線により意識を戻す。

「ここで、何をしているの?」

既に、散策を始めてから2時間は経過していた。そこにきての、

突然の再会。目の前には、リーダーと対面した時にサイードの顔を晒そうとしたリルと呼ばれた女が立っていた。

腰まで流した赤い髪に、灰色の瞳。主張激しい胸に括れた腰はスタイル抜群であり、確かに美人ではある。しかし、瞳の持つ光はくすんでいて、目つきも鋭くどぎつい。纏う雰囲気から、ただの女ではないのだろうが、幹部よりもリーダーの女と言われた方が納得できそうだ。

リルは偶然を装っていたが、サイードには彼女が故意に近付いてきたのを悟っていた。
人の醜い部分が地球より率直に行動として表れるのは、サイードに楽しみをもたらしてくれる。

「いや、何か手伝える事は無いかと思ってたんだが、気付いたら迷っていてね。貴女は確か……」

「リル、よ。ふふ、昨日と随分態度が違うのね」

サイードは彼女に会えて、かなり好都合だった。しかも、本当は女であるので同じ女の気持ちや思考は分かりやすい。特に、自分の欲望を最優先させるタイプの女は。

口元に手を当ててクスクスと笑ったリルは、熱の篭った視線をサイードに向けながら道を塞ぐ形で会話をする。

「昨日は少し、感情的になってしまったからね。普段は、こちらが素だよ」

口調も柔らかく変え、豹変したと言ってもおかしくない。サイー

ドを知っている者がいれば、薄ら寒いと引くだろう。残念ながら、この男を知る人間は今のところまだ居ないのだが。もしかしたら、ティルダはいくらか会話をしているので、そんな反応をしたかもしれない。

サイードがそんな態度を取って、嫌悪していたはずのリルの会話に付き合っているのには当然理由がある。散策している間にサイードにも、彼女に用が出来ていたのだ。

自身の豹変は、楽しい楽しいお遊戯であり、最も大きな快楽のための前戯でもあった。

今のサイードは、女に受けの良いもの腰柔らかな青年であり、かといって付き従うだけの軟弱とはまた違う。弄ぶことを得意とする、少し危ない男。

元々サイードという”役”は、そういって定まらない人物なのだ。

「ねぇ、私の勘だと、あなたかなりいい男でしょう？」

かといって、こうもあっさりとそれにのってくるリルには、大爆笑して泣かせてしまいたくなる。それを我慢して、サイードは彼女の手を取った。

「さぁ？　それは貴女が判断してくれれば良いさ。」

耳元でそっと囁けば、リルは擽ったそうに身をよじる。それに合わせてわざとらしくクスッと笑い、すぐ傍の適当な部屋へと導いて行く。素直に従う姿に、彼女に拒絶の色は見えない。

可哀想に、リルの後ろにはある物が視えていた。

それこそが、死を招くと自覚しているサイードにのみ備わるものなのだが、何故偽りの人格に特技としか言えないようなものがあるのかは、本人にも不明だ。気付いたのは、昨日ごろつきと対峙した時だったのだが、これといって役立つともいえない力をサイードは持っていた。

未だ不確定な部分も多いので詳しい説明はまだできないが、少なくとも言えるのが、リルは欲に溺れたばっかりに、欲張ったばっかりに、それが視えるのだろう。

サイードが宛がわれているのと同じつくりの無人の部屋に入った2人は、ベッドにリルを押し倒す形で向き合っていた。体は密着し、彼女の足の間に自分の足を挟み、至近距離にある顔では互いの吐息が交じり合う。

クスクスと笑うリルは、腕をゆっくりと動かして細い指でそっとサイードの顔を覆う布を顎下にずらした。

「えらく念入りなのね」

「焦らされる感がたまらないでしょう?」

布の下には素顔があると思っていたのに、現れたのはまた布。若干苛立った様子で眉を顰めたリルにサイードは楽しそうに小さく笑って、自分からずらされたマントと一体である布を剥ぎ取った。そうすると、彼女に明かされるのが髪だ。銀の髪が揺れ、その美しさに女として軽く嫉妬を覚える。

次に、サイードは、ピアスで止めているマスクを外した。手に持ったマスクをリルの横に投げれば、彼女は感嘆の息を吐き出しなが

ら釘付けになっていた。

晒された素顔、マスクの下にあったのは、綺麗な鼻筋に傷のまったく無いきめ細やかな肌。薄い唇は、女に劣情を抱かせる。

「貴女だけに、特別だ」

そんな顔が、そんな唇が、リルに近付きながらそう囁いた。瞬間、彼女は言い知れない幸福感に震える。それは、自分がサイードに求めてられているという勘違いな達成感でもあった。

「ふふ、勿論。2人だけの、秘密ね」

リルは、初心な少女では無い。女の快楽を知り、女としての武器を使って生きてきた。しかも彼女は、それが出来る美貌がある上に、絆されるより絆すタイプだ。当然、自分へのプライドも高い。しかし、彼女の知ったサイードという男は、それを捨てても求めたい感情を抱かせる。

この男を自分のモノにしたい。リルの心はそれに支配された。

「ねぇ、私が貴方を助けてあげる」

「助ける？」

サイードが反乱軍にいる本当の意味を知っているリルは、この瞬間リーダーに従う意味を失った。時に人は、手に入れる為であればどんなことでもする節がある。

正直、彼女にそうさせている本人は、自分の顔がそこまでの効果

を持っていることに驚いているのだが、その容姿は淫魔のごとく整っていて、尚且つ定まらない人格がもたらすミステリアスな雰囲気が相まって、破壊力抜群なのだ。

女の姿でも同じか、と聞かれればまた違ってくるのではあるが、そうすると性別を間違って生まれてきてしまったと思えてくる。

顔から離れ、リルの首筋にうめて焦らしながら先を促せば、小さく嬌声を上げながら彼女はうっとりと惚けた。

「ぁんっ。反乱は失敗するわよ。そしたら貴方、殺されちゃうじゃない」

どうしてリルがそんな事を言うのか。普通であれば、訝しむはずだ。しかし、サイードは彼女がそう言う理由を全て知っていた。だからこそ、用があったのだ。

確かにサイードは、反乱軍に利用されるかたちで此処にいる。しかし、何もせずに受身でいるわけではないのだ。最大限、最低の準備をし、異世界(ココ)に存在(ある)のだから。

「何故失敗すると？」

そして、利用できるものは全力で利用していく。目的のためならば、それがたとえ自分自身であっても。

「知りたい？なら――」

「教えてくれたら、いくらでも君を喜ばせてあげるよ？」

首筋から顔を上げたサイードは、リルが全てを言い終わる前にそ

の口を短く塞ぎ、わざとらしくリップ音をたてながら頬にも口付けた。そうして、主導権を自分に持たせる。
ただ唇を合わせただけだというのに、それだけでリルは興奮した。

とはいっても、サイードはリルを抱くことは出来ない。まあ、もし本当に男であったとしても、彼女を抱こうとは思わないだろうが。

それでも、キス一つで自分に利益があるというのなら、相手が虫であろうがサイードはやってのけるだろう。この男は、そういう奴なのだ。

「ふふ、意地悪ね。いいわ、教えてあげる」

馬鹿な女(リル)の頭にはもう、サイードとの情事にだけしか興味が沸かず、その魅力的な身体を差し出していた。

そして、必死にその胸に縋って、我慢ならないと急かす。

もし、サイードに僅かでも女の膨らみがあれば、ここでバレる危険性もあるのだが、念のためサラシを巻いておけば焦る必要も無いぐらいに余裕で安心できる。それを意識的に考えないようにして、サイードはリルの髪に口付けを落とす。

そのまま再び首筋に軽い刺激を与えている姿は、男女が睦み合うものそのものだ。しかし実際は、堪え切れない嘲笑を隠すためだった。

その焦らしに耐えかね、リルは考える事すら放棄して言った。

「私はね、陛下に愛されてるの。つまり、間者。だから2日後の計画はバレバレなのよ?お陰でたーんとご褒美が頂けたわ」

でも、私は貴方を愛してあげる――

それが、愚かな女の最後の言葉となった。

「残念でした。……俺の勝ちだ」

サイードの突然変わった口調に困惑する間もなく、リルの思考は痛みに支配された。首筋に埋まっていた筈の美しい顔は、いつの間にか抱き合うのからただの馬乗りに変わり、自分を冷たく見下ろしている。そこに、感情の一切を映さずに。

そして、その右手はほんの数秒前まで無かったはずの剣を握っていて、見た事の無い装飾が施されたソレの先を辿っていけば、切っ先は自分の胸の中へと埋まっていた。

愕然と視線をサイードに戻そうとする。しかし、その動きは緩慢で気だるさを伴い、それでもやっと視界に求めていた男が映ったとき、その顔はニヤリと歪んだ笑みを浮かべていた。

それすらも美しいと感じ、そしてリルの視界はシャットアウトする。

現実を呑みこむことも出来ず、把握も出来ず、死が彼女を喰らった。

その力、特別

サイードが見下ろす先には、くすんだ瞳を濁った瞳に変えたリルだったものが映っていた。ほんの数秒、興味なさげに眺めていたサイードだったが、そこからの動きは早かった。

外していたマスクと布が、突然部屋に吹いた緩やかな風により舞い上がり、再びその顔と髪を隠して元の状態へと戻って、風がそうしてくれている間に、手に持つ剣を死体から引き抜いて血を払った。

そして、風が止むと同時に、部屋の扉が外側から蹴り倒された。リルを刺していつもの姿に戻る、この間1分も経っていない。

「っ！？」

部屋に入ってきたのは4人。その中で一人、息を呑む者がいた。

彼等が押し入ってくるのを知っていたサイードは特に驚くことはなく、ゆっくりと視線をそちらに向ける。

ティルダは、死体とサイードどちらに息を呑んだのだろうか。

「リ、リル！？　おい、リルっ！！」

ティルダ以外、リーダーと2人の幹部は警戒して武器を構えつつも黙ってサイードを見るだけであった。彼等は、一連の会話全てを聞いていた。

ティルダまでいたのは、彼の精霊の力を借りて気配を消していたからだ。

では、何故そんなことをしていたのか。それは、サイードがそうさせたから。理由は、今から少し時間を遡って起きた出来事にあった。

サイードがアジトの散策をしている際、その耳に不審な動きをするリルの事が耳に入った。それを伝えてきたのは、精霊だ。

精霊にとってサイードは、王に近い敬愛する存在である。その度合いは、純血種のソレとは到底レベルが違う。

そしてその力は、唯一ルシエを特別にするもの。ただの女子高生を、アピスで特別にした力だ。

本来、精霊とは契約によって繋がり、そしてその契約は精霊1体としか結ぶことができない。アピスの人間は少なからず魔力という、例えるなら生命力がより実感できる形になったものを持っているのだが、その魔力は契約をした時点でその精霊の色に染まってしまう為に1体が限界なのだ。そして、精霊の力を自身のものに変換するのに魔力が必要になる。

しかしルシエは、救世主になることで人間の中で最も精霊に近い存在となり、それにより、全ての精霊と意思疎通を図ることが可能となった。契約していようが関係無くだ。その上ルシエは、契約してなくとも精霊の力を分けて貰える。

この力は元々、デルが世界を渡るルシエに授けなければならないもので、救世主になるなら必要なものでもある。

とはいっても、現在精霊の力は極限まで弱くなり、存在も少なくなっている。それでも、全てがいなくなったわけではないし、そこにある精石に属する精霊しか存在しないわけでもない。先ほど、マントとマスクを着けてくれたのが風の精霊であるように、本来精霊とは、世界中にありふれてるはずだから。

しかし、精霊にも力の強弱はあり、衰弱してしまうと自身の存在を保っていられずに消滅してしまう。そうさせるのが、穢れなのだ。

少し話が逸脱してしまったが、サイードが城の見取り図を入手したりできたのは、単にそういうことだった。

精霊に呼びかけ、精霊に聞き、精霊に目を借りることで視ることができる。

当然、そうするにも魔力が必要であるのだが、異世界人であるはずのルシエもそれを持っていた。それは何故か。異世界に渡る際、一度体が構築し直されたからだ。

いくら地球とサイクルが似ているとはいっても、まったく同じでは無い。太陽が上り、沈めば月が輝く。そういったモノは地球と同じであっても、世界を構成する要素が違う。なので、そのまま世界を渡ってしまえば、恐らくルシエの体は魔力を知らないことで、時間をかけて崩れてしまっただろう。所謂拒絶反応だ。

だから、身体を構築し直し、その際に魔力の芽を植えてその存在を直接体に覚え込ませた。

とはいっても、芽というだけあって、それが発芽し成長しないことにはルシエの持つ魔力は目覚めないし馴染まないはず。なのに、異世界に来てたった1日で精霊との意思疎通を図れるのは異常であ

る。仮に、疎通のやり方を予備知識として持っていたとしてもだ。

しかも、精霊との会話は、人間とのものとはまた違う。

力の強い精霊であれば、より人間に近い明確な意思を持っていたりするが、そこらにいる精霊は比較的弱い存在であり、持つ意思も弱い。

なので、人が何かを見て誰かに報告するとすれば、例えば「城の見取り図がありました」となるものが、意思の弱い精霊に教えてもらう際には、「何かあったよ」だけしか得られない。いやはや、なんとも根気が必要なことだろう。

それをサイードは、アジトを散策しながら、存在を確認できた精霊と複数繰り広げたのだ。

結果、「変なのがいる」から始まってリルが裏切り者だと知った。そしてサイードは、すぐさまリーダーを探してそれを教え、嘘だと思うなら今から暴きに行くから聞いていればいいとのたまい、もしそれが本当であった場合、リルを殺してもいいと許可を受けたのだ。同時に、ある約束を結ばせた。

それが、リルを殺してすぐさま彼等が部屋に現れたことと、サイードの所業に激怒しなかった理由である。誰もが信用しなかった中、真実はサイードに微笑んだ。

そうして現在の状況が出来上がり、部屋は緊迫した雰囲気で満たされていた。

「殺す必要があったのか！？」

もう1度剣を振ってついた血を落とし、残ったものを死体が着ている服で拭っているサイードに向け、ティルダは怒りを込めて叫ぶ。

その姿にサイードは哂い、呆れる。誰もが、その目が笑っているのに気付いていた。

「答えろ！　サイード！」

馬鹿にされさらに怒りの増したティルダは、サイードを死体から離すように突き飛ばしながら食って掛かった。反撃しなかったのは、その価値すらなかったからだ。

「俺が許した」

代わりに、視線だけでリーダーに対してこいつをどうにかしろと訴え、受け取った彼は言葉でティルダを止めた。

「なんでだよ!?」

「裏切りは大罪だ。餓鬼なてめぇでも、それぐらいわかんだろうが」

今度はリーダーに食って掛かるティルダと、そのやり取りを、サイードはぼんやりと眺める。まるでフィルター掛かった感じでそれは映った。

反論の余地も無い事実に、可哀想なティルダは、リルだった死体を抱き締めて泣いた。しかし、リーダーはそれを無視してサイードに視線を注ぐ。

その表情に、出会ったときの偉そうな雰囲気は無い。どうやら彼

は、色々なことが気になって仕方がないようだ。

本来であれば、サイードにはその疑問に答える義務はないし、その気も持たない。しかし、リーダーとこの件で話をして許可を取り付けた際に、彼はとある条件を提示していた。

「その剣は、どこから出した？」

リーダーが知りたがったのは、サイードの能力である。この裏切りを暴いたこともそうであるが、彼には今更ながら、サイードが得体の知れない人物に思えていた。

今だと、手に持つ剣がそうだ。サイードは見る限り丸腰であった。彼等のように常に帯刀してはいないし、弓を背負っているわけでもない。

当然、ティルダの報告で、マントの下に小剣を忍ばせているのは知っていたが、その剣は隠せる程小さくは無かった。

刃（ブレード）は平均よりも若干細く長く、銀色に美しく輝き、鍔（ガード）の中央には地球でいうところの華奢（かしゃ）なセレスタイトがはめ込まれている。握り（グリップ）は黒く、柄頭（ポメル）には、そこに繋がれた白と黒の翼を模した手のひらサイズの大きなダイヤのストラップが揺れていた。

剣の形自体、リーダーは初めて見るものだった。加えて、派手ではないが豪華な装飾。宝剣と言ってもいいぐらいのその剣に視線が縫い付けられる。

しかしそれは、今浮かんだ疑問である。

リーダーが出した条件はサイードの能力を晒すというものだったが、それに答えるのに出した条件が、質問は3つに限るというもの。

裏切りを教えた際には、知った方法に答えていない為、現時点で2つの質問をしてしまっていた。

「質問は3つまでの約束だ。残るは、後1つだが？」

剣に関しては、思わず口にしてしまったんだろう。僅かに苦渋を潰した顔をしたリーダーは、暫く思案した。

さて、彼はどう出るのか。そこにサイードの興味が向く。果たして最後の質問は、反乱軍のリーダーとしてのものか、一個人としてか。

ある意味、力量が問われるものだ。サイードはリーダーを嫌悪はするが、散策の間でついでに知っている彼の思惑には、感嘆した部分があった。

少しばかり期待していれば、リーダーは口を開く。

「お前は敵か、味方か？」

傍らの幹部が剣と弓をサイードに向け、いつでも動ける状態で待機している中、部屋に響いたのはそんな質問であった。

「じゃあ、最後の質問からいこうか」

サイードは、どんな印象を持ったのだろうか。その質問は、反乱軍としてのものに聞こえた。しかし、一概にそうとは言えない反応をサイードは示す。

馬鹿にするような、興ざめしたような感じがした。

「まあ、断言してやるよ。敵では無い。とはいっても、味方でも無いがな」

それは、反乱軍がどうなろうと関係無いということでもある。だが、サイードにしてみれば、当然なのだ。

やはり、どこか拍子抜けしたのだろう。返り血が付いていないか全身をチェックしながら答える姿に、緊張感はなかった。

「んじゃ、次だな。この剣は少し特別でね、知り合いから貰ったんだが」

あっさりと言ってのけ、今度は万が一にでも攻撃されないように、右手に持った剣の切っ先を下に向け逆手にしながら、腕の高さを彼等がよく観察できるように挙げた。

「なっ!?」

すると、剣は一瞬にしてその手から消えた。そして、手のひらを分かりやすいように広げる。サイードの右手の中指には、セレスタイトが1つはめ込まれた黒い指輪が光っていた。　ちなみに裏側には、白と黒の剣と同じ翼を模したダイヤもはめ込まれている。どの石も、剣を飾っているのよりは小さい。

泣きながら様子を見ていたティルダも含め全員が驚きに声を上げる中、もう一度その手に剣が現れた。その時には、中指の指輪が消えている。

それは、魔法でも不可能な現象だった。故に有り得ないと凝視してくる彼等に、現実だと思わせる様に何度かその動作を繰り返した。

ちなみに、これもデルに無理やり用意させたものだ。剣を持った事の無いルシエでも扱えるよう、羽の様に軽く錆びもしない剣。精霊の力が乗るようにもされている。デルに出来るかと聞き、出来ないと言わないから造らせた。装飾は、彼の趣味にまかせてある。

「さて、最後だ」

未だ、その現象を受け入れられないリーダー達を放置し、サイードは進めた。部屋は当に血の臭いが充満しており、それに酔って気分が悪くなっていたのだ。

最後の質問は勿論、どうやって裏切りに気付いたのか。

「俺は、こう見えて精霊とオトモダチでね。だから、教えて貰ったってわけ。ソレが、不審な動きをしているとね」

真実全てを言うはずはない。ちらりと死体を一瞥して言った言葉は、それでもアピスの人間にとって特別なものではあった。とはいっても、彼等は、意思疎通が可能な程強力な精霊と契約している、と勘違いをしたのだが。

しかし、それだけで特別になれる程、アピスの人間と精霊は密接した関係なのだ。それを考えたら、穢れにより精霊が少なくなっているというのに自覚をしない人間達は愚かとしか言えない。

この瞬間、リーダーにとってサイードは、ただの身代わりの駒から戦力に変わった。聊か状況についていけずに固まるが、ここでしっかりと働かなければ、サイードは即効見限って別の行動へと移るだろう。

時間を無駄にする余裕が、サイードには無いのだ。

それに、ティルダがまだみっともなく抱いている死体（リル）を無駄にできるほど、彼等も余裕がある訳ではない。

「……明日、城に攻め込むぞ」

リーダーの決断に、そうこなくては、とサイードは笑った。それが、サイードと彼が結んでいた約束だった。

明日はよろしくな、と告げて部屋から出て行くサイードに、彼等が抱いた感情はどういったものだったのだろうか。疑念、驚愕、畏怖、困惑。どれかなのか、それとも全てなのか。部屋には言い知れない空気が漂っていた。

力への信頼

リルの体を貫いた瞬間、フラッシュバックした記憶。デルの言った、あんな事になるとは思っていなかったの本当の意味。
あの、人の体が貫かれる光景を、“私”は知っていた。

それは、高校に入学したばかりの頃。去年の4月の事だ。

新しい制服、新しい環境、誰もがそれに心を躍らせていた。
だけど私は、その頃にはとっくに捻くれた性格が完成されていたから、友達も作らず日々を過ごしていた。

そんな中、やたらと絡んでくる男が居た。中学3年の後半から始めたバイトの先輩で、少し年上で、優しいと評判だった。何故か彼は、出会って数週間で私を好きだと言った。

軽い男では無かったらしく、周りも不思議がっていたのを知っている。

しかし、断る理由も無く、だからって好きでも無かったが、その告白を受けた。

ただの、気紛れ。

付き合ってからも、やたらと好きだと言われ、デートを繰り返し、たまに寝た。愛情は、幾らそれらを重ねても沸くことはなかった。

だけど、何故か別れようとは思わなくて、もしかしたら好きではなくとも、彼との時間は楽しかったのかもしれない。

でも、突然別れは訪れた。しかも、永遠に。

その頃には、毎日のようにトラブルに見回れていて、それもその一つだったのだろう。デート中に遭遇してしまった通り魔により、彼は私を庇ってあっけなく死んだ。

リルのように前から刺され、無駄に長かった刃渡りの為、背中からそれを飛び出させる形で。それを私は、至近距離で見ていた。皮肉な事に、他にも被害者はいたが、彼がたった一人の死亡者となった。

彼は最後に私に向かい、無事で良かったと言って息を引き取った。

でも、リルに対しサイードが笑ったのは、それを思い出して悲しかったからではない。そもそも、その事件を忘れてなんかいない。

リルを刺した瞬間にある事に気付いていて、それが可笑しくて笑えてきたのだ。リーダーとティルダのやり取りがフィルター掛かって見えていたのも、そのせいだった。ああ、本当はこういったやり取りが正解なのか、と今更ながらに知ったから。

私を庇い死んだ人間がいたのは事実。
彼は明らかに、デルが与えてきた神の試練のせいで死んだ。

なのに私は、彼の名前と顔を思い出せなかった。出来事は忘れていないというのに、最も覚えているべきことが欠けていた。

まだ、たった一年しか経っていないのに。
だから、この女を、リルを殺した事など、一週間もすれば大して覚えていないんだろう。

そう思うと物凄く愉快で、だから笑いを抑えられなかったのだ。
そして、正解なやり取りを知ったからこそ、自分の異常さが見えてくる。

無事でよかった、と刃物を引き抜かれたせいで盛大に血を吹きながら倒れた彼に対し、私は何て言ったんだろう。

「何してんの？」

そう、確かそう言って泣きすらしなかった。感謝も、贖罪の念すら抱かなかった。葬儀に参列したかどうかも、定かではない。

「……くっそ！」

夢見の悪い一夜だった。突然飛び起きたサイードは全身汗だくで、酷い頭痛に頭を押さえる。

あまりの息苦しさに、思わず顔を覆う布を剥ぎ取った。
襲ってくる鈍痛に耐え、大きく息を吐き出す。そうして無心に、それが治まるのを待った。

いくらなんでも、顔を隠したままで寝るのはきつかったのだろう。もしかしたら、リルを殺した一件で何かしら抱いたものがあったのかもしれない。

でも、それは仕方の無いことだ。何せルシエは、異世界に来てまだ3日目なのだ。慣れることのほうが遥かに難しい。

「まさか、これ、精霊使ったからじゃないよな？」

中々引かない体の異常に、サイードは心当たりを口にしていた。それは正解で、やはり魔力が馴染んでいないというのに精霊と通じるのには無理があったのだ。そもそも、複数と対話する時点で魔力以外にもかなりの精神を使うので、身体が悲鳴をあげないのは有り得ないこと。
それに、サイードはまだ魔力が発芽すらしていない状態だ。使いこなせるわけがない。

「……使えねぇ」

なんとかなるだろ、という安易な考えの結果に打ちのめされたサイードは、何をそんなに苛立つのか、壁に拳を叩きつけた。
しかし、とにかく現状としては、今日を乗り切るのが先決である。例えティルダだろうと、それ以外の誰であろうと、サイードは彼等を盾にしながら精石を壊すつもりでいた。

「準備はいいなっ！？」

リーダーの声が、荒れた広場に高らかに響く。数も戦力も決して強いとはいえない反乱軍は、太陽が頂点に達する少し前に、その意思を武器に込め城に進み出した。

リルの裏切りとその死は、僅かなメンバーにしか知らされなかったらしい。

それもそうだ、それを知らせたところで志気が下がるだけである。突然の決行日変更については、相手側に悟られていたと事実を言っているが。

駒から戦力に変わったサイードは、まるでリルの後釜とでもいうように、リーダーと共に行動することを命令された。心情では苛立ちはしても、実際に願ったり適ったりなので素直に従っている。

リーダーと共に行くということは、必然的に王の場所に向かえるということ。従って、精石の破壊がより楽になるのだ。

「俺は、納得してないからなっ！」

唯一の難点と言えば、リーダーと行動するのがサイードだけじゃなく、ティルダもだということだろうか。他の幹部は仲間の統率に徹し、王を討つのはこの3人。しかしティルダは、未だに怒りを顕わにしたままだった。

「好きにしろ」

大勢の人間に踏み荒らされ乾いた大地が細かい砂埃を上げ、思わず布の位置を確認しながら、サイードは関係無いという態度で返した。悔しそうに唇を噛むティルダの姿など、既に映ってはいない。

怒号を響かせながら、反乱軍は駆け抜けていった。

途中で、その熱気に中てられた市民までもが加わっていくが、サイードだけは重要なポジションにいながら傍観者であった。

この国は、終わる。こうして反乱する民も、それに対抗する国も、そもそも数が少なすぎる。

これまでしてきた事で他国に救いを求めることができず、今までの無意味な戦争で戦力もほぼ無し。

だからこその反乱なのだが、その涙ぐましい覚悟も努力も、無意味となるだろう。国を国として成り立たせてくれている精石を、その根源が、サイードによって破壊されるのだ。

だからこの戦いは、さらに大地を血に染め、精霊を苦しめるだけの戦いとなる。それでもサイードは、この反乱を利用する。

何故なら、何を守りたいのかと問い、デルは世界を守りたいと言ったから。だから、僅かな犠牲より大きな成果を求める。

命を天秤にかけるなど傲慢極まりないが、何の犠牲も無しに救えていたら、当の昔に世界のバランスは元に戻っているだろう。

「サイード、ティルダ！　こっちだ！」

偉そうに怒鳴ってくるリーダの背中を眺めながら、サイードは城門を突破する。兵士は、大した防衛もできず、簡単に反乱軍の侵入

を許していた。

あちらこちらで、金属が打ち合う音がする。火の手が上がり、城にしては少ない使用人達が逃げ惑い、呻き声が耳を刺激し、断末魔が体に絡み付く。

反乱軍と兵士、どちらともつかない血が大地に染み込んで、サイードにしか聞こえない精霊の悲鳴の渦の中、3人は場内を進んでいった。

周りを観察する暇は無い。邪魔者は容赦なく切り、屍を踏みつけ、必死に精石の気配を探った。

城の見取り図を元に彼等は進んでいて、2人は王を目指して玉座へと向かう。

「変だ……」

しかし、目的の違うサイードは違和感に気付いて立ち止まった。風の精霊の補助を受けた身体は、全力疾走を続けても疲れることは無い。体力があるリーダーとティルダも、興奮に目を血走らせてはいるが、今のところ無傷であった。

「精石は本当に玉座にあるのか!?」

サイードは当然その気配を知らないわけだが、そこは最も精霊に近い存在である。城に入ってから、全身にピリピリと訴えかける何かがあった。違和感を持ったのは、その何かが玉座に近付いていけばいくほど、薄くなっていくからだ。

「あぁ、恐らく王が肌身離さず持ってるはずだ！　こんな時に、玉

座の間に居ないほうがおかしいだろうがっ！」

足を止めればその分、敵を呼び寄せてしまう。しかし、リーダーが厳しく捲くし立てれば、やられた、とサイードは苛立った。

その感情のまま、襲い掛かってきた兵を小剣で仕留め、来た道を戻ろうと踵を返す。リーダーとティルダ、2人はぎょっとした。

「くそっ。なら、玉座に王は居ないぞ」

しきりに周囲に気を張るサイードは、敵を警戒するのとはまた違っていて、2人はさぞかし疑問に思っただろう。しかし、その言葉は俄かには信じられない。敵国の襲撃であれば逃げることもあろうが、この騒ぎで玉座に居ない、即ち反乱に対して王が尻込みすれば、それはもう負けを認めるようなものだ。

その戸惑いをサイードも理解はできたが、何故そう思うのかは説明しなかった。代わりに、リスク承知で近くにいた精霊から情報を得る。

「……罠か」

その精霊から得られたのは、玉座の間には王を狙う不届き者に対し、かなりの兵が待ち構えているということ。尚且つ、王は私室にて守られているということだった。

幸い、1体と通じただけでは僅かに体力を持っていかれただけで、支障は感じない。

「悪いが、俺は玉座には行かない。信じるかどうかは、自分で判断しろ」

先程の囁きに警戒したリーダー達であったが、それでもサイードによる説明は得られなかった。さらに、あっさりと行き場所を変えられ、静止をかけるが聴く耳は持たれない。困惑し指示を待つティルダと、どうしたものかと悩むリーダー。だが、サイードには信用に値する実績があった。

「そこに王はいるのか！？」

「あぁ、いるようだ」

それならば、彼等もついて行かないわけがない。ティルダに対し頷いて返したリーダは、すぐさまサイードを追った。目指す私室は最上階。

まさか逃げることはないだろうが、それでも立ち止まっている時間も、悩む時間も惜しい。

こうもあっさりついてくるとは思わなかったサイードだったが、視線は上へ上へと急(せ)いでいた。

「……私室か」

「あぁ」

右にリーダー、左にティルダ。サイードを中央に置く形で走る3人は、一見すれば仲間である。

「リルの事は許せないけど、俺はサイードの力を信用する」

さらには、ティルダのこの言葉。もしかしたら、信用や信頼とい

ったものは、築くこと自体はそれ程難しくないのかもしれない。それ自体よりも、難しいのは保つことや継続にあるのだろうか。

「はっ、有難いと言っておこうか」

ただし、それに対し感謝したり喜んだりするのは人それぞれ。残念ながら今のサイードに、余裕なんてものはない。この先には重要な仕事が控えており、尚且つそれは方法が不確定なものなのだ。

デルは精石の破壊の方法を、詳しく説明してくれなかった。簡単に、それぞれの解放の詩を唱えればいいとだけしか言わず、その詩は精石に近付けば自然と頭に浮かぶだろうと。

実際、それは本当のことで、最上階に近付き精石の気配が濃くなるにつれ、少しずつ鮮明に何かの言葉がサイードの頭を支配し始めていた。

ただ、せめてタイミングぐらい教えて欲しかったと、デルに対して苛立ちを抱く。

唱えるだけで破壊できるのであれば、それはいつだって良いだろう。だが、ただの言葉が力を持つとは思えない。

それに伴って魔力を使うのであれば、そうほいほい唱えるわけにはいかないし、精霊王に呼びかける効果があるというのであれば、目の前になければ無意味かもしれない。

サイードは迷っていた。

しかし、その間にも最上階へと近付いていく。

そして、入り組んだ廊下を走り階段を上り、不審に思うほど兵の

数が減っていると感じた時、彼等は目的の階へと辿り着いた。

「突っ切るぞ！！」

階段を上りきった時、視界に映ったのは、大人が5人横にならべば一杯という広さの廊下を埋め尽くす兵士だった。

罠として玉座にて待ち構えている数がそれ以上だとしても、目の前の兵士は多く、しかも全身を鎧で包んだ者もいれば一見軽装に見える者までいることから、近衛兵から護衛兵と手練ばかりだろう。

当然、そうなると精霊の情報通り、王はこの階に居ることになる。しかし代わりに、サイードは迷っている余裕が無くなった。

ティルダは魔法で、リーダーは剣術で立ちふさがる兵を突破していく中、サイードは一か八かの賭けに出る事を決めた。

精霊に加護を掛け直して貰い、剣を構え直したサイードは、デルが必ず口に出して唱えろとは言っていなかったという、そこに賭けるしかなかった。

最初の詩

戦いには集中力が当然必要だ。そんな中別のことをするとなると、かなりの不利に追い込まれる。

それでもサイードは、いくらか精霊に補助してもらいながら、それを実行した。

（その心に眠りし誓い）

頭の中で、声に出しているかのように意識しながら、浮かんでくる言葉を復唱していく。

（それはさながら焔の如く）

勿論、目の前の敵はサイードを無視したりはしないので、その間も迫りくる剣や槍を払いながら、自らも剣を振るう。

（司るは勇ましき意志）

リーダーとティルダも、猛者の如く戦っていた。ティルダは魔法

を使うのだが、大きな炎で戦えば味方まで巻き込みかねず聊かやりにくそうではあった。

よくよく考えれば、この2人がいなければ、サイードは堂々と詩を唱えられただろう。しかし、1人でこれだけの兵を相手取るのは難しかったはず。近衛はともかく甲冑兵は、関節を狙わなければ崩せない。

不便さと幸運さの狭間、サイードは自分の仕事を真っ当していった。

（立ち塞がりし壁を砕き）

心で唱えていけばいくほど身体から力が抜けていくので、恐らく賭けには負けていない。もしくは、精石が反応する範囲にあったのか。

判明すればこの先楽になることではあるが、知らなくても問題は無い情報にまで意識を向けてはいられなかった。予想以上に、体力が消耗されていく。

「サイード！　何してんだ!?」

「…っ、悪い。」

寧ろ、これ以上は命取りになりかねない状態にまでなってきていた。ティルダがいなければどうなっていたことか。

身体がよろめき、その隙を狙っての背後からの攻撃へ、対処が遅れたサイードは危うく刺されかけ、咄嗟に気付いた彼がそれを救った。

まだ半分程度だというのにサイードの動悸は激しく、足はふらつ

き、視界が歪む。幸い、リーダーとティルダのお陰で、兵はほとんど残っていなかった。
元々赤かった絨毯が、気付けばかなりの血を吸い赤黒く変色している。歩く度に水気を含んだ音が響き、廊下にはあまりに濃い鉄臭さと死が充満していた。

（救いの手を差し伸べ）

サイードの剣も服も、同様に血で真っ赤に染まっているが、何時、何人ぐらい刺し切ったのか、本人はあまり覚えていない。息をする命は3人のみで、気持悪く不気味な静けさがあった。

（その火を燃え滾らせ）

そんな中、身体の悲鳴を感じても、サイードは詩を唱え続ける。激しさを増す息遣いも、リーダーとティルダもそうである為怪しく思われず、そもそも2人は、あと少しで王の前に辿り着ける緊張感でそれどころでは無い。

（その陽で照らし）

先にあるのは、王の私室への扉だけであった。
この時点で、サイードは立っているのもキツくなり、加えて、どうしてか眼球までもが鋭い痛みを訴えている。リーダーの後を必死についてはいくが、壁の支えなくしては歩けないほどだ。
2人は、扉に意識が削がれていて、最早隠しきれ無いサイードの異変に気付いていない。

（道を示さん）

後1文。陽の精石の破壊まで、とうとう目前となっていた。
同時に、ティルダが私室への扉に手を掛け、リーダーが警戒しながら待機し、王の命運もこれまでのところまできている。

国も、王も、終わろうとしていた。

国を再建する為に王を討とうとしている者。世界のバランスを戻す為に、国を滅ぼそうとする者。
そんな者達が手を組み共に行動してここまで来たのだから、皮肉なものだ。

両者とも、目的が達せられようとしている。しかし、片方はその先の希望も一緒に壊そうとしているのだ。

反乱軍は、一体どれだけの犠牲の上、ここまで来たのだろうか。
反乱に至るまでに、多くの民が死に、苦しみ。軍を結成してからも、数え切れない仲間を失ったことだろう。
そうしてやっと王を討て、新たな時代、新たな国へと進もうとしている。
当然、その先に必ず幸せが待っているとは言えない。しかし、希望となるものがあり、何より精石がある限り民の豊かさは補償されている。されている、はずだった。

しかし、彼等の気付かない所で、自身の人生と世界を犠牲にして歩み始めた者がいた。破壊することでどうなるか、分かりながらも決して歩みを止めないだろう者が生まれていた。

手に掛けたるのは、希望と再建への扉だと信じ疑わない者達。

全身を襲う異常に油汗を掻き、壁によりかかって痛みに耐え、胸

を押さえながらもおぼろげな視界で見据えるのは、終わりへの扉だと哂う者。

それぞれ、相対する心を抱きつつ共に走り剣を振った彼等。そのことを知っているのは、破壊する者、サイードだけだ。

サイードが見つめる中、とうとう矛盾の扉は開く。

瞬間、リーダーとティルダは怒声を上げながら中へと駆け込んだ。

サイードが黙って眺める大きく開いた扉の先には、威厳が微塵も感じられない人間がいた。霞む視界にその人物の詳細な容姿は映らず、しかし、その者が持っていたかなりの長さのある杖と、その先端で輝く宝石らしきものだけはひどく鮮明に映った。

燃えるように赤いルビーのような石――陽の精石。

それを見てニヤリと哂ったサイードは、ご苦労様とリーダーとティルダに皮肉の労いを心の中で掛け、終わりの言葉を口にする。

限界だと瞳を閉じ、まるで最後を見るのを拒否するように、そして身体をずり落とし横たえながら、震える唇を動かした。

「再び、その姿を現し、知らしめよ……」

パンっ、と何かが割れる音がした。

しかし、その時には既にサイードの意識は、深い深い奥へと沈んでいた。

『その心に眠りし誓い
司るは勇ましき意志
立ち塞がりし壁を砕き
救いの手を差し伸べ
その火を燃え滾らせ
その陽で照らし
道を示さん
――再び、その姿を現し知らしめよ』

『とうとう、この時が来てしまったか』

声が聞こえた。

指先すら動かせない、初めて感じる重い身体に戸惑いながらサイードは覚醒した。

何が起きたのか、どうなったのか、此処はどこなのか。

様々な疑問が沸くが、目を開けるどころか喋るのも不可能な状態だった。例えるならば、漂っているような、そもそも意識は本当に覚醒しているのか。

まさか、序盤も序盤でゲームオーバーではあるまい。

そういった気持ちで落ち着こうとするが、まさかと思う自分がいるのも確か。命に執着するつもりは欠片もないが、さすがにそれはプライドが許さなかった。

そうすると、自ずとデルに対しての文句が後から後から沸いてくる。こんなこと聞いていない、また会うことがあれば必ず殴ってやる、と。

ここまで頭がはっきりし、思考が出来ることで、ルシエはやはり覚醒はしているようだと判断した。しかし、尚も体は動かず、回復もしていない。

だから仕方なく、どうにか気配だけでも探れないかと行動の方向

性を変えることにした。

勿論、自分の身体の状態の再確認も忘れない。

身動きは出来ないが、先ほどから思考はできるし呼吸もしている。

つまり、生きているというのは分かった。

『無茶をした結果です』

そうして気配探知をしようと意識を集中すると、突然耳からではなく頭に直接声が響いた。決して、澄んだとは言えない、頭に鈍痛を与えるような声。低いような、ただ単に威厳を持っているだけのような、どちらにしろルシエにとってはあまり好感の持てない声だった。

（誰？）

『あなたに解放されたものです。名はありませんが、そうですね、陽の王と呼ばれております』

声は出なくても、その者との会話は成立した。

同調というのだろうか、共有だろうか。陽の王と名乗ったソレは、ルシエに敵意は持っていない様子だった。ただし、この陽の精霊王が敵意は持たなくても、友好的だとは限らない。

（初めまして。で、何か用？）

ともかく、まずは上手く解放出来た事を喜ぶべきだろう。何故、王がルシエにこうして接触しているのかは不明だが。

なので、会話をしながらも、救世主としての力を用いて王の感情を感知できないかどうかを探る。
本能が知るなと警告を出しているが、それでもルシエは悟られないように強行した。

『まだ知る必要はありません。焦らなくてもいずれ、明らかになっていくでしょう。なので、探るのはやめて頂けませんか？』

しかし、さすがは王だ。あっさりとばれてしまい、内心舌打ちをする。
口調はかなり丁寧ではあったが、明らかに剣呑さを含んだ言葉に危険が感じられ、ルシエは黙ってそれに従った。

『まずは、世界……デルでしたか。彼からの伝言を預かっております』

（あー、いいよ、いらない。大体予想つくし、従う気はさらっさら無いから）

今はその名前を聞くだけで苛々すると言って、今度はルシエが不機嫌になった。恐らくその伝言とは、今回の賭けに対するお小言か何かだ。
何故、デルと陽の王が解放直後に接触しているのかはかなり怪しくはあるが、恐らくこれに関して今はまだ答えてくれないだろう。

しかし残念ながら、ルシエの態度は陽の王に対し何か墓穴を掘ったようだった。

『そうはいきませんッ！　まったく、あなたは……。下手をすれば死んでいたのですよ!?　寧ろ、生きていたのが不思議なぐらい。

いいですか？　物事には順序というものがあって――』

突然怒り出した陽の王は、そこからは延々とお説教をし始めた。

ルシエとしては言い返したいのが山々なのだが、まず口を挟む暇がない。それに、陽の王の言葉は正論であり、地味に心へ刺さってくる。

（なんか、姑に怒られてる嫁な気分だわ）

『何か仰いました！？』

（いえ、何も）

会話が成立しているというのを思わず忘れ、心で呟くルシエ。今回ばかりは、デルに従うべきだったのかもしれないと激しく後悔していた。

ただ、無駄に長い説教からは、いくらか新しい情報を手に入れることが出来た。

口調からして彼女が言うには、物事には順序があり、デルは破壊の難易度だけで場所を指定したわけではなかったらしい。

精霊に力の差があるように、当然精霊王同士でも優劣が存在し、難易度は破壊の困難さと解放する王の強さを基準にして判断していた。

そしてやはり、解放はデルに与えられた魔力が鍵（キー）となり、だというのに、それを無視して高レベルから挑んだ結果、ルシエはそのリスクを受けていたのだ。

ただ、それは元々承知の上であった。しかし、予想外だったのが、ルシエが精霊に干渉できるように、精霊側からもルシエに干渉できるということ。

それは強い精霊――王であれば、下手をすればルシエを乗っ取ることも可能ととれる。

『異世界の空気にも慣れておらず、しかも精霊の力に今まで触れたことのない人間が、いきなり私のような王の中でも高貴な――』

高飛車な言葉は無視するとして、つまりは、初めてアルコールを飲んだ者が、自分の限界も知らないというのに、馬鹿みたいにがぶ呑みした結果と同じようなものだろう。陽の王が言うに、ルシエの潜在能力か生まれながらの体質かがなければ、解放した瞬間に体内から発火し死んでいたそうだ。

『まったく、信じられませんね！　それだけでも、呆れて物も言えないというのに、剰え詠唱破棄とは！　いいですか？　魔法というものは――』

そして、あの時の疲労感の原因は、生命維持に必要な分の魔力すらも消費しかけていた、要するに魔力切れを起こしていたからだった。詠唱とは、精霊の力を契約者の魔力で引き出し具現化する為のもの。通常でも、それには相応の修行と才能、年月を必要するというのに、王の解放ですることは、ただの馬鹿としか言えなかった。

説教をされるのも、ここまで暴挙が続けば頷ける。しかしルシエは、そもそも解放に際し魔力を使うと聞いていない。自分に魔力があるのは、世界を渡る際に身体が作りかえられると言われていたので、ある程度予想していたから納得出来たが、それでも結局、デルは隠し事ばかりしていたことになる。それが一番気に食わなかった。

『私の精神に連れてこなければ、最低でも1ヶ月は動けなくなっていたのですよ？』

（それはどーも）

長かったお説教は、最後の最後で自分の今いる場所を知ることで終わった。

その頃には、ルシエの精神的疲労がかなりのものとなっていた。

高飛車な言葉は、流すのにも相当の労力を使うらしい。疲れた、とルシエが泣き言を言うぐらいだから、かなりのものだったのだろう。

『……何か？』

（いえ、何も）

このやり取りも、一体何度繰り返したことやら。

それにしても、毎回こうなってしまうのであれば、ルシエは今更ながらデルに従わざる負えない。力が無いというのは、本人が一番自覚している。

となれば、デルが最初にと指定していたのは水の国だった。

記憶を手繰り、それを思い出したルシエは一気にげんなりとなる。

（うっわ…。陽から水だと、地球でいうとこの正反対じゃん）

『あぁ、その件ですか』

地球より文明が発達してないアピスで、それほどの移動となるとかなりの日数がかかる。手間と時間を考え、その非効率さに嘆くルシエだったが、それは次の陽の王の言葉で無意味となった。

『水の王との相性が最悪なので、風から先にしてもらえます？』

恐らく、今のルシエがいつもと同じ状態であったら、考えるよりまず殴っていただろう。あれほど魔法と精霊、魔力について説教をしていたというのに、王は個人的な理由でルシエに無茶を要求した。

（……ごめん、もう一回言って？）

『ですから、水は嫌いなのです。風から先に解放なさい！』

聞き間違いかと一応思ったルシエだったが、再度問い返したら命令が下された。精霊同士、相性というものがあると分かったからよしとしよう。そう思わなければ、やってられなかった。

（分かった、分かった。じゃあ、早くここから出してよ）

結局、陽の王が友好的かどうか以前に、ルシエが彼女に対して苦手と意識してしまったのだが、それは余談だ。

どういう仕組みかは不明だが、ルシエは王の精神内に身体ごと連れて来られているらしいので、恐らく自分の意志で戻るのは不可能。長居したくないと思い言うが、またしてもそれは予想を裏切るかたちで返ってくる。

『私と契約すれば戻れますよ？　デルから聞いてませんか？』

（はぁ！？　そんな事しなきゃ駄目なの？　もしかして、１０の王全部と！？）

デルは、あまりどころか重要なことの殆どを説明せず、ルシエの質問に答えていただけだったようだ。

『……』

（……）

さすがにそれは陽の王も予想外だったのか、暫し２人は無言となり、それぞれでデルに対する怒りを静めることに集中した。

『とにかくですね、デルには私からしっかりと言っておきます』

（可能だったら、最低でも５発は殴っといて）

ここにきて初めて、２人は親近感を味わいつつ団結していた。

それにしても、１０の精霊王と契約とはどういうことだろうか。王と言えど精霊ではないのか。そうすれば、１体としか契約出来ないのがこの世界の理である。その点を踏まえて考えれば、精霊といえど王と考えるのが正解なのかもしれない。それでも、リスクが無いとはどうしても思えない。

力を得られるということだけを考えれば、それはとても魅力的な話だろう。しかし、ルシエは一気に興ざめする自分を感じた。

精霊からすれば、ルシエは純粋に救世主なのだ。

だからこそ、無償の奉仕をしてくれるのだがその点をすっかり失

念しており、そしてそれは、ルシエにはとてもつまらないものだった。

『まさか、私と契約するのが嫌だと？』

（滅相もございません）

救世主なのに悪。その響きに囚われていたルシエにとって、まさに寝耳に水だった事に気付いて唸っている姿は、どうやら陽の王には拒否していると思えたらしい。より一層低くなった声色に、ルシエは命の危機を感じて即座に否定した。

未だに目は開かず、動けずではあるが感覚は戻っている。そして皮膚が焼けそうな感じがしたところから、先程の本音を悟られでもしたら、ルシエは跡形もなく焼かれていたかもしれない。

精霊に殺されたとなっては、最早笑うしかないだろう。

『まあ、契約といっても、低級のとはまた違います。私も私で、世界が安定するよう役目を果たさなければなりませんので。言うなれば、私の力の一部を好きに使えるようにするためのものです』

精霊に関しての知識が、現時点ではまだ豊富とは言えないルシエにとって、陽の言葉は疑問を増やすだけ。ここまできたら、デルの言葉の信憑性すら怪しい。これが彼の策略なのか、ただ間抜けだったのかは残念ながら微妙ではあるのだが、結局なるようにしかならないのだろう。策略であれば、乗っかってやればいいだけで、嵌らなければルシエはそれでいいのだから。

『それでは、契約を済ませてしまいましょう。言っておきますが、力を貸すだけですので、これから先いくら私に呼びかけようと助け

を求めようと、一切応えませんのであしからず』

（それで十分）

少しばかり刺々しさを含んだ言葉。しかし、精霊王は人間に裏切られた立場であり、ルシエは人間だ。少なくとも、陽の王やデルはそう思っている様だ。ただ単純に、ルシエが世界を護る立場であるからか恨みきれないだけなのか、それで接していただけなのかもしれない。

この先全てが、こうやって簡単に精霊王と対話が出来るとは限らないのだと、心にしっかり刻んでおく。恐らく王は、ルシエのように自業自得とは思わないであろうから。

（痛っ……）

そうして、契約が結ばれた。身を任せるしかないルシエは、ただ身体を委ねるだけであり、陽の王に任せていれば、額に強烈な熱と痛みを感じた。
その熱は全身へと巡り、再び額へと収束する。同時に、身体の自由が戻っていくのを感じた。

『力が馴染むまで容姿が僅かに変化しますので、気を付けることです』

まず、手を握って開いて確認をし、身体を起こす。次に、急激な光に目をやられないとも限らないので、ゆっくりと瞼を開いた。しかし、視界には何も映らない。それこそ、手を目の前に掲げても、それすら捉えられない闇にルシエはいたのだった。当然、陽の王の姿も分からない。

（……そっちもまぁ、頑張って）

『ご武運を。くれぐれも、無茶だけはしないように』

ルシエは気付いてしまった。もしここが、本当に陽の王の精神ならば、彼女の心は光の届かない闇に埋もれてしまっているのだと。しかしそれは、本人の問題であり、ルシエごときが干渉できることではない。

得体の知れない何かに引っ張られる感覚がして、別れがきたのだと悟った。

『何が、悪かったのでしょうね……』

その際聞こえた言葉は、ルシエに笑いを誘った。

（そんなに、善がいいものなのかねぇ）

答えが届いたかどうかは、陽の王だけが知るところだ。

ともかく、ルシエは現実へと戻ろうとしていた。その際には、全てが済んでいるのだろうか。

目的は達せられ、その上容姿が変わっていると言っていたので、早々に立ち去らなければならない。そして、得られた力を試すのも必要だろう。

今回積めたのは、殺しの経験と数、投擲技術の確認ぐらいだろうか。結局、期待していたほどではなかった。

さあ、次に目指すは風の精石。

――陽は、昇った。

「……戻ったか」

気付けば視覚が光を捉え、サイードは王の私室から少し離れた廊下にいた。丁度、階段の前で、廊下全体が見渡せる位置であり、死体が一面に広がっている。

それに対してはこれといった反応は示さず、ただ、足元で奏でる湿った音にだけ僅かに眉を顰めた。

「そういや、何処が変わったんだ？」

元々、目と手ぐらいしか外にでていない風貌だ。確認しようにも、普通でも鏡が必要だろうが、サイードにはその術が無い。

ただ、首の後ろで今までに無い違和感があり、不思議に思って周りが静かなのを良い事に布を剥ぐ。

すると、案の定まず長さが変化していた。しかも、肩下まで伸びていた髪の色までがシルバーから深紅になっており、明らかに陽の

王の影響を受けている。

流石に皮膚が赤くなるということは無かったが、他で色素が変化しているとなると、後一つしかないだろう。ただ、そこを確認するとなると鏡がなくては無理だ。

とういことで、サイードは手に取った布を持ちながら、すぐ傍にあった適当な部屋に足を進めた。

「瞳まで赤い……。これは、マズイな」

そこは側近の私室だったのか、家捜しするまでもなく鏡は見つかり、サイードは自分の姿を睨み付けながら呟く。

髪だけであれば、いつもの格好で誤魔化しが効いたが、瞳までもとなればむしろそっちの方が仇となるだろう。どうしたものかと思案しながら、結局クロゼットを漁る。

ついでに、髪もそのままであれば邪魔にしかならないので、綺麗に並べて片付けてあったリボンの中から、黒を選び結んでおいた。

この部屋の主は、大分几帳面な者だったようだ。

形の似たものに分け、綺麗に服が並べられている。そこから上着を選び着替え、ついでにいくらか服を拝借しておく。

なんとか、女っぽい男で通用するだろう。ルシエから見た自分の評価はそうであったが、どこをどう見ても麗人。陽の純血種より濃い赤は、人の雰囲気を逸脱していた。

「まあ、これでいけるか。てことで、さっさととんずらさせてもらおうかねぇ」

反乱も、最初の目的は達せられているだろう。精石がどのような形で壊れたにしろ、この先の彼等の行動に興味は無い。

――例え、どちらか1人とは永遠に会う機会が無くなろうとも。

「なんで、なんでだよ！　やめろよ、リーダー！！」

すぐ近くの王の私室から聞こえる、悲鳴にも似た叫び。それに気付きながらも、サイードは最上階から地上に向かう為、窓の淵に足を掛けた。

「万一、この国が再建できたとしたら、今度は敵として会うだろうな」

まったく危惧していない、しかしどことなく楽しみにしているという風体で、サイードは笑う。

「さーてと、荷物を回収して行きますかねぇ」

そして、サイードはそこから地上へと飛び降りた。かなりの高さがあるというのに、躊躇する様子もなく簡単にそれが出来る度胸が理解できない。当然、精霊の補助で無傷で着地はできるが、それでもだ。

背中で遠ざかる声に対し、サイードは届かないと分かりながら呟いた。

「意外に嫌いじゃなかったぞ。ムスイム国王位第一継承者、ティルダ殿下？」

軽やかな足取りで城から遠ざかるサイードに、この国の未来を左右する戦いの結果は分からなかった。

反乱軍リーダーの作戦。それは、王を討ち、手元に引き寄せていた王子も消し去ることで自らが王となること。そして力を蓄え、再び諸国に戦いを仕掛けることだった。

この世界では、精石があれば何でもできるという概念が深く根付いている。

サイードにとって、リーダーの思想自体は好ましいものだ。ただ、愚かで笑えるという点でだが。

もし、リーダーが勝ち、再びサイードの前に現れることがあれば迷わず剣を向けるだろう。

しかし、ティルダが生き残ったとしたら。彼の考えは、サイードにも予想が付かない。2人で過ごしたあの時、彼は彼なりに国の再建を心に誓ったようだが、果たして優しいだけの彼にそれが出来るのか。

今の優しいだけの青年では、おそらく敵対するどころか武器を向けることは出来ないだろうが。

それでも、継続的に楽しめるとしたら、ティルダが生き残ったほうが断然である。

どちらにせよ、再び相見えることがあれば、その時は恐らく、世

界中にルシエの存在が知られてからだ。

「残る精石は、後9個」

アピスに降り立ち、僅か3日での破壊達成であった。

陽の王（後書き）

「陽の国編」終了です。
次からは、「風の国編」がスタート。

ご意見、ご感想よろしければお待ちしております。

その戦い、不穏

ムスイム王の死は瞬く間にアピス全土に広まったが、王の死を嘆く者はおらず、寧ろ歓喜された。これから陽の国がどうなっていくか定かでは無いが、精石の喪失だけはどこにも伝わらなかったようだ。

今はまだ、暗躍する時だということか。もしくは、自身でその時を選べということか。

「んー、気持ち良いー！」

ルシエは、あれから風の国の領土へと渡り、道中で見付けた泉で気持ちよさそうに水浴びをしていた。村も何もない、砂漠同然の道のりを延々と歩いた身体は泥だらけである。

さらに、どうしてか静かであって欲しかったこの移動では、無駄にファンタジーでファンシーな生物と頻繁に遭遇し、望んでいた経験値と実力の確認はできたものの血に塗れてもいた。

「さすがに、ドラゴンが3連ちゃんで襲撃して来た時は死ぬかと思った」

静かな泉は、人のいる場所より精霊の気配を濃く感じる。それに囲まれながら、ルシエは思う存分冷たい水で体を清めた。頭の中で、ここまで来る間に遭遇した生物を思い出しながら。

ルシエにとって、精霊は意思疎通が出来るので存在は実感できていたが、世界自体が弱ってその姿を見たことが無く、異世界にいるという自覚を強く持てていたわけではない。しかし、実際にあり得ないモノを見て、やっと漠然とながらも分かってきた。

精霊も元は姿形を持っているということなので、精霊王を解放していけば力のあるルシエも視覚で捉えることができるようになるだろう。

大小あれど契約を結べる程の魔力を持つ人間は、誰でも精霊を見れるのだから。

そう考えると、これだけ顕著な変化が起こっているというのに、何故この世界の人間は気付かないのだろうか。

「お風呂、入りたいなぁ……」

身体が冷えてきた為、泉から上がるしかなかったルシエは、足裏の草の感触を楽しみながらも呟く。

異世界に降り立ってから今日で1週間程度なのだか、そうすれば恋しさも生まれてくるのだろう。

文明は魔法というものがある分地球程発展しておらず、風習だって違ってくる。

湯船に浸かることが出来ないのが、今のところ一番の不満だろうか。この世界では、身体を拭くか湯を浴びるだけなのがほとんどだ。湯に浸かれるのは、限られた富裕層のみである。

それ以前に、この1週間、まともに風呂に入れて無いからこその不満かもしれない。

「なんかもー、一生懸命とか必死とか、柄じゃなさすぎる」

ぶつぶつと、独り言は続いている。荷物を入れている麻袋を漁り、ムスイムの城で拝借していた服を適当に着て、予備のマントを巻いていく。あの時変化していた髪と目は元の色に戻っていた。

手に、服としてはもう使え無いだろう汚れ切った布を持ち、ルシエは心で燃えろと念じた。

すると手の平から炎が生じ、一瞬で灰と化す。その炎がルシエを傷付けることは無い。

授かった陽の精霊王の力。炎が出ている間、ルシエの瞳は真っ赤に変わっていた。

大分コントロールが効くようになったと満足げのルシエだが、困った事にこの力、使っている間は髪と目の色が変わってしまうのだ。さらには使う力の大きさに比例して、髪が伸びてしまう。

今程度だと色が一瞬変化するぐらいなのだが、そう簡単に人前では使えないだろう。本人も、当然それは分かっていた。

「さて、旅を再開しますかねぇ」

砂漠地獄から解放され少し回復したテンションで、ルシエは再び歩き出した。

この先で、大きな出会いが待ち受けているとも知らずに。

「砂漠の次は森、ですか……。いや、別に良いけど。良いけどさ、なんていうの？　適度にいけないかな、適度に」

ルシエは、深い森の中を汗だくになりながら進んでいた。

時折精霊に手助けはもらうが、基本自力でだ。鍛錬を兼ねているのだろう。泉で回復したはずのテンションは、急降下している。

太陽を遮ってしまうほどの木々が生えた、薄暗い森。目印となるものは無く、方角もあやふやになってしまうだろう。

しかし、この旅に地図など不要で、精霊に案内してもらえばいいだけだ。

ただ、精霊と人間の感覚は同じではないので、こうして過酷な道を歩くことになっているのだが。

「あー、焼き払ってしまいたい」

今なら出来そうな気がすると、ルシエは上がった息を木に手をつきながら整えた。

目指しているのは、風の国の中心、首都「ウェントゥス」だ。アピスで最も気高い騎士と、最強の魔術師団を持つ最大の国。

恐らく、そんな国の精石を壊すとなると、ルシエは暗躍出来なくなるだろう。他国との国交も盛んだというから、陽の国のようにはいかない。

疲れ以外では重くならない足取りに、ルシエはその事実を理解しているのだろうか。陽の国はあっさりとクリアできすぎたということを。

風の国からは、人間との戦いが避けられないということを。

「とりあえず、野宿できる場所を探して」

近くにいた精霊に頼み、ルシエは指示された方向を進む。

その時、不自然な風が緩やかにその鼻を霞めた。

「……信じられない」

それは、風の精霊の知らせ。鉄臭さを含んだその風は、ルシエの進行方向から流れてきた。

「当然、迂回しますよねー」

明らかにトラブルだと分かり、ルシエは回避を速断した。

精霊が知らせてきたということは、関らせようとしているということ。

ルシエの進行の邪魔になる、というのであれば、そこを避けた方向を指示して導けばいいだけだ。

しかし、それをしないということは、精石以外の内容であれば面倒事でしかない。

精霊は信頼できる。ルシエを貶めることは決して無い。つまりは、今の知らせは精霊のお願い事であるってことだ。

それを即効拒否するとは、本当にルシエは非人道的な性質である。

「痛っ！　痛いって！」

しかし、精霊も引けないらしい。風や枝がマントをひっぱり迂回をさせないように引き止める。

一人で騒いでるようにしか見えない奇行も、薄暗く寂しいこの森

の中では空しさしか醸し出してくれなかった。

「……わかった、わかったってば！」

その攻防は、ルシエが早々に折れる形で終わった。

耳には遠くからではあるが、さっきから剣の打ち合う音やら声が微かに届いている。

深く溜め息を吐き、蹲り、暫し顔を俯かせたルシエだったが、諦めて立ち上がった時には、手に剣を握っていた。

「行けばいいんだろ、めんどくせぇ」

ぼやきながら姿勢を低くした”サイード”。草木に紛れるようにして進んだ先にあったのは、小さな小競り合いという規模のものでは無かった。

膝裏の位置で裾が舞う薄緑の上着は、風の国の騎士のもの。それを着て剣を構える人間が、１５名程。――地面に伏せているのも含めてだ。

対して、サイードと同じように全身を黒で包んだ人間も１０名程いる。

その２組が、激しく戦っていた。

「うわ、絶対に関りたくねぇ……」

心の底からそうぼやく。

恐らく精霊は、どちらかを助けて欲しいのだろう。もしくは、この中の誰かを。ただ、サイードはまったくもってやる気が起きない。

精霊の味方になっているつもりが、毛頭無い。

「俺は使いっぱしりかっつーの」

中々動かないことに焦れ精霊は抗議をするが、ここで先程のようにそれを表現するとサイードの命まで危ぶみかねないので、無理矢理動かすことができなかった。

それを良い事に傍観に徹したサイードだが、目は状況を見極めようと真剣。見る限り、数は若干勝れど、騎士が圧されていると思われた。

「どう見ても、敵だと思われるだろうしねぇ」

格好も似ていて、怪しさ満点。騎士側を助ける理由も無い。

サイードにとっては、無駄に敵を増やしたくもないし、義理すらなかった。

そうして、観戦すること数分。騎士の中に、一際目を惹く人物がいた。

優男にしか見えない風貌だが、優雅な剣術で彼だけが黒尽くめを軽々と切り倒している。――仲間を助けながら。

彼の殺気はすさまじく、敵もそれに圧倒されていた。

少し離れた場所にいるサイードが隠れる茂みまでも、その殺気に中てられざわめいている程だ。

「あいつ……いいね…」

戦ってみたい。思わずその欲望に支配されたのがいけなかった。

「あっぶね！」

欲望と共に漏れてしまった気配を感じたのか、一気にサイードのいる茂みに向けて黒尽くめからの攻撃が飛んでくる。

それ自体は伊達に経験値を上げたわけではないので、少し身体をずらすだけで回避できた。しかし、騎士だけに集中すればいいものを、黒尽くめはサイードへの攻撃の手を休める事が無く、暗器だろうか、針のようなものが耐えず茂みに投げられ続けた。

さらには、騎士までもが警戒して殺気を飛ばしてくる。止む事の無い地味な攻撃と殺気に、サイードのほうが我慢しきれない。

「さっさと決着つけろ！　それと、針うぜぇ！」

やってしまった、とすぐさま後悔するサイードだが後の祭り。懐に忍ばせている小剣を黒尽くめの一人に投げ、大声と共に立ち上がってしまった。

その小剣は見事心臓へと命中し、その場の視線が全てサイードに集中している。

こうなってしまっては仕方がない。サイードは目の前の人間全てと自分、精霊に苛立ちながら、ガサガサと茂みから出ていった。

「そこの騎士、加勢する」

突然の乱入者、しかも騎士からすれば敵と同じような格好をした者からの言葉に、混乱する。素直に助かったと思う者がいたら、ただのお気楽者だろう。

期待されるとは思っていないサイードは、答えを聞かずに行動した。大分、地味な攻撃に苛々していたのだろう。

黒尽くめの人数は、サイードが最初に見た時より僅かに減って8人。

「これ、返すぞ」

目の前にいた一人に迫りながら、手には先ほどサイードを苛々させた針が5本ずつ握られていた。一度体の前で腕を交差させ、すぐさま放たれたそれは、弧を描いて黒尽くめへと向かう。

素早い攻撃を避けきれなかった3人が、まず倒れた。その全て、頭に針が刺さっている。

唖然とする騎士と、慌てる黒尽くめ。それを気にすることなく、サイードは迫っていた一人の心臓に小剣を突き刺し、背後から攻撃を仕掛けてきた者を剣で縦に一閃。

一度、リズミカルにバックし距離を取り、背後に回り込んだ者には即座に小剣を投げ、前から果敢に攻めてきた者は足でこめかみを蹴って怯ませてから同様に殺した。

そして、最後の一人がサイードの頭上から剣を振り上げてきたのを片手のみで剣で受け止め、残していた小剣をこめかみにめりこませる。

あっという間だった。

「こんな奴等に手こずっていたのか?」

最後の一人の身体が崩れ、小剣が抜け血が噴出す。それを避けながら拍子抜けしたように、騎士へと振り返った。

騎士の誰もが、言葉も出ない様子で固まっている。
そんな空気でもマイペースでいるサイードは、手に持ったままの小剣の先が欠けていることに気付いて文句を零していた。

カラン。

使い物にならなくなったそれをあっさりと地面に捨て去れば、静かなこの場では必要以上に音が響く。びくりと屈強な騎士が大げさに反応する様子に、サイードは間抜けだと哂った。

「礼ぐらい、言って欲しいもんだがな」

吹き出すことは必死に抑えたが、喉の奥でクツクツと笑い声が漏れている。それでも反応を返さない騎士に肩を竦め、サイードは何を思ったか、今し方自分が殺した者を漁り始めた。

回収した小剣は物の見事に全て欠けてしまっていて、代わりにだろうか、死体が持つ暗器をごっそりと拝借している。時折、使えなさそうな物を放り投げ、好みの武器があれば機嫌を良くし。

ドラゴン等と戦っている間に、血の臭いにも肉を断つ感触にも慣れてしまったのだろうか。
リルの時のように、血に酔う素振りが一切無い。

サイードの行動は、騎士が倒していた分もちゃっかりと漁り終わるまで止まらなかった。
その背後では騎士の中でただ一人、優男だけが剣を構えて警戒していた。

絶望を撒くか、招くか

「おっし。……礼は言われても、剣を向けられる覚えが無いんだが？」

思う存分死体を漁り、予想以上の収穫に大満足なサイードが振り返った時、そこには固まっていたはずの騎士達が向ける剣の輝きがあった。

その目には、感謝の念など毛頭無い。

「何者だ？」

代表してサイードが興味を持った、絹の様に細く滑らかな襟足が少し長いクリーム色の髪をし、ピーコックブルー（青緑）の瞳の色をした男が言葉をかける。物腰の柔らかそうな雰囲気が、世の女性達を魅了していそうだ。

だが、姿に似合わない低い冷たい声がその場に響く。

「別に、何者でも構わないだろ？助かったんだから良いじゃないか」

ただし、当然サイードにその魅力は通じない。

相手側からしても、怪しまない理由が無いだろう。躊躇せず軽々と人を殺す精神と技術をとっても、格好を見てもそうだ。

「そうはいかない」

お堅いねぇ、とぼやいたサイードは、睨んでくる優男を意味も無く見つめた。

暫く、無言の状態が続いたが、変化は無いと悟ったのか、仕方なさそうにおどける感じで両手を上にあげたサイードは、剣を指輪へと戻した。

その光景に、騎士達が僅かに驚きで体を揺らす。

「ただの、ふらふらしている旅人さ。怪しい者ではないよ」

「どう見ても怪しいだろ」

「あー、やっぱり？」

だよねぇ、と分かっていて聞いてくるサイードに、優男はなんだこの男はと思っているのだろうか。内面を欠片も掴ませない、何を考えてるのか察する要素すら見せない。戦いというものは、相手を見極めてこそである。動きを予測し、考えを察知し、どちらがより上に立つか。

ただ、それはそこに誇りがあればこそである。

「こっちは、戦う気が無いんだがな」

優男に映るサイードは、そこにいるのにいないと思わせる不可思議さがあった。まず、口調が定まらない。砕けていると思えば柔らかくなり、しかし次には冷たくもなる。

思わず、人間かと問いたくなった。そんな時だった。

「ん？」

「お待ち下さい！」

優男の直ぐ脇の茂みから、まず騎士が一人飛び出してくる。かなり慌てた様子で何かを必死に押し止めようとしていたが、次には暗い森に似つかわしく無い鮮やかな塊が飛び出してきた。

「皆、剣を納めなさい！」

サイードと騎士達の間に転がった塊。それは、この場に居るには相応しく無い少女だった。

成る程、先ほど黒尽くめに騎士が圧されていたのは、この少女を守りながら戦っていたからなのだろう。

気持ち程度に動きやすい作りにされた、小奇麗なドレスに身を包んだ１０歳程度の少女は、透き通る緑の髪と瞳をした風の純血種だった。

純血種、と言えばティルダを思い出す。彼は陽の純血種であり、そして王子でもあったのは記憶に新しいだろう。そうすれば、自ずと少女にも抱くものがある。

「姫様！　お下がりください！」

サイードは、やっぱりと眉を顰めた。純血種は、１滴も別の種族の血が入っていない者。しかし、人間が存在し始めてからのアピスの歴史は、そう浅くは無い。

その中で純血でいるには、只の人であれば難しいことであると想像に難く無いはずだ。となると、その身が持つ地位は、精石を重んじる人間の中では高いものになっていく。

めんどくさいことになりそうだ、と出てきたフレーズにサイードは感じた。

その間に、優雅な仕草で立ち上がったお姫様らしい少女は、周りの言葉を無視してサイードの目をじっと見つめる。この世界で、ゴールドの色は珍しくないはずなのだが、彼女は何を考えているのだろうか。

「悪いが、俺はこれで失礼させてもらう」

「お待ちなさい！」

騎士がサイードにかまけてる暇が無くなったことを良い事に、視線を気にせず早々と背中を向けると、その背に透き通った高い声が投げられた。しかし、サイードは、お姫様を無視すると決めた様子。振り返る素振りも見せない。

「私を無視するなど、なんと無礼な！」

お姫様はその行動が癪に障ったのか、さらに叫ぶ。甲高い声が頭に響き、サイードは深い溜め息を吐いて振り返った。

自分の声でだとお姫様は勘違いをするが、サイードの目はその小さな体の奥で警戒を続ける優男に向けられている。

「行っても構わないだろ？」

「待ちなさいと言っていますでしょう！？」

「……悪いが、姫様がこう仰っておられる」

まさかの展開。
優男であれば、安全を最優先してお姫様の命令を無視するだろうと踏んでいたサイードにとって、今の言葉は予想外であった。
思わず出た舌打ちは、布に阻まれ届かない。

「なら、勝手に行かせてもらう」

優男に確認を取ったのは、出来る限り戦いを避ける為だった。背中を向けて黙って歩き始めれば、そこに攻撃が仕掛けられるとも限らない。
だから、承諾を求めていたわけでは無かったのだが、理不尽に自由を拘束されるのが我慢ならなかったのだろう。
その場から去る際に死体の横を通った時、突然動くはずの無い黒尽くめの内の1体が飛んだ。

「ひっ！」

それは近くの木に強か打ち付けられ、再び地に横たわる。お姫様が驚愕と怯えに小さく悲鳴を上げ、騎士達が剣を構え直す中、サイードはもう1度小さく舌打ちをしていた。
あまりに苛立った時、何かにその気持ちをぶつけたいと思う感情自体はよく分かるものであるが、今のはあまりに無情で非情すぎた。
何の罪も無い、とはお世辞にも言えないが、いくら殺人を生業にしてきたような者であっても、死を迎えたのであれば失われた生に対して敬意を払うべきだ。自分が断ち切ったのであれば尚更。

案の定、騎士達はその行動に嫌悪を抱き、怒りに震えた。

「あの者を捕えよ！」

そうして、誰もがサイードが早く立ち去ってくれるよう願った中、空気を読まない声が命令した。

条件反射というべきか、忠誠を誓った相手の命令に忠実であれと染み込まれた騎士の身体は、考える前に行動する。

囲まれてしまったサイードの近くには、さらに大きく膨らんだ苛立ちをぶつけられるものは無い。

「ヒメサマ含め、全員アレと同じになりたいか？」

低く、ただ低く漏らされた言葉は、狼の唸りにも勝るものだった。サイードという名の黒狼は、先ほど自分が蹴り飛ばした拉げた死体を視線で示しながら警告を発する。ヒメサマという単語には、思いきり馬鹿にした雰囲気が込められていた。

「忠実なのも結構だが、守りたいのであれば通せ」

ただの護衛なのか、言葉通り主であるのか、細かいことはどうでも良い。

大事なのは、このままではどちらにせよ全員の命が危ぶまれるということ。サイードからすれば、騎士達との戦いは極力避けたくはあるが、だからといって別段恐れることでは無いのだ。

どうせ、後々追われる身であり、姫の1人や2人殺したところで、精石の破壊に比べればその罪は小さい。

「ヒメサマも、我儘が通じる相手を見極めるぐらいは出来るようになった方が良い。これ以上は、痛い目をみることになるぞ」

金の瞳は、手加減なく１０歳の少女に殺気を向けた。お姫様は今度は言葉も出せず固まり、その場に緊張が走る。
誰もが顔を青くさせ、サイードの一挙一動を見逃すまいとその体に視線を縫い付けた。

しかし、お姫様への睨みは、優男が体で防いだことによって無くなる。すると今度は、瞳がスッと細まり、殺気とは違うものが彼に注がれた。
サイードは未だ、戦いたいという願望を持っていたようだ。

最早それは、戦闘狂（バトルジャンキー）といえるのではないだろうか。精霊王の力を授かることには抵抗を示していたはずなのに、本当に一体何を考えているのだろう。

「……しかし、まぁ」

そこでふと、サイードの顔色が変わった。
視線をこの場の誰でも無い森の奥に突然移し、今度は楽しそうに笑う。いや、実際ははしゃいだのだろう。

「流石にその歳で殺されるのは哀れではあるな」

心にも無い事を呟き、理由を作り、サイードは再び剣を出現させて僅かに身体をずらした。

「まだ、終わってなかったみたいだぞ」

「がっ！？」

その数秒後、突然サイードを囲んでいた騎士の一人が首から血を吹き出しながら倒れた。

「姫様を！」

サイードの仕業かと疑い、攻撃を開始しようとする騎士。しかし、その視線が生い茂る木々の奥に向けられていることに気付いた優男が、お姫様の警護を指示しながら制止をかける。そして、サイードと同じように周囲に神経を張り巡らせた。

「２０人ぐらいか？　向こうは躍起だねぇ」

今度は、言葉と共に剣を振れば金属音を響かせながら何かが弾かれる。それは、先程の黒尽くめ達が使用していた暗器に似た刃物。それを見たところでやっと、敵がサイードの他に居ると騎士達は察した。

「と、いうことで。悪いが俺は関係無いから、立ち去らせてもらう」

「……は？ふざけるな！　敵で無いならその腕だ、助けようとは思わないのか！？」

誰がどう見ても２０人を相手取るのは、今の騎士側には荷が重い。それが分かりながらもあっさりとそう告げるサイードに、優男は憤りを顕わにした。しかし、サイードの反応は、呆れたとも身体全体で冗談じゃないと言っている様にも思える。

「警戒されてた相手を助けようと思う程、人間できてないんでね」

「人の死を何だと思ってる！」

「レ、レイス！」

この間にも、騎士は次々と地に伏していった。最早その数は、先程の戦いも含め出会った当初の半分以下になっている。中には、サイードが弾いた刃によってそうなった者もいる始末だ。それを怒ったところで、不慮の事故だとかそこに居るのが悪いとサイードは言うのだろう。

それでもどうにかサイードを引き込もうとする優男の耳に、綺麗なドレスを血に染めたお姫様の切羽詰った声が響いた。

目には涙を浮かべ、縋る視線をサイードにも向ける。それでも何も感じないのか、気付けばサイードは徐々にだが騎士達との距離を広げていた。

「どれだけ薄情なのだ！」

「人が人にもたらす死程、無意味なことなど無い。そもそも、手を貸す義理がないだろ」

刃が飛んでこないエリアまで遠ざかり剣を消したその瞳が、今の言葉が本心だと物語っていた。人が人にもたらす死。お互いの生への価値観の違い。

“ルシエ”の思う生とは、それこそ人にとっては極論にも近く、とても動物的なものだった。

種の存続。その為の生。その上でその役割を放棄したと、自らをイレギュラーに定める。

人はそれぞれに価値を求め、意味を探り、そうして生きているだろうが、ルシエにはそれが無かった。

故に、人が人にもたらす死に対しとても無感情となる。本来生物にとって同じ種は番候補、ライバル、仲間、同族であり、他の種は糧か障害、自己の存続の為の共存対象でしか無いだろう。本能で生きているのだ。

その全てに於いて、敵は敵でありながら敵で無い。

同種であっても、なわばり争いでの死闘の先は糧であるし、弱肉強食の世界では糧にならないよう生に工夫する。そこに、生への執着があるかどうかは定かでは無いが、人間のように生に繋がらない死をもたらす争いが果たしてあるのだろうか。

自己の矜持や理念、正義を掲げたところでルシエにはただの言い訳にしかならない。

「薄情は、俺にとって褒め言葉だね」

手をひらひらと振りながら背を向けて立ち去る姿は、かなり浮いていた。痛みに呻き苦しむ者の横を見ることもなく歩く心は、騎士達には悪魔に感じる。

絶望を招く点では、否定が出来ないだろう。

「……ん？」

しかし、突然その足を阻む何かがあった。

サイードは気付いていなかったのか、不思議そうに視線を下に向ける。そこには誰かの手が足首を握る光景あり、先を辿れば口から

血を吐き虫の息な騎士の姿があった。その者は、気迫に満ちた瞳でサイードを見上げていた。

「どうした？」

この妨害に苛立ち、機嫌を損ねるかと思ったサイードだったが、一体何をしようというのだろう。その騎士に対し穏やかに笑いかけ、気味が悪い程緩やかな声で問いつつしゃがみ込む。ただ、そうしながらもそっと騎士の持つ剣を奪っているところを見るに、碌な事では無いだろう。

サイードの服に、血が染みていた。

「た、たの、むっ。姫様を、たす……っ！」

忠実な騎士の死に際の願い。彼は、その言葉を言い終わる事が出来なかった。

「お断りだ」

勇敢な騎士は、全てを言い終わる前に事切れた。サイードがその背、丁度心臓の真上の位置に、奪った剣を落としたせいで。

「き、貴様あああああああああっ！！」

呆然とする仲間達。その残虐な所業に我を忘れるレイスと呼ばれた優男。

レイスは、我を忘れてサイードへと迫る。

しかしその瞬間、大事なお姫様が無防備となってしまう。それを、姿を隠した見え無い敵が見逃すわけがない。

瞬間、お姫様の可愛い心臓に刃が迫った。

「大事なんだろう？」

「何なんだ、お前は……」

くつくつと、至極楽しそうな笑い声が響いた。

お姫様に刃が迫ったのに気付いた瞬間レイスがハッとしたが、その時にはもう手遅れで。しかし、それが彼女を捉えることは無かった。

サイードが、寸でのところで死体から奪っていた針の暗器で弾いたからだ。

「気が変わった、助けてやる。ただし、ヒメサマだけだ」

「だとしても！　もう助かる可能性の無い者を、わざわざ手にかける必要はないだろう！」

ホッとしたのも束の間、レイスは先程の件の怒りが治まっておらず蒸し返す。

サイードの助ける発言を得たからだとしても、短絡にも程があった。それぐらい、許せない行いだという事でもあるのだが。

それにしても、何故サイードは急に態度を変えたのか。気分屋だからといわれても納得できるのが悲しいが、今回はそれが理由では無い。

お姫様が死の危険に晒された瞬間、精霊が大きく騒いだせいでサイードはそうせざるを得なかったのだ。どうやら、精霊はお姫様を死なせたくないらしい。それが、この状況に陥らせた最初の騒ぎの原因にも繋がるのだが、さらに精霊は言ったのだ。サイードの為にも、と。

お姫様が風の精霊と契約していることは、気配で気付いていた。なので、それをその契約精霊が言ったのであれば、サイードは無碍にしただろう。だが、大きく騒いだというのはとどのつまり、無関係な精霊までもがその感情を抱き訴えたということ。それは、普通であればあり得ない現象であった。

精霊が人を愛したのは昔の話。今や、個人個人を好む事はあれど、人間という種族に対して精霊は何も抱いてはいない。むしろ恨みすら抱き、王の解放を望んでいる。

サイードを説き伏せる為にその利益を仄めかしたのだろうが、漠然でも精霊の感情が伝わるので純粋な助けたい想いも感じ、少女が精霊に愛される者なのだと察した。

この世界において精霊は絶対。人間にとっても精霊は必要不可欠。そして、それに愛される者とくれば、ある言葉が思い浮かんだ。それこそ、ファンタジックで貴重な存在。

面白くなってきたと再度笑いながら、サイードはレイスの訴えに答える為に彼を見据えた。

「死を感じながら、怯えながら死ぬほうが良いか？　痛みに苦しんだ末に死んだほうが、良いか？」

助かる可能性が無いと言ったのは、お前だろう。正論を突きつけるかのように言い放ったサイードだったが、その答えを持つ者はいない。なにせ、どっちにしろ感情論なのだから。

ただ、サイードは感情だけでそうしているわけではない。

血は、大地を汚してしまう。血そのものでは無く、そこから伝わる未練や憎悪、そういったものが大地を汚してしまい、そしてそれが精霊を穢す原因になってしまう。

だからサイードが人を殺す際は、心臓や頭、そういった箇所を狙って可能な限り即死になるようにしているのだ。

「それは……」

レイスは反論したかった。しかし、言い返せない。生への冒涜ともとれるし、苦しみからの解放ともとれる。納得は出来ないが、サイードの絶対の自信を持った傲慢な態度に対抗できる程、心にも状況にも余裕は無かった。

「別に、同意は求めない。ただ、これが俺の考えで、それをとやかく言われたって煩わしいだけなんだよ。で、助けは必要か？」

それに対し、レイスはグッと唇を噛み頷いた。恐らく、考え方と行動を受け入れは出来ないが、助けてもらわなければ乗り切れないと判断したのだろう。

自己のプライドより、騎士を取った。

「なら、ヒメサマを抱えて向こうに走れ。真っ直ぐだ。俺が全員食い止めてやる」

「仲間を！」

「言っただろ？　助けるのはヒメサマだけだ」

レイスの背後を指し示し促したサイードは、まだ何かを言いかける彼を無視して反対側、敵に向けて走り出した。

視界の隅で、レイスがお姫様を抱き残った仲間に指示をだすのが映る。

その間誤付く様子に苛立ちながら、茂みへと入った。

「さて、人間相手に陽の力を使う良い機会だ」

独り言はささやかな警告。力を引き出していけば、布の下で髪が伸びる感覚がした。

「振り返らずに行け！」

走り出したレイス達に叫んだのは、恐らく敵の意識を自分に集中させるためだろう。

数を増して飛んでくる刃を剣で弾きながら、サイードはタイミングを見計らった。その身体の周囲には、１つ２つと火の矢が形成されている。揺らめくそれは、相当の熱を持っていた。

敵が全員射程圏内に入るのと、矢がその数に達するのはほぼ同時。

「悪しき魂を、勇ましき火で滅せ！」

契約の詩と共に矢が放たれ、森はただ静寂に包まれた。

「よし、大成功」

その炎は、断末魔すら許さない業火だった。大きさは肘までの長さぐらいの小さなものだが、そこには凝縮された濃い魔力が込められ、まさしく王の力。

僅かに肉の焼ける臭いが風に乗って森に走り、空気となって消えていった。

ここにきて、ドラゴンがどれだけ有難いものだったのかサイードは実感する。

死が近くなるほど、培われる力が洗練されるのだろうか。サイードが戦闘を求めるのは、そう思ったからなのかもしれない。代償は命、得るのは経験。もしかしたら、”ルシエ”には理由が必要なのかもしれない。言い訳ともいえるが、始めに遡って考えてみれば、いつもいつも物事に理由を付けているのでは。

初めて、ルシエが人間だと思えた。

「さて、漁るか」

性質の悪い追い剥ぎだが、わざわざ茂みに入って行ったサイードは、誰もいないのにまるで追い払うようにひらりと一度手を振った。

「我ながら、なんて悪役」

何故かくつくつと笑い、視界に入った黒焦げで原型を留めない程焼けてしまった死体に、再度違った笑いを零す。

「だけど、まだまだ抜けてるんだよな」

やり過ぎた攻撃が敵の所持品まで壊し、自分に呆れながらもそこまで残念がってはいないのだろう。すぐに気持ちを切り替えたサイードは、何故かどさりと荷物を下ろした。

そして、徐にマントを外し服を脱ぎ、森の中で死体を前に全裸になる。

……

誰もいない場所で羞恥などいらないと荷物を漁り、必要な物をどんどん取り出していく。まず足首までの地味なスカートを着て、サラシの中に詰め物をする。その際、何とも言えない顔をしていたのは触れてはいけないだろう。そして、胸元に黒いリボンがあしらわれた地球のブラウスよりは生地が厚く荒い触りのトップスを着た。さらに、用意していたこの世界には存在しないだろうカラコンを装着し、最後に肩にぎりぎり触れるぐらいの長さのカツラを被る。

すると出来上がるのが、地の純血種とは違った茶色の髪に赤交じりの薄茶色の瞳をした、どこにでもいそうで、それでいて少し気の強そうな女だった。

何故だろう、男装している際には日本人特有の童顔さは欠片も無く、むしろ実際の歳より上に見える美青年になるというのに、女になると確かに可愛くはあるが普通の印象を抱いてしまう。

「えーっと、なんだっけ。……そうそう、リサーナ！」

本当に不思議だ。声も心なしか高く聞こえる。今の“リサーナ”を見たところで、誰も殺しの技を持ち精石の破壊を目的としている者だとは思うまい。

何度か咳払いをし、自分の姿を見える範囲で観察して頭の中で作り上げていた人格を復習したリサーナは、軽やかな身のこなしで荷

物を纏め死体を飛び越えて、可愛らしい笑顔でレイス達に指示した方向を見つめた。

「ごめんね、お姫様。私、面倒事は嫌いなんだよね。だから、後は自力で頑張って！」

そして、まるで悪戯が大成功したようにカラカラと笑い声を上げたリサーナは、示した方向とは真逆の方向へと歩き出した。

精霊がいうに、目的地は近いらしい。何故、お姫様という身分の者が無用心にこの森に来ていたのか謎は残るが、それは知る必要の無い事。むしろ、知ったら駄目なのだろう。そうしたら最後、言葉どおり面倒事に巻き込まれるのは目に見えてる。

鬱蒼とした森に消えていった後ろ姿にサイードの影は微塵も無く、その切り替えの良すぎる様は役者という一言で片付けることは出来なかった。

鬼事か、隠れ鬼か

「リサーナ、これ頼んだよ！」

「はーい」

「リサーナ！」

「リサーナちゃ～ん！」

「はいはーいっ！」

風の国の首都ウェントゥスの一角にある店、「光風の便り亭」は連日活気に満ち溢れていた。こじんまりとしたその食堂は、旬のものを使った家庭的な食事を売りとしていて、首都の知る人ぞ知る隠れた名店である。

しかし、最近では、普段の何倍もの人間が訪れる人気店になっていた。十数席しかない店内は連日満員となり、客の足が中々途絶えず、店のスタッフにとってはさながら戦場。

テーブルの間を縦横無尽に走り回るのがたった一人となれば、その苦労はかなりのものだろう。

客からも店の人間からもしきりに名を呼ばれる少女は、すばらしい働きっぷりを見せていた。無駄に絡んでくる客に対しては機嫌を

損ねないように上手くあしらい、素早く注文を聞き、手には何枚もの皿を乗せて料理を運ぶ。

終始笑顔で働くその健気さと見た目の愛くるしさが、確実に客の胸を掴み、女将が渾身の力を込めて作り上げた料理が胃を掴む。素晴らしき連携プレーである。

今までも十分に経営できていたこの店が急激に繁盛し始めたのは、その少女が店で働くようになってからだった。

茶色の肩につくぐらいの髪に、赤が混じった大きな薄茶色の瞳。名前はリサーナ――ルシエである。

なぜこんなことになっているのか。それは、１０日前に遡る。

首都が近いと教えられリサーナの姿になったのは良かったのだが、人間と精霊の感覚の違いが誤算となり、女の格好で深い森を歩くことになってしまったのが全ての始まり。今思えば、面倒であれもう一度サイードになっていればよかったのだが、やっと首都に着いた時には、リサーナは強姦を受けたかのようなボロボロな姿になっていた。

当然、首都へ入る際に通らなければいけない関所で兵に止められ、事情の説明を求められた。

そして、さてどうしよう、と苦笑いになりながら必死に誤魔化そうとしていたところに、偶然近くに居合わせた光風の便り亭の女将が乱入してきたのだ。

女将は、まずは身なりをどうにかしてあげるのが先決だろう、と兵を怒鳴り付け、可哀想にその兵は自分の服を剥ぎ取られリサーナに献上するしかなかった。そうしてそのまま、どうしてかリサーナ

を気に入った女将によって、半ば強制的に店で働くことになったというわけだ。

その豪快さには、リサーナも為す術が無かったのだろう。気付いた時には、男に襲われたショックで記憶を無くし、それでも気丈に振舞う健気な少女というおかしな設定が出来上がってしまい、最早修正不可能となっていた。

またもや、思わぬ隠れ蓑を手に入れられたと手放しで喜べればそれでもよかったのかもしれない。

しかしさすがに、毎日毎日働きづめではそうも言っていられないだろう。

「いやー、リサーナが来てから、店が大忙しで嬉しいねぇ！」

陽の国と同じようにいくとは思ってはいなかったが、この１０日の成果がこの通り、店の看板娘として売り上げに大貢献してるだけとなれば、本人は焦り以前に呆れを感じる。

しかし、女将は裏のまったくない純粋な善意でそうしているのだから、責めることも出来ない。

リサーナは、笑顔の仮面を貼り付けたまま大きく溜め息を吐いた。

何が楽しくて、こんなにせっせと働かなければならないんだ。それには、そんな気持ちが篭っている。

いい加減どうにか手を考えなければとは思うのだが、身動きできない今の状況ではどうしようも無いのかもしれない。勿論、何もしていないわけではなかった。精石の場所は当然分かっているのだ。

ここに来てから3日経った深夜、ルシエは城に偵察も兼ねて侵入を試みていた。

風の精石は、王の証として代々受け継がれている。しかし、最早崩壊寸前であった陽の国とは違い、風の国は他国との国交も盛んで色々な出身者を受け入れ、制度も設備も最大で素晴らしく整ったところだ。しかも、大きな力を持つということは、その戦力もかなりのレベルとなってくる。

騎士は当然の事、様々な属性の精霊との契約者によって構成された魔術師団を有する風の国は守りも強固であった。

城の敷地に侵入した途端、何かしらの探知に引っかかってしまったルシエは、四方から魔法がビュンビュンと飛んできて危うく死にかけた。

慌てて契約している精霊達に呼びかけなければ、火だるまになり氷付けになり、何が死因か分からない状態になっただろう。

ならば、リサーナでいるのを止めて、再びサイードになって行動すればいいのではと思うかもしれない。当然、本人もそれは考えた。

しかしそれも、今のルシエには難しいことであった。

何故なら、その手はもっと前、女将に引きずられて店で働くことになってしまった初日に封じられてしまったからだ。

その日はまだ、今とは違ってちらほらと客がやってくるだけのこれまでの光風の便り亭だった。昼も過ぎ、客足が途絶えていた店では、リサーナが奥で遅めの昼食を取っている最中で、女将は夜に向けての仕込みに精を出していた。

そんな時、入り口に備えられているベルが店内に響く。

「いらっしゃい！」

店にはクローズの看板が出ていたはずなのだが、女将は別段気を害することもなく大きな声で相手を迎えていた。

それが耳に入りながらも、リサーナはもぐもぐと口の中のトルッテと呼ばれる野菜をパンで挟んだサンドイッチもどきを咀嚼する。よくよく考えれば、アピスに来てまともな食事を取ることが今まで無く、昨晩から地味に感動したりしていた。

遠くでは来訪者と女将が何か会話をしいたが、業者か何かだと思って気にしない。

「リサーナ！　リサーナ、出といで！」

しかし、突然の呼び出し。仕方なく食べかけのトルッテを置き、首を傾げながらパタパタと走っていく姿は本当に普通の少女だった。

そんなリサーナだったが、謎の来訪者を見た途端、ギクリと顔を強張らせて固まる。その視線の先にいたのは、風の騎士だった。

「君が女将の言っていたリサーナか」

しかも、見覚えがありすぎる者である。絹の様に細く滑らかな襟足が少し長いクリーム色の髪をし、ピーコックブルー（青緑）の瞳の色をした、そう、森で出会いお姫様の護衛をしていたレイスがそこにはいた。

「先程の話では、大変な目に合ったそうだな」

リサーナの驚きと焦りは相当なものであった。しかし、表面にはおくびにも出さず、驚く程素早く頭を回転させて自分に出来る最上級の笑顔を浮かべる。

「初めまして。新しくここでお世話になっている、リサーナと申します。大変な目に合ったと言っても、私には記憶がありませんので。それよりも、こんな誰とも知れない私を拾ってくれた女将さんに感謝しています。きっと、私以上に幸せ者などいないでしょう」

「……そうか。一応、こちらでも君の身元を調べておこう。親御さんが心配していたら大変だ」

どうやら、レイスが怪しんではいないようだ。役者顔負けの演技以前に、サイードとリサーナの共通点が何も無いというのが大きいのだろう。

ただし、ただの娘にしては言葉遣いや動きが良すぎた為、別の意味で興味を引かれてしまった。

「ありがとうございます」

「一言言わせてもらうと、記憶が無くても衛兵に相談するべきだ。君の為でもあるし、他に被害がいかないようにも。私達は頼りないか？」

困ったように、諭すようにそう言うレイスは騎士であった。リサーナとしても、女将の迫力に負けてここにいるのだが、ここでそれを言ったところでどうにもならない。素直に謝罪を述べ、記憶が無くて状況を掴むのに精一杯だったと言うだけで留めた。

「それで、あの。どうして騎士様がこちらに？　私の件でしたら、お話出来る事が何も無いのですが」

存外に早く出ていけ、という気持ちを込めてそう言えば、どうやらレイスは元々別件で店を訪れていたらしい。それを伝えようとしたところ、女将にリサーナの話を持ちだされたそうだ。

女将め、と思ってしまってもまあ、立場的に仕方ない。善意とお節介の境界線というのは、中々に曖昧だった。

「ここの女将は、なんというか、強いな。こちらの話は仕込みがあるからと、君に伝えるようにと言われてしまったんだよ」

「ふふ、力は男性に適いませんが、内面は女性の方が何倍も強いですからね」

クスクスと悪意の無さそうな笑みの下、耳が痛そうなレイスにしてやったりと笑うのは良いのだが、リサーナの余裕はそう長くは持たなかった。

レイスが元々の用件を伝える為、懐から一枚の紙を取り出しさしだしてきて受け取った瞬間、気付かない程度の時間ではあったがその目が大きく見開かれる。

「それを目立つ所に張っておいてくれないか？」

「……なんですか、これ」

レイスを見た時とは比べられないほどの冷や汗が背を流れ、唖然としかけながら精一杯問い掛ける姿は、相当な一大事だったのだろう。

レイスはここに来るまでも何度か訝しまれたのか、少し居心地が悪そうにしているだけだ。

渡された紙は、人探しの張り紙であった。ただし、一見手配書にも思える様なものだったが。

「そこに書かれている者に少し用があってな。旅人らしいのだが、この街に立寄っているはずなんだ。もし、客の中で見かけたりそういう話を聞いた者がいたら、君でも構わない。詰所に知らせて欲しい」

「分かりました。女将さんにも伝えておきますね」

無意識にしっかりと返事をし、対応したリサーナは最早プロだろう。

私用だから、普通のものと違って強制は出来ないけれど。そう言って、よろしく頼むとレイスは店を出て行った。

リサーナの件でも別の騎士にもう一度事情説明を求めに来るかもしれない、とも言っていたが、今は張り紙に釘付けで返事が出来たか自分ではあやふやである。

最早気を付ける必要のなくなり、紙を持つ手は小刻みに震えてい

た。

「あんの、クソ騎士がっ」

グシャリと苛立ちに潰された紙には、どんな絵描きに頼んだのだと文句を言いに行きたいぐらいの粗末な似顔絵があり、その下にはその者の特徴が可能な限り書かれていた。

『黒のマントに同色の布で顔を隠した、ゴールドの瞳の男の旅人。剣術に長けており、身体は比較的細身で年齢は若め。人との関りをあまり好まない様子。見かけた、若しくはそういった男の話を聞いた者は、ウィーネ騎士団もしくは城門番に知らせたし。　ウィーネ騎士団団長レイス・アレフィセー・アランドル』

つっこみ所満載の紙であるが、とりあえずまず言えるのは、その探し人はどう考えてもサイードであった。

「見事に手を潰してくれやがった！」

美味しい食事を堪能し、即刻この店を立ち去ろうと考えていたリサーナにとって、それは大きな痛手であった。

レイスの去った扉を睨み付けた目は、か弱い少女からかけ離れた獰猛な肉食獣。一瞬で治めはしたが、リサーナはこの店を拠点にすることを余儀なくされ、安易な行動を取れなくなる。

何せ、ウィーネ騎士団とは、王直属の近衛も勤めるエリート集団である。

同国の他の騎士からも一目を置かれ、他国からは恐れられる。しかも、あのレイスが団長とくれば警戒せざるをえない。

そんな騎士団の長ともなれば、真っ当な者の中では確実に最強か

それに近い腕なのだ。

ただ、そうなればいくつか疑問が出てくるのだが、それはバレなければなんとでもなるだろう。……バレなければだが。

「リサーナ？　リサーナ！　騎士様のお相手が済んだのであれば、早くご飯を食べ終えちまいな！」

「……はーい」

何とか怒りを静めたリサーナであったが、その代わり頭の中は様々な事が巡っていた。

そうして、結局のところ、うまい策が浮かばずに焦りだけを募らせる日々を送るのだ。

「リサーナ、か。おい、今の少女について可能な限り調べておけ」

「はっ！」

影で、避けようの無い面倒毎に巻き込まれながら。

レイスは優男ではあるが、綻びだらけの設定と細かな観察力、やはりそこは騎士団長であった。

一人しかいない役者の舞台

焦りだけを募らせて働き続けていたリサーナ。

夜も更け、光風の便り亭は女将からその息子にバトンタッチし酒場へと雰囲気を変え、男達で賑わっている。

夜の料理も仕込みは女将なので、酒よし料理よしの店はやはり人気だ。ただ、突然現れた看板娘は、流石に１日働き続けるのは無理なので、夕食も兼ねてテーブルでまったりとしている。

時たまそこに酔っ払いが絡もうとしてくるが、この１０日間で酒場には、食事をしているリサーナには話し掛けないという不思議なルールが出来ており、それは別の客が嗜めて防いでいた。つまりは、抜け駆け防止策というところか。

身なりは全員が美人と評価するわけではないが、可愛らしくて独り身とくれば、放置されるわけがないというのが世の常である。

そういったわけで、喧騒の中静かに食事をするリサーナであったが、内心では爪を噛んで苛立ちを抑えたい衝動に駆られていた。

昼間の焦燥が引き金となったのか、どうやら我慢の限界が来ている様子だ。たった３日で１つ目の精石を壊した身としては、これ以上は陽の精石の喪失が公に出るまでの猶予も消費され続けている上、１０日も収穫無しで自分自身が許せないのだろう。

ただ、言わせてもらえば異世界に来てまだ３週間も経っていない

のである。しかしまあ、ルシエからしてみれば、地球を消させない為に来ているわけで、その現状を知る術が無い分募るものもあるのかもしれない。

それに、苛立ちの理由はまだあった。レイスと一方的な再会をして2日程経った頃から、どうにも監視されている気配がしていたのだ。バレている可能性というか、何かを疑われている可能性が考えられ、落ち着いてもいられない。

そういったストレスの限界が今日だったということだ。

最早、顔を晒すのを躊躇っている場合ではないのかも。リサーナは密かにそう唇を噛み、勝手に出そうになる殺気を全力で鎮めた。

「マスター、ご馳走様」

「おう。今日は直ぐに部屋に戻るか？」

食べ終えた食器を厨房へと片付け、息子へと声を掛ける。豪快な女将と違い、とても柔らかく静かな印象を与える息子に、腹の中で女将にはつらつさを吸い取られたんじゃなかろうかと思ってしまう。ちなみにその女将だが、元気の秘訣は早寝早起きらしく、食堂の営業が終わると早々に寝てしまっている。

息子の問いかけに首を振ったリサーナは、今日も少しお客さんと話をしていくよと、再びテーブルへと戻った。

それを今か今かと待っていた飢えた狼共は、我先にリサーナを呼ぼうと躍起である。

何故、面倒が嫌いなルシエがそんな事を自らやっているのか。そ

れは、何時の時代も酒場は情報の宝庫だからである。

進展は無くとも、そういったことだけはしていたのだ。

客の輪に入っていくリサーナを温かく見つめる息子は、よもやその少女がそういった打算を企てているとは思うまい。

ちなみに、これまで得た情報の中には、ティルダのその後も含まれていた。

彼はどうやら、リーダーとの戦いに打ち勝ったらしく、今は”ティルダ王”として生きているらしい。

これに対しては、ルシエは純粋に楽しみを抱いていた。もし次に会った時、彼がどのように成長しているのか。

会わない方が良いとは思うのだが、汚い世界にお優しい少年が揉まれ、果たしてどうなるのか。そこに興味を惹かれて止まない様だ。

そんな他国の事に関しても知ることが出来るのが酒場なのであるが、実際にリサーナが知りたいのは風の国の、しかも中心に関する事である。当然、レイスについてもそうだ。

どうやら風の国は、現在王位継承権でかなり揉めているらしい。王が3人いる子の内の誰にするのか決められないという。とはいっても、全員が女というわけでも無く、王子が2人と王女が1人。

普通こういったものは、長子が必然的に第一位になるはずなのだが、その長男は病弱で1年の大半をベッドで過ごし、なら代わりの次男はというと、民から馬鹿王子と呼ばれる程に浅慮で傲慢。王女にしても我侭娘だと専らの噂だ。

王の苦労がそれだけで理解できそうだ。民としても、国の先行きが不安だろう。特にリサーナは、その我侭王女と会った事があるの

で尚更である。ただ、あのお姫様がただの我侭娘だと思えなかったりもするが。

そして、風の国自慢の騎士団ウィーネの団長であるレイスについてだが、彼は民に慕われる大人気の騎士だった。

生い立ちとしては、平民の出でありながらその剣の腕を買われ、アランドル伯爵家へと養子入りしたそうだ。とはいっても、所詮は元平民で伯爵の中でも下の家。肩身の狭い想いをしながらも、それを感じさせない堂々とした立ち振る舞いと、分け隔ての無い優しい性格が老若男女問わず受けている。

ルシエの持つイメージとは大分かけ離れているが、ここは黙っていてやるのがレイスの為だろう。

と、いうわけで、様々な情報を得ているので無駄とは言い難くあるのだが、状況的にもそろそろ潮時である。これ以上は、レイス側も何かしら監視だけじゃない行動を起こすだろう。

「ほら、リサーナ。驕ってやるから1杯どうだ？」

「ありがとう」

リサーナは、今日が光風の便り亭で過ごす最後と決めた。常連のおやじの勧めで一杯あおりながら、一度、今夜の監視役へと目をやる。視線の先に居た平民を装う青年は、恐らく報告か何かで知っているのだろう、リサーナが今までで初めて酒を飲んだ事に一瞬驚き、笑顔で自分のグラスを持って席を立つ。それを確認しながら、直ぐに視線は驕ってくれたおやじへと戻った。

「めずらしいな、リサーナが酒を飲むなんて！」

「というか、初めてじゃねーか？」

常連客達も、今までに無いその行動に不思議そうにはしながら、それでいて嬉しそうである。リサーナは、楽しそうに笑いながらグラスを傾けておどけた。

「だって、飲んでみないと分からないじゃない。賭けてみる？　飲めるか、飲まれるか」

「いいねぇ、だけど、どう賭けるんだ？」

その提案に、客が沸き立つ。そんな中、先程の監視役もいつの間にかその輪におり、値踏みするようにそう言った。リサーナはグラスに残った半分程度の中身を一気に飲み干し、ダンとテーブルに打ちつける。

「そうね、1賭け1杯。全部飲み干したら私の勝ちで、潰れたら一番多く奢った人が私を1晩独占できる。もしくは、奢られた分全部、奢り返す。これでどう？」

どっちがいいか、というリサーナの問いかけは、酒場に響いた雄叫びにかき消されてしまった。2杯、3杯と次々に客がマスターへと注文し、目の前のテーブルは直ぐに酒だらけとなる。監視役の青年は、まさかこう返されるとは思わなかったのか、ヒクリと頬を引きつらせた。しかし、目の奥で自らも狼を臭わせる。

「大丈夫かい、リサーナ」

「たぶんいけるよ。ちょっとしたお礼みたいなものだから、マスターは気にしないでね」

次々とコップを空け、平気そうに言うリサーナに肩を竦めたマスターであるが、その顔は楽しそうでそこまで心配している様には見えない。実際、精霊の力を軽く使えば、治癒の要領でアルコールなど簡単に分解できるため、この賭けは既に勝敗が決まっているようなものだ。

女の姿であるからこそ小悪魔といえるが、腹の内は悪魔。可哀想な客達は、この１０日で少し荒れてしまった手に転がされていた。

「ふふ。まあ、飲むだけじゃあ楽しくないし、いつもの様にお喋りしながらでいこうよ。騎士様は、皆が賭けた数の記録をよろしくね。たぶん全員、字書けないだろうし」

どちらが接触しているか分からなくなりそうな状況で、リサーナは上手い具合にペースを自分へと持っていく。指示を受けた青年は、懐から自然に紙を取り出して従っていた。その影で、こっそり隠されていたリサーナの報告書が精霊の風により取られているとも、そして、今の言葉が相手のレベルを計る為のものであったというのにも気付かずに。

騎士だからといって、字が書けるわけではない上、この世界での識字率はそう高くは無い。字が書けるというだけで、平民であってもそこそこの地位や立場、環境の中にいる人間だと考えられるのだ。

それに、そもそも青年は平民を装っており、一言も自分が騎士だとは言っていない。このあからさまな値踏みに気づかないということは、経験が浅いか実力がたかが知れているということだろうが、リサーナの作る場の空気に呑まれているせいなのかもしれない。

「あー、でも念のため、限界決めとくよ？　３０杯が限界ねー！」

「おうよ！」

「まかせとけ！」

ノリに乗った客達。この世界には、地球に比べ娯楽が少ない。だから、こういった小さな賭けは日常茶飯事で、誰かが取り締まるっていうことも無かった。さらには、いつ死ぬか分からない瀬戸際な日々を送ってもいるわけで、人に残る数少ない本能も手伝って、男女の情事というものにもモラルが薄いというか、寛大というべきか。とにかく、リサーナぐらいの歳であれば、既に咎められたりすることも無い当たり前な事なのである。

こうして、今夜の光風の便り亭はリサーナの独壇場となり、舞台が開幕する。

ここで何かしらの活路を見出せなければ、状況は悪くなる一方。それだけ切羽詰っているのだと実感できるのは、当然本人しかいなかった。

「お、おい。流石にペースが早すぎないか？」

「余裕余裕。まだまだいけるよー？」

「そうだぞ小僧！　地味に自分が一番賭けてるくせに、格好つけるんじゃねーよ！」

「リサーナ！　３０じゃなくて４０杯にしてくれねぇか！？」

ガヤガヤと盛り上がる店。サイードの似顔絵に見つめられながら飲む酒は美味しいとは言えないが、周りが次々と出来上がっていく姿には笑いが抑えられない。

「風の国の栄華にかんぱーいっ！」

「乾杯！！」

「ウィーネ杯の盛り上がりも祈って、だな！」

そうして、周りに合わせ心にもない音頭を取った時、リサーナの望んだ活路への光がひとつ灯った。誰が言ったか、ウィーネ杯という単語。それは、下手な詮索が相手の漬け入る隙となりかねないリサーナにとって最近最も知りたかった情報そのものであった。

「ウィーネ杯？」

相手が零した単語を拾い聞くのと、自ら進んで質問をするのとでは与える印象が違う。街に出る暇も無く働かされていても、皆が浮き足立ってる事はずっと前から気付いていた。後はその根源を辿りたかったリサーナであるが、吹っ切れたその頭には慎重というものが欠落し、デメリットが多々あったとしても斬新な手が浮かんでくるのも事実である。

結果、その糸口を掴んだのだ。

「ウィーネ杯は3年に1度ある、武道大会のことさ。騎士団や魔術師団所属の新人の奴等や貴族も出るが、腕に自信のあるそれ以外も参加可能な大会でな。そこでお偉い方の御眼鏡に適った奴は、栄光への道が開けたり、特別に入団が許されたりする。つまり、風の国

最大の娯楽であり、出場者にとっては経験を積める良い機会で、国からしたら貴重な人材発掘の場ってわけさ」

「へー。それっていつあるの？」

知らなかったのか、と周りが苦笑するが、だってお店で忙しかったものと答えれば納得し、３日後だと教わった。

「３日間の日程で行われるんだが、今年は結構魔術師が多いらしいな。エントリー期間も終わって、総参加者数は１９０人だったか。今年は俺、予選担当だから忙しくてさー」

この場で最も重要な情報を握っていそうな青年は、酒のお陰でかなり口が緩くなっている。次から次に、リサーナに利益のあるものが飛び出てきて、真っ白だった計画（プラン）が次々と築かれていった。

客は誰も気づかなかったが、青年の言葉に危うくクツクツとサイード寄りの笑いが零れそうになり、目の前のカップの１つを一気に飲んで誤魔化す。まだまだ平気そうな様子に、客達は残念そうな悲鳴を上げた。

「だから街が浮き足立ってたのね。それだけ大きかったら外からも見物客が来そうだし、良い書き入れ時だわ」

「おうよ！」

「リサーナも、さらに忙しくなっちまうんじゃねーか？」

ニコリ、悪意の無さそうなその笑みが、舞台の終わりを告げた。

十分必要な情報は集まり、活路がいくつもの光で明るく灯される。

贅沢を言えば、レイスがどういう目的で自分を監視していたのか探りたくはあったが、酒が入って緩くなったといっても騎士は騎士。しかも、ウィーネ騎士団団長が送ってきた人間だ、これ以上の危ない橋は渡れない。

それに、精石を壊すことに比べれば大抵のトラブルは可愛いものだ。ある程度アルコールの回った頭で、リサーナは自信あり気にそう思った。

「あー、肉屋のおじさん潰れちゃってるし。奥さん呼んでくるから、皆で楽しんでおいて」

そして、後は舞台を降りるだけとなる。不審に思われない様、客の1人だけを故意に眠らせていたリサーナは、自然な流れを装って店を出ようとした。その際の、賭けはどうなるんだという猛抗議に対してはテーブルを指差し。

「ごちそうさまでした！」

じゃあ行って来る、という声は、マスターさえも唖然としていて誰も聞いてなかっただろう。皆の視線は、いつの間にか空になっていた30のカップに釘付けだ。

ケタケタと笑う高い声は、そうして闇に溶けていく。

この後、暫くしても戻ってこないことに疑問を抱いたマスターが酔っ払いの尻を叩いて動かし、慌てて女将も起こして総出で探すのだが、リサーナが光風の便り亭に戻ってくる事は2度となかった。

当然、見張り役の騎士はレイス直々に手痛い仕置きを受け、悲しみに暮れた女将に息子は責め立てられるのだが、本人がそれを知る由が無い。

こうして、突然現れ1つの店を大繁盛に導いた少女は風の様に消え去り、それは大きな街の小さな行方不明事件として処理されるのであった。――勿論、表向きとして。

さぁ、歴史に名を刻もう

城の近くに造られた、専用の闘技場。かなりの広さを持つその存在自体が、いかにウィーネ杯が国にとって重要で歴史あるかを物語っている。

そして本日、街の人間の半分以上が集っていると言っても過言では無いぐらい、そこは人で溢れていた。

至る所に出店が立ち並び、時折迷子になってしまったのか子供の泣き声が混じりながらも、喧騒と熱気に満ちている。ただ、観客は朝早くから会場で我先にと場所取りをしているので、外に居る者達のほとんどが会場入りが叶わなかった者か出店目当ての者だ。

それに、全員が全員、純粋にウィーネ杯を楽しむかと聞かれればそうでは無い。貴族達は出場者を対象に賭け事に精を出したり、他国の間者が紛れたり。こういった大きな行事では、どこでも何かしらの思惑が付き纏ってくるのだから、仕方が無いのかもしれない。

それを踏まえて開催し続けているのでなければ、最大の国と豪語は出来ないだろう。

「ふぁ～」

そして、参加者の控え室にも一人、ある思惑を持った人物が大きな欠伸をしながら暢気に構えていた。

シルバーの短髪を無造作に立て、ゴールドの瞳を潤めるその者は、様々な雰囲気を醸し出す集まりの中、壁にもたれてひっそりと佇みながらも一際目立った容姿をしている。体つきが成長途中なのか、周りに比べ細く軟弱そうだというのも理由の一つなのだろうが、何より形の良い薄い唇と長い睫に縁取られた切れ長の瞳、すっきりとした鼻筋をした顔が、つまりは整った容姿がむさ苦しい「武」の控え室で異質に見えるのだ。

何を隠そうサイードである。

「くっそ、めんどくせぇ。いつまで待たせんだよ」

サイードは、寝不足なのか肩を解しながら一人ごちる。それを、他の参加者はちらりちらりと横目で盗み見て、こいつは警戒に値しないなと嘲笑うのだ。

どうやらウィーネ杯には、素顔を晒して参加するらしい。服装も、簡素なシャツに黒のパンツ、機能性を重視した少しごつめのブーツという姿である。誰もが防具や盾を装備しているので、それがさらに小物臭を漂わせているのだが、本人は全く気にしていなかった。

そもそも、何故サイードが“参加者の控え室”に居るのか。リサーナとして光風の便り亭でウィーネ杯の情報を入手した時には、確かに参加エントリーは終了していた。

それが寝不足な原因なのだが、どうやったって不正参加をしている。

リサーナの行方を晦ませサイードとして取った行動は、まず参加者名簿を入手することだった。そして、その中でも予選敗退しそう

な者を探し出し、選ばれた哀れな生贄を出場出来なくさせ、名簿を摩り替える。無名の者も参加する上に、その人数が１９０人と多いからこそ欺けたのであるが、何とも卑怯である。

ただ、参加すればサイードの思惑が成功するわけでない。言うなれば、これは下準備の段階なのだ。その目的の最終地点は、城に入城する権利を勝ち取る事にある。そうすれば、例え精石を目の前にしなくとも、場所を探せば恐らく詩を唱えられるだろう。

なので、大変なのはこれから。そのはずである。

しかし、その本人が欠伸を何度も噛み殺すことが出来ず、更に腕を組んで俯いて眠り扱けようとしていれば、どうも実感しずらい。

他の「武」部門での参加者も、あまりのだらけ具合に始めは眼中に無いという雰囲気を持っていたというのに、苛立っている様子だった。

ちなみに、先程から「武」と言っているがそれが何かというと、この大会は武術を力とする者と魔法を力とする者が入り乱れる試合となっており、その使い手の区別も兼ねて武術専門を「武」と、魔法を主とする者を「魔」としているのだ。

ただ、それぞれで競うわけではなく、予選以外は武であれ魔であれ関係なく戦わなくてはならない。イメージとして、ほとんどの者が魔法を使う＝後衛（イコール）と思うかもしれないが、魔術師だからといって魔法のみで戦うわけでは無いのだ。でなければ、１対１の戦いになり相手が武術の使い手な場合、魔術師は簡単に死んでしまうだろう。

そうならない為にも、魔術師は自主的にウィーネ杯に参加し、己の力を高めようとするのである。それは、武術を専門とする者も同

じだ。めったに魔術師と戦う機会が無い分、この機会に経験を積もうとエントリーするのである。

実戦に近い試合。それは訓練で鍛えられないものを与えてくれる。だからこそ、サイードの気の抜けた態度は、向上心に満ち溢れる参加者にとって勘に触ってしまうのだろう。

どこぞの貴族のぼんぼんが、親に言われるがままに適当な気持ちで参加している。恐らく、ほとんどの者がそう思ったのではないだろうか。褒めるべきか、上辺だけならサイードは気品があると勘違い出来る。

独り言を聞けば、その口調からまた違って見えるのだろうが。

「早く終わらねぇかなー」

本気で寝てしまいそうになり、カクンと身体の力が抜けた反動で朧気に覚醒したサイードは、周りがそう思っているとも知らず呟いて、結局綺麗とは言えない床に直に横になり寝息を立てるのであった。

当　然、精霊に出番になったら起こしてくれと頼むのを忘れずに。

「これより、ウィーネ杯を開催する！」

外では丁度開催宣言が行われ、すぐさま「魔」の予選が開始されており、歓声と衝撃音が響いていた。

ウィーネ杯のスタートは予選から始まる。今年は、「魔」で登録した者が１１０名、「武」での登録が８０名の計１９０名による戦いが繰り広げられることとなった。

得意分野関係なく力を競うこの大会であるが、予選のみ「魔」と「武」を分けて行うのが通例。集団で、しかも狭い範囲での戦闘においては範囲攻撃を持つ「魔」が有利となってしまう為にそうなっているのだ。

毎年、均等に人数を振り分けたブロック毎に予選が行われるのだが、今年は「魔」が１８ブロック、「武」が１３ブロックに分かれて本戦出場者を決め、午後からその本戦が始まる。つまり、本戦に進出できるのは全部で３１名というわけだ。

そして、見た目が派手な「魔」から予選がスタートし、勝ち上がった者から順に本戦トーナメントの抽選を行っていく。

会場の広さの関係で、１度に３ブロックが限界の為に生じる待ち時間は、個々の精神集中を高める時間として使われていた。

「あ〜、寝たら尚更疲れた」

なので、それを寝不足解消に使うというのはただの馬鹿か余裕があるのか。しかも、文句まで言うのだから、余裕があるからじゃなければ一生の恥にしかならないだろう。

精霊に容赦無く叩き起こされたサイードは、「武」の予選１ターン目の終わり間際に凝り固まった身体を解していた。集合時間が陽

が昇って直ぐだったので、地球だと8時程になる今の時間を考えれば、恐らく2時間程寝ていたことになる。
会場は、大分熱気が高まっているだろう。そして、予選「武」の部4ブロック目に位置するサイードは、案内役の騎士の指示で会場へと歩くのだった。

周りの剣呑な雰囲気もどこ吹く風、マイペースに首を解す姿はいつもより柔らかい印象を与える笑顔を貼り付けている。
薄暗い控え室から外へ出れば、久しぶりの光に自然と目が細まった。

取り敢えず足を止めずにいれば、次第に目が慣れていき、視界には普通では気負ってしまう程の人、人、人。
円形に作られた闘技場の戦闘エリアには、中央に造られた土台を中心に左右にも同じものがあり、そこでそれぞれ予選が行われる。

大きな歓声に迎えられたサイードは、その内の左側へ行くように指示を出された。他にも6人が同じように促され、全員で7人が4ブロック目の参加者なのだろう。
サイード以外の皆が防具を装備し、気合十分だ。

「それでは、ルールは同様、各ブロックエリア内に最後に立っている者を本戦進出者とし、武器は登録したもののみ使用可、致命傷は厳禁とします！　エリア外に出たり、急所に武器を添えられたら敗退。膝を付いても負けと判定しますので、各々全力で誠意を持って戦う様に！」

どういう原理か、進行役の説明が喧騒の中でもしっかりと参加者の耳に入ってくる。事前に説明を受けているので、再確認の意味も込めてなのだろう。

各ブロックに監視と判定の審判役を務める騎士が3名づつ付き、お互いに頷き合う。サイードのいるブロックには、光風の便り亭での最後の夜に出会った監視役の青年が居た。心なしかやつれている気がして、思わず慰めてやりたくなる。サイードは、隠れて笑っていたが。

「それでは、「武」の部予選2セット目、始め！」

そうしている間に、進行役の合図と共に戦いは始まった。

サイードの相手となる6人だが、其々が持つ武器を見るに剣を使うのが3人の斧が2人、弓が1人である。

「真面目に頑張るねぇ」

皆、一斉に構え、近くに居る敵と素早く打ち合っていく。人数的にも1組は必ず混戦となるこの状況で、サイードは開始と共に軽快にバックステップや側転をしてエリアの端へと移動した。上手い具合に全員の意識外を移動するのだから、その根性に最早脱帽である。

そんな行動に客席からは幾つかブーイングが上がるが、それは甘いマスクを利用して、ウィンクをしたり唇に人差し指を当てたりして静めていった。

その際、女性の何人かが額に手を当てクラリとよろめいた気もしたが、恐らく気のせいだろう。……気のせいであって欲しい。

と、一人だけ明らかに可笑しい者がいる4ブロックのエリアであるが、早々に1人がリタイアしていた。サイードの様にエリアの端に位置取った弓使いが、別の相手に気を削がれている中で一番身近

に居た者の脛を器用に射たのだ。

それにより、相手を失くしたもう一方が弓使いへと標的を変えるが、予備動作と素早い矢の補充で、次を射るまでのタイムラグが少ない卓越した技術により餌食となる。

「へぇ」

傍観に徹していたサイードは、素直にその腕前に拍手をした。

このような作戦は、外せば自滅しかねないものだ。下手をすれば、敵同士がその場で協力し、弓使いを倒しにきかねない。それを気配を消してこなす様は、純粋に褒められるものだった。

弓も使えるようになった方が便利そうだ、と新たな発見をしたサイードであるが、別で対峙していた内の1人もいつの間にかリタイアし4人となった状況では、傍観し続けることは叶わなかった。

たった3人減っただけで、エリアは格段に広くなる。サイードの登録している武器は剣なので、それを含めて剣士が2人、斧が1人、弓が1人。さて、そうなるとどういった組み合わせになるのか。

残り2つのエリアでも、早くも進出者が決まったり1対1になっていたりと進展が見られる。

「と、なると。俺が一番場違いってなるかなー」

周りとの温度差を自覚しているのか、サイードが苦笑を浮かべながら気を張るのと、2本の矢が放たれるのはほぼ同時であった。

「まずはお坊ちゃんにご退場願おうかねぇ！」

しかも、斧使いまで標的をサイードに決めたのか、せっかくの偶数となったというのに混戦である。この流れからいけば、残りの剣士もそれに加わるだろう。

弓と違い、剣士が背中から切るのは、このような場では侍じゃなくとも褒められたものじゃない。

「俺は残念ながら、っと、お坊ちゃんじゃない、うぉ！　ちょっと、全員でとかひどくない！？」

今回のサイードは、今までと比べフランクでおちゃらけた青年でいくようだ。矢をサイドステップで避ければ元々居た場所に刺さり、それに反応を返す前に斧が横から振り下ろされる。下手をしなくても当たれば脳天からぐしゃりとなりそうな攻撃に、観客からは悲鳴が零れ、審判は慌てた。

それも、少しずれた反論をしつつ前方に2回転して避けるが、今度は着地地点で剣士が待ち構え素早く仕掛けてくるので、少し驚きながら再び側転してやっと体制を落ち着けることが出来た。

まるで曲芸のような身軽な動きは、大いに会場を沸かせた。

「劇団にでも所属してたのですか？」

「いんや、俺はあんたみたいに繊細なだけだよ～」

攻撃を見事に全て避けられた3人は、サイードがそんな動きをするとは思っておらず驚き、弓使いは戦いの最中だが思わず問いかける。残りの2人は言外に貶され、弓使いも皮肉を言われることになるのだが、剣呑な雰囲気をものともせず、サイードはその場で軽く

跳ねてやっと臨戦状態になったのだった。

「これは、武器は使わない方が良さそうだな」

カチャリ。この大会の為に用意した急ごしらえの腰の剣は、ハンデにはなれど相棒とはならないだろう。そんな理由での発言なのだが、それもまた挑発にしかならず、元々が好戦的なのか結局1対3の戦いでいくしかなさそうだ。

何故指輪の剣を使わないかというと、あれは森でレイス等に見られており、万が一発覚してしまえば計画が失敗しかねないからだ。

「甘くみないで欲しいね！」

恐らく、斧使いは傭兵で剣士は新人騎士、弓使いは物腰の柔らかさと仕草から貴族か何かだろう。本人達は気付いていないが、いつの間にかこのブロックに観客は釘付けである。

「取り敢えず、一番面倒そうな……」

剣士の抗議に笑って返したサイードは、3人を見比べ、その視線を弓使いに定めた。今の位置から一番遠い場所に彼はいるのだが、距離は問題じゃないらしい。

「光栄な評価をありがとう」

「いやー、後ろからグサリが一番怖いからねぇ」

お互い上辺は笑顔なのだが、ブリザードが酷いのは気のせいだろうか。どうやら弓使いも腹黒いタイプの人間の様だ。

「その前に俺様が場外にぶっとばしてやるよ！」

「いいや、僕が膝を付かせてやるね！」

ちなみに、残りの２人が無駄に張り合っているが、観客ですらそれを無視している。

「では、真正面から射抜いてさしあげましょう」

「それは楽しみだ」

弓をしならせ番えられた矢は照準を定め、サイードは弦を引く左手に集中する。煩わしい外野の音の一切を遮断する集中力は、相手の僅かな動きも見逃さないだろう。

数秒の対峙の後、攻めを選んだのは弓使いだった。

シュッと矢が放たれ、それは的確にサイードの身体に迫る。それをまたもや側転で避けたのだが、間髪入れずに次々と、追い立てるように弓使いは猛攻した。

体勢を立て直すことも出来ず、４人も居れば広くなったとは言え狭いエリアをじぐざぐに走るサイード。

「ちっ……キーテか、君は。」

流石の弓使いも、その俊敏性に思わず舌打ちをしていた。

ちなみにキーテとは、ほとんど猫と同じなのであるが、尻尾が二股のしかもそれが蛇という、可愛さが半減しそうな動物だったりする。しかも、本体というか頭というべきか、とにかくメインが蛇の

方。どっちにしろ害虫駆除をしてくれるので、家庭ではそれ目的で飼われたりするのだが、占める面積が少ない尻尾の蛇が食事をするのだから、想像するだけで珍妙な光景が浮かんでくる。

「お兄さんも、中々に鬼畜だねぇ」

近付いて離れて、を繰り返すサイードは何が目的か、まるで矢を放つ場所を誘導するように走っていた。

会場の中にはその狙いに気付く者もいくつかいて、既にほう、と関心していたりする。

そして、サイードは大きく斜めから真正面に移動するように弓使いへと迫った。

「甘い」

当然、卓越したスキルを持っているのだから、相手としては飛んで火に入る夏の虫。肩を狙って1本の矢が放たれる。

「ぐあっ!!」

それは見事に命中した。

「なっ!?」

しかし、その的を変えて。崩れ落ちリタイアとなったのはサイードでは無く剣士であり、矢は左太腿に刺さっている。

驚きに染まる弓使いだが、よくよくエリアを見てみれば、斧使いの右腕にも矢が2本刺さっていた。

「いやぁ、まさかそんなに、お兄さんが俺と一騎打ちしたいとは思わなかったよ」

状況を飲み込めているのは恐らく、これを狙っていたサイード本人と審判、スカウト目的のお偉い方数人だろう。

しかも、剣士に矢が刺さったのは今し方であるが、斧使いがそれを受けたのは2人の攻防が始まって直ぐだ。

正方形に近いエリア内で仮に弓使いが立っている場所を北側とすれば、サイードは最初南東の端に立っており、剣士は東側、斧使いは縦にも横にも西の端とサイードの中間ぐらいに居た。

そして、最初の1本を側転で西側に避けたサイードは、悟られず注意しながら矢を避け続けて、弓使いからは斧使いが隠れる様に、斧使いからは矢が隠れて反応が遅れる様にタイミングを図って移動したというわけだ。

剣士に対しても同じ要領で、当たるように攻撃を誘導した。弓術は驚くほど集中力を必要とする技である。それが仇となり弓使いは良いように動かされたのだが、こう言ってはなんだが、剣士と斧使いも大分間抜けだ。

剣士に関しては、サイードが走りながらブリッジをし、しかも精霊に協力してもらい矢尻に少し力を加えて軌道を変えたので避けれなくても仕方は無いが、動きそのものに着いていけず、突っ立っていただけである。狙ってくれと言っているようなものだろう。

「今日の俺は、運が良いみたいだわ」

よっ、とブリッジの体勢から起き上がったサイードは、してやったり顔をしながらしらばっくれ、ニヘラと笑っていた。

「抜け抜けと……っ！」

「小僧がああああああ！」

弓使いの顔には余裕が無くなり、使われていたという事実が屈辱を生む。当然、斧使いもそうだ。利き腕をやられ、重量のある斧を満足に扱えないだろうに、それでも怒りまかせにサイードへと突進した。

「おっと」

それはさながら猪、体格からすれば闘牛かもしれないが、直線的で単純な攻撃だということは同じだ。ひょいっと身体をずらすのみで避けた際、サイードは片足をその進行方向に突き出して、まんまと引っ掛かった斧使いは大きく跳んだ。

「おぉ、飛んだ。すげー」

「うぐっ！」

そして、盛大に地面に落ちて顔から数メートル滑った。ケタケタ笑うサイードだが、他は唖然である。しかし直ぐに、周囲から悲鳴があがった。

「ん？」

サイードとしては、この後会場全体が爆笑に包まれると予想していたので、これは予想外だったのだが、弓使いまで同じ位置にある皆の視線を辿れば、そこには、このまま落ちれば持ち主の背中一直

線であろう斧がクルクルと回っていた。

「おー……。あ、タンマね」

流石にこれは、審判役の騎士が剣を抜き救出する為に動こうとしたが、サイードがそれを止め、よっと呟いて軽やかに跳躍。驚く暇も与えず、なんとそれを足で蹴ったのである。当然足は精霊により保護されているのだが、「武」でエントリーしている者が魔術師でもあると考える者はいない。魔術師は貴重で重要な戦力であり、自身もその才能に幸運と誇りを持つのが常識なのだ。

なので、単純に蹴ったと思った会場はどよめいた。

「アックスシュート。あ、いや、トルネード？」

そして、蹴られた斧であるが、それは方向を変えただけでクルクルと飛び続け、サイードの緊張感の無い適当でノリだけの技名と共に、弓使いに狙いを変えていただけである。まさかの展開に、弓使いは目を限界まで明けている。

殺しは厳禁で、あくまで試合の戦いだ。どう転ぶか分からないこの攻撃は、当たれば一大事なので、標的は変わっても当然審判がカバーするべき。サイードも、万が一に備えて構えなければいけないだろう。

しかし仕掛けた本人は、相手が避けられると見越した上なので、一人場違いに暢気であった。

「お兄さんなら大丈夫！」

キラキラした笑顔で所謂グーサインを弓使いに向ける。これは流石に、モラルがなっていない。

「どこまでも人を馬鹿にして！」

ノリが良い、というわけではないが、弓使いも避けなければ死もあり得るので、期待に答え優雅なステップを魅せるのであった。そして、その後ろでは二次災害を防ぐ為、結局審判が斧を剣で叩き落とすのであるが、彼等はあくまでサポート役なので影に徹してもらおう。

「良い加減、お遊びは終わらせましょうか」

そろそろ予選も佳境である。冷静ではあるがかなりの怒りを蓄えた弓使いは、避ける為に逸らしていた視線を戻した。

しかし、そこにサイードの姿は無い。

「そうだね。そろそろ飽きたし、後ろがつっかえてるもんな」

端と中心付近で相対していたはずだったが、その声は弓使いの直ぐ耳元でしていた。

慌てて視線をその方向に向けたが、時既に遅し。

「おやすみー、お兄さん」

弓使いが斧を避けている一瞬の隙に急接近したサイードは、横側から迫って跳び、後頭部を狙って華麗な蹴りを繰り出したのであった。

驚くのが精一杯の弓使いは、声を出す暇もなく地に伏す。

今までで最高の歓声が鳴り響く中、少しの間を置いて、本戦進出者決定を示す白旗を審判役が揚げた。

一連の戦いに有した時間は凡そ１５分弱。しかしサイードは、かなりの人間に衝撃を与え深い印象を与えたことだろう。当然その中には、お偉い方も多い。

「サイード……ですか」

そして勿論、思惑も動き続ける。

敗者となっても勝者の如く

「本戦進出者は、ここで抽選を行ってくれ」

「ほいほーい」

一つのショーにもなりそうな戦闘で勝者となったサイードは、案内役に従い、今度は本戦進出者用の控え室に入った。

そこには既に２３人の今後の対戦相手がおり、視線が一斉にサイードに注がれる。

「へっ、坊ちゃんかよ。金で進んだか何かだろーな」

その中の一人、大斧を持った男の言葉が部屋に笑いを誘った。先に駒を進めた者達はサイードの戦いを見ていないので、認識の改め様が無かったのだろう。同じ2セット目の「武」の進出者も、サイードのブロックが一番試合時間が長かったので、中途半端にしか見ていない。

「君の名は？」

「サイード」

まったく相手にしていない様子のサイードであるが、抽選を行っている騎士の指示に従いながらも僅かに眉を顰めている。騎士は一度手元の参加者名簿を確認して、小さな箱の中から中身を一つ引けと差し出す。

吟味する事も無く、適当に選んで取り出した石には、白い線で四角い記号が書かれていた。

「一回戦、４試合目だな」

「おや、私の相手ですか」

それを見た騎士は、部屋の壁に大きく貼られたトーナメント表の同じ記号が記された場所に名を書き込む。反応したのは、一人の魔術師であった。

「こてんぱんにして、社会の厳しさってのを教え込んでやれよ」

「勿論ですよ。貴族だからと、甘えが許される場所ではありませんしねぇ」

まじまじとトーナメント表を眺める横で交わされる、本人を無視した会話。これはさすがに、サイードでなくても苛立つだろう。

本戦からは「武」も「魔」も関係ない組み合わせではあるが、「魔」が多い分バランスは悪い。

４試合目であれば、今日に一線交えることになるだろうな、と考えたサイードは、そこでやっと室内の連中へと視線を向けた。

「見た目だけは強そうな人ばっかだから、舐めた口利くなとかは言わないけど。さっきからさ、坊ちゃん坊ちゃん煩すぎ。俺、貴族じゃないんだけど」

「そうなんですか？」

これは意外だと魔術師は驚き、サイードは頷く。周囲も、だったら実力で勝ち取ったのかと信じられないながらも、まじまじと目の前の青年を値踏みした。

見た目だけは、というのはさり気無さ過ぎて気付かない者ばかりだった。

「がはっは！　お前等、そんな身構える必要あるか？所詮運だろ、運」

「だけど、運も実力の内と言うしねぇ」

「だったら、私がその運を上回ってあげますよ」

確かに本人もさっきの試合は運が良かったと思っているが、他人に言われればただの嫌味。今後、別の意味で素顔でいるのは控えようと決めた。そして、こうなってしまえば、これからの展開を簡単に察する。

だがまあ、今回は牽制も出来るので愚直だとは言い切れないのかもしれない。

部屋にひしめく人間をぐるりと見回したサイードは、抽選係の騎士が文句を言ってくる前に一旦扉から離れ、無邪気な笑顔で口を開いた。

「少なくとも、あっちの人とそこの人」

さあ、どう毒を吐くのか。そう思えば、サイードは突然、壁に凭れかかっていたローブを来た性別不明の者とレイスに似た優男を指

差す。
何を言っているんだと笑っていた者達が静まり、全員がサイードと指を差された2人に視線をさ迷わせた。
その2人もサイードを笑ってはいたが、殆ど空気の様に気配を消していた為、まさか自分に意識が向けられるとは思っていなかったのだろう。
ピリっとした雰囲気が部屋に満ちていく。
「俺なら、あの2人の方を怪しむよ？一人は、女なのに男の格好してるし」
それが分かっていながら、自分の事は棚に上げて言った。案の定、係りの騎士を含め驚いた面々は、一斉にローブの者を凝視する。それでたじろがない所からして、ローブの人物も大分肝が据わっていそうだ。
しかし、皆の反応に反して、サイードはやれやれと肩を竦める。
「違う違う。そっちの人は、魔術師みたいな大剣使いさんでしょ。あんまりガタイが良い訳じゃないのに、身の丈大の剣を振り回すなんて俺も吃驚だけどさ。女は、剣士みたいな魔術師さんの方」
ピクリ。サイードの標的にされた2人の肩が同時に跳ねる。ここまで他人の手の内を晒すのは戦いに身を置く者としてルール違反であるが、ニコリと笑うその顔が、馬鹿にしたお返しだよと威圧していた。
2人以外の他の面子も、気付かなかった者は言外に格下扱いされ、気付いていた者も自分だけの有利な情報を晒されたわけなので、結果的に全員がしてやられたわけだ。

「あらあら。可愛い坊やだと思ったら、とんだ策士ね。やられたわ」

誰にも破れそうに無い沈黙を柔らかい雰囲気で突破したのは、クリーム色の長い髪を後ろで1つに纏め男の装いをした、サイードの言っていた剣士みたいな格好をした者だった。ズボンは男の服装だと根付いているこの世界では、それを着ているだけで男装となる。

ちなみにこの間に、3セット目の進出者が3名この空間に入って来ていたのだが、騎士までもがサイード達に注目してしまっている為、可哀想に扉の前でどうすれば良いのかも分からず戸惑っている。

これも見越して、サイードが扉から離れていたのであれば、男装魔術師ではないがとんだ策士というか、予想出来ていたのなら少しはこういったトラブルを回避する努力ぐらいして欲しいと思う。

「そりゃあ、貴族じゃないのに、貴族だ、ぼんぼんだ、って笑われたらさすがに俺でも気分悪いよ」

「ごめんなさいね。でも、場違いな感は否めないから仕方が無いわ。舐められたくなければ、それ相応の雰囲気を纏うのも強さのうちでしょう？」

男装魔術師は、開き直ったのか否定をしなかった。声はどう頑張っても女にしか聞こえないので、誤魔化しは効かなかっただろうが。

背後の進出者が不憫だったのか、サイードは騎士に顎で彼等を示し、スタスタと男装魔術師の横に移動する。その際に肩を竦め、なら逆も考えようよと言う。

「逆とは、油断させる為に弱いと思わせようとするということか？」

それに返したのは、ローブの人物だった。壁から身体を離し、サイードと男装魔術師に向かってくるところから、興味が湧いたのか。こちらは声から男だと分かった。渋めなので、３０代ぐらいだろう。

「皆の憧れ、ウィーネ騎士団団長なら説得力があるかもしんねーが。坊ちゃんみてーなのは、普通によわっちいだろうよ！　そんなひょろい身体で、剣もおもちゃレベル。口は達者みてーだが、所詮それだけだろ」

けっ、と割り込んでくる大斧使いは、今日もしくは大会後、闇に葬られてしまうのではないだろうか。先程から、悉くサイードの苛立ちを誘っている気がする。一瞬、サイードの目が細まったところから、強ち外れていなさそうで怖い。

「とにかく、ローブの人の言ってる通りだよ。まあ、別に自分の力はたかが知れてるから、俺が強いってことじゃないけど」

「剣は使い手を映すからな」

「私は君の言う通り、魔術師だから分からないけどね」

どうやら、大斧使いは3人の輪に入れてもらえないようだ。全員から薄い反応しか示してもらえず、逆に彼が周囲に笑われてしまい、顔を真っ赤にしながら機嫌悪く部屋の隅に移動していく。それを、男装魔術師はクスリと笑い、ローブの男は無反応を貫き、サイードが肩を竦める。

３人で壁まで移動し、本戦開始までの時間を潰す事にしたのだろう。誰も名乗って仲良しグループを作ろうとはしないので、違った意味合いもあるのかもしれない。

「そんなにこの剣、安っぽいかな」

「値段云々じゃなく、グリップがまず使い込まれていない新品同様だ。鞘を見ても同じ。１度も戦闘で使っていないのではないか？」

サイードの思わずの呟きに、丁寧にローブの男が説明をしてくれる。ベテラン故か、人柄からか。ただ、男がサイードを軽視していたのは自分のタイプを暴露される前までなのは確かだろう。そしてサイードも、頷きながらこの男が他とは別格だと感じていた。それは、男装魔術師も同じである。特にこちらは、精霊と誰よりも親密な関係であるルシエには分かりやすい。

勿論、自分以外が相手ならかなりの強者になるだろう、という意味でだ。

「え、でも待って。そしたら君、剣を抜かずに予選突破したってこと？」

ザワリ。馬鹿にしつつも、余程サイードの事を皆気にしているのだろうか。男装魔術師の発言に、部屋がざわついた。

国を挙げてのこの大会では、新人といえど将来有望な者や傭兵として少なからず名が知られている者が出場するので、レベルとしてはかなり高い。

なので、予選であれ簡単に勝てるものでは無いのだが、その中で登録武器を使わず戦うというのは、相当難しい事だった。

それを、皆が馬鹿にする小僧がやっていたのであれば、今度こそ本当に認識を改め最大限警戒する必要が出てくるだろう。

答えをゴクリ、と待つ面々にサイードが取った行動は、ニコリと

笑うことだった。しかし、それは僅かの時間で、すぐにその無邪気な笑顔は消え、全てを拒絶するような冷たい瞳と鋭い嘲笑が浮かぶ。
両隣からはっと息を呑む気配を感じながら、その視線は先程の大斧使いに向けられていた。

「まあね。俺、運が良かったみたいだし？」

ああ、怒っている。きっと、この瞬間、部屋の全員が感じたことだろう。
そして、大斧使いに、お前死んだなと哀れみを向けた者も何人かいたはずだ。

「でも、本戦出るからには、俺だって優勝目指してるからね」

そんな凍りついた雰囲気の中、サイードはそうのたまうのだが、今までで一番笑いを誘いそうな言葉に誰も笑えなかった。新たに視線を向けられた、サイードの初戦の相手となる魔術師に至っては、恐れ戦いた始末。

この時、丁度本戦出場者が全て出揃っていたのだが、恐らく魔術師はサイードに歯が立たないだろう。魔法が精霊に頼らなければ使えない限り。

「……で、では、これにてトーナメントの組み合わせが決定。２の大鐘と１の小鐘が鳴った後に本戦を開始する。本日は１回戦８試合目までを予定しているので、該当する者は必ず控え室に来る様に！
明日は、１の大鐘と１の小鐘を合図に１回戦９試合目からの者と、２回戦出場者は集合。遅れた場合、容赦なく棄権とみなすので注意すること。それでは解散！」

係りの騎士も、この空気の中告げるのには大分勇気がいっただろう。それが合図となり、其々がこの後の試合の前に腹ごしらえをしたり、明日の為に身体を休めたりする為ぎこちない動きで部屋を出て行くのだが、その際誰もがサイードを遠巻きにするのだから可笑しい話である。

「んじゃ、俺はここで寝て過ごそうっと」

「……予選控え室でも寝てたな」

そしてサイードは、また寝ることにしたらしい。ローブの男が呆れたように言えば、だって育ち盛りだからと適当に返すだけで、即効床に寝転がった。男装魔術師がそれを見て僅かに顔を顰めるが、機嫌があまり良くないサイードを相手にお小言を言うべきではないと分かっているらしい。肩を竦めて出て行った。

「これは、策士というよりとんだ道化だな」

「おじさんも、堅気ぶってるけど、大分やんちゃしてる口でしょ？」

俺にはどうでも良いけど。背中を向けるサイードの言葉に、ローブの男は一瞬驚いた様子で身体を固め、この道化がと笑った。

「久しぶりに本気を出せそうな奴に会えたかもしれんな。今後の楽しみの為に、全力で鍛えてやるから精々勝ち上がれ、若僧」

ひらり、と振られた手は了承か抗議か。試合とはいえ、質実剛健な者の集いではないのだから、気楽に寝るのは関心できないが、本気で寝入った感じが気配で分かり、ローブの男は再びクツクツと笑いながらその場から去っていった。

今日に試合があればまた会うことはあるだろうが、サイードが興味を持っていない限り次に接触するのは闘技場のステージだろう。

カサリ。サイードは耳元で聞こえた物音に目を覚ました。

「鐘、鳴ったわよ。それにしても、暢気なものよね」

敵意は感じないが、良い気持ちで落ちていたところを無理矢理浮上させられ、誰だよと鋭い視線を音の発信源へと向けた。

「私は1試合目だから行くけど、少しは何か食べ物を入れておきなさい。じゃあね」

「……あー、うん。頑張って」

そこにあったのは茶色の紙袋で、声の主はあの男装魔術師だ。だ

が、のろのろと彼女に視線を移動する頃には、その身体は扉の外に消えている。

どうやら完璧に寝入っていた様で、外では予選以上の歓声が響き出した。

「トルッテか。お人好し、なのかねぇ」

既に集合時間となり、試合が始まるらしい。頭が覚めるまでぼーっとしていたサイードだったが、渡された紙袋を徐に確認した。すると、中身はお馴染みになったサンドイッチもどきである。それを見て呟いたサイードだが、その内の一切れに目を細め。

「これは、お坊ちゃんから立派な敵と認識されたと、喜ぶべきかな」

それが何を意味するのか。言う必要は無いだろう。

戦いは既に始まっているのだ。

声高らかに笑おうじゃないか

1回戦はあっけなく終わった。

「勝者、サイード！！」

観客の喉はどれだけ丈夫なんだ。サイードはそんな事を考えながら、足元の対戦相手を見下ろした。

間抜けに気絶しているその魔術師に向かい救護が駆けつけてくるが、腹部を殴られただけなのでそう焦ることもないだろう。

トーナメント形式の本戦で、サイードはあっさりと2回戦へのキップを手にしたのである。

「試合そのものより、気使わなきゃいけないのに疲れるな……」

魔術師は、サイードにとってただの凡人。それは、いい加減説明しなくてもいいだろう。ただ、それを前面に出して試合をするのは、自分の首を絞めてしまうだけである。

仕方なく、精霊に対して攻撃を当てない様に攻撃してくれと頼むのであるが、こういった複雑な意思を伝えることがどれだけ苦労なものか。それが理解できるのは、極少数しかいないはず。

意思というものは、お互いが明確に持っていなければ、より複雑な方が伝わらない。ただし、複雑だから偉いだとか、凄いというわけでもないが。弊害、とは何と便利な言葉か。

「まぁ、そう簡単にいくわけないわよね」

ステージから、自分に向けられ続けた探られる視線の持ち主に笑えば、男装魔術師は観客席からヒラリと手を振った。

その余裕から、彼女も勝ち上がったのだろう。

「立ち位置というか、そもそも場所が違うのにねぇ」

サイードは、歓声を無視して今日の仕事は終わったと、ざわめく街の限られた静寂を探しに消えたのである。

そうして、2日目を迎えた。

「それでは、ウィーネ杯2日目を開始する！」

高らかな声と雄叫びになりそうな歓声。2日目も、初日と同じく爽やかな快晴だ。

この世界の活動は朝日が基準である。夜もそれなりに蝋燭等の灯りで過ごせ無くは無いが、普通の家庭で無駄に浪費しようとは思わない。

ウィーネ杯も、平民のそのリズムに則って進められる為、サイードは今日も欠伸を相棒に控え室に居た。そこは、昨日よりは幾らか

人数を減らして出場者で占領されている。

次々と、そして着々と1回戦の試合が消化されていく中、どうやら今日は誰もサイードに関ろうとはしないようだ。男装魔術師も、大剣使いも、ついでを言えば大斧使いも。皆、自己の精神統一を重視したり、武器の最終メンテナンスをしたりと忙しい。

勿論、体力温存の為でもあるだろう。トーナメント形式ということは、勝ち上がれば上がる程、負担は大きくなっていく。しかも、相手のレベルも最初と比べれば格段に強くなるのだから、消耗戦であることは必須。強者の多いこの大会でのその条件は、終わりの見えない戦争にも近く感じる。

その中でどれだけ温存、コントロールが出来るか。ペース配分も、強者の必須スキルであるということだ。運はくじで、実力は勝敗で。そうして、即戦力になりそうな実力者を国が囲う。ある意味、純粋な奪い合いが凝縮されていると言っても過言ではないだろう。

「よし、これで2回戦進出者が出揃ったな。ここからは、予選と1回戦目で使ったステージが撤去され、闘技場全てが戦闘エリアになる。作業が終わり次第、順に試合が開始されていくから指示を待つように」

そして、集合時間から2時間と少し経った頃だろうか。僅かに息を荒くした魔術師が控え室に戻ってくると同時に、案内役である騎士がそう言った。

周囲が其々、室内の者達に視線を巡らせる。サイードだけが、「武」の出場者だけに限らせていた。とは言っても、十中八九、決勝には大剣使いのローブの男が上ってくるだろう。後は、そこに自分もいけるかどうかだ。

国を挙げて、しかも3年に1度で行われるこの大会。サイードは、

決勝だけは毎回国王も観戦しにくるという情報を入手していた。その情報自体は、民にとっても周知の事実なのでそれ程重要では無いし、そう易々と国王が精石を持ち歩くと楽観しているわけでもない。

だからこそ、わざわざ出場して勝ち上がろうとしているのだが、果たしてどの程度まで力を隠しサイードとして動けるのかどうか。それが、ルシエにとって一番の難関であった。目標はあくまで入城であり、万一にでも陽の王の力を見られてしまえば、今の何倍も風の精石の破壊が困難になってしまう。

「陽の精霊王がどれだけ無茶振りしてたか、もう少し考えて動きゃよかった」

ひっそりと、今更なことを呟いたサイードであるが、その言葉に自身の無謀さは含まれていない。

これからの戦いの算段をいくつも考えながら、2回戦目はスタートした。

相手はまたもや魔術師。最早、その様子を語るまでも無い。今日は勝てばそのまま控え室、負ければ救護室へとが繰り返されるので、軽やかな足取りで退場するサイードであるが、本人の知らぬところで予想外にその名は民衆へと広がっていった。

本人からすれば、重すぎて持っていられない、持てても満足に扱えない。加えて、精霊に補助を頼もうにも素材がそれに耐えられないから、結果使えない。そんな理由で抜かないでいた剣であるが、他からすれば、武器を使わずに勝利する青年としてダークホース扱いされたのである。その拳に篭手でも装備していればまた違っていただろうが、軽装だから尚の事。

俊敏性は華麗な動きに、緊張感の無い構えは優雅さに、見た目の軟弱さは本質を隠す謙虚さに。聴いたら恐らく悶絶するであろう表現をされ、期待と娯楽を求められていた。

全ては精霊のお陰でしかないのだが、これもまた何度目かだろうが、観客が考えるはずもない。そもそも、今まで精霊の加護や保護、補助と様々語っているが、それが魔法とどう違うのか。

魔法と人の持つ魔力、精霊については2度も語らないが、短く言えばルシエのそれは取引では無く分け与えられているということである。今までの人と精霊の契約は、好みだけが全てであった。

しかし、現在はそれに加えて精霊が自らを保つ為に取る手段の一つでもある。精霊も生き物なのだ。だとすれば、生存する為の糧が必要になってくる。

精霊にとってのそれが魔力で、今までは世界に溢れる分だけで十分だったのが、穢れによって蝕まれたことにより質も量も極減してしまい、生きる為に契約する。そうすることによって、自らの力を人間に使わせてやる代わりに魔力を喰うのだ。

その過程で絆が生まれたら、それはそれで良いだろう。ルシエは精霊を縛る存在では無いのだから。

ただ、それだけの理由で契約しているのであれば、精霊はルシエに従い、自らが戦えない代わりに力を分け与える。

混同してはいけないのが、精霊の力と魔法はまた別モノだということ。そして、ルシエの戦いは、精霊と人間との戦いでもあるということ。——戦争なのだ。

もし、精霊王を解放することでアピスにある程度精霊の力が増え、魔力も増えた時、今説明したような生きる為だけに契約している精霊は簡単にそれを破棄するだろう。契約は力の大きい方が主導権を持つのだから。

ということは、そういった精霊達はスパイとも言える。

ただ、これは全面的にルシエが優勢とは言えない。個人を好いて契約している精霊は、その破棄を望まないだろうし、相手の意思を尊重しルシエに牙を向く可能性がある。しかも、万が一精霊の方が相手より力が劣ってしまった場合、その支配下に置かれてしまうのだ。

一対一であれば、区別をつけて対処出来るだろうが、遠くない未来、大勢と対峙することもあるだろう。

そうなれば、一々精霊と意思疎通を図ってなどいられない。

風の精石を破壊する為に参加しているウィーネ杯だったが、気付けばそういった重要なことに気付かされ、ルシエは数少ない容赦の一つを消すに至った。

こんなことばかり考えているから、現在の自分の評判にまで気が向いていないのかもしれない。

「おいおい、次の相手はお前かよ」

無意識なのか、常に壁側に陣取っていたサイード。無表情を装ってその思考は複雑に働いていたのだが、それを邪魔したのは、昨日から何度も無駄に苛立たせてくる野太い声だった。

「どうやら、お互い運が良かったみたいだねぇ」

「あん？　俺様は実力で、勝ち上がってんだよ餓鬼」

ただ鍛えているだけ、と思える大柄な体つきの大斧使いは、しゃがんでいたサイードに実に好戦的な視線を浴びせる。

それに対し皮肉で返せば、直ぐにこめかみに青筋を立てるのだから、言葉にしなくとも十分に小物だと教えてくれているはずだ。

「今からそんなにハッスルしてたら、試合中に息切れするよー。ていうか、汗臭いからまず行水でもしてこいって」

どうやらサイードは、苛立ったというよりも関わる事自体無駄だと感じた様子だった。逆上させようが、嫌悪されようが、とにかく声を掛けてくるなと視線すら合わせない事でアピースしている。

しかし、だとしたら、もう少し言葉を選ぶべきだ。これでは、相手の性格（タイプ）からして、無駄に逆上させるだけ。しかも、人数が減っている控え室では、現段階でそう大声を出さずとも全員に会話が聴き取られてしまう。

男装魔術師が一際大きく吹き出し、その通りだわと笑い、他の参加者も当然、あまり反応しなさそうなローブの大剣使いまでもが、壁に顔を向けて隠そうとしてはいるが肩を震わせていた。

「てめぇ、昨日からその口、躾がなってなさすぎじゃねぇか？」

「俺が不躾だったら、あんたは凄腕の調教師もお手上げなぐらいの野性味溢れる猛獣だろうよ」

毒、毒、毒。筋肉馬鹿と言ってあげた方が、何倍も優しい心の持ち主なことだろう。相変わらず目線を合わせずしゃがんだまま、意

味もなく傍らの剣を触りながら言った言葉に、大斧使いは顔を真っ赤にさせた。

いや、顔だけじゃない。彼自慢の筋肉まで同じくそうさせて、わなわなと怒りに震える。その右手も小刻みに震え、必死に武器を取るまいと理性を総動員させているのだろう。

「ぷふっ！　も、だめ、止めて……」

「これ以上は、流石に不憫だろう。……くふっ！」

しかし、世の中は無情なものだ。

そんな大斧使いの努力は、今までのサイード以外にも行ってきていた自身の傍若無人な態度と浅慮な発言のお陰で、部屋全体に笑いをもたらした。

全員が、なんとか笑いを沈めようと頑張るのだが、自爆の嵐である。

その中でも男装魔術師と大剣使いという勇者が、全力で止めようと間に入ろうとし、それも結局自爆に終わった。

爆笑の渦に、とはならないだけまだマシなのかもしれないが、それでも自分は強いと感じている大斧使いにとっては十分な屈辱だろう。

ただ、彼は知らない。サイードにとっては、こんな侮辱はただの皮肉で序の口だった。

「俺が思うに」

大斧使いが口を開く寸前、サイードの声が再び響いた。抑揚が無いところから、そこまで本人は深く考えていないのだろう。

「まあ、全裸を見たわけじゃないから絶対じゃないだろうし、ていうかあんたの裸なんて無駄に吐いて体力消耗するだけだから大金積まれてもお断りだけどさ。背筋はその武器を使うには必要で褒められる付き方だと思う。実に機能性に優れてるね。だけど、上腕のは見た目だけでスピードを損なうし、胸筋も無駄。それならまだ、デブの方がマシって思うぐらいだ。あ、もしかして、大道芸もやってるとか？　ふんって鼻息荒くして筋肉だけでシャツを破ったりして。それならまぁ、仕方無いか。大事な資金集めの為でもあるんだろうし」

深く、考えていないんだろう……。たぶん想像して、自分で笑ったんだと思う。

小さく吹き出し、サイードはやっと顔を上げて大斧使いを見た。

「やめ」

ちなみに本人も周囲も、一気に喋られた言葉を理解するのに少しのタイムラグを有したようだ。ポカンと呆けてる間にまたもや整った唇が動き出すのだが、大剣使いが一番最初に全てを把握しなんとか静止を掛けようとし、一歩届かなかったのである。

「ねぇ、俺にも見せてくれね？　まじで出来たら、金払うからさ」

「てんめえええええええ！」

至極真面目で期待の篭った表情のサイードだったが、これだけ言われればいくら聖人君主でも平常心ではいられなかっただろう。大斧使いみたいな者だと尚更である。

彼の必死の理性も空しく、気のせいではあったのだろうが血管の千切れるような音と共に、その手は背中の大斧を掴んでいた。

「待て！」

「落ち着きなさい！」

流石にこれには、周囲も笑ってはいられなかった。２人の間に入ろうと、控え室担当の騎士も勿論動こうとする。もう、１人空気を読まずにキラキラした瞳を向け続けるサイードは、放っておいていいだろう。

「うるせぇ！　ここまで馬鹿にされて黙ってられっか！」

しっかりと固定されていた大斧が、軽々と右腕一本で構えられる。至近距離で向かい合っていたサイードと大斧使いだ。素早く、そして軽く振るうだけで、簡単に定めた狙いに突き刺さるだろう。

しかも、そうなったが最後、部屋は血の海になるはずだ。観客とは違い、悲鳴を上げて目を瞑るだけしか出来ない面子では無いので、ある者は自身の得物を構えて走り、ある者は魔法の詠唱を始め、ある者は傍観に徹する。

危うい青年を助ける為というよりは、可哀想な未熟者を罪人にさせてはならないと思っての行動の方が強い。

「死ねや小僧が！」

理性も何もあったものではない。その内を占める感情のまま。腕が振り下ろされた。

大斧は振り下ろされ、部屋には轟音が響き渡る。壁は砕けて大斧が突き刺さり、天井にまで亀裂を作る。

「坊ちゃんだったり、餓鬼だったり。小僧って、餓鬼より格上じゃ

ない？」

だが、全員の心配は杞憂に終わった。

柔らかだが抑揚の無い声は微塵も変わらず、僅かに充満する砂埃が、視覚で無事を確認させてはくれないが、そこに一切の負傷も匂わせていない。

「我願う、清浄な世界を」

誰かが迅速に魔法を使い、それは直ぐに治まった。そうして、全員がサイードが扉の前で笑っているのを見たのである。

「続きは試合で、ね？」

どうやって。誰かが呟くのだがそれに答えることはせず、呆然とサイードと自分が振り下ろした大斧の場所とを見比べる大斧使いに、手で扉を示して促す。そうすれば、彼だけでなく全員がトーナメント表に視線を移すのだが、2人の一つ前の試合には、既に線が1本付け加えられていた。

「俺に、剣を抜けさせてくれよ。やっと「武」の奴とかち合ったんだからさ」

どうやら全員が、サイードの暇つぶしに遊ばれただけらしい。ただ、それだけでは無さそうだ。

「良い感じに、狂戦士（バーサーカー）になれたでしょ？」

悪戯が成功した子供の様な言葉。刺激を求めていたのか、未だに経験値を求め生贄を作りだそうとしていたのか。はたまた、単純に

昨日の仕返しか。
ルシエは無駄な事はしないと思うのだが、それは過大評価じゃないと信じていたい。

「ファイアドラゴンを倒したとも、ウィンドドラゴンを退けたとも、数々の噂を持つギルド所属の冒険者。虚勢の狂戦士の異名を持つ大斧使いに対するは、花街から現われたとも思える程に目見麗しく、今回唯一、一度も武器を抜かずに勝ち上がってきた銀髪の青年。その実力は未知数ですが、確実に乙女の心とごく一部の紳士のハートを鷲掴みにしている若き剣士。真逆とも言えるこの2人がどう戦うのか！？　試合開始です！」

司会の紹介はともかく、サイードと大斧使いとの決着の場は正々堂々な試合へと移された。

とはいっても、端からサイードは敵として認識してないのだろうが、相手の意気込みは相当なものである。

大きな歓声と黄色い悲鳴が響き渡る中、大斧使い……せっかくなので虚勢の狂戦士は、その得物を心を表すかのように片腕で振りながらサイードを全力で睨み付けていた。

対するサイードであるが、どうやら今回も剣を構えるつもりは無いようだ。

それどころか、客席の女性達に爽やかな笑顔で手を振っている始

末である。ここまでくると、舐めているとか緊張感が無いだけでは、その奇行を説明できないかもしれない。何せ、今までのサイードを考えれば、正反対とも感じる振る舞いなのだ。勿論、先ほどの毒を抜きにしてである。

まるで、全力で誤魔化しているというか、装っている気がした。

「もう、助けてくれる大人はいねぇぞ」

「別に、さっきだって助けてもらってないじゃん」

それぞれアピールタイムが終了したのか、向き合った時に交わされた言葉はあまり意味がない。

いくら浅慮だといっても、虚勢の狂戦士も一介の戦士なのだ。虚勢と付いても、戦士であるのだ。

狭く定められていた戦闘エリアはその5倍程に範囲を広くし、2人は中央で対峙する。四方には、判定とストッパー役である騎士が控え、観客はゴクリと唾を呑んでいた。

「狂戦士の名ぐらい、虚勢じゃないとこ見せてくれよな」

「はっ、早々にリタイアなんかさせねぇからな」

最初に動いたのは狂戦士だった。怒りは消え、真面目な表情になる。しかし、あまり整ってはおらず大きな顔におまけ程度に付いている目は釣り上がりぎらついていた。もしかしたら、それが狂戦士と呼ばれる原因なのかもしれない。

「芸も何もねぇでやんの」

狂戦士は、その巨体に似合わない結構なスピードでサイードに突進してきた。しかしそれは、予選での斧使いの動きと同じようなものだ。猪突猛進、一直線。ヒラリと軽い動作でかわすだけで事足りた。

しかし、サイードは思わず瞠目する。その攻撃の威力が、予選の者と段違いだったのだ。

先ほど控え室で壁に亀裂が入っているのはしっかり見ていたが、あれでも精一杯手加減していたらしい。地面が、2メートル強の長さと1メートル弱の深さでひび割れていた。

「筋肉馬鹿もここまでくれば、立派な武器ってことか」

流石にそんな威力のモノを喰らうわけにはいかず、警戒も兼ねて距離を取る。

観客は、その力量に大いに沸いていた。

「てめぇが避け続けて地面が壊れるのが先か、俺様の斧が制裁を加えるのが先か」

「試してみろよ」

次にサイードを襲ったのは、その豪腕により振られた斧が生んだ衝撃波だった。どこの少年マンガかと思わずつっこみたくなる攻撃を、またもサイードは跳んで避ける。

しかし、狂戦士はわざとその場で地面に斧を突き刺した。

「うはっ、いいねぇそれ」

そのまま着地すれば、亀裂に足を取られて態勢を崩しただろう。
サイードは精霊の加護を受け、地面に付くギリギリで再び軽やかに跳ぶ。
一見、その身体は羽のように軽く、飛んでいるようにも風に乗っているようにも思えただろう。
風の国の民にとって、とても美しく映るのだった。

「ちょこまかと！」

しかし、それだけでは防戦一方だ。
衝撃波と地面の亀裂が何度も迫り、エリアの地面はまるで大きな怪物の爪痕のように抉れ、見るも無残なものになる。
サイードはそれでも避け続けるだけで、次第に狂戦士が息切れ大きく肩を上下させはじめた。そこでやっと、サイードの目に攻撃の光が宿る。

「お疲れだったり？」

「馬鹿を言え！」

まるで岩がそこらにあるような不安定な足場を駆け抜け、サイードは舌なめずりをしながら狂戦士に迫った。
いくら小物っぽいと言っても、仮にも3回戦まで進む腕を持っているのだ。狂戦士にはしっかりとその動きが映っており、大斧が的確に向かってくる相手を捉える。
見た限り力は拮抗しているように思え、観客からしたら手に汗握る良い試合だ。2人に対してそれぞれ、声援が降り注いだ。

「甘い、甘い」

「んなっ！？」

崩れた足場を利用して撹乱させながら懐へと向かったサイードには、大斧の届く位置に入った時、当たれば確実に首が飛ぶであろう攻撃が迫っていた。

己のスピードのせいで止まる事も避ける事も出来ないと思っていた狂戦士にとって、まさかそれが外れるとは思わなかったのだろう。空振りに終わり、思わず驚きに声を上げる。

サイードは、攻撃をしゃがむことで避け、そのままぐっと足に力を込めて両腕を地に付け、それを軸に全体重を乗せた蹴りを狂戦士の顎に狙いを定める。見事、下から上へと衝撃が狂戦士を襲い、巨体が簡単によろめく。

当然、それだけでは終わらない。そこからは、攻撃のラッシュであった。

顎の次は鍛え抜かれた胸。さらによろめいた身体に今度は足払いをされ、まるで倒れるのは許さないというかのように背後へと回れば、背中から一蹴り。

お陰で、後方へ倒れることは回避できた狂戦士であるが、さらに脇腹に一発喰らい、痛みへのくぐもった呻きが零れる。

「まだまだ、終わらねぇよ。意識飛ばすんじゃねーぞ、筋肉だるま」

スケートリングを滑るような流れる動きで、サイードは再び狂戦士と向かい合う。ギラリと光る獰猛な視線は、その目見麗しさに似合わず、狂戦士は戦慄した。

どこが貴族だ、お坊ちゃんだ。小僧だ、餓鬼だ。そうやって、己の認識の間違いにやっと気付くのだが、今更遅い。彼はもう、獲物

として狩人（ハンター）の標的（ターゲット）となっている。

「おら、俺に剣を抜かせてみろよ」

最初の一撃で脳が揺れ、視界が定まらない。それでも狂戦士は、サイードの言葉に己の誇りを刺激され、まだ持っていられた大斧を振った。

「それで終わりとか言うんじゃねーよな！」

耳が笑い声と共に危険を訴え、視界が決定的にそれを教える。狂戦士がなんとか意識をしっかり保とうと頭を数回振れば、目の前には爛々とした視線と末恐ろしい笑みを携えたサイードがいた。

「うおおおおおお！」

「んだよ、やっぱり小物じゃねーか」

一際大きな歓声。狂戦士が雄たけびを上げて精一杯”虚勢”を張るが、先ほどまでの派手さに比べて呆気なく試合は終わった。

最後にサイードが、狂戦士の腕に右足を振り下ろし、すかさず腕にも一撃入れて大斧を落とさせ、それを軽々と持ち上げて持ち主の首に添える事で。

「勝者、サイード！」

まだ、気絶する方が楽だったかもしれない。無様に地面に伏せた方が、受ける屈辱は少なくなっただろう。

進行役の勝敗を告げる高らかな声が響く中、狂戦士は目の前の青年に視線を縫い付けられていた。

彼が大斧を持てるようになるまでに鍛えなければいけなかった力は、その青年の肉体では到底無理なレベルのもの。片腕で振り回せるようになるまで、驚く程の時間と修行を必要とした。

負けたことに驚いたのか、見た目にそぐわない腕力に唖然としたのか。ただひとつはっきりしているのは、サイードにとって狂戦士の大切な相棒は、自分の腰にぶら下がっている玩具と同等だということだろう。勝敗が決まった合図で、最早用無しだとぞんざいに放り投げて背中を向けたのだった。

「精々這い蹲って泣けばいいさ、三下さん」

ドスン、と2人の間に大斧が落ちる。その音の裏で、サイードらしい傲慢な言葉が槍のように狂戦士に突き刺さる。しかも、大斧の奥から見えた表情は、馬鹿にするというより心の底から見下した笑みだった。

「くっ、くっそおおおおおおお！」

狂戦士は、悔しさよりも憤りを感じた。確かに彼は己を過信し、天狗になっていた。自分より大きな斧を振りまわせる奴はいないだろう、パワーに勝る者はいないだろうと。それでも彼は、立派な戦士だったのだ。

ある時は足の悪いお年寄りを背負い、ある時は畑を荒らす大型の動物を退治し、流石にドラゴンを倒したというのは勝手に流れていた噂であるが、襲ってきたドラゴンから行商を守って逃がしたことはある。決して悪人だったり、ならず者だったわけではない。

だというのにだ。見た目軟弱なサイードは、いくら怒りに満ちて悪意を向けていたといっても、対戦相手に対する最低限の敬意も、

己のプライドも、戦士としての構えも何も持っていない様に感じた。
ただ遊び、翻弄し、勝手に飽きて終わらせる。勝者として驕らないことは褒められるだろうが、敗者への労いも何も持たず、ただただ見下して哂うだけ。

そんな感情が溢れ、狂戦士は拳を地面に叩きつけて蹲った。

観客は、２人を勝者と敗者でしか見ない。故に歓声は収まらず、馬鹿みたいに叫ぶだけだ。

サイードは、とっくに控え室に向かい退場し始めていた。狂戦士は、少しだけ顔を上げてその背中を睨む。
全身に蹴りをくらっているが、威力は顎の一撃以外は大したダメージになっていなかった。だからこそ、大斧を持てた事に驚いたのだが、それよりも彼の心を巣食ったのはまだ戦えるという闘争心。

ゾワリ、と狂戦士の雰囲気が一変する。

「待ちやがれ！」

腹の底から叫ばれた声に、肩を貸そうと駆け寄って来ていた騎士達が止まって怪訝な顔をした。

「納得いかねぇ！　俺はまだ戦える！」

何百もの歓声に負けないその訴えは、観客すらも黙らせた。しかし、サイードは立ち止まりも振り返る素振りさえも見せなかった。
それでも構わないと、狂戦士は立ち上がる。２歩ほど歩けば、直ぐに大切な武器を掴む事が出来た。
彼は、不穏な雰囲気を察知した騎士の制止の言葉を無視し、血走

った目で尚もサイードを睨む。

「試合は終わったぞ。こっから先は、ただの戦いだけど？」

そこで、とうとうサイードが反応した。殺気を向けられて、試合だからこれ以上は無しだと常識的な言葉を吐けるほど、寛容な心を持ち合わせていない。

目には目を、歯には歯を。狂戦士も、今の言葉の意味を理解していた。

しかし、それぐらいでは止まれなかった。

「剣を抜きやがれっ！」

確実に殺傷能力のある衝撃波が５つ、騎士の制止も空しく放たれる。それはまるで檻の様に逃げ場を塞ぎ、サイードを取り囲む。

悲鳴と怒号、お祭り騒ぎであった会場は騒然となった。

サイードが振り返ったのは、衝撃波がほとんど目の前に迫った時だった。跳んで避けようにも、その攻撃の高さは優に３メートルは超えている。流石のサイードも、その高さを怪しまれずに越えるのは無理だった。

さらに、衝撃波の間を縫って避けようにも、その隙間に誘われた一枚の葉が粉砕されてしまったのを見て無理だと諦める。

試合で繰り出されていたものも大分加減されていたのだと、観客はこの時やっと悟った。なんだかんだで狂戦士は常識人であり、決して殺そうとは思っていなかったのだ。

当たれば死ぬかもしれないという攻撃も、予選でサイードが行ったように、相手が避けれると確信していたからこそのもので、ただ

単に自分を認めさせたかったのだろう。

ウィーネ杯という、戦いではあるが一種のスポーツを披露する場で誠意を欲した。

力の優劣は当然ある。だが、サイードの言動、視線は、人として見ていなかった。狂戦士だけでは無く、出場者全員を。どうでも良いと、愛想の良さそうな青年の仮面の下で語っていた。

他の参加者もそれは感じていたが、彼等と同じように黙って見過ごせる程、狂戦士は懐が広いわけではない。

ただ、控え室の一件で、サイードがもっとマシな態度を取っていれば、こんなハプニングは起きなかったはず。苛立ちの仕返しなのだとしたら、2倍返しではすまされない。

「正当防衛ってことで、構わないよな？」

一般の観客の誰もが、若い青年が衝撃波の犠牲になる瞬間を見ないようにきつく瞼を閉じる。

何人もの魔術師が防御の魔法を発現させるが、間に合うかどうか。そうしている間に、5つの衝撃波は湾曲して鳥籠のようにサイードを包み、一気に閉じた。

四方を囲まれ、逃げ場は無かった。

「三下は撤回してやるよ。そん代わり、あんたは冒険者じゃなくなったけどな。ルールは守らなきゃいけない、だろ？」

轟音と共に砂埃が舞い、何人もが身を縮めて悲鳴を上げた。しかし、その耳に聞こえたのは、肉を切り裂く音や、まして断末魔でも無かった。

ただ、安堵も出来なかった。派手に舞った砂埃の中からひとつの塊が飛び出してきたのはよかったが、それはかなりの速さを出して狂戦士に向かっていく。

さらに、狂戦士も騎士が取り押さえられず、塊に大斧を構えて突進する。

最早これは試合では無い、死闘だ。

砂埃の中から出てきたのは、当然サイードである。その身体は、至る所に細かい裂傷を作っていて、陶器のような肌を赤く色付けている。

頬から流れてくる血を舐め取る姿は、仮面が剥がれて本性が剥き出しであった。

「やっぱ、お遊戯じゃあ面白くねぇよなあ！」

その手には玩具の剣が握られていて、サイードはそれで大斧の一撃を受け止める。ピシリ、と不穏な音が耳に届くが、まったく気にしていない。

狂戦士は既に言葉らしい声を出しておらず、攻撃を止めた剣を鬱陶しそうに力押しした。

サイードは、一体何をしているのだろうか。その身体は僅かに風を纏っており、髪が不自然に靡いていて、もし狂戦士や周囲が冷静であったなら一目で不審に思っただろう。

単純に、風の国に来てから溜まりに溜まっていたストレスが爆発しているのであればまだ良いが、自分で作り出した3つの人格のせいで精神のバランスが壊れているのだとしたら。今の様子では、あ

ながち外れていなさそうだから恐ろしい。

「そこまでだ！」

そして2人が一度距離を取り、再び打ち合おうとした時。客席の最前列、一際豪華で護衛も立たせている来賓席から一人、その間に飛び込む者がいた。

その者は、右手の剣で狂戦士の斧を止め、左手でサイードの剣のグリップを握って抑え、2人に負けない闘志を纏って叫ぶ。

瞬間、客席は一気に安堵したのである。まるで、彼が出てこればもう大丈夫だというように。

「伝統あるこの大会で、そのような態度をされては困る。両者、武器を収めるんだ」

「俺、死ぬところだったんだけど」

「だったら尚の事、私がさせないから引きなさい。これ以上は見過ごせ無い。当然、その懐に忍ばせている武器からも手を離すんだ」

凛とした響きの声は、一切の反論も認めなかった。興ざめしたのかサイードは、やれやれと溜息を吐いてあっさりと引き下がる。

対する狂戦士は、それでも引けないのか息を荒げて睨み続けた。

「君の気持ちも分からないでも無い。この青年は、目に余る言論と行動ばかりだからな。当然、控え室での報告も上がっている」

肩を竦めて心外だとサイードは思うが、それには口を挟まずに大人しく剣を鞘に仕舞った。そして、一斉に駆け付けてくる騎士達に

小言をもらいながら怪我の度合いを診てもらう。
その間にも、狂戦士を宥める言葉は続いていた。

「だが、だからこそ、自分の信念を揺らがせるな。こんな相手の言葉に耳を貸すぐらいなら、素振りでもしていた方が何倍も己の為になる」

「おい。流石にそれは、俺に対して失礼すぎやしないか？」

狂戦士は、その者の言葉でやっと斧を下ろし、周囲を騎士で固められながらも退場した。
となると、サイードは間に入って来た者と必然的に向き合わなければならなくなるのだが、襲われたのは此方だというのに、あまりの物言いに思わず目を細めた。
その金の瞳には、相手の姿が映されている。クリーム色の髪にピーコックブルーの瞳をした彼は、忘れたくとも忘れられない、憎きウィーネ騎士団団長レイスだ。

「全力で殺そうとしていた者が、偉そうに。私を欺けるとでも？」

サイードは、傷の手当てをと救護室へ連れて行こうとする騎士を払いのけ、目の前のレイスに言う。
流石、民に人気の騎士様だ。かなりの歓声がして、サイードが五月蝿さに眉間に皺を寄せた。それでもレイスは、ニコリと目だけは笑わず微笑む。

「まさか素顔でいるとは思わなかったし、この大会に出ているのも予想外だったけどね」

「ちっ」

ここでやっと、サイードがこの大会でサイードらしからぬ振る舞いを多々していた理由が分かった。

考えれば直ぐ分かったことなのだろうが、レイスが騎士団長であればお偉い方の一人として観戦していても当然なのだ。しかも、よくよく来賓席を見れば、お姫様もそこにいらっしゃるではないか。

だからサイードは、悟られないように振舞っていたのだ。まあ、堪え性が無さ過ぎてどうやら問題児として報告が上がっていたようで、しかも、その努力空しくしっかりバレていた様だが。

「何を考えているのかは知らないが、もう少し賢く立ち回ってくれよ」

「何故、お前の事を気にしなければいけない？　俺を探していたみたいだが、こっちは何の用も無いしな」

苛々と、腕を組んで貧乏ゆすりをしながら返すサイードと、余裕綽々、威厳たっぷりのレイス。２人に面識があることにレイスの部下達が驚くが、それ以上に、普段は柔和な彼がサイードに対し、嫌悪感を剥き出しにしていることに慌てている。

どうやらその中に、あの森に居た者はいないようだ。

そろそろ次の試合の為に場を開けるべきなのだが、丁度、大地の精霊と契約している魔術師がエリアの修復を行う為に空いた時間が生じ、２人の会話は続けられた。

「何故だって？　色々とやらかしてくれたくせに、よく言ったものだ」

強烈なブリザーブが吹き荒れる。レイスは未だ、サイードのあの時の所業を根に持っている様だ。ただ、捕らえるつもりは無いのだろう。

「やらかしたも何も、助けてやっただけだろう。無事、森を抜け出せたみたいで何よりだ」

サイードもサイードで、レイスと関わり合いたく無い様子。そっと来賓席に視線をやり、お姫様が自分を見ている事に気付いてもう一度舌打ちをしている。

「危うく迷ってしまうところだったよ。さて、それよりもだ。一生懸命別人だと装っていた様だけど、こうしてバレバレだったと分かったのなら、剣もそんな鈍らを使う必要が無いんじゃないか？」

いつまでこんな奴に付き合わなければいけないのだと思うサイードだが、大勢の人間の前では、レイスにこれ以上の礼儀を欠く態度を取ることが許されない。

自分の努力を無駄だと言われ、だから何だと視線だけで返すのだが、彼は気にせずサイードの指輪を目で示した。

「特例として許可しておくから、ソレを使うが良いさ。そして是非とも優勝してくれよ？　私には、君に聞きたい事が幾つかあるのでね」

その申し出はとてもありがたいものだったが、後半の言葉には面倒事の気配がたっぷりと込められていて、思わず零れそうになった暴言を必死に呑み込むサイードであった。

「明日の決勝とデモンストレーション、楽しみにしているよ」

そして、レイスは実に優雅に、尚且つ上目線で、再会を喜びながら自分の席へと戻るのであった。

逆にサイードは、今までで一番機嫌を悪くし、腰の剣を乱雑に投げ捨てながら退場した。顔は若干に俯き、何も無い先を激しく睨みつけるのだが、髪に隠されぎみの瞳の方は、隠しきれ無い感情のせいか金と赤に忙しなく変化していたのである。

女は焦っていた。

たったひとつの目標の下、何年も必死に努力し苦労し、やっとこのウィーネ杯に出場することが出来、無事に本戦に出場して準決勝まで進んだのだ。

舐められてたまるかと、男装をして剣士だと油断させる為に偽装までして。結局それは、思わぬ形で初日に意味を無くしはしたが、それでもだ。

ここまできたら、何が何でも優勝しなくてはならない。その為にプライドも捨て、人としての常識も無視し、汚い手まで使ってきた。

しかし、後一歩というところで、初日に抱いた不安が現実になろうとしている。

「あぁ、忘れてた。昨日はわざわざ俺の為に、トルッテをありがとう」

目の前の、何の力もなさそうな不真面目な青年によって。

それは女の勘だったのか、精霊の警告だったのか。女――男装魔

術師は、額に流れる汗を拭う余裕も無く、恐怖を押し殺す様に唇を噛み締めていた。

「さっきまでだったら、少しは手加減しようかと思ってたんだけどね。だけど、今、俺、相当此処にきてるんだわ」

準決勝の相手は、彼女の中でかなり高く危険視されていた。

始めは見た目から舐めてかかっていたのだが、その行動と言動、僅かに垣間見た本性に危険な臭いを感じていた。ただ、現状はあまりに予想外。

此処、と言いながら、自身のこめかみを示したサイードの目は、まるで憎悪を叩きつけるかのように男装魔術師を見据えていた。

「喜んでくれたみたいで、よかったわ」

気丈に返してはいるが、彼女は今にも気絶しそうな顔色をしている。本人の意思を無視して身体は震え、声も弱弱しかった。

「くはっ！　そんなに怯えるなよ。別に取って食いやしないし、あんただって、あの糞野郎に良い感情は持っていないだろ？」

糞野郎。それを示す相手を、男装魔術師はよく知っている。いや、知っていた。

そして、その者こそが彼女の目標でもある。

男装魔術師の視線は、僅かにその者の方へと映り、サイードも同じようにその方向へと動く。そこに居るのは、レイスであった。

彼女と同じクリーム色の髪に光が降り注ぎ、美しく反射している。しかし、レイスの瞳は彼女を映してはくれない。

「似てるな、とは思ってたけど。本当に血が繋がってるとはねぇ」

「……繋がっているだけだわ」

言い得て妙だな、とサイードは哂う。

男装魔術師の目標は、優勝者に与えられるウィーネ騎士団団長との手合わせの権利を勝ち取る事であった。３日目に行われるそのデモンストレーションで、彼女が生まれて直ぐに養子にいってしまった兄と、会話がしたかったのだ。

権力を欲し、家族を捨てて自分だけ贅沢をしている兄に一矢報いたかった。

だからこそ、危険に思えたサイードに対し、差し入れとみせかけて少し強力な痺れ薬を盛ったトルッテを渡した。他の対戦相手にも、密かに反則行為をとったりした。

ただただ、地位など無くても強くなれると見せ付けたかった。

「別に、今更運営側に密告する気なんて無いから、そこは安心しなよ」

サイードはそう言って、剣のグリップに触る。それは、３回戦まで装備していたものとは違い、正真正銘の愛剣だ。

「剣が変わってるけど？」

「あんたのお兄さんの計らいでね」

男装魔術師は、戦いが始まる、と神経を尖らせ唇を舌で軽く湿ら

せる。相手が魔術師との相性が良いのか、1回戦と2回戦を短時間で終えているのを知っているので、微塵も気が抜けない。

「策士というより、道化だわ。何よその剣、詳しくない私でも普通じゃないって分かるもの」

「道化、ねぇ。それ、ローブのおっさんにも言われたわ。この剣については、そうだな。むしろ、魔術師だからそう感じるんだろうな」

見た目だけなら、感嘆できる程に美しい。ただ、男装魔術師にはその剣が、とてつもなく恐ろしい物に見えた。

ゾワリと背筋が凍り、触れることすら拒まれそうな気配を感じる。恐れ多いとはこういうことか、と思える程だ。

「ま、いつまでも話してるわけにもいかないし、そろそろ始めようぜ」

気を抜けば、無意識に後退してしまいそうだ。男装魔術師がそう思って気合を入れ直すと、見計らったかのようにサイードがそう声を掛けてきて、ハッとする。

「悪いけど、さっきも言ったとおり手加減できないから。あんたとあの野郎は、仲良しな兄弟じゃないみたいだけど」

「我、乞う。契りの下にその力を！」

男装魔術師が詠唱を開始するのを待って、サイードは試合では今回初めて最初から剣を抜く。

そして、余裕そうに立ちながら「それでも」と続けて、戦場に立ったことも人を殺した事も無い彼女に対して全力の殺気を放った。

「似てるってだけで、腹が立つ」

「迫る敵を薙ぎ払え！」

出し惜しみはしない。その意気込みを表すように、会場に大きな竜巻が発生した。

精霊はどの国でも色々な種類が存在している、というのは誰もが知っていることだ。ただ、相性として国の持つ精石の眷属と民が一番であり、結果的にその国に属する魔術師はその属性の者の割合が多い。

男装魔術師もその一人であり、彼女の精霊は風の属性である。

ここで、魔法に於いての魔力と精霊について、少し説明をしておこう。

魔法とは、魔力を媒体に精霊の力を具現化させるものであるが、何故精霊の力は単体でそれを発揮できないのか。それは、王以外の精霊は、ある程度の差はあれど、世界に影響を及ぼすことが難しい程に微弱なものだからだ。

それこそ、陽の精霊であれば一本の草すら燃やすことも出来ず、風の精霊であればそよ風ぐらいしか生み出せない。

理由としては、これはサイードの推測であるが、精霊は存在することが全てであるからだと考えられる。

存在するだけで、世界は保たれる。存在していれば、世界が成り立つ。だから、それ以上に発展しない。

ただ、そこに魔力が混ざれば違ってくる。

精霊の力は魔力とは別。魔法こそが精霊の力であり、魔力は本来

の魔法を増強させる役割を担う。
その量と質、魔法そのものである精霊との相性。それにより威力の優劣、上下が発生し、魔術師の力量となる。

これは、またもやサイードの推測であるが、人間が強い意志を持っており、尚且つ精霊とは真逆の存在だからこそ可能となったのではないか。そう考えられた。
何故なら、魔力そのものはアピスの空気中にも含まれるし、命あるもの全てが有しているものなのだ。
しかし、例えばキーテと精霊が契約を結ぶことは不可能であり、精霊が勝手に魔力を奪う事も出来ない。

人間だけが成せる技。そう言えばとても素晴らしいものに思えるだろうが、捉え方によっては精霊の良い非常食。そう考えてしまうのは、サイードだからか。

とはいえ、魔法のお陰で人の生活が発展しているのも事実だ。
農業、商業、武力。様々な分野で魔法は、その素晴らしさを人に実感させてきた。だからこそ、最早切り離せないものになっている。

と、少し語りすぎてしまったが、その精霊の力の増強剤である魔力で男装魔術師を評価すれば、彼女は純血種でないというのに中々優秀であった。
魔力は生まれ持つもので、その質を鍛錬によって向上させることはできるが、量はどう頑張っても増やすことが出来ない。
彼女が放った竜巻を起こす魔法は、規模でいけば、才能の無い者だとその一発で1週間は寝込んでしまう程のものだった。

「運も実力の内だったっけ？　だったら、あんたは運が無かったってことだろうな。俺とあのローブのおっさんが居なければ、優勝も

狙えただろうよ」

竜巻は、サイードに向け意思があるかのように迫る。男装魔術師はその制御を行いながらも、さらに別の魔法を行使するために口を開いた。

「我、乞う。彼の者に絶望を与えたもう刃を」

「人間相手には初めてだな。この剣の本領を発揮できんのは」

サイードは当然、男装魔術師の契約精霊に対し今までの相手と同じくお願いをしている。ただ、今回は魔法の規模が大きすぎ、巻き込まれるというかたちで避けることが無理だった。

しかも、続けての魔法は、竜巻をまるでミキサーにするようなえげつないもの。竜巻に巻き込まれて、それも精霊の制御下を離れる。魔法は精霊が操れるが、魔力は術者の領域。

これもまた、控え室で見つけた対人間への懸念であった。

「ま、別の目的で用意していたのが、功を奏したって感じだけど」

「私の為に倒れなさい！」

男装魔術師が叫ぶのと、竜巻がサイードを呑み込むのは同時。ただ、それが実はサイードが自らそこに突っ込んだのだと、彼女は術の規模が大きすぎたせいで気付けなかった。

「やった……？　なっ！？」

「ごちそうさま」

竜巻の中にサイードが消えたのだけは分かっていた男装魔術師。
自然に収まるのを待っていればもれなくサイードがミンチになってしまうので、死ぬ前に魔法を消そうと魔力の供給を止めた。
すると、徐々に規模を小さくしていく竜巻だったのだが、その中心に黒い影が見えてくる。
彼女の予想としては、かなりギリギリの満身創痍で立っているか倒れている姿があるはずだったのだが、それは見事に裏切られた。

「やったか、は死亡フラグの代名詞つってね」

僅かに乱れた髪をかき上げるサイードは、まったくの無傷であった。
しかも、手に持つ剣は始まりより明らかに輝いており、プレートは銀から緑を帯びた色に変わっている。

「魔力を、吸った……？」

男装魔術師は愕然とする。アピスの世界に存在する物質の中には、魔力を吸収したり宿したり、精霊の加護を受けることが可能なものがある。
しかしそういったものはとても希少価値が高く、偶然それが可能だったと説明するしか無いものがほとんどだ。滅多にお目にかかれるような代物では無い。

「惜しい。魔法を喰った、が正解」

「くそっ！」

相性が悪すぎる。男装魔術師は、自分の運の無さに苛立った。

魔力を吸うだけであれば、その許容範囲を超えるまで魔法を放てばいいだけだ。そこまで難しいことでは無い。

しかし、サイードは言ったのだ。喰った、と。

だったら、お腹一杯になるまで同じようにすればいいと思うかもしれない。俄か魔術師であれば、そうしただろう。

ただ、喰うということは消せるということ。そして、わざと喰いきらずに貯めることも出来るのではないか。

男装魔術師の脳内では、そんな最悪な予想を導き出していた。

「女の子がそんな汚い言葉を言ったらだめだって。婚期逃すぞ」

「ふざけるな！」

そして、男装魔術師が魔法を使うのに躊躇した隙に、サイードは僅かに残る竜巻から抜け、彼女に向かって走った。

「我、乞う。我に降る災いを遮る盾を！」

慌てて、手を降って風の盾を作り出す。

怯む事も無くそのまま向かってくるサイードに、先ほどの予想が当たっていたのかと男装魔術師は恐れた。

「我、乞う。断罪し正義の槍を！」

しかし、それでも勝ちたいという気持ちは消えない。盾を前方に配置しつつ、サイードの足止めをしようと幾つもの風の槍を落としていった。

「……避けてる？」

そこで、ひとつの違和感に気付いた。

恐らくサイードは、先ほどの竜巻は剣を使って対処したのだろう。しかし、風の槍はただ避けているだけだったのだ。避けきれないものは剣で防ぐが、それも弾くだけ。

魔法を喰った、と言っていたのだから、そんなことをするよりも喰わせたほうが何倍も楽だろうに。なのにそれを何故しないのか。

「まさか。剣がすごくても、あの子の魔力が低すぎて使いきれてないとか？」

宝の持ち腐れ。男装魔術師の頭に、その単語が浮かんだ。

だったら――

「当たれば勝てる！」

槍の数が増した。

サイードは器用に全てを避け、弾くのだが、活路を見出したと思っている男装魔術師には気持ちに余裕が生まれている。

彼女の考えたことは、半分正解だった。

サイードの剣は、対精霊用にと元々作らせていたもの。それが、本人も言っていた通り対魔術師にも有用であり、竜巻を無傷で対処できたのである。

効果として、あの剣は魔法を吸収して蓄えたり喰うことが出来るのだが、それを発動させるにはサイードの魔力が鍵（キー）となるのだった。

そして、蓄えた魔法はその行使権を術者からサイードへと移し、

溜まった分だけ同じ効果の力（パワー）を放出する。

確かに現在のサイードは、魔力をほとんど持っていない。種はやっと芽を出そうとしている、ぐらいだからだ。

ただ、サイードは溜めたその力を解放していないだけで、出来ないのではない。だから、半分正解だ。

「やっぱ、学のある奴と戦った方がいくらか楽しいんだよねぇ」

「なんで当たらないの！」

「そりゃ、当たりそうなのは喰いつつ弾いてるし、俺があんたの方に向かっていってなければ、絶対に当たらないからだよ」

最早、槍というよりは殺傷能力のある豪雨が降っているぐらいの規模になっているのだが、サイードはかすり傷のひとつもしていなかった。

そして、剣の色もより濃くなっている。

「我、乞う」

「盾、ちゃんと魔力込めないと危ないよー？」

男装魔術師は、別の策を講じることができなかった。詠唱途中で、サイードが目と鼻の先に迫ったのだ。

本人は、予想以上にそこまで辿り着くのに時間がかかったと思っているのだが、彼女からすれば短時間。攻撃を避けながらにしては、あまりに早かった。

「くっ！」

「お、ナイス反射神経」

危機一髪、盾がやっとその役目を果たした。
ガツンと剣がぶつかり、敵を押し離そうと盾が風を放つ。

「笑う、な！　だから君は舐められるのよ！」

普段であれば男装魔術師も乙女だ、美男子が目の前にいれば赤面していただろう。だが、今の状況では、今のサイードの表情には、そんな気がまったく起きない。
剣は怖い。負けるのも嫌だ。そして、彼女自身は崇高な目的の為に必死になっている。

この戦いが始まるまでは、あの狂戦士を自分も馬鹿にしていたが、こうして対峙してみればその気持ちが十分すぎるほど理解できた。

「そんなこと言われても、楽しまなきゃ無理なんだよ」

そして、憤りを込めて男装魔術師が叫び睨み付けた。
その時、目の前の表情が消える。

笑っていた顔は何もかもを無くし、片方しかみえていない瞳が男装魔術師を景色から除外する。
憎しみ、不満、恐怖。負の感情全てがそこにある、そう思った。

「いいじゃん、少しぐらい遊び感覚でやったって」

それは、誰に対しての言葉だったのだろうか。男装魔術師に向けてじゃないのは確かなのだが、そう言った直後にふわりと柔らかく

微笑んだサイードは、再び彼女に意識を戻して「ね？」と同意を求めたのだった。

これには、男装魔術師も思わず赤面してしまった。あまりに優しく、柔らかく、美しかったせいだ。

「え？　あ……」

心の中で馬鹿にされているとも知らず。

「あんたと俺、その目的の桁が違いすぎるんだよ」

風の盾が、その強度を大分弱めているのにも気付かず、男装魔術師はその道化師が作り出す嘘にのまれた。

「たかだか、お兄ちゃん一人を見返すだけのソレと比べられるなんて、俺を馬鹿にするのも程があるっつーの」

そしてサイードは、瞬時に剣を逆手に持ち替え、溜めに溜めていた魔法のほんの一欠片を引き出す。

「がっはっ……！」

そうすれば、風の盾は簡単に破られて、剣のポルメが男装魔術師の腹部にめり込んだ。

彼女はあまりの衝撃に身体をくの字に曲げ、ドサリと倒れる。

見開いた目は生理的な涙を流し、突然のことに驚いた体内が悲鳴を上げて嘔吐させた。

「てめぇらは、どれだけ俺を苛立たせれば気がすむのかねぇ。今更

謝ったって、赦す気はないけどさ」

薄れゆく意識の中、男装魔術師が聴いた言葉は低く地を這う怒りそのものだ。それに対し、彼女は思う。さらに蹴られないだけマシだな、と。

「勝者、サイード！　サイード選手、見事決勝戦進出です！」

この大会が終われば悲劇が始まるというのに、目前となったカウントダウンにも気付かずに、脇役であり後の犠牲者となる民衆は、サイードに大きな歓声を送っていた。

その夜。一人の少女が覚悟を決めていた。

「もう、後戻りは出来ませんね。終わらせてしまいましょう。」

自分の身長の3倍ぐらいある窓の外の月を眺めながら、その子は

泣いていた。
ただ、泣きながらも大人でも出せないような威厳と強い意志を持って微笑んでいた。

そして、建物を同じくして別の場所では、一人の男が酒を煽りながら闘志を燃やす。

「あの男だけは放置しておけない。あのお方の為にも」

剣を掴みながら見据える先には、残酷にも彼に必死の想いを抱いている者の姿は微塵も無かった。

リサーナでいるのをやめて、サイードで行動するようになってからの拠点となった森の中では、ルシエが静かに寝息をたてている。
ルシエは知らない。彼に対し、色々な想いが向けられているなど。

精霊は必要なことしか教えない。それはある意味無情で軽薄で、とても軽い関係なのだった。

何の為に剣を持つ

風の国で催される3年に1度の大会、ウィーネ杯。
今年度は3日間全てが晴天で、尚且つ例年以上に白熱する試合が繰り広げられていた。
本戦進出確実、優勝候補と噂されていた弓の名手はまさかの予選敗退となり、誰も意識しなかったダークホースが2人、決勝戦に勝ちあがったのだ。
どちらも、今まで何の功績も残しておらず、無名も無名。
観客は大いに沸き、賭け事に興じていた貴族のほとんどが泣き、大穴を狙って2人の内の片方に賭けていた没落寸前の貴族が決死の祈りを抱く。
影でそんな事が起こっていたりもするが、何にせよ、国を挙げての祭りは今日で最終日を迎える。

この日だけは周辺の店は概ね臨時休業となり、屋台に力を入れ、最後の稼ぎに期待を注いだ。

「本日も、驚くほどの晴天！　風の精石も、この予想外な展開に喜んでいるのでしょう！　まずは、未だ全身をローブで包み、その全貌を隠し続けている謎の男。大剣を軽々と、そして優雅に扱いながらここまで進んだ剛健な剣士は、その貫禄を崩すことなく戦えるのか！？　皆さん、大きな声援でお迎え下さい」

残すところ後1戦となり、今日は進出者は顔を見合わせないよう

に其々に控え室を与えられている。その為、会場への入場も別々で、まずは大剣使いが大地を震わせそうな大きな声援を一身に注がれた。

試合の時だけ、ローブの下で背負っている大剣をその上に装備し直す姿勢は、格下であっても備えだけは怠らない律儀さを思わせる。

主に一人の青年が起こしてきた色々な波乱、そのせいで騎士により最終のルール確認をさせられることになったのだが、大剣使いがそれを受けている間に、観客の視線は南側にあるもうひとつの入場口へと移っていた。

「さて、皆さんが待ちきれないということで。対するは、意外や意外、魔術師の出場人数が上回る中、「武」の部門同士での戦いとなりました！　準決勝でとうとう剣を抜き、華麗な舞いで相手を翻弄。甘いマスクの下には、獰猛な狼が潜んでいたのか？　大剣にどこまでその細腕が食らい付くのか、黄色い声援が会場に響きます」

そこから出てきたのは、シルバーの髪を風に遊ばれながら颯爽と歩く青年サイード。

レイスにバレたことで装うのを止めたのか、観客に何の反応もみせずにスタスタと開始の位置まで歩いていく。表情も、冷たい気配を纏っていた。

サイードに対しても、むしろサイードの為に、特に念入りに最終確認をしようと駆け寄る騎士だったが、鬱陶しいの一言で拒絶されている。

その威圧感がまだまだ新米を抜けたばかりの騎士にはダメージが大きすぎ、任務を真っ当することが出来なかったのだが、誰が彼を責められるだろうか。

この時のサイードは、当に我慢の限界を超え、自分本位な虐殺を

抑えることに全力を注いでいたのだから。
あくまでその身にあるのは、精石の解放。そして、それに対しての共犯者はいるが、感情だけの所業はデルの役割には出来ない。
ただの虐殺は、本人にしか責任を負えないものだからだ。

何も知らない観客達は、それでもそんなサイードに、決勝で気負っているのだなと勝手に思って勝手に好感を抱くのである。

「おめでたいにも程がある」

最早、観客にも騎士にも、律儀に説明を受ける大剣使いにも苛立っていた。
そんなサイードの感情につられ、周囲の精霊も騒ぐ。ふわり、と小さな風しか起きないが、剣は昨日の男装魔術師の魔法を蓄えたままなので緑の光を漏らし、あろうことか片目は僅かに緑に変わる。
どうやらサイードは、精霊と同調し易いようだ。そして、それが瞳に出やすい。
こんなことまで予想して片目を髪で隠しているわけじゃないのだろうが、感情の変化が激しすぎる点は弱点にしかならないだろう。
激情していようが、冷静に事を運んでいく冷徹さは賞賛に値するが。

「ちゃんと言い付けを守ったみたいで安心したぞ」

「別に。あんたの為に勝ち上がったわけじゃない」

ただ、この決勝戦だけは今までと少し違う。
それは、対戦相手がサイードより明らかに格上で、さらに立ち位置として今まで勝利してきた敗者と同じ場所にいるということだ。
恐らく、玩具の剣では歯が立たなかっただろう。

「若いってのは罪だねぇ」

最終確認が終わり、進行役が2人の今までの戦い方や勝ち姿を力説していた。

その間に繰り広げられる会話は、ポジションに付いた騎士にすら聞こえない。

「これだから年の功って言葉は面倒くせぇんだ」

「俺もまだまだ若輩者だがな」

サイードは、スラリと剣を抜いた。

カチャリと一鳴きしたその剣は、前方ではなく身体の横でエッジを下に向けて構えられる。

「良い剣だ。意志がしっかりと込められているな。ははっ、その意志が歪んでいるが。剣は使い手を選べん」

大剣使いは楽しそうに笑った。

強者の余裕か、経験からくるものか。まるで、幾重にも師事を施してきたような姿だ。

「歪んでいて結構。俺は、誰かに褒められたくて動いてるわけでも、息をしているわけでもない。賞賛や同情、同意を求める程度の志など、持つだけ無駄だ」

「良いねぇ。その年でそんな言葉が吐ける奴はそうそう居ない。そうだ、良い子ちゃんには誰だってなれる」

大剣使いは腕を組み佇むだけだった。

それでも纏う闘志は逸脱しており、サイードを確かに対峙するに値すると認めている。

「俺に剣を抜かせてみろ、小僧」

そして、進行役が試合開始を告げた。

「どちらが勝つと思いますか？」

最前列で尚且つ会場の全てが見渡せるベストポジションの客席、来賓席で少女が自分の騎士に問いかけた。

といっても、その騎士も招かれる側なので隣に座っている。

「そうですね、経験や姿勢からいえば、恐らく大剣使いの方が優勢でしょう」

「でも、貴方は青年に勝ってほしい」

少女はそう言って、隣の騎士に微笑んだ。
騎士はどこか悔しそうに眉間に皺を寄せながらも、そうですねと素直に返す。その視線は、一挙一動を見逃すまいと戦う2人に釘付けだ。

本来であればそれは少女の立場からは無礼であるが、彼女は咎める浅慮な行為などせず、自分も視線を戻して大剣使いに攻めていく青年を眺める。
彼女にとって、試合そのものよりもその青年を見ることが重要であった。

「姫様は、どうしてそこまであの者を意識するのですか」

「理由は説明しましたでしょう？　レイスだって、驚きながらも受け入れたではないですか」

その会話は、この2人にしか理解できない内容であった。
本当の意味を知ればこのような大勢がいる場で話せるようなものではないのだが、例え会話の断片を盗み聴きしたところで、まったくといっていいほど汲み取れないからこそ大丈夫なのである。

髪と瞳の色に良く合うシンプルながらに豪華なドレスを身に纏い、お姫様は微笑んでいた。そこに、我侭姫と民に馬鹿にされるような姿は微塵も無い。

「会わなければ、それで済みました。しかし、アレは危険すぎる」

「何が危険で安全かなど、最早関係ない次元に事はあります。それに、私はあの青年がそこまで浅はかだとは思えません」

その２人の会話に挙がっている青年は、大剣使いに奇抜な剣技で何度も攻撃を仕掛けている。
全てを見事に避けられているのだが、その目には焦りも憤りも映っていない。勿論、余裕があるわけでは無いのだろうが、かといって無謀に攻めているわけでもなかった。

「私（わたくし）は、託します。いいえ、託したいのです。あの青年の持つ、運命さえも捻じ曲げるような揺るがない意志に」

レイスには、お姫様のその感情だけが理解出来ないでいた。
彼は、ウィーネ騎士団団長でありながら、王女の護衛でもある。本来であれば、彼は王の近衛なのだが、その主直々に任命されてそうなっていた。
そして、護衛となって初めて、王女がわざと我侭姫を演じている事実を知ったのだ。

「後から後悔しても、遅いのですよ？」

ただ、それを知ったところで何がどうなるわけでもない。忠誠とは、それこそ揺らいではいけないのだ。
レイスの言葉に、お姫様は本当に暖かく微笑みを深くするのだった。
それは、１０歳そこらの少女が出来るようなものではない。国を、幾つもの命を背負う姿だ。

「私には、後悔する権利もありませんから」

一瞬、お姫様は自身の手に視線を落とし、すぐに顔を上げる。

「とはいっても、レイスはレイスであの青年と相対して構いません。

私も、全てに同意できるわけではありませんから。お好きに戦いなさいな」

まだ決勝は始まったばかりで、どちらが勝つとも分からない状況なのだが、武術に長けているわけでもないお姫様は最後に、あの青年は勝ちますよと確証があるかのように言うのだった。

レイスもレイスで、勝って貰わねば困りますと返し、そうしてそれきり2人は静かに観戦した。

ただそれは、大剣使いのローブが脱げるまでであったが。

「小僧お前、剣を誰かに師事されていたわけじゃないのか」

「生憎、剣を持ったばかりの素人だ」

サイードは、攻めて引いてを繰り返し、相手の出方を伺っていた。しかし、大剣使いには一切の隙も見られず、当てるつもりで剣を繰り出すも、全てが軽くかわされている。

さらには、たった数分でサイードが素人だと見極められてしまう始末。とてつもなく分が悪かった。

「く、あっはっははは！」

大剣使いは、サイードがあっさりとそれを認めたことで、傑作だと言わんばかりに爆笑した。

流石のこれには、サイードも攻撃の手が止まる。

好機ではあったが、そこまで笑うことだろうかと思った部分があり、そもそも腹を抱えながらも隙を作らない大剣使いに舌を巻いたからだ。

暫く、その笑いが静まることはなかった。

「天性の才能か、それとも反則技でもあるのか。どっちにしろ、やっぱお前良いわ」

大剣使いは、あまりの潔さと軽さがツボに入ったのであるが、それ以上にそのレベルの高さがまるで努力が無意味だと言っているようで笑えてきたのである。

ボソリと、こりゃ負けたほうが良い勉強になりそうだと、意味の分からない事を呟いていた。

「よし、決めた。お前俺のローブを脱がせてみろ。そしたら負けてやる」

とはいっても、大剣使いの方があくまで格上。本人もサイードも、それは事実として分かっている。

ただ、今の言葉だけは頂けなかった。

舐められるのは、度が過ぎなければ構わない。上目線でこられるのも、まあ我慢出来る。

しかし、忘れてはならないのが、今のサイードは我慢のし過ぎでこれ以上を受け入れられない状態にあるということだ。

会場に、突風が吹き荒れた。

砂埃が酷く、大剣使いも観客も、審判役の騎士も進行役も、全員が思わず目を瞑って髪や服を抑える。

そして、収まったところで何が起こったのだと辺りを見渡すのだが、何故だろう。少しの差はあれど、皆が次には大剣使いに視線を釘付けにされた。

「で？」

「おいおいおいおい。前言撤回じゃあ駄目か？」

これには、さすがの大剣使いも唖然である。

サイードは笑っているように思えたが、確実に冷笑している。そしてその手には、今の今まで大剣使いが纏っていたはずの薄汚れたローブが握られていて、剣が明らかに風で纏われていた。

「大丈夫。俺、何も聞こえてなかったから」

感情に呼応して、剣の風が強くなる。先ほどの爆風は、溜めに溜めていた男装魔術師の魔法だったのだろう。

突風で誤魔化しつつ、上手く操ってローブを剥ぎ取る。魔力は低くとも、そこは流石日本人だったということか。種族的な器用さも相まって、繊細なコントロールのセンスを持ち合わせているのか。

ただ、それだけでは、今の会場の静寂は作り出せ無いだろう。原因は恐らく、大剣使いの方にある。

褐色の肌にゴールドの髪と瞳。鍛え抜かれた肉体に無駄は無く、男らしい格好よさのある者だった。

「あーあー、せっかく最後のお楽しみにしようと思ってたのに。でもま、やっぱ勝ちはお前に譲るわ」

「それはありがたいが、今すぐじゃないだろ？」

大剣使いはガシガシと頭を掻き毟り、ニカリと満面の笑みを浮かべる。そこには、純粋に楽しみたいという感情が浮き彫りになっていた。

そして、サイードの言葉に当たり前と返し、とうとう背中の大剣を触った。

「せっかくだ、俺が剣の何たるかを少しだけ教えてやる」

周りを無視し、2人の戦闘狂が狩りの時間だと囁いた。

しかし、それは空気の読めない外野によって邪魔をされる。

「リュケイム団長！！」

「元を付けろ、馬鹿！　んでもって、邪魔すんじゃねーよ」

どうやら大剣使いは、そこそこお調子者というか明るい性格なのだろう。外野の叫びにご丁寧につっこみを入れる。

さらに、その1人の邪魔者を皮切りに、一気に観客は騒然とした。

「な、なんと！　謎の大剣使いは、『俺、旅に出るわ』という言葉と共に突然消えた、前ウィーネ騎士団団長、リュケイム様だったあああああ！？　なんということでしょう、予想外、あまりに予想外

です」

進行役でさえも、我を忘れて馬鹿みたいに叫ぶ。

ただ1人、この世界の内情の触りしか知らないサイードだけが、取り残されたようにポツンと内の高まった神経をどうしたらいいのだと憤り、そして、またお前かと大剣使いに叫んだレイスを睨み付けている。

「貴方は何をやっているのですか！」

「いいから黙れって！　今俺、忙しい！」

「忙しいじゃありません！」

なんだこの茶番、と思うのはサイードだけであろう。それだけ、大剣使いの正体は驚くべきものだった。

騎士団、それもウィーネ騎士団というのは国にとってとてつもなく重要な存在であり、尚且つそのトップともなればそう簡単に投げ出せるようなものではない。

進行役の言葉が真実で、それをまるで塵を捨てるかのように簡単に投げたとなれば、このような反応をされても仕方が無いのだ。消えたのであれば尚更である。

「あ～、悪い。収集つかなくなりそうだ」

「……興醒めするにも程がある」

さすがのこれには、大剣使い――リュケイムもお手上げであった。

サイードも、言葉と共に剣に纏わせていた風を一度治めて、どうしようもないと舌打ち。そろそろ、限界突破したストレスゲージが

その胃に穴を開けてしまうかもしれない。

「だなぁ。俺、リタイアするから、小僧何とか周りを黙らせられないか？」

対戦相手にこんなことまでお願いされてしまうのだから、本当に身体に支障をきたしてしまいそうだ。

てめぇでやれよ、と視線で訴えても、リュケイムは無理無理と首を振るのであった。

そして、深い溜息を吐いて諦めたのだろう。サイードは、溜めていた全ての力を使い、剣を振ったのである。

当然、誰も被害に合わないように。

すると、豪風と共に観客が戦闘に巻き込まれないようにと造られている壁に大穴が開く。

「うん、やっぱお前良いわ」

確かに黙らせることは出来たが少し、いやかなり大げさだろう。本人の表情がすこしすっきりした感じを出しているので、これはこれで良かったのだろうが。

「てことで、俺リタイアするわ」

出会ったときよりかなり口調が変わっているリュケイム。どうやらこちらも、少なからず道化の気質を持っていて、どことなくサイードと似た性質があるのだろう。

ともかく、波乱ばかりのウィーネ杯。

今回の優勝者は、サイードに決まった。

自分の為

はっきり言えば、決勝戦はかなりの戸惑いを生んだ。
サイードの力量は、優勝候補になるぐらいレベルが高かったのは確かだが、だからといって栄えある決勝がまさかの相手側のリタイアで決まろうとは、誰が予想しただろうか。

観客の心情としては、概ね二つに分かれた。
このまま我らが騎士団長様と戦ってもらおう、というものと、再試合で全力を出し合うべきだ、というものに。
ただ、後者は、元々こうなった原因の一端である観客なのだから、利己的にもほどがある。
勿論、大会側がそう決定したのであれば、サイードもリュケイムも従わざるをえないが、2人ともその気は当に失せていた。

そして、異例ながらこの決勝戦に協議が為されることとなり、サイードは与えられた控え室で時間を持て余すことになってしまう。
部屋の中央、またもや床に寝そべって呼ばれるのを待っているのだが、その目は天井を眺めながらも真剣に何かを考えているようだ。

「あそこまで、対魔術師に効果があるのはびっくりだな」

どうやら、身になった試合、今は昨日の男装魔術師とのものを冷静に分析しているのだろう。

眼球がまるで、その時と同じ動きをするかのように忙しなく動き、誰かが見ていたら気持ち悪いと思ってしまいそうだ。

「ただ、溜めるってなればかなり体力持ってかれるし。正直疲れた……」

本人が言う通り、その顔色は若干青い。

まだ戦いが控えている、しかも下手したら決勝が仕切りなおしになりかねないので、瞳を休めるように腕をそこに当てて溜息を吐く。

気乗りしないのだろうか。いや、どちらかというといつも以上に面倒くさそうだ。

出会った時はあれ程戦ってみたいと思っていたはずだが、今はレイスとの関わり全てを避けたがっていると思えた。

恐らく、元々が持つ危険やハプニングの察知能力の高さが、そうさせているのだろう。

バレないように、と神経を使っていたこの3日間だ。そうするには、相手を観察しなければいけない。

その過程でサイードは、レイスとお姫様が自分に視線を向けているのに気付いており、その中に何かが込められているのも分かっていた。

それでも装っていたのについては、ただの意固地だろう。

「あー、今回は色々しくったかもしれない」

ぼそっと呟かれた言葉には、疲労の色が濃い。素が出つつも反省するだけで、暫くすれば落ち着いた呼吸音が部屋に響いた。

「……魔法剣士」

しかし、寝ていたわけではなかったのか、十数分後に突然言葉を発する。

「魔法剣士、サイード」

もう一度謎の言葉を発し、クツクツと笑い出し、次第に身体を横向きに変えくの字に折り曲げて爆笑しだした。

その様子から、十分元気で疲れも軽かったのかもしれないと思うのだが、不気味すぎる点から、余計に疲れているのかもと思う。

きっと、疲れていたんだろう。

これで、今後魔法剣士サイードですと名乗り始めたりでもしたら、きっと世界は崩壊してしまう。

早く試合を始めてやれと願わずにはいられない。

リュケイムは、自分の控え室で問答無用に追求されていた。

「貴方は一体、何がしたいのですか！」

「だからー、旅がしたかったって言ったじゃん」

「ええ、言いましたね！　ですが、了承した覚えはありませんし、あの後私がどれだけ大変だったか！　やれ、副団長の監視不行き届きですよ、だ。やれ、君が追い出したのではないかだとか。追い出すならもっと頭を使うだろうよ！」

「おいおい、キャラが崩壊してるぞ。レイス団長」

五月蝿いと吠えるレイスに、リュケイムはやれやれだと肩を竦めた。

レイスは我を忘れているのか、リュケイムの胸倉を掴んでおり、いつもの柔和な雰囲気は微塵も無く鬼気迫る迫力である。

今の光景を見たら、さすがのサイードでも一歩引いただろう。

相当、リュケイムには溜まったものがあったということか。

「団長、一先ず冷静に」

そんな般若と化したレイスを、怖気づくことなく宥める者がいた。

淡々と細々と、気配すらなさそうな気弱な声である。

「聞きたい事があるからと、私もデモンストレーションが控えているというのに、共に来たのですよ」

「……分かっている」

その者の言葉に、レイスはリュケイムから離れ、咳払いをひとつしてバツが悪そうに誤魔化した。

残念ながら、部下に怒られてやんのと空気を読まない馬鹿が一人、遠慮無しに笑っているのでその口元はひくひくと震えていたが。

「リュケイム様も、少しは団長の気持ちを汲んでやって下さい。ただでさえ、気苦労が絶えず私が大変なんですから」

「さーせんしたぁー」

リュケイムという男は、本当に３０代の良い大人なのだろうか。

先ほどの言葉から、もう１人は副団長らしい。決戦後は、優勝者は団長と準優勝者は副団長と剣を合わせるのが習わしなのだ。

レイスと同年代な感じで青髪の、インテリが形を持って生まれたような副団長は、眉間に指を当てて小さく溜息を吐いた。眼鏡をかけていないのが残念だ。

「おふざけはそろそろやめましょうよ」

でないと私は、これからの準備をさせてもらいますよ。そう言うかのように、副団長はリュケイムに冷めた視線を向けてレイスへも一瞥をくれる。

それに、誰もリュケイムをただの馬鹿だとは思っていない。

例え、旅に出たいからという理由で騎士団長という地位を捨てるような男であっても、元騎士なのは変わらない。

そして、理由も無く馬鹿な真似をするような馬鹿ではないと、彼等は知っているのだ。

「何故、戻ってきたんですか。しかも、突然こんな形で」

「色々ときな臭い事が耳に入ってきたもんでな」

副団長は、レイスが本来のペースを取り戻したことで傍観を決め

た。

扉の前に立ち、部屋に誰かが立ち入らないかどうか気配を探りながら、視線はリュケイムに縫い付けられる。

まるで、一挙一動見逃すまいと、彼を見定めるかのように。

「……きな臭い？」

リュケイムは元々、情報収集能力に長けた男だった。

騎士でありながらその情報網は裏の世界にまで及び、レイスにとっては剣の腕よりもそちらの方が何倍も恐ろしい。

恐ろしい、ということは、レイス自身に何かしら秘密があるということだろうか。

向かい合う形で腰を下ろした2人は、おふざけの空気の一切をかき消した。

レイスは真剣な表情に、リュケイムはまるで試すようにと若干の違いはあれど、そこは守ることを主とした職を誇りとしている、していた者達だ。

「陽の国が一度落ちたのは当然知っているな？」

「子供でも知っていることですからね」

まさか他国の話が出るとは思っていなかったレイスだが、それが何年も付き合ってきた元団長のやり方だと分かっていた。

浅いところから、確信へ。道化とはこの人のことだ、とレイスはまだ部下だった頃に同僚に対し何度も愚痴を零していたりする。

「だが、それ以外を誰も知らない。これはおかしいだろ？」

その国の人間までもが。そう言ってリュケイムは、眉間に皺を寄せて真っ直ぐにレイスを見つめる。

「ただ単に、情報を隠しているだけでしょう」

「それ以外に何があるんだよ。問題は、何故隠す必要があるのかだ」

レイスは今の言葉を吟味する為、一度リュケイムから視線を外す。ただ、だからどうしたのだという気持ちもあった。

所詮、他国の問題である。自分たちは武器ではあるが、軍師にはなれない。

騎士団長といえど、まとめ役にはなるが所詮それだけだ。

そんな考えが顔にでたのか、リュケイムは深い溜息で呆れた。

「あのなぁ、不穏なんだよ。陽の国に限ったことじゃねぇ。むしろ俺は、陽の国が何かしら被害を受けた側だと考えてる。それも、早々公にできないような大事だ」

「しかし、あの国は反乱が起こり、王が変わったばかりです。復興するだけでも厳しい状況なんですから、当然では」

「だあ！　お前じゃ駄目だ、話にならん」

しかし、あまりのレイスの鈍さにリュケイムが匙を投げた。

頭を掻き毟りながら、だからお前は剣馬鹿って笑われるんだよと言っている。

貴方には言われたく無い、と反抗するレイスだが、少なくともリュケイムは同じではないだろう。使う、ということを知っていると

見受けられる。

「だからこそおかしい、ですよね」

そこで、黙って話を聴いていた副団長がやれやれと口を挟んだ。
何を言っているんだお前は、とレイスは見やるのだが、リュケイムの方はお前のが話易そうだと彼を座らそうと目で訴えた。

残念ながら、嫌ですと一刀両断されたのだが、副団長は続ける。

「どう考えても、現在の陽の国は国庫も無い状態ですから、復興さえも難しい。それは、私たち騎士ですら分かる事。なのに、反乱で何が起こったのか、どうやって前王を討ち取ったのか。その一切が流れてこないと、リュケイム様は言っているのですよ?」

「いや、だから、それを隠しているんだろ」

2つの深い溜息が重なった。
取り残されたレイスだったが、何かを言う前に小さな咳払いで封じられてしまう。

「貴方は、盗賊を討ち取ってその功績を隠しますか?」

だが、副団長の言葉にやっと今までの会話の意味を知った。

「……確かに」

いや、確かにじゃないだろ。と思ってしまっては負けだろうか。
鈍いにも程がある。
ただ、リュケイムが言いたいことはそこでは無い。それだけでは、

国の中枢が知っていればいいことだ。
続きを、と促され、彼は頷いた。

「陽の国が一番分かりやすいから出したんだが、まあそれでだ。どこもかしこも、変な動きが目立ちすぎてるんだよ、最近」

ちらりとレイスを見て、リュケイムは次々と自身が持つ情報を明かしていく。
それは、インターネット等無いこの世界で考えればかなり広く多い情報で、リュケイムの能力の高さに驚かされた。
レイスと副団長は、今更ながら何故彼は国を捨てたのだろうかと疑問を抱く。それすら分かっているかのように、リュケイムは自らの力を見せ付けるのだった。

「でだ。俺が戻って来たのは、それを陛下に伝えて警戒して頂く為だ」

「……は？」

そうして、唐突にリュケイムは言った。
当然ながら2人は驚くのだが、彼は気にも留めない。

「そして、お前たちにも警戒してもらう。……最近、光風の便り亭という場所で身元不明の女が1人、保護されたらしいな」

ここからが重要だ、と言わんばかりにその声が低くなった。
副団長は、そういやそんな報告があったようなと浅い反応であったが、逆にレイスは眉間の皺を深くし大きな反応を見せていた。

「男に襲われショックで記憶を無くしたらしいが？」

「どうしてそれを」

何故か、レイスのリュケイムに対する警戒が濃いものになる。
それを面白そうに笑いながら眺めるリュケイムだが、目が笑っていない。

「俺は、国に仕えるよりも陛下に忠誠を誓いたくてな。だから、その椅子をお前に譲った」

「捨てた、の間違いでしょう」

どっちも変わらないだろ、とリュケイムは言うが、レイスはまるで親の仇にでも会ったかのように、激しく彼を睨み付けた。

先ほどまでの空気が嘘のようだ。

何がそこまでレイスの癪に障ったのだろう。彼は奥歯を噛み、無意識に腰の剣を掴んで軽く腰を浮かす。
おやおや、とリュケイムは笑い、副団長は冷静に傍観するだけだ。

「その女、逃がしたそうだな」

「え、そうなのですか？」

ただ、それを聞いた副団長は思わず問いかけた。
そうすると、レイスの怒りが自分に向きかけるのだが、リュケイムが無視して先へと進むので難を逃れる。
レイスもレイスで、部下に世話を掛けてしまうタイプということか。

「まったく、俺でも予想できない何かが起こりそうな不穏な空気が漂っているって時に、明らかに怪しい奴を野放しにした挙句、まんまと逃げられちまうとは。ウィーネ騎士団が聞いて呆れる。だから俺は、ウィーネ杯に託けて、お前等の緩んだ神経を鍛え直してやろうと思ったんだよ」

「何故貴方に、そんなことをされなきゃいけないんですか」

ギリッと睨み付けるレイス。しかし、無意味な反抗はリュケイムには通用しないだろう。

真面目ながらも笑っていた口元が急に下がったかと思うと、彼は座ったままの体勢で片足を上げ、レイスが反応するよりも早く抜こうとした手を剣ごと踏んで止めた。

「言っただろ？　俺は、陛下に忠誠誓ってんだ。つまりは私兵。正規のお前等がそんなに腑抜けてたら、誰が俺の主人を護るんだ？騎士が主君の憂いになるなんざ、俺は許さねぇ」

その威圧感（プレッシャー）は、恐らくレイスでも出せないだろう。

そもそも、己の誇りの象徴である剣を足蹴にされている時点で、実力差はみえている。

副団長も、威圧感に押されて背中に冷たい汗が流れていた。

「後、サイードとかいうあの小僧。公表前に出されていた出場者名簿の中にはいなかったぞ？　当然、参加申し込み書も無かった。どこでどうやって、すり変えられたんだろうなぁ」

反論も言い訳も許される雰囲気では無い。

そこには、洗練された道化の姿があった。

サイードと戦っていた時は、あれ程楽しそうに見えていたというのに、こうなればそれすら装っていたのだろう。
馬鹿な真似をするような、という言葉は撤回するしかない。
リュケイムはきっと、忠誠を尽くす為になら馬鹿になりきるはずだ。

「2度と、こんなヘマして俺の手間をかけるんじゃねぇ。あの小僧も絶対に逃がすな。見えない不穏（なにか）に付け入る隙を見せれば、陛下に危険が及びかねない」

「……肝に、命じておきます」

レイスがやっとのことでそう言うと、リュケイムの足は彼を解放した。
そして、副団長に対してお前もだと言い付け、これ以上は話すことはないと口を閉じたのである。
2人は、威圧感から解放されたことに安堵の溜息を吐き、そして己の失敗に反省を見せた。
今後彼等はリュケイムに頭が上がらないだろう。

ただ、それでは失礼しますと2人が退室しようと扉に手をかけて頭を下げた時だった。

「俺を欺けると思うなよ？　レイス・アレフィセー・アランドル」

今までで一番低い声がレイスに降り注ぎ、しかしこの時だけはレイスは何も返さず、一礼して颯爽と立ち去っていったのである。

「ありゃあ、どうしようもないな。あの小僧の方が、大分マシな顔

してるだろうよ」

閉じた扉を見つめ、椅子の背に肘を立てながら呟かれた言葉の真意はいったい。

その後直ぐ、協議の結果とデモンストレーション開始を告げに騎士が入室し、リュケイムは何事も無かったかのように出て行くのだが、はたしてサイードは、自分が疲れすぎて壊れかけている間にこのようなやり取りが為され、何より身近にリュケイムという何倍も経験を積んでいる道化師が居る事に気付いているのだろうか。

翳すのは誇り

舞台を用意しよう。

それは、誰の言葉なのだろうか。

波乱、波乱のウィーネ杯で、歴史はあるが所詮お遊戯の枠から抜けない大会で、世界を揺るがすような運命がいくつも交わり定められた。

しかし、それを知るのは覚悟を決めた本人達のみで、全てを把握している者は誰もいない。

望む者ですら、舞台を用意するだけしかできない。そうして、意志を持つ人形を躍らせる。

それをさせるにも、踊るには音楽が必要で、奏でるには楽器が必要だ。さらに、楽器があっても奏者がいなければただの物。

まずは、産声を。

誰かが楽しそうに笑う。楽しみで仕方が無いとはしゃぐ。

用意だけが、誰も気付かないままに着々と進められた。

ひとつの大会のメインイベントであり、クライマックスでもある戦い自体が壮大な何かのファンファーレになるのかもしれない。

「さて、とうとう始まります！　優勝者への特典であり、我らが自慢でもあるウィーネ騎士団団長、レイス・アレフィセー・アランドル様とのデモンストレーション！　両者美丈夫で女性は大興奮なことでしょう！　是非とも、剣技でも我々を魅了してほしいものです。サイード選手は、果たしてどこまでレイス様に食いついていけるのか？　片時も目を離せません！」

協議の結果、決勝戦が再度行われることはなかった。
陰では、リュケイムが何か手を回したとも囁かれるが、その真偽は分からない。

太陽は当に頂点を過ぎ、リュケイムと副団長との試合も終わった。
語らずとも、その勝敗は分かることだろう。

そして今、因縁の対決というほど縁があるわけではないが、お互いがお互いに何かを抱えている2人が、会場の中央で剣を抜き対峙していた。

「正々堂々と団長を殺れるなんて、こんな良い機会は2度と無いだろうな」

「いやいや、殺すのはルール違反だよ」

どうやらサイードは、疲労から回復したようだ。
不敵にレイスを睨み付け、舌なめずりをしていた。

そしてレイスも、余裕を取り戻したのか冷静にサイードを見つめていた。
その周囲には、半径3メートル程の円が白い線で地面に引かれていて、サイードはそれが気に食わないと言いたげに一瞥した。

本来、優勝者は手合わせを願うという形で試合を行う。言わばこれは、優勝者の為というよりも、他国に自国の戦力を見せ付ける為のものだ。
そして、試合そのものも、結局はスカウト目的もあるので、これだけの手練れが自国に下っているという牽制にもなる。

そもそも、騎士団団長たる者、そう簡単に負けることはないのだ。だからこそ、ハンデとしてレイスはその円の中だけしか動けないのがルールである。
これは、サイードにとってもとても面倒くさいルールであった。

その円から出られないということは、自分が打ち込まない限り接近できないということなのだから。

どうするか、と考えている間に、大袈裟な開始の笛が吹かれた。
盛大な歓声と共に、試合が始まる。

「遠慮無く来ればいいさ」

ニコリと舐めてかかってくるレイスだが、彼もサイードの力量の一端を森で垣間見ている。
決して、油断をしているわけではない。

「その円、邪魔なんだが」

「ルールだから、仕方無いさ。私にはどうにも出来ないよ。……君が消してくれれば、問題無いがね」

その言葉に、サイードが四方に立つ騎士に視線をやった。

「じゃあ、消すまでお互い手は出さないってことで良いな？」

「君の言葉を信用して、一度痛い目見ているからな。約束はしない」

レイスの瞳に、一瞬だが黒い光が掠める。

恐らく、森で迷いかけたことを言っているのだ。

ねちっこい男は嫌われるぞ、とサイードは返しながら、もう一度視線は白い線へ。どうやら、それは石灰か何かで書かれているだけのようだ。

それなら、とサイードは走った。

レイスが警戒を強めてその動きを追い、剣を握る力が増す。

サイードはそれを無視して、剣で線を一閃。そして、ほとんど空になっていた男装魔術師の魔法に自身の魔力を僅かに上乗せして、小さな風の刃を作り出した。

それには殺傷能力はほとんど無く、線を刻むというよりも周囲の砂を小さく抉って上から隠している。

自身も線の上に足を滑らせ踏み消して、円はすぐに消えた。

この奇行に驚いたのは、観客である。

始めは、サイードが強気で攻めていったのだと勘違いしておぉ、

と唸ったのだが、まさかこのようなことをするとは。
ざわりざわり、と周囲が騒ぐ中、一度開始位置に戻ったサイードは、剣を肩に乗せてニヤリと笑った。

そして、レイスではなく軽く首を上げて周囲に大声を張り上げる。

「我らが団長の全力、是非見てみたくは無いか！？」

空いている手をわざとらしく広げてアピールをし、サイードは態々レイスも戦えるように仕向けていくのであった。

「観客は目で、俺はこの身で！　もし俺が勝ったら、それはそれで一興だろう！？」

言葉そのものは、立場も何もあったものではない。
当然、騎士達は馬鹿にされたのかと眉を顰めるのだが、平民の観客達は大いに沸いた。

次第に、やれ、やれと合唱しだし、進行役が咎めるも収集が付かない状況にまで発展する。
そこでやっと、サイードはレイスへと視線を戻して一言。

「これなら問題ないな？」

そう言って笑った。

「民の期待に応えるのも、我々の役目だからね。これなら、仕方が無い」

レイスも、消された後がはっきりと残る線に目をやり、まるで不

本意だと言うような態度を取りながら歩く。
サイードも合わせて一歩を踏み出し、騒ぎは合唱から再び歓声へと切り替わった。

レイスは、型にのっとった構えで歩きながら線の跡を踏む。
サイードは、肩に乗せていた剣を体の横にエッジを下に向けて構えて片手で振るう、いつものスタイルにもっていく。

2人の足並みは次第に早まり、そして。

「君を私は認めない！」

「はっ！　てめぇに認められたって嬉しくないないなぁ！」

美しい金属音と共に、お互いの誇りが交差した。

ギリギリと僅かに押し合い2人ともが飛び退くように離れるのだが、表情の違いが大きい。サイードは楽しそうに笑い、レイスは怒気を含んだ厳しい顔だ。

一方が一歩動けば相手も動き、2人は其々で隙を窺う。
その様子を、気付けば会場の誰もが固唾を呑んで見守っていた。

ただ、その中でサイードに期待を寄せる人間はいないだろう。皆、考えるとしたら精々が、あの小僧は我らがレイス様を相手にどこまで粘れるのか。

サイードも、実はそうであった。精霊や陽の精霊王の力を全力で使えば、少なからず自信は持てる。
しかし、剣術のみだけではセンスは勿論のこと、経験が重要だと

いうことが分からない程馬鹿では無いし、自惚れてもいない。

「ま、存分に俺の礎になってくれってね」

ふわりと、その足を柔らかな風が包む。今までに何度も使っている、瞬発力を上げてくれる風の魔法だ。

僅かに身体を落とし、サイードは一気に間合いを詰めた。

当然、レイスは素早く反応して下半身に力を込める。

金属音はまだしない。

サイードは、素早くレイスの目の前にまでいったのだが、そこでは剣を振らずに跳躍し背中に回ったのだ。

そして、躊躇無く胴体を分断するつもりで一閃する。

観客が悲鳴を上げる暇も無い動きだった。

「……甘い！」

しかし、そう簡単にいくなら、レイスは団長の座にはいないだろう。

響く金属音。

彼は後ろを振り返ることなく、両手で前に構えていたはずの剣を逆手に持ち替えて攻撃を防いでいた。

そして、すぐさま構えを直して身体を動かし、攻撃後に出来る隙を狙い反撃を繰り出す。

サイードが剣を片手持ちするのは、剣そのものが軽いから為せる

技でもあるが、それ以上にその俊敏性にあった。
上からのレイスの攻撃は、お得意のバック転で避ける。
地面に手をついて中腰となった体勢を立て直すことなく足に力をいれ、そこから再び接近。
それも簡単に防がれてしまうのだが、お互い攻撃と反撃を繰り返す形でそのまま剣の打ち合いとなり、まるで曲を奏でているかのように会場に美しい音が響いた。
観客の誰もが、男ですら、両者の剣技と姿に見惚れた。
暫くは、打ち込めば払われ、払えば打ち込むという動きが続き、その途中で何度か押し合いをし、その度に2人は瞳で会話をしていたのだろう。
サイードはいっそう笑みを深くし、レイスは怒気を濃くする。
「姫様は、契約されている精霊と、とても親密な関係なのだ」
しかし、それは突然であった。何度目かの剣の交差の際、レイスは囁くように声を発したのだ。
その瞬間、サイードは不吉な予感を抱き、それこそ飛び退いた。
僅かに開いた距離。永遠に続くかと思われた攻防は一端中止となったのか、2人は僅かに息を荒げながら対峙に戻る。
サイードの顔から、笑みが消えた。
「その精霊が、とても興味深い事を教えてくれたそうだよ」

止まっていた思考が、フル稼動する。
恐らく、王族であるお姫様の契約精霊は風を司るシルフだろう。
シルフは臆病で用心深いが、一度信頼を得られれば強い絆を結ぶ事が出来る。

しかし、ルシエの存在は精霊にとって例外で絶対であり、何を不安に思うことがあるのだろう。
万が一、仮にだ。あのお姫様がルシエ同様、精霊と意思疎通を図れたとして、そして存在を明かしたとしても、少なくとも彼女が障害になることは無いのだ。
この仮定自体、かなり確立の低い事ではある。
ただ、ルシエは自分だけという驕りは抱かない。自分だけは特別だ、という感情を許さない者だった。

だからこそ、その懸念を抱くことが出来るのだが、戦いの最中ではあったが視線を来賓席に移せば、そのお姫様は明らかに頷いたのである。
それは、確実に意味を持ち、訴える仕草だった。

「君は、精石を壊す為にこの国に来たのだろう？」

めずらしく、サイードの目が大きく開かれて驚きを露にした。
お姫様にだったのか、レイスの言葉にだったのかは分からない。
しかも、何かを言う前に、まずは身体を動かすことに集中しなければならなかった。

勝敗を競うというのに、相手の意識が移ったのが分かりながら、黙って待っていてくれる者はいない。
そもそも、レイスはそれを見逃す未熟者でもない。

「余所見は禁物だ」

頭上からの素早い一撃が、サイードを襲う。

「わざとだよっ！」

サイードは慌てて剣を翳し、押されえて腰が落ちかけながらも片手をブレードに添えて踏ん張り、大きな舌打ちと共にレイスの足を素早く払った。

「なっ！？」

「くそっ」

咄嗟の行動は見事、レイスは体勢を崩しサイードへの注意を削がれる。

しかし、不安定な体勢で防ぎ、そのまま攻撃に転じた為に耐える力が弱まったせいで、サイードの剣は宙を舞う。

このままではまずい、と腕を支えにレイスの腕を蹴る。

カランと、２本の誇りが地を叩く音が重なった。

そして距離を取ったサイードは、やっと、お姫様に対して余計な事をと毒付くことができた。

焦るなと自身を律しながらも、その表情は険しい。

考え通り、精霊がお姫様に教えたとしてもそれは障害にならないであろう。ただ、だとしても、お姫様が信用した相手がルシエにとってもそうなるとはならない。

だから、ルシエは仲間を欲する事が無いのだ。

どうするべきか必死に考えるも、答えは一つしか無い。それも、早急に対処せねばならず、しかし今ここでするのは厳しいという最悪の展開だった。

「焦っているようだね」

「……てめぇ」

レイスは笑っていた。それも、してやったり顔である。

今度はサイードが怒気を含むこととなった。

その感情のまま、レイスの懐へと入り拳を繰り出す。それはあっさりと避けられ、彼から一撃を貰ってしまうが、それでもサイードは怯まず蹴りを脇腹に入れダメージを返した。

体術に関して、ルシエはまったくの素人ではなかった。

地球でのトラブルが増えていった折、その対処法を会得する為に幾つか身に付けていたりするのだ。

ただ、与えられるダメージの値は両者に大きく差があった。

サイードは、思わず自分が女であることに憤りを感じてしまう。

普段であれば、ふとした拍子に忘れてしまう事実であるが、肉弾戦の際にそれが如実に表れるからだ。

いくら戦術で補おうとも、体力や力の差はどうやっても男を越えられない。

一刻も早く、剣を取り戻さなければならなかった。

目的を知られている時点で、これは試合の枠を外れている。

レイスは国を護る騎士だ。そしてサイードは、国を壊す敵である。
そんな両者が剣を手に相対していたら、そこにあるのは生と死。

「俺を公衆の面前で殺すのが目的か」

もし、レイスが騎士では無く、その秘密を明かしたのがお姫様じゃなければ、サイードははぐらかす選択を取ったかもしれない。
しかし、忠誠を誓い誓われる関係の者に知られた時点で、それは通用しないだろう。
半ば自棄になりながら、サイードは問うた。

「……聞きたいことがある」

ところが、ここで予想外の事が起こった。
騎士であるレイスが、あろうことか答えをはぐらかしたのだ。

流石のこれには、サイードがあからさまに訝しむ。
口元を垂れてくる血を拭いながらレイスを見ても、彼は動く気配がなかった。

お姫様の精霊や彼女自身、そしてレイスも何がしたいのか。
自分に何かを抱いているというのはサイードも感じていたが、初めてその内容に疑問を抱いた。

立ち塞がるつもりか、利用したいのか。まさか、協力したいだとか、仲間になるつもりがあるわけではあるまい。

自分の目的に関することしか気にせず、周囲に気を配らない不注意が起こした結果が今の状況ではあるが、何にしろどれをとっても全てが迷惑である。

レイスは一瞬顔を伏せ、次にサイードを見た時、彼は意を決した表情をしていた。

「君は何の為に剣を持ち、そして何の為にそれを振るう？」

「どういう意味だ」

「良いから、答えろ」

しかし、口を出たのはまったく脈絡の無い質問。サイードは困惑する。

何がしたいんだと目で訴えるも、レイスは答えるまで動かないと思えた。

流石にそんな状態の彼を攻撃してしまえば、観客からは大ブーイングをくらってしまうだろう。

それに、今更ではあるが、彼等の真意を探らなければならない。

仕方なく、サイードは質問に答える為に考えた。ただ、先ほどの質問は考えた事も無いもので、眉間に深く皺が寄っている。

――何の為に。

サイードにとって、剣（ぶき）とは殺すのに必要で、殺すのは邪魔だからである。

しかしそれは、レイスの知りたい答えではないだろう。

何故なら、武器の役割や殺す理由にはなれど、サイード自身が持ち、使う理由にはならないからだ。

だから、さらに深く考えていく。

邪魔なのは、進まなければならない道を塞ぐからだ。では、それは何故か。

そうやって、一つ一つを掘り下げていき、とうとう辿り着いた答えはシンプルで、とてもらしいものであった。

「……そうだな。強いて言うなら、俺自身の為だ」

「なんと愚かなっ！」

サイードにとってその答えが全てである。ただそれは、レイスにとって到底理解し難い答えだった。

一瞬にしてレイスの表情は嫌悪に変化し、まるで目を覚まさせようとするようにサイードに拳を繰り出す。

それを避けつつも、サイードは思った。

こんなものに、正解な答えなどあるのだろうかと。

そもそも、何故人間は、物事に対して逐一意味を求め、想いに理由を求めるのか。

分からない、とサイードは呟く。その先にある価値が分からない、と。

「人は、自分以外の誰かを護る時にこそ、人知を超える力を発揮する！　なのに君は、力がありながら己だけの為に振るうのか！？」

「在り来たりな名言をどうも。しかし、それは絶対か？」

今や戦いは、唯の殴り合いとなっていた。しかも、正反対の思想

まで引き合いにされてだ。

答えを求めること自体、サイードには無意味なことである。

何故なら、正しい答えが存在する数学にさえ、そこに辿り着くまでの計算式にはいくつかのパターンがある。それも、複雑になればなるほどだ。

そこでは、一番シンプルで簡単にまとまらず、無駄に幾つもの公式を用いて遠回りしてしまったとしても、同じ数字（こたえ）に辿り着く。

それも模範解答にはならずとも当然正しい答えであり、正解を導いてくれる過程だ。

考え方、思想もそれと同様、同じものでも掘り下げていくと違っていたりする。

そこにははたして、間違いがあるんだろうか。そもそも、こういったものに正解や間違い自体がないのでは。

基準として、常識と非常識があり、それで分けられるだけではないのだろうか。

「君は、人を切る際に何を思っていた？」

レイスは、サイードの問いに答えなかった。まるで、都合の悪い言葉は聞こえていない様だ。

そのくせ、自身を価値観はさも正論のように翳してサイードを諭そうとする。

両者、既に肩で息をしていた。

サイードに至っては受けたダメージが大きく、若干足元が覚束ない。片目は殴られて腫れてきており、全身に痣が出来ている。

レイスは、そこそこ負傷はしているがサイード程ではなかった。

もし彼が、サイードが本当は女性だと知れば、一体どういった反応をするのか。平気で殴っている様子から、是非とも知らないと思いたいものだ。

でなければ、些か風の国の騎士の有り様に疑問を抱いてしまう。

「何も。別段何も考えていないが？　俺にとって殺すことは、食事や睡眠と然して変わらない。だが、それが何だと言うんだ」

「駄目に決まっているだろう！　お前の正義は、一体どこにある！？」

頬に一発大きく攻撃をくらい、サイードは地面に倒れ身体を滑らせた。

予選であれば負けと判断される程のものであるが、最早2人には周囲の声など聞こえておらず、誰も止められない。そもそも、誰も止めようとしなかった。

ここまで騎士団長に対し食らい付き、しっかりと試合が出来る者は滅多に居ないのだ。

サイードは赤い唾を地に吐き、新たに流れた口元の血を乱暴に拭い、痛む身体を無視して起き上がる。

そして、膝に手を付いてレイスを見やった。

彼は何を言いたいのだ。自分に何を求め、どうしたいと。そう思いながら、叫ばれた言葉を脳に届ける。

ルシエだって当然、その手を初めて赤に染めた時には、何かしらを抱いたはずだろう。心は確かにある。

ただ、そこで抱いた何かを考えた末、そうした自分が出来上がっ

た。それだけである。

ゆっくりと膝についた手を離し身体を完全に起こせば、頬に鋭い痛みが襲い、小さく呻き声をあげながら顔全体を覆うように片手で押さえた。

指の隙間から見えるレイスは、一体どう映ったのだろう。

「……正義？」

サイードはぽつりと呟いた。そのまま、同じく肩で息をするレイスを穴が開くほど見つめる。

何度も何度も正義と呟き、そうする度にだんだんと口元がヒクつく。

そうして何度目かの正義を発した直後だった。明らかに口角が上がり、サイードは両手で顔を覆った。

「くっ、くはははははは！」

まるで泣き笑いにも思える姿だった。顔を上に向け両手で隠し、しかし聞こえる声は愉快で堪らないと言っている。

恐らく、レイスの言う正義とは、人に優しくしたり、困っている人を助けたり、そういった類の人の道理というものだろう。

善意、良心、愛情、慈愛。そういったものを寄せ集め、固めたもの。

それは、彼がどんな人物だと思っていたにしろ、ルシエにだって存在し、過去に行動で示したことだってある。

一頻り、サイードは盛大に笑って表情を隠す手をどけた。
その下には、瞳を見開き心底人を馬鹿にする表情があり、両手を広げながら叫ぶようにレイスに言った。

「なら聞くが、お前の言う正義とは、正しい道理とは何だ？　困っている者を助けるのがそうだというのなら、悪事を働いてそれを隠そうと必死になっている奴に手を差し伸べるのも、正義になるじゃないか」

それ自体は、言葉の文である。しかし、いつだって何かを決めるのは人間で、決めたのも人間。

ならば、否定をするのも人間だ。

あれはダメ、これはイイ。
何故、どうして、だから、だとしたら。

そうやって意味を求め、区別したがる生物は人間以外にいない。
それが知能が高いからこそなのか、そうではないのかは誰も知らない。
だからといってどうこうなるわけでは無いが、ルシエに可笑しさを抱かせるのは、それを他人に押し付けようとすること。

善悪を区別することだった。

しかしそれは、なんとも曖昧であやふやなことだろう。もし人間が、他と同じように武器も持たず生身だけで食物連鎖の枠にはまっていたとして、そうしたらそこに、人殺しという罪は存在するのか。
弱肉強食の世界で必死に抗い、生きるために同種を見捨てたり、仕方なしに殺したりすることは罪なのか。

答えは、否だ。

でなければ、自然界が成り立たなくなってしまう。肉食獣が他種を食らうことや、子が生まれた際に親を食らうこと。そういったもの全てを、自然の摂理といえなくなる。

人間とは愚かなもので、そういった光景を見た時には残酷だと評するが、結局は仕方が無いと身勝手にのたまう。

そうして、自身に影響が及ばない限り、まるでまったく別の立ち位置にいるかのように振舞うのだが、人間の築いている足場、決めてきたものというのは哀れな程に脆いものだ。

たとえ現実はそうでは無いと言ったとしても、何時どのような形で変化するとも限らない。

「それは違う！　私達は見極める頭と心を持っている。だからこそ、善悪が存在するのだ！」

「なら、俺は人間では無いと？　だがそれは、何を基準に定められる。心か？　法か？　それこそ簡単に変化するし、そうすれば悪法も存在しないだろう？」

理解出来ない。お互いが全身でそれを訴える。

ただ、サイードは考えを言葉にしながらも、自分でそれを否定していた。

そう思いながらも、ルシエ自身、地球に居た時には今と同じように行動していたわけでは無い。社会では法が定められており、それを犯せば待つのは償いと責任だ。

アピスに来たからこそ、目的があるからこそ、ルシエはその為に人を殺す。逆を言えば、だからだ。だから、殺すことに罪悪感を抱かず、快楽も抱かない。

ただそれは、心のどこかで自分は救世主だからと驕っている結果なのかもしれない。割り切っているのかも。

それに気付いたとしても、ルシエはそれを省みることはないだろうが。

とにかく、2人の関係はまさしく水と油であった。両者が相容れることは難しすぎるだろう。

しかし、2人には決定的な違いがある。

自分の考えが正しいと信じ、諭す風を装いそれを強要するのがレイスだとすれば、正しいとは思わず、誰にも関係無い自分だけの事だと分かっているサイード。

常識での正しいは当然レイスだ。人の築く社会で“生きる”のなら、サイードは悪である。

「だから君は、そのような瞳をしている！　死を招く色を持っている！」

ただ、それは大きなお世話であった。

サイードは人間だ。ただし、人であることを捨てた人間。

意志を持っているだけの只の生物で、意志を持つからこそ他の生物を代表して世界を担ったのである。

人にとって不幸だったのは、選ばれたのがそんな考え方の同種だったということだろう。

お互いに攻撃もせず立ち尽くしていたが、サイードはこれ以上こ

の押し問答を続ける気はもう無かった。
素早く視線をレイスから外し、自分の剣を探せば直ぐに見つかる。
剣は指輪に変える事は触れていなくとも可能だが、呼び寄せる万能な機能は持っていない。
その手で、その足で掴み取るしか無く、その距離は少し走れば届く場所にある。ただ、それは相手も同じ。
それでもサイードは、迷わず駆けた。
「っ！」
「くっ！」
その動きに素早く反応しレイスも行動を起し、最後の誇りのぶつかり合いとなった。
高い音と共に、1本の剣が再び宙を舞った。

そして死が纏う

困惑、賛辞、驚きからの雄叫び。色々なものが混ぜ合わされた歓声が、大きく大きく響き渡った。

それはきっと、精石の奥深くで眠る精霊王さえ叩き起したことだろう。

誰もが、本人さえ想像していなかった光景がそこにはある。

一瞬の静寂の後に響き渡った音を愉快だと思いながら、その者は哂った。

「負けた奴の言葉は、どれだけありがたいものでも、正しくとも、遠吠えにしかならない。……残念だったな。万が一、俺が人の言葉に心から従うことがあるとすれば、それは負けた時だ」

サイードは、レイスの首に剣を当てながら言った。

レイスは膝をつき、唇を噛み締めながら睨み付けているが、反論はしない。

こうしてお互いが武器を手に対峙した時点で、例え試合であれ、そこは力がモノを言う世界になる。言葉が不必要だとみなされる場

所だ。
幾多の戦いを経験しているレイスは、むしろサイードよりそれを知っている。だから今、何も言えないのだ。
それでいて、試合中にあれ程言葉を発していたのは、勝つと決め付けて侮っていたからに他ならないだろう。
絶対の自信は、ただの自惚れとなったわけだ。

「悔しいだろう？」

その無様な姿に、サイードはくつくつと頬を緩めた。見下ろす目線は冷たく、人の温もりが微塵もない。

試合は終了したのだが、サイードは剣を下ろさなかった。それを不審に思い審判が走り寄ってくるのだが、何故かレイスが手を翳して制した。

馬鹿みたいに周囲が叫ぶ分、その中心である筈の場所がひどく浮いている。
そこでふと、レイスの表情が変わった。

「君は、可哀想な子だな」

ピクリ、とサイードの腕が動く。聞き覚えのありすぎる言葉だった。
レイスの瞳には、明らかな哀れみが含まれており、人にしかない強さがある。

「拒む事で檻を造り、それで身を守り、気付かないフリをする。自分は切り離された存在だと装って、そして心を誤魔化す」

首の横にある剣を素手で躊躇なく掴み、それを押しのけ立ち上がる。
痛いだろうにそれでも剣は離さず、サイードの胸倉を掴んだ彼は至近距離で訴えた。

「怖いだけだろ？　世界に関わるのが。だから君は、壊そうとするんだろ？」

被害者面をして。レイスが掴んだままの剣は、容赦無く彼の手の皮を、肉を断ち、雫がブレードからエッジへと流れ地面に落ちていく。
何の情けも容赦も無い、まるで見当違いでありながら遠慮の無い言葉である。それが、彼がサイードに、ひいてはルシエに見出した答えなのだろう。
問いかけでは無い、咎めの言葉だった。

あまりにも、身勝手なものである。
勿論、サイードの行動もそうではあるのだが、アピスの人間がそれを言って良いものだろうか。
被害者面？　いや、実際にそうなのだ。
最終的な決断は本人が下したものではあるが、無責任な行動が１人の少女を殺し、知らないからとはいえアピスの人間達は、さらにもう一度殺そうとしている。
無知は罪だ。無知で居続けるのは愚かな罪だ。
世界には知が溢れているが、それでも知ろうともしない行為はそれこそが罪そのものである。

知れば善になるわけでも無いが、それでもだ。

サイードは、流れる赤を眺めた。その視線はもう、レイスに見向きもし無い。
瞳が語るのは、剣が汚れた、それだけである。

「殺す意味も無い。お前が敵になるなんて、あり得ない」

ぼそりと呟かれた言葉が全てだった。哂いすら浮かべず、サイードはレイスを捨て置いた。
彼が、障害になる程壁らしい壁を築ける男では無いと判断し、風の国でこんなにも自分が苦労しているのを馬鹿馬鹿しく思う。
不安要素は排除するべきだが、その不安にすらならないとレイスは感じた。

そして、静かに剣を指輪に変え、素早く戻して鞘に収める。
そうやって、態々観客の目を誤魔化す行為すら阿呆らしくなった。

レイスがまだ何か言っているが、その耳には声が届く事は無い。
フイッと視線を横に向けたサイードは、来賓席のお姫様を見つめた。

少女は、自分の騎士が負けたというのに表情を崩さず、むしろ微笑んでいる。そして、またサイードに向けて頷きを一つ。
今度は、サイードも同じくそうして何かを交わした。

「カワイソウに。どう見ても、良い王になるだろうに」

届けるつもりの無い言葉は、その意志に反してお姫様へと渡る。
彼女は、予想外の賛辞に瞠目しつつも、年相応の花が咲くような笑顔で喜んでいた。
そして、桜色の唇が小さくか弱い言葉を紡いだ。

当然、爆音にも似た歓声にそれはかき消されてサイードまで届かないのだが、それでもしっかりと伝わったのかもう一度頷く。それは、先ほどとは違い、何かを了承するかのような仕草だった。

「この戦いが、今までで一番つまらなかったな」

胸倉を未だ掴まれているというのに、サイードはまるで一人でそこに居るかのように足を動かし、埃を払うような仕草でレイスの腕を外させる。

そして、そのまま背を向けて退場していった。

この後には表彰式が控えており、さらにそれが終われば、サイードに国の重鎮達が押し寄せてくるだろう。

ある者は私兵に、ある者は純粋にその力を求めて。ただ、確実にそれに応える事は無いだろう。

まだ精石を壊すことと、その為に入城するという目的は果たされていないというのに、その足は控え室どころか闘技場の外へと向かっていた。

「ご主人様に憂いを持たせたくないのであれば、俺なんかよりあのヘタレを監視しろよ」

背後の物陰に隠れる者にそう吐き捨てながら、サイードは喧騒に紛れて歩く。闘技場を出たときには、全身を黒が覆っていた。

頭の中では、何度も何度も可哀想という言葉がリピートされていて、サイードはすれ違う人を瞳に掠めながら言った。

「だったらあんた等は、オシアワセな奴なんだろうな。精々、泣き

喚け」

君に捧ぐ声

ウィーネ杯が終了したその夜はどの酒場も賑わい、客たちは様々な戦いを振り返りそれを酒の肴に盛り上がるのが常であった。
その中心は、団長と優勝者のデモンストレーションが最も多く、今回も例に漏れずそうである。

ただし、どの酒場でも空気は悪く、それは酒場に限らず首都全体がそうであった。
当然だろう。前代未聞、団長が負けるというハプニングが起こったのだから。それも、身元不明で名も無い年若い青年によってだ。

しかし、それだけであれば、暗くなるよりも期待に満ち溢れた雰囲気に包まれたことだろう。何に於いても、逸材や天才は存在する。
問題は、その青年が消えたということにあった。

青年は表彰式に姿を表さず、慌てて騎士が控え室に呼びに行くも、もぬけの殻だったらしい。
他国の間者、レジスタンス、暗殺者等様々な憶測が飛び交い、皆が不穏な空気と一抹の不安を感じ取った。
それは、城内でも同様だ。只でさえ王位継承を巡って荒れているというのに、それに加えて醜い責任の擦り合いや青年の捜索、他国への隠蔽で一番騒然としていることだろう。

才ある者は、手に入らなければ脅威で不穏分子にしかならない。

そのような状態のウェントゥスの中心に位置する建物のとある部屋。

1人の幼い少女と、1人の青年が小さな灯りが点るだけの部屋で優雅にお茶を楽しんでいた。

少女は清楚なドレスに身を包み、青年は黒のパンツに白いシャツという軽装だ。

ただ、豪華な部屋の薄暗い中でのお茶会は、まるで幽霊のもののような光景だ。冷えた空気が、さらにそれを思わせる。

カチャリ、とカップが立てる小さな音だけで、2人は先ほどから無言のまま。お互いに探り合う視線が何度も交わっていた。

一つ言えるのは、それでも2人が共に相手に敬意を抱いているところか。

そうして暫くの時間が過ぎた時、青年がとうとう口を開く。

「……隠し通路なんて、思い付きませんでした」

「あら、常識でしょう？」

少女は驚いたように目を開く。相手が言葉を紡いでくれたことと、その中身が意外だったことの両方に対してだ。

「この世界では、そうですね」

「え、あ、ごめんなさい」

青年の言葉の重みを知る少女は失言に俯くが、彼はどうして貴女

が謝るのですかとふわりと笑った。

「いえ、こちらこそ申し訳無い。“彼”は我々の中である意味一番素直なもので」

それには、少女が頭を振る。膝に置いた手を強く握り合わせ、唇を結び合わせる姿は、何かに追い詰められている様で幼さに似合わず痛々しい。

青年は、カップを持ち口を付けながらこっそりとそれを見て、首を傾げた。

「王女殿下は、立派なレディだと思いますよ」

「えっ！？」

少女が驚いて顔をあげた時、青年は紅茶を口にしており目線は合わなかったが、口元はやはり柔らかく上がっていた。

その目身麗しさも相まって、少女は赤面する。何度も青年を見ているはずの彼女であったが、まるで初対面の紳士と密談をしている気になった。

目の前の青年は、少女にとって使命そのものであり、近しい存在でもある。ただ、どうしても異質さが拭えない。

頭が良い、と思った次にはどこか抜けていたり、雰囲気や言動、まるで別人と対峙しているように思わせたり。

「それに、我侭姫を演じていたなど、思いもよりませんでした」

貴方は何、と思わずそう問いかけようと口を開いた時だ。青年は、少女を見つめながら言う。

その瞳の奥で、何かが怪しく光っていた。

「……貴方こそ、森やウィーネ杯での言動からはかけ離れていますでしょう」

内心あたふたとしていた少女だったが、掛けられた言葉を返す時には、立場を重んじる王族に戻っていた。

忘れてはいけない、と叱責をする。今、この場は、世界の命運を分けるような大舞台なのだと。

「それは、サイードですから」

青年は、さも当たり前の様に言った。しかし、やはり異質なのだ。

1人の人間は1人の人にしかなれないはずなのだから。

「貴方が、サイード様でしょう?」

ここで初めて、少女はあからさまに怪訝な顔をした。

青年は、その反応が当然だと受け止める。ただし、では、と反論は忘れない。

「我侭なお姫様も、貴女の姿だと?」

これには、少女は言葉を返せなかった。

彼女は、今以上に幼い頃からどうしてか頭が良く、2番目の兄が権力を欲している事にも自分がそれに巻き込まれることにも気付き、公の場に出る頃には装うことを覚えてしまっていた。

だけど、本来の自分はそうじゃないんだと、我侭を言いたくて言っているわけでは無いんだと、ずっと心の奥底で本音を抱えていた。

「まあ、貴女の様に不本意で彼（サイード）でいるわけではありません。それに、彼でいることは楽しいというのが本音です」

青年は、少女が葛藤しているのに気付きながらもこれといってつっこみはしない。

それどころか、お茶菓子を手にとって美味しそうに頬張るといった余裕さを見せ付ける。

――アレは危険だ。

少女は、今になって自身の騎士が言った言葉の本当の意味を知る。

私は間違っていたのかもしれない、そう思いかける程に青年が分からなかった。

だからだろう、どうしても聞きたい事が出来てしまった。つい先ほどまでは、関係無いと半ば思っていた事柄だったというのに。

「だから、貴方は壊すのですか？」

せめて、せめてこれだけは分かりたい。そんな想いを込めて真っ直ぐ向けた視線の先では、青年が僅かに驚いている気がした。

しかし、それは気のせいだったのかもしれない。彼は、とても眩しそうに目を細め、やはり笑う。

ただ、この時の笑いだけは、本当に柔らかかった。蔑みも呆れも無い、嬉しそうな顔。

少女が作り出したその表情は、この世界で青年が初めて出せた素顔だったのかもしれない。

「貴女が貴女だけに課せられた義務があるように、こちらにも義務……いいえ、信念があるだけですよ。それが、破壊だっただけです」

「ですが、破壊には常に苦痛が伴います。貴方は、この世界がお嫌いですか？」

質疑応答。いや、この場合は幼子がどうして雲は空に浮かんでいるの、と聞くレベルの質問が上質になっただけのやり取りと言うべきか。

それでも、青年は怒るでもなく真摯に答えていく。

敵わないと思い、怒らせてしまってはどうしようかと不安になる少女だが、後半からは純粋に知りたいと思い始める。

目の前の人物を知りたい。それが叶った時、自分が正しかったのかどうかが分かるかもしれない。

先ほど危険だと思ったばかりなのに、どうしてか少女はそう思わずにはいられなかった。

「嫌いですよ。心底、ね」

青年は即答して、一度目を伏せた。そして、少女が何かを返す前に再び言葉を紡ぐ。

「ですが、花を等しく嫌えない様に、世界を嫌えどその中身についてはまた別です。そして、信念にもまた好き嫌いは関係無い。足元だけ見て歩いてしまえば、風景の美しさに気付けないし、先だけを見て歩いていれば小石に躓く。後悔だけする道を選ぶ事の方が、楽な道を選ぶより何倍も難しいと、そうは思いませんか？」

そして青年は、花は花粉が飛ぶから好きになれないが、黒い花は見る分にはとても和みます、とカップに残った最後の一口を飲み干した。

少女は始め、その断言に陰を落とし、次に必死に耳を傾け、後半は難しすぎて理解出来かねはしたが、それこそ花を咲かせた。

「ふふ、不思議な方ですね。是非とも、お名前を教えて頂けませんか？」

そして気付けば、青年をサイードでは無いと思っていた。

銀に輝く髪に獣を思わせる金色の瞳、目見麗しさはまったく同じだ。それでも、浮かべる表情も言動も、声の抑揚さえ違う青年が青年だと理解する。

青年は、やっと聞いてくれましたねと、それはそれは嬉しそうに言った。

「ルシエです、王女殿下。それでは、そろそろ例のモノをお出し頂けませんか？」

彼（ルシエ）はきっと、悪魔なのだろう。そして、天使でもあるのだろう。

少女（おひめさま）は信じようと、託そうと誓った。

そして、小さく頷いて立ち上がり、繋がっている隣の部屋――寝室へと向かう。

その姿を目で追いながらも、ルシエは黙って待っていた。

お姫様はベッドの下から、深緑の手触りの良い高価な布にくるまれた何かを取り出し、直ぐにルシエの元へと戻った。

2人とも、その物を託し手に入れるのが目的で、こうやって相見えていたのだった。

それは、コトリとルシエの前に置かれた。

「お確かめ下さい」

「その必要は無いですよ。本物かどうかなど、見なくても分かるのでね」

ルシエはそう言いつつも、布を剥がす。そこには、深い色合いの翡翠が美しく輝き、銀の本体の輝きすら霞ませる王冠の姿があった。

「一応最終確認をしておきましょうか。……バレれば、反逆罪で打ち首かもしれませんよ？」

座り直したお姫様は、国の象徴である王冠とルシエの美しさの釣合い具合に息を呑むが、かけられた言葉にハッとして笑った。

「国、私の役割、世界、精霊、私自身。全てを踏まえて考えた結果、そしてルシエ様のお言葉から導き出した答えです。それで打ち首になるのであれば、私はそういった役割でしか無かったということでしょう。……いいえ、全ては私達人間には到底及ばない場所に」

今までの姿勢の良さから一転、ルシエはテーブルに肘を付いて顔を乗せお姫様を観察するが、そこに一切の偽りは存在しなかった。

お姫様の姿の方が、何倍も美しい。そこには、生そのものが輝いているのだから。

「では、貴女は聖女だから差し出すわけでは無い、ということでよろしいのでしょうか？」

「……はい。私は、私の判断でコレを、精石を貴方にお渡しいたし

ます」

とても、力強い言葉だった。ルシエは、心底目の前の少女が好きだと思った。下心等無しに、純粋に好ましいと。

それは、所詮ルシエにとってという小さなもので、この行動の是非にはならないが、幼い身体の中で満ち溢れる信念と本心、欲望全てが心地良いと感じた。

たとえ、聖女という存在が無条件に精霊に愛され、人より尊く、精霊より価値の無い、都合が良く特別で哀れな存在だとしても。

精霊を労う為に意思疎通が図れる力を授かり、精霊の怒りを静める為にその身を捧げる役割を担っている、ちっぽけな神の玩具だとしても。

それでも自分自身を貫き、葛藤し、こうして抗う姿が美しいと思った。

そして何より、ウィーネ杯でレイスと試合を行った際、精霊を通じて突然精石を渡すと言われ、半信半疑で指示に従い城の隠し通路を使ってこうして対峙したのだが、今ではそれが良かったと思える。

信じた、とは違う。同情もそうだ。ただ、利害が一致しただけで、そして少女も共犯になった、それだけのこと。

それでも、お姫様を好きだと思えた。

同時に、こうして国や民、父を裏切ってまで精石を差し出したのは、彼女の精一杯の反抗。そう思う。

お姫様は、精霊と通じルシエが救世主だと知りながら、それでも話しをして殺される事も厭わずにルシエへ託したのだ。

目的の物を手にした今、幸運（ラッキー）だったとそれだけ思い立ち去るのが正解なのだろう。

ただ、それはサイードが取る行動であり、ルシエという人物はそうでは無い。
好きなモノ、好きな事にはとことん忠実なのがルシエなのだ。

頬杖をついたまま動かないルシエを不審に思いながらも、お姫様はこれ幸いにと奮い立ち、拳を作って訴えていた。

「その代わり、誓ってください！　決して諦めないと、そして勝つと！」

お姫様はきっと、精石を渡したことでひとつ、肩の荷が下りたのだろう。身体を震わし、目に涙を溜め、テーブルに身を乗り出して叫ぶ。
普段の彼女であればもう少し冷静に、普段寝ている筈の時刻にこうして声を出してしまっては侍女や近衛が乗り込んできてしまうと判断しただろう。
それは勿論、最初に対策を練って結界を張っているから心配する必要は無いのだが、それでもこの行動は普段の彼女ならあり得ない。
……我侭姫であれば、癇癪を起すことなど何度もあったが。

「約束は、できません」

「そんな！」

「……ですが、ココに誓った信念と目的は、何があろうと絶対に変わらない。それは、貴女の望むものと同じです」

ルシエは冷静に真実を口にするが、それは寧ろ嘘を付かない潔さがあった。そして、揺るがないと瞳で訴え、ココ――心臓を指差す。

「っ……貴方に会いに行って良かったと、渡して良かったと、心から思いますっ！」

きっと、この会話の大部分は、2人の特別な人間にしか分からないことなのだろう。聖女と称される特別と、救世主のくせに悪魔な特別。

その奥底で繋がっているのは、一体どういった感情なのだろうか。

「私も、選んだだけなのです。自分の力から知った事柄や貴方の言柄から。王よりも、人を。国よりも、未来（さき）の命を。その為に、私は私自身と貴方を犠牲にする！」

「ははっ、聖女らしからぬ言葉ですね。ですが、私にはそれがありがたい説法よりも何倍も心地が良い」

そしてルシエは、布はそのまま頭に王冠を掲げて立ち上がった。

そのまま、お姫様の前まで進んで目の前で膝をつくと、恭しく胸に手を当て頭を垂れる。

突然のその行動に驚くお姫様であるが、それは経験からくるものか、初々しくも堂々とした雰囲気だ。

「王とは戴くものだと、元の世界では良く比喩されていました」

「それは、こちらでも同じです。王とは目指しはすれど、欲するものでは無い。着飾るのも、贅を尽くす為ではありません」

「はい。だからこそ、その象徴は頭上で輝く。己の頭上は、自身では超えられない」

ルシエは一度面を上げると、彼（サイード）の発言を、今此処で訂正させて頂

きますと仰々しく言った。

「貴女は、ご立派な王でした」

そして、そっと小さな手を取りその甲に口付ける。

まるで神聖な、美しい儀式の一端に思える様子であった。

お姫様は嫌悪するどころか光栄だと胸を打ち、そして恐る恐る何かを言いかけ留まる。

リップ音を響かせて唇を離したルシエは、その様子におや、と首を傾げ暫く黙っていたが、察したのか微笑んだ。

「友、と呼ぶことは出来ません。それは貴女もお分かりでしょう」

「……そうですね」

気付かれてしまったことにお姫様は赤面するが、それでも、と今度は引かずに言った。彼女にとってルシエは、初めて装う事無く接する事が出来た人だったのだ。

だからこそ、終わりへと旅立つ自分の勇気にさせて欲しかった。

ただ、こういったものは強制できるものでも、お願いするものでもない。

そもそもルシエは、そういう存在を望まない。望む関係とすれば、それこそ共犯者だけだ。

ただ、目の前の少女は好きなのだ。それだけは、一生変わらないだろう。

変わるとすれば、好きから好きだったぐらいである。

もう一度、何かを伝えるかのように離さずにいた手の甲へと口付

けたルシエは、真剣に言った。

「犠牲になるぐらいなら、戦死を。最期まで、虫の息になってでも、抗うのです。聖女じゃなく、自分自身に従って。そうしたところで、世界に影響が無いのは、我々が一番知っているのですから」

そして、自身の頭上に輝く王冠を外し、お姫様へと移動させて懐から一本の短剣を取り出す。

抜き身の短剣のその鋭利さに怯むお姫様であったが、それを許さないと無理やり手に握らせてから、ルシエは今度はこめかみにキスをした。

「そうすれば、貴女は戦友としてこの心に刻まれるでしょう」

お姫様の翡翠からは、ぽろぽろと美しい雫が零れて止まらなかった。

ルシエの言葉は、どんな賞賛よりも嬉しかったのだ。

――後悔の無い旅路を、女王陛下。

きっとその言葉は、例えば魂のみになったとしても、お姫様の心の深い部分に刻まれただろう。

それが本心からか、お得意の嘘かどうかは本人にしか分からない。そうだとしても。

「そして、借りを作らない為にも……ご命令を」

ルシエは跪き命令を待ち、暫くして下されたものは、それこそお姫様を聖女と謳いたくなるような慈悲深い、とても優しいものだった。

その内容が明かされるのは、これよりほんの少し後。

小さな口が紡いだ命令に頷いたルシエは、立ち上がって王冠を自分に戻してお姫様の身体を抱きしめた。優しく、柔らかく。

「……ありがとな」

その時囁いた声はサイードだが、だからこそとても真っ直ぐであった。

流し始めてからずっと涙していたお姫様は、黙って何度も頷きながら、ぎゅっと持たされた小剣のグリップを握る。

「お前が聖女なら――私は、魔女かしら？」

ただ、別れ際に囁かれた言葉に涙は引っ込み、慌てて問い詰めようとした時にはもう、高貴なルシエも、冷徹なサイードも目の前にはいなかった。

視線の先には、風に揺れるカーテンと先程まで閉じられていた筈の窓しか無い。

静かに立ち上がったお姫様は、譲られた小剣をそっと抱きしめ、瞳を閉じて謡う。

自身への鎮魂歌（レクイエム）を。民への鎮魂歌を。未来への、賛美歌を。

それを聴きながら、何時もの全身黒尽くめのスタイルになったサイードは、自分しか知らない風の国の小さな女王陛下の命令を遂行する為目的地へと歩いた。

そして、歌が終わった時だった。

2人はそれぞれ、お互いに宛て呟く。

「全ては、好きにさせない為に」

それは、共闘であった。
それは、見捨てる行為でもあった。

1人はその命を終えることで戦い、1人は死へと向かい戦い。
そして、最期には笑いたいと願う。

旅は、そうして何かを犠牲にしながら続いていく。

輝きの消えた夜

闇夜。不吉さを表すかのように、頭上の星はその輝きを隠し月は潜み、身体を撫ぜる風は生暖かく不快だ。
それは、ウェントゥス全体を走り回り、王城の正門横の城壁の前も通り過ぎる。
そして、そこを過ぎた風は生暖かいだけから血生臭いを加えて、再びウェントゥス中に吹いていくのだった。

城壁の前には、大袈裟な人だかりが出来ていた。
いや、状況を見れば大袈裟とは言えないかもしれない。
平民は口元を押さえてそこにある光景から目を逸らし、慌てて駆け付けてきた城の騎士達は、驚愕と屈辱を浮かべる。

警備を与る騎士だろうか。彼等が必死に周囲を宥め、現場保存をしようと奔走するが、誰もが動けずにいた。

「なんて、こと……」

人々は、口々にそう呟く。その無残さに、無情さに、残虐さに。
そして、失われた命が余りに軽く扱われている事に、同情と哀れみを抱くのだ。

「ほら、歯車は狂い始めた。……さぁて、どう出てくるんだろうね。

いや、まだ動かないか」

高く聳える正門の上で寛いで座るルシエは、人々がうろたえる有様を眺めながら呟いていた。

短い髪は風に遊ばれ、精霊も嬉しそうにはしゃいでいるようだ。

右目を隠すように流した前髪を人差し指で弄びながら、ルシエは微笑んで眼下の光景を観察し続ける。

今居る場所は、相当大掛かりな足場がなければ、只の人が辿り着ける場所ではない。そもそもが、座って景色を眺めるところではないのだ。

誰も、そんな場所に犯人がいるとは思わないだろう。

ルシエの視線の先、灰色の城壁は、人だかりのある部分だけ紅く染まっていた。それも無造作にでは無く、その色で鮮やかに文字が描かれている。

そしてその字の下では、もう2度と動くことのない身体が3体、磔にされて壁を飾っていて、彼等はただ人を集めるだけの為に、門番という立場のせいでそれを強いられた。

「まぁ、今はただ踊ってあげるよ」

ルシエはそうして挑戦的に笑い、鉄の棒でしかない高度のありすぎる不安定な椅子の上で、足を無造作にぶらつかせながら何も無い黒だけの空を見上げるのだった。

片手は髪を弄び、もう片方では暇つぶしにするかのように、無意味に指輪と剣とを交互に変化させて。——剣の銀だったブレードは、毒々しい黒に変化していた。

ルシエが王城の正門で優雅に夜空を眺める1時間前。丁度、お姫様との別れを済ませた直後まで時間は遡る。

サイードは、城の敷地内を堂々と歩いていた。

「お探しの人間が直ぐ傍に居るって知ったら、城（ここ）の連中は面白い顔してくれるだろうな」

顔を隠す布の下からは、くぐもった笑い声が聞こえていた。

サイードは目的地へと暫く歩き続け、足を止めた時には、目の前に敷地の最南端の古びた塔があった。

「ここか」

石造りのその塔はそう高いわけでは無く、一度見上げて入り口へと視線を戻す。扉すら簡素な木で造られ、痛んで茶色にくすんでいる。

「王道だと、塔といえば囚われのお姫様なんだけどねぇ」

サイードは、やれやれといった感じで呟き、片手を扉に添えようとした。

「っ……いってぇ。大した懸想なこった」

しかし、それは叶わなかった。

サイードが扉に触れようとした途端、まるで弾かれるように指先に痛みが走り、そこから僅かに血が垂れる。

地面に落ちる前にそれを舐め取りながら、サイードはもう一度塔を見上げた。

御伽噺に出ていそうな城に似合わない塔の天辺近くには、しっかりと窓がある。ベッドのシーツなりカーテンなりを使えば、簡単に脱出できるような高さだ。

それは、先程眺めた時となんら変わらない。

ただし、今は全体を覆うように薄い風のベールと、肌を刺すような厳かな気配がそこにはあった。

――汝、立ち入る、許さん

そして、響いた声のような音。

サイードは驚く事無く静かに目を閉じ、ただの音にも聞こえかねない声を理解しようと集中する。

声は、そう言っている気がした。

「俺が何か知っていて、そう言うのか」

咎めるでも、命じるでもなく低く返せばベールが揺れる。

――友、為なれば

恐らくこの声は精霊のものだ。それも、サイードが今まで意思疎通を図ってきた脆弱な存在では無く、王には敵わなくもティルダのよりも強い精霊。

ルシエが借りは作らないという名目で受けたお姫様の命令は、彼女の一番上の兄、本来では第一位王位継承権を持つ王子を救えというものだった。

そして、その王子は目の前の塔で療養という隔離、いや、自身が契約している精霊に護られている。

正直言えば、こんなことをする必要は無い。命令と言えど、強制力は皆無なのだ。

それでもサイードは、面白いと思った。

簡単に従ってくるだけの精霊よりも、こうやって反抗してくる方が良い退屈凌ぎになり、王子を救えれば、一国に借りを作ることにもなる。

とはいっても、お姫様に精石を貰ったことでの借りを返すのだから、借りは作れないはずなのだが、その本人が消えてしまうとすればまた別だ。

王女は死ぬ。それも、もう少しで。

サイードもルシエも、それは知っていた。それでも救おうとは想わない。

だから、見捨てる行為だと言ったのだ。

「その友の助けになれるかもしれないから来たとしても？」

――それは……真？

サイードは、断片的に汲み取った精霊の言葉と根気良く会話をしていた。

精霊は助けという言葉に反応して、ベールが弱まる。

それを見逃さず、サイードはゆっくりと警戒させないように顎の下に布をずらし、マスクを片耳にぶらさげて顔を晒す。

そして、無言で頷いた。

精霊は思案しているのか反応を返さなかった。

それでも黙って待ち続け、十数分後ぐらいだろうか、揺らめきながら風のベールは雲散する。

そうして、扉が頼りない音共に独りでに開き、サイードは薄暗い塔の内部へと足を踏み入れた。

塔の内部は薄暗く、不安定な階段が螺旋状に続いている。

それを黙々と進んでいくサイードだったが、暫くするとベッドだけしかない狭い部屋に辿り着いた。

お世辞にも、一国の王子が暮らすような部屋には思えない。生活感はまったく無く、豪華なベッドだけが辛うじてその身分を主張するだけだ。

「ほとんど死にかけだな」

――我、なんとか、保っている

その部屋は階段同様、灯りすらなかった。

いくら闇夜に慣れた目でも、星の瞬きも月の輝きも無い今日のよ

うな夜では、足元とほんの先が見えるだけである。
そんな暗闇で、何故王子の様子が分かるのだろうか。
いくら狭いといっても、塔の天辺のこの部屋の入り口に立つサイードと王子のベッドまでは、十数歩の距離があった。

――死、見えるか

それは、人間だけが抱く疑問では無かったのかもしれない。
精霊があり得ないと言う様に、今までの抑揚のない声色から一転、驚きを表に出しながら聞いた。

サイードは、思い出したかのように耳にぶら下がるマスクを付け直し、布はずらしたままで目を細める。
まるで、何かを見極めるかのように。

「……死の可能性なら見える。悪いが風を起こしてくれ」

それは、サイードにしかない眼だった。ただ死に近い人間が分かるという、何の力にもならない邪魔な異質。
死期が近ければ近い程、サイードの右目にはその人物の身体を覆う様に黒い靄が映る。それだけである。

サイードであれルシエであれ、髪の下に隠す方の目が可笑しいというのは分かっていることだった。
しかし、自分がルシエになった時には決して見えない光景が、サイードの時にだけ映る。

分かっていたから、髪で隠していたわけではない。かといって、隠したからそうなったというのも違うだろう。
意味の無いものとは、どうしても思えない。

「まぁ、お告げみたいなもんだ」

精霊は深く追求しなかったが、部屋に吹いた緩やかな風に乗せて呟かれた言葉には、誰かに宛てた明らかな挑発が含まれていた。

それはともかく、サイードの右目には部屋に入った時、何も映らなかったのだ。

全体を黒い靄で覆われていて、だからこそ、死にかけだと言えたのである。

そして、風により一瞬靄が払われ、その隙に王子のベッドの横へと移動する。

土色の顔色をし脂汗を額に浮かべ、苦しそうに顔を顰める意識の無い新緑の髪が美しい少年がそこには居た。

「起こし続けろ」

――承知

闇夜の得意な左目はその有様を、右目はそうさせる場所を脳へと送る。

死の靄は、ただ本人を覆うわけでは無く、原因へも手を伸ばすのだ。

例えば、サイードがリルを殺した時、身体を覆っていた彼女の死は、その靄をサイードの剣、変化させる前だったので指輪にだが、まるで結びつけるかのように伸びていた。

だからサイードは自分が殺すのかと予想して、事実そうなった。

そして、何故可能性なだけで死そのものでは無いのかというと、靄は本人の行動や周囲の事柄によって、簡単にその濃さを変化させるのだ。

またしてもリルの時を例にすれば、サイードが初めて彼女と出会ったその時はまだ、僅かに薄く纏うぐらいにしか靄は見えていなかった。

だから、可能性なのである。

真実は違うのかもしれないし、本当はもっと違う力なのかもしれない。しかし現状では、サイードにはそれ以上の説明がつけられない。

「……へぇ」

絶え間なく王子を包もうとする靄は、契約している精霊の起こす風で次々に流され、その間にサイードは彼を観察する。

靄は、王子の左手を中心に湧き出ており、それを視認して遠慮なく服を巻くって腕を晒した時、サイードは思わず声を漏らした。

王子の腕は、左目で見てもどす黒く変色していたのだ。

――魔、友に毒。友、綺麗

ざわりと部屋を通る風が乱れるが、サイードは相手にしない。

まるで王子を染める黒を辿るように黙々と服を剥いで、その肌に指を滑らせていた。

「お前の友は、魔力が高すぎるのが仇となって、悪意に満ちた精神を持つ者の魔力に毒されたってことだな」

されるがまま、サイードに剥かれていた王子は、判断をつける頃には上半身裸の状態にまでなっていた。
その晒された身体の首から下の左半身は全てどす黒い。

サイードの、精霊との意思疎通のスムーズさには正直脱帽である。
先程の、精霊にとっては全力の状況説明。あれは、しっかりと精霊の価値観を理解し、魔力や魔法といったものの本質により近い認識が無ければ、恐らく意味不明な言葉の羅列となったことだろう。

――友、頼む。任せた、友

「あぁ。その代わり、俺がどんな行動しても騒ぐなよ？　後、俺はお前の友になるつもりはねぇ」

今だってそうだ。私達には、始めの友も終わりの友も、王子を指していると思えてしまう。
なのに、サイードは当たり前のように会話をし続けていた。
それはきっと、一朝一夜で可能なことではないのだろう。

現に、こうして精霊と会話をするにも魔力が必要なのだ。
何度も精霊と会話をしていなければこうスムーズに事は運べないと、何も苦労せずに進んでいるのではないと、そう感じるのは間違いなのだろうか。

「つっても、原因が魔力の侵食？　だと分かっただけで、どう対処したらいいのかね」

ちなみに、サイードがこの部屋を訪れたからといって、王子の死の可能性が薄まる気配はなかった。

左の掌を最大に、王子からは靄が噴出し続けており、それは今のままでは何の力にもなれないと、それこそ視覚で突き付けられている。

サイードは、自身の持つ知識を洗って、効果的なものが無いかどうか探した。

靄は可能性を示唆するが、恐らくサイードはそれを逆手に取ったのだろう。

可能性が低くなるのに、言動だけが効果を及ぼすわけでは無い。

有効なアイディアが湧き出た時点で、靄は薄くなるはずだ。

半ば確信を持っているサイードは、靄の出所である掌を持って思案をした。

――魔、取り出す。主(ぬし)、吸える？

精霊も、少しでも力になれないかどうか、自分の持つアイディアで問いかけた。

王子を苦しめるのが魔力なのだから、それを取り出すもしくは吸えないか。そんなところだろう。

「魔力を吸い出す？」

すると、サイードがハッとした。そして、ぶつぶつと小声で呟く。ほとんどが誰にも聞き取れないぐらいの声だったが、奪うという単語だけは辛うじて精霊にも伝わった。

「そうか、単純に奪えばいいのか」

そして、何かに行き着いたのだろう。そう言って自身の指輪に視線をやると、今まで変化することの無かった王子の死の可能性の噴出が止まった。

――委ねる

精霊の合図にも似た言葉を受け、サイードの手には愛剣が現われる。

競うものが無い輝きは、何時にも増して美しかった。

「風で一応、押さえておいてくれ」

止めるのを忘れていた為部屋に吹き続けていた風だったが、サイードの意を了承したのか、それは王子とサイードの髪を浮かせつつ周囲を圧迫する。

俺はいい、と言いたいサイードだったが、面倒だったのか気にしない方向で、剣を王子の左の掌の上に垂直に掲げてゆっくりと落としていく。

その切っ先が王子の中へと沈む際、彼の身体は大きく跳ねて苦痛に歪む顔をさらに濃くさせた。

「っ、暴れさせるなよ」

掌から流れ出るのは黒から赤に。鮮やかにシーツを染め上げる血は、王子が生きているということを激しく主張する。

サイードは、精霊が王子をしっかりと固定するのを待ってから瞳を閉じ、剣のポメルを両手で包み頭を乗せて祈るように集中した。

「……う、あ〝ぁ！」

イメージとしてはそのまま、無駄なものを吸い出すように。

男装魔術師と戦った時に魔法を吸収した様に、それでいてより精密に、サイードは王子を苦しめる原因を除去しようとする。

王子は剣が掌を突き刺した時以上に、サイードが魔力を用いてそれを始めた瞬間、か細いうめき声を上げた。

――友、耐えろ

風が狭い部屋をざわつかせ、王子とサイード共に額に大粒の汗を浮かべる。

半裸の身体の黒は、まるで生き物のように蠢いていた。

「うわ、きっつ……」

剣から逃げるようにそれは動くが、サイードは気付かない。思わず素直に零しながらも、瞳は閉じたままだった。

そして、得体の知れない魔力の侵食というものとの攻防は、数分という短い間であったが、静かながらも熾烈を極めたのだろう。

ストローで吸い込むように、王子の身体から剣へと黒い魔力が移動し始めた時には、サイードの顔色は彼程では無いが、ひどく青ざめていたのだった。

――主、終わった

地味な戦いは、精霊の淡々とした合図によって終了を告げた。

「あー……何だこれ。予想以上にきつかった」

精霊の言葉で魔力の使用は止めたサイード。

しかし、暫くは襲ってきた吐き気と眩暈と闘う羽目になり、動くことは出来なかった。

反対に、王子の方は先程までの状態から一変、肌は健康時の色を取り戻し、呼吸も穏やか、明らかに回復している。

――主、剣

精霊も、サイードの疲労などお構い無しだ。

王子の回復に沸き立ち、掌からさっさと剣を抜けと文句をたれる。

無事、お姫様の命令を遂行出来たのは、デルに造らせた剣による偶然の賜物だろう。

こうした使い方も出来ると知れた点では、サイードにとっても素晴らしい事だが、それでも労いぐらい与えてやるべきだ。

「ったく、俺も忙しいっつーのによ」

自身との闘いに打ち勝てたのか、それとも自棄になりかけているのか。

サイードは、精霊が騒ぎ始める前に目を明けながら剣を引き抜く。

その際、一度ふらついていたのだが、動けるのであれば大丈夫だと気にしない事にした。

剣の切っ先からは王子の血が、弧を描きながら持ち主への身体へと落ちていった。

「サービスで、王子の高すぎる魔力も喰ってやったから、起きれる

ようになったら制御（コントロール）の仕方教えてやれ。でないと、魔法くらったら次も同じ事になるかもしれない」

そうして最後に精霊に忠告をし、懐から預かっていたお姫様からの手紙を取り出して王子の胸の上に置く。

その手紙の上で両手を組ませたのは、悪趣味な悪戯であり、ささやかな仕返しだろうか。

――心、礼を。ありがとう

これで役目は終わったと、休む事無く立ち去る背中に掛けられた言葉に、右手では剣を無造作に揺らしながら、左手を挙げて振って答えたのであった。

サイードが、自分の愛剣の変化に気付くのは、塔から出て王城の光が届く場所まで行ってからの事。

王子の身に襲いかかっていた魔力の侵食という現象の正確な知識を得るのは、もっと先の事である。

「あぁ、綺麗だ」

少なくとも、今回の異例とも思えるまさかの他人を救うという行為が、結果的に本人にも喜びをもたらしたのは確かだろう。

剣のブレードが漆黒に染まっている事に気付き、誰にでもなく零しながら空に掲げた時のサイードの表情は恍惚としていて、その姿の方が何倍も美しかった。

同時に、取り憑かれたような危うさもあったのだが、残念ながらそれを指摘できる者は誰も居ない。

そして、サイードはやっと達成できる目的への大舞台を用意する為、ご機嫌で城門へと向かい、３つの尊い命が失われるのである。

手向ける花は花水木

それは、始まりの調べ。終わりの合図。

「こんばんわ、ウェントゥスの皆さん。一風変わった恋文（ラブレター）は受け取って頂けましたか？」

変化の兆しを察した月と星が隠れる中、風の首都全体に柔らかい声が響き渡る。それ程の規模で声を届かせるには、通常何十人もの魔術師が必要だった。

しかも、城壁に群がっていたならまだしも、夜中な今、夢の世界に沈んでいた者達にとっては意味が通じない上に迷惑極まりない。

ほとんどの静寂に支配されていた家々からは、慌てながらも次々と淡い灯り（ランプ）が点り、ウェントゥスは強制的に目覚めさせられた。

「中々、斬新でしょう？　死体とその血で綴った手紙なんて」

惚れちゃうこと確実です、と声は続いた。

その後ろでは、警戒を報せる高音の笛が絶えず響く。

城壁の死体に群がっていた野次馬は、滑稽ではあるが一様に辺りを見渡して声の出所を探していた。

「それで、答えを聴かせて頂きたいと、こうして参上した次第です」

クスクス、クスクス。四方から聞える笑いに人々は戦慄する。

城からは騎士が大勢飛び出してきており、その手には其々誇りが携えられていた。

当然、門は全開である。

ルシエはそれが動き出した際、軽やかに城壁の上の僅かな足場へと移っていた。

風の国の城は、正門は高く聳え立っているが、城壁自体は成人男性の４人分ぐらいの高さで、夜であっても暗闇にはならない城の周囲であれば、注意して見れば直ぐに気付ける。

ご機嫌に鼻歌を歌いながら、手紙が綴ってある上まで行こうとするルシエ。

それさえも首都に響き渡るのだが、誰かの叫び声がアピスでは聴き慣れない歌を遮った。

「あそこに人が！」

綱渡りするかのように両手を広げてバランスを取り、片足分しか無い足場を歩くルシエを見つけたのは、野次馬の１人であった。

「おや、見つかってしまいましたか」

それをきっかけに、ただの野次馬は騒ぎ、騎士は剣を抜き、魔術師に構えるよう命じる声も聞こえる。

始めは怪しむだけだったのだが、一瞬にして緊張感が漂った。

全員が気付いたのだ。

星も月も無い今夜。ルシエの頭上で輝く銀が、この国の希望そのものである王冠だということに。

その中で、野次馬の誰かがサイードだと叫んでいた。

――サイードだ、サイードか

――いや、違う。だったらあれは

――何者だ

――何をするつもりだ

口々に叫び、面白いほど困惑し、群集は混乱する。

その群れは止まる事無く増え、ルシエの口角も比例するように上がっていく。

ルシエは今、素顔を晒してお姫様とのお茶会の時と同じ格好をしていた。

違うのは、腰に抜き身の剣があることぐらいか。

風の民が見たサイードの剣とは変わり、今ではそのブレードは漆黒。だからといって、それがルシエとサイードを別人にさせるわけではない。

それでも、人々は最終的にサイードでは無いと結論付けた。

瞳や髪の色は同一。闇夜のせいで見極められないというわけではなく、しかし、その2人の人物は似ているようで顔付きがまったく違った。

一見大した差では無いが、仮面を取り払った表情と容姿は、サイードの何倍も中性的で性別を思わせないのだ。

そして、周囲の混乱を堪能したルシエは、優雅で美しく右手を胸に当てて左手を剣に添え、ゆっくりとお辞儀をした。

貴族でも出来ないような洗練された仕草。このような状況でなければ、周囲の者を男女問わず全員、虜にしたことだろう。

しかし、ルシエが顔を上げて眼下に広がる景色を見下ろした時、人々は慄く。

「光栄に思うが良い。此処が始まりの場となり、お前達が選択できる猶予が生まれる時」

淡々と、抑揚無く。慈悲も無慈悲もそこには無い。

あまりの人間味が無い声に、その姿を見ていない者達まで声を失い、ウェントゥスは異質な静寂に包まれた。

ルシエはお辞儀をした体勢から城壁の上に腰掛けると、足を組んで腕を支えに顎を乗せ、もう片手は身体の横で壁を掴んだ。

「我が名はルシエ。崩壊と死を導き終焉を告げる――破罪使だ」

リラックスした状態で、薄く色気漂う唇から零れた言葉。それは、未来永劫アピスの歴史に刻まれるもの。

そしてルシエは、さらに体勢を崩して王冠を外しわざとらしく大袈裟に、群集がしっかり見れるよう掲げながら解放の詩を紡ぐ。

旅の始まりは静かに密やかに、陽の国からだった。

だが、ルシエとしての本当の始まりは、今日この夜、この瞬間なのだろう。

精霊と人間、ルシエによる壮絶な戦いが幕を開ける。
そしてその奥で、もう一つ、大きくも小さいゲームがスタートした。

空気が震えた。

お姫様は引き続き、私室の客間で一番好きな紅茶とお茶菓子を楽しんでいた。
普段なら当に寝ている時間であるが、今日ぐらいは構わない。いや、今日だからこそ構わないだろう。
騒然とした状況の城内、しかも今は部屋を煌々とさせようが困らない。

「ふふ、本当に不思議な方だったわ」

ギリギリ足がつくぐらいの高さの椅子に座り、足を揺らして1人で笑う。
視線の先には、誰もいない正面の席へと向けられている。

「私も、好きと堂々と言えば良かったのかもしれないわね」

それでも独り言は止まらない。

つい少し前まで、お姫様は1人では無かった。重要な役を担い、それを全うしたのである。

麗人、というのが相応しいのだろうか。少なくとも、お姫様が知る中で誰よりも美しい人との一時は、身構えていたのが馬鹿らしく思える程に楽しかったと振り返る。

しかし、その表情は微笑みつつも儚く弱弱しい。

「今頃気付いても遅いのでしょう。でも、きっと意味はあった。……ね、そうは思わないかしら？」

そして徐に、お姫様の独り言が誰かに投げられる。

視線はそのまま、優雅にカップに口を付けながら、彼女は背後に気配を感じた。

「お気づきでしたか」

「いいえ、私は武人ではないもの。唯一の友が教えてくれました」

現われたのは、お姫様が待ち構えている者では無かったが、嬉しい人物ではあった。

「さすが、聖女ってとこですか」

その者の言葉に小さく笑ったお姫様は立ち上がって振り返り、予想外の訪問者と視線を合わせるのだが、そこには騎士服とはまた違う、シンプルながら上質な服に身を包んだリュケイムが居た。

「お父様の御用で来られたのでしょう？」

険しい表情をしたリュケイムとは違い、お姫様はとても落ち着いている。

しかし、こうまで落ち着いていられるとは、本人も思っていなかった。

「今すぐお返しするというのであれば、陛下は不問にと」

「なんともまぁ、甘い事。だからお父様は、お兄様に好き勝手されるのですよ」

リュケイムは、道化師でいられなかった。

彼は、主君から少女の真実を聞いてはいたが、所詮忠誠を誓う方の血族でしかないという認識しか持っておらずノーマークだったのだ。

女が恐れるに足る瞬間は、狙いを付けられた時と金に関係する時だけ。そんな風にしか思っていなかったのかもしれない。

ましてや、主君の娘は１０を過ぎたばかりの少女だ。一体何が出来ると思えるだろう。

「貴方もですよ、リュケイム。私など、眼中にも無かったでしょう？」

だから出し抜かせて頂きました。お姫様は、堂々と胸を張って言った。

「精石はもう本来の場所へ。相応しい方の手へ。お返しする事は不可能です」

「なっ！？　貴女は、それが何を意味するか分かって言っているのですか！　子供の悪戯じゃあすまされないぞ！？」

そして、リュケイムの必要な情報を憚る事無く曝け出す。

すると、当然彼は驚愕し憤慨するのだが、お姫様は最後のフレーズに侮辱されたと眉を潜めた。

「あまりに無礼すぎる。私は王女です。身分を弁えなさい」

「……最早、貴女は王女では無くなった」

そうだろう。一連の会話から推測するに、さっそく王冠が盗まれたことに王は気付き、ただでさえ荒れている現在の城内、隠密に対処できるよう私兵であるリュケイムが動いたというところか。

そして、盗んだのがお姫様だと分かったからこそ、こうして彼が部屋を訪れたのだ。

素直に返せば、王位継承権は失うも、その罪は明るみにならなかったかもしれないが、それが出来ないと分かった今、最早お姫様はただの人にもなれなくなってしまった。

「お覚悟を」

しかし、お姫様は反抗も戸惑いも無く堂々としており、その様子にリュケイムは違和感を覚えた。

この空気は知っている。達成感と幸福感だ、と察する。

案の定、その身を預からせてもらう為に差し出した手を、彼女が取る事は無かった。

そしてお姫様は、望んだ相手との繋がりを得る為、最初で最後、自ら戦おうと口を開いた。

「リュケイム、私を」

「姫様！　……何故、貴方がこちらに」

残念ながら、それは突然の乱入者によって遮られてしまったが、礼儀も何も無く大きな音をたてて開かれた扉の先には、お姫様が望んだ相手がいたのだった。

「レイス！」

今までの緊迫した空気から一転、年相応の花の咲く雰囲気にリュケイムは少々困惑した。

同時に、元部下の空気の読めなさに心底呆れるのだが、それも一瞬で、レイスの表情が何時に無く険しい事で何かがあったのだと否応無く気付く。

「夜分遅く、ご無礼をお許し下さい」

「構わないわ。眠れなくて、丁度リュケイム様に相手をして頂いていたところですから」

何も知らないであろうレイスは当然、深夜にいくら幼いといっても女性で王族な方と2人きりになるのは非常識すぎる、とリュケイムに非難の視線を向けるのだが、逆にリュケイムは、お姫様の自然な嘘に舌を巻いた。

「どうかしたのか？」

そして、レイスが話を切り出しやすいよう、自分も装いながら非難の視線を無視して聞く。

本来、王の私兵であるリュケイムにその権利は無いのだが、どうせ隠したところで無意味だと身を持って知っているレイスは、大して戸惑うことなく状況を説明する。

城の周辺で騒ぎがあったこと。それで城内の警備の変更があること。少しばかり騒がしくなってしまうから、侍女を寄越して部屋に護衛を配置させて欲しい事。

騒ぎについては、少女に聴かせるにはあまりに血生臭すぎる為、かなり掻い摘んでであったが、それでお姫様には十分であった。

十分、というのは、その中心にルシエがいるからでは無い。知らなくて良いことだと知るに十分ということだ。

「そして、念の為、御身のご無事を確かめたく」

最後にレイスがそう言うと、お姫様は満面の笑みを浮かべて嬉しそうにしたのだが、その時の彼女の瞳を見てリュケイムは悟ったのである。

気付いているのだ、と。

「分かりました。では、私は後少しだけリュケイム様とお話がしたいので、侍女と護衛はリュケイム様に呼んで頂くわ。寝るかもしれないから、護衛も女性でお願い」

「は！」

そうして、レイスは騎士の礼を取り退室する為背を向ける。その際、リュケイムに向かって意味ありげな視線を投げたのはどういう理由があったのか。

リュケイムもリュケイムで、レイスに射ぬかんばかりの視線を向けており、強さだけでいえば何倍も上だった。

そんな中でも、お姫様の瞳はレイスだけを追っていて、扉のところまで彼が来た時、その目尻にはうっすらと涙が溜まっている。

「レイス」

縋る様な、切ないさえずりだった。

呼び止める声にレイスは振り返るが、残念ながら彼はその変化に気付かない。

「このドレス、以前、貴方が褒めてくれてとても嬉しかったわ」

「……もったいないお言葉です」

意味が分からないと困り顔ながら礼儀で答えるレイスに、お姫様は小さく笑った。

今の彼女の立場を知るリュケイムが、その態度に怒りを抱き、必死で押し留める様に拳を握っている。

「それと、私最近、お手紙を書くのが楽しくて。少ししたら届くでしょうから、絶対に読んで下さいね」

「ありがとうございます」

今度は怪訝な顔をするレイスだったが、余程急ぎなのだろう、そ

れではと挨拶をするとあっけなく去っていってしまう。
消えた彼に向かいお姫様が呟いた言葉は、リュケイムにしか届かなかった。

「約束、ですよ」

男女が2人きりになってしまう場合僅かに開けておくのがマナーだが、しっかりそれがされている事に苦笑しつつ、お姫様は自分で扉を閉めて鍵まで掛け、暫くそこに寄りかかって動かない。
伏せられた瞳と小さな肩は震え、彼女は大事に仕舞っていた大切な気持ちとの決別を済ませる。

リュケイムは黙ってそれを眺めていた。

「……すいません。あまり長いと侍女も不審に思うかもしれませんね」

その背中にあるのは何か、リュケイムは知らない。しかし、振り返った時、お姫様の目元が僅かに赤くなっていたその理由は分からなくもない。
お姫様も、1人の立派な女だったのだろう。
だからといって、彼がすべきことは変わらないし、彼女の真意を探ることは避けられないのだ。

「不審も何も、呼ぶ必要はないでしょう。もうこの部屋には居られないのですから」

そうして連れて行かれるのは牢か、幽閉か。直ぐに断罪されはしないだろうが、その命は風前の灯火だ。
そこからさらにリュケイムは、消えた王冠を探す命を受けるはず

だ。
どうしても話さないというのであれば、拷問さへ厭わない。彼の瞳は、お姫様に明確にそれを伝えている。
しかし、彼女は動かなかった。扉に背中を向けて体勢を変えるだけで、一歩も。
「先程の言葉の続きです」
そして、お姫様の身体からは風が生まれ、部屋の明かり全てを消した。
リュケイムは慌てることなく剣に手をかけ、彼女の動向を見守る。
コツリ。お姫様の靴が床を叩き、リュケイムの剣を握る力が強まる。
コツリ。それでも怯まず、彼女は剣の届く範囲まで歩いて身長の倍ほどある頭上の瞳を見た。
「リュケイム、私を殺しなさい。それを利用して、お父様を困らせる者を貶めるのです」
「っ！？　なりません。貴女にはお話頂かなければいけない」
「どうせすぐに露見する事。私が話す必要はありません」
お姫様の見る金の瞳は驚いている。
同じ色だというのに違う、と彼女は誰かを思い浮かべてリュケイムにさらに一歩近づいた。
「それに、貴方には部下の不始末の責任を取る義務があります」

その言葉に、リュケイムの片足が僅かに後退し掛けた。
元部下です、と反論するもその声は小さい。

「殺しなさい！」

――こんばんわ、ウェントゥスの皆さん

その時だ、2人は不思議な声を聞いた。
まるで頭の中に響いてくるかのように、部屋全体から発せられるように、柔らかい声が脳髄を刺激する。
リュケイムは慌てて周囲を警戒するが、お姫様は逆に、そのタイミングの良さに驚いた。

驚いて、感謝する。

「なら、貴方が死ぬことになります！」

その小さな手にはいつの間にか短剣が握られており、リュケイムがハッと気付き視界で捉えた時には、お姫様は目前にまで迫っていた。
そして、考える前に身体が反応し、腕は剣を抜いて躊躇無く振る。

鮮やかな赤と、透明な雫が宙を舞う。
同じく、小さな身体も飛んだ。

「誓約に従い、叶えたまえ。穢れを無に」

小鳥のさえずりという表現が相応しい声を紡ぐ唇は、痛みを感じていないかのように詠唱して、風がそれに従い穏やかに部屋を包む。

「殿下！」

リュケイムは己の所業だというのに驚き、お姫様が床に落ちる前に抱き止めた。

残念ながら、その身体は脇腹から肩に見事な致命傷を刻んでいて、どうやっても助けることが出来ないことが一目瞭然だ。

何故、と思わず問いかけるが、お姫様は僅かに首を振るだけ。

「お父様に、お兄様の、塔に、行くようにと」

緑の瞳はどこか別の空間を見ながら彷徨い、呼吸は徐々に静かに、小さくなっていく。

外では、謎の声を皮切りに大きな騒ぎが起こっている様子だったが、リュケイムは腕に抱く”子供”のことで頭が一杯であった。

切った時の、なんと柔らかい感触だったことか。主君の命であっても、子供と女だけは手に掛けたく無いと、意外にも頑なな信念を持っていたリュケイムだったが、このような形でそれを破る事になろうとは道化師な彼でも予想できなかったことだろう。

「彼、に、伝えて」

「……なんなりと」

「貴方は、私の、騎士だと」

咳込むと、内側で流れる赤がリュケイムを責めるように迫り上がり、彼の頬を染める。

律儀に主人の指示に従い続ける精霊は、部屋は決して赤を染めさ

せはしないが、彼にはそうしなかった。

「ごめん、なさ、い。貴方を、利用、しまし、た。だか、ら、貴方、も」

一生懸命言葉を紡ぐが、その声は段々とか細くなっていく。目元からは雫が肌を伝い零れて止まらないが、そこには苦しみや痛みはほとんど無かった。

リュケイムが唇を噛み締め、必死にその最期を目に焼き付けようとする中、お姫様は微笑む。

「必ず。必ず無駄にはしません」

お姫様は、小さく何かを囁いて、それを最後に命の躍動を終えた。彼女は、ルシエとの約束を守れたのだろうか。表情はとても穏やかで、きっと彼女なりに精一杯戦えたのだろう。

戦うとは、ただ武力だけで成り立つものでは無い。

「悪いが、お前のご主人の身体を清めてやってはくれないか」

暫く、お姫様の亡骸を見つめていたリュケイムだったが、そっと瞳を閉じさせて身体を抱えたまま立ち上がり、精霊に言った。

その際、己がこんな時でも剣を離していなかった事に気付き失笑していたが、そこは人生を長く歩いている者だ。黙って鞘に戻して、それきりだった。

精霊は、リュケイムに言われるまでも無いと訴えるかのように、彼には激しく彼女には優しく風を起こしてその存在を消した。

「貴女は王族としてご立派に生き、１人の女（レディ）として死んだというこ

とですね」

その人生に敬意と賞賛を。そして、必ずや無駄にはしない。リュケイムはそう心に誓い、これからのことを算段しながら静かに怒りを蓄えた。

お姫様が何を考え王冠を奪い、誰の手に託したのか。まずはそれを突き止めなければならないのだろうが、それは予想外の形で彼女の言葉通りあっさりと露見する。

その際、リュケイムが何を思い考えるのかは、本人の中でひっそりと潜められるのだろう。

――私は、貴女の戦友になれたでしょうか

美しい旋律を奏でるルシエに届いた、音無き声。

それに微笑みで返したルシエは、暫く瞳を閉じて1人の女の為に祈りを捧げた。

屈しない心の詩と風の王

すぅ、と息を吸い吐き出せば、まるで生きているかのように声は踊った。

「その心に眠りし誓い」

お姫様に精石の付いた王冠を渡されてから延々と頭に響き、最早覚えてしまった詩の始まりを口にすれば、掲げる翡翠が明らかに光り始める。

どよめく群集だったが、それは光り出した王冠に対してか、儚く美しい声にだったのか。

「それは正しく絶対の領域」

込められた意味など分からないだろうに、それでも人々はその響きに酔いしれ始めた。

ルシエは目の前に掲げていた王冠を、さらに高く上げながら続ける。

瞳には何も映さず無心でいれば、身体の中の何かが奪われていく感覚がよく分かった。

「司るは敗北に砕けぬ不屈の魂」

風が背中を押すようにルシエの周りをクルクルと舞い、その相手をさせられている髪は徐々に長さを変えていく。
星の代わりに輝く銀は、先端から次第に精石に引けを取らない翡翠を宿し煌いていった。

その時、多くの風に混じり一片の言葉がルシエに届いた気がした。
まるで分かっているかのように、同意するように、ルシエはふわりと微笑み瞳を閉じる。
身体は前回程では無くとも十分に疲労を抱き始め、瞳もまた鈍痛を感じていく。

「纏えば絶対の鎧として」

静まり返った首都に響き続ける声。
天使の歌声だと賛辞を贈れるのは何も知らないからこそで、次からは悲鳴と争いの中での無慈悲な鎮魂歌にしかならないかもしれない。

ルシエは、大きくなっていく疲労と苦痛に顔を歪めそうになるのを必死に耐えながら、それでも紡ぎ続けた。

「翳せば守りの盾として」

そして、小さな小さな戦友に宛てた祈りを止めて瞳を開こうとした時、一際大きな激痛がそこを襲った。
頬を何かが伝うが、涙で無いのは確認しなくても分かる。

「放てば打ち砕く刃として」

風の伴奏に、人々の悲鳴が加わった。

黒だった視界はうっすらと赤みを帯び、消える気配の無い激痛に思わず片目を押さえれば、掌にはヌルリとした感触がある。
一体それは、誰から溢れたものなのか。

「それは他が為に背を押さん」

ルシエの瞳からは涙の代わりに血が流れ、白い頬を不気味に染める。
その光景に人々がパニックに陥るが、ルシエは見下ろすだけ。そして、見つめられるだけだ。
向けられる視線は畏怖、恐怖、困惑、警戒。色々あれど、全てが黒い。

しかし、見つめられる側は、何処にどういった瞳を向ければ良いのだろう。
見下すにはあまりに対象が多すぎ、見つめ返したところで、何かを得られるわけでもない。

微笑は、失笑へと変わった。

解放の詩の最中、別の単語を入れる事は出来ない。
その為、声に出さずに紡がれるが、託されるのは嫌いです、唇はそう言っている。

掲げる王冠を支える片手が傾いでいき、疲労と痛みは最高潮に。
それでも毅然と振舞うルシエの掌から、王冠は滑り落ちていった。

腰にまで伸びた髪は、夜空を飾る風のカーテン。落ちていく様を眺める瞳は、翡翠の秘宝。

群集は、落とされた王冠を受け止めようと、混乱しながら必死に天へと手を伸ばす。
誰かの指が掠めそうになった時、最後の一節が降り注いだ。

「再び己が手で吹き荒べ」

王冠を飾る希望が砕けた瞬間、人々の目を強烈な閃光が襲った。
そして発生した暴風が悲鳴もその持ち主すらも一掃し、城壁に座るルシエの目の前には、深緑の長いローブにフードを被り全身を隠して僅かに俯く者が浮いている。

しかし、ルシエは驚かず、自身も痛む身体に鞭打って立ち上がり、謎の人物と向き合う。

「初めまして、風の王」

「……お前が、矛盾する者か」

風の王と呼ばれた者は、低音で腹に響く声で呟いた。
その声やルシエの頭2つ分ほど高い身長からして、恐らく男になるのではないか。
陽の王とは違い高飛車な態度は今のところ感じられず、ルシエはこっそりと安堵する。

「矛盾する者？」

しかし、聞き慣れない言葉に首を傾げた。
風の王は、まさか知らなかったのかと言いたいのか、可笑しそうに肩を揺らせた。

「内に秘める心と正反対の行動を進んで行い、一人涙するのだろう？　それを矛盾と言わずなんとする」

ローブの隙間から伸びた腕は、しっかりとルシエを指差した。その指の先にある爪は異様に長く、それだけで凶器となれそうだ。

ルシエは示された場所に無意識に手を触れ、それが血の涙だったことに気付く。

馬鹿にされていると分かるには、それだけで十分だった。

一瞬にして剣呑な表情に変わり、腰の剣を抜いて空へと駆ける。

そこまで怒りを抱く理由など無いはずなのだが、何かが癪だったのだろう。その迫力は鬼気迫るものがあった。

しかし、黒の刃は風の王を捉えることが叶わず、鈍い音を立てながら見えない壁に阻まれる。

その際、反動か衝撃でフードがパサリと落ちていった。

ルシエが初めて見た精霊王は、人間に似た造りで、人間には到底勝てない完璧な美を有する容姿をしていた。

切れ長の瞳にルシエよりは長いが無造作な髪は翡翠そのもので、大きな特徴として鋭く尖った耳がある。

どう見ても男ではあったが、それでも誰をも虜にしてしまいそうな冷徹な美。

何より息を呑んだのが、切れ長の冷たい瞳に填められた翡翠の輝きの奥だった。

その美しさは、世界屈指の詩人でも芸術家でも無理かもしれない。

そこで煌く本質が、何より美しいかった。

瞳は心を写す鏡だと誰かの名言があるが、風の王が澄み切った心を持っているからそう思えるのか、それとも絶対的な力があるから

かは、その感情を抱いた本人であっても理解出来ないのだろう。

「黒の天使は白い悪魔ということだな」

風の王は、まるで甘噛みでしかないと、軽く手を振って作り出した風で吹き飛ばす。

危うく城壁に激突しそうになりながらも、ルシエは間一髪で免れて風の王を睨みつけた。

最近好んで良く使う風の加護であるが、その頂点には所詮敵わない。

自身を落ち着ける為に深呼吸したルシエは、見下ろしてくる氷の視線に舌打ちしつつも、体勢を整えて改めて風の王と対峙することにしたようだ。

足を再び城壁の上に下ろし剣を指輪に戻した。

「聖女がお好みだったら、残念ながら楽しめないだろうし、好きにすればいいよ」

「……全ての王と契約しなければならないと聞いたはずだが？」

「興味無い。解放出来ればなんとかなるでしょ」

しかし、謙るつもりは無いらしい。陽の王の言葉は当然覚えているが、絶対と言われてないのだからと、元々精霊王と契約を結ぶつもりが無かった。

痛い思いは、解放の時だけで十分だというのが本人の言い分である。

風の王は予想外の発言に驚いたようで、僅かに片眉を吊り上げるが、それが本心からだと分かると笑った。
冷笑さえ美しいとは、精霊王とは恐ろしい。

「気に入った。気に入ったついでに、お前の思う自身の役割を見せてもらおうか」

まさかの反応に、ルシエはあからさまに嫌そうに顔を顰めるが、無言の訴えは悉く無視されて諦めるしかなさそうだ。
深く溜息を吐き、頭を抱えつつも唐突に跳躍して風の王同様空に浮かぶ。
そのまま高度を上げてウェントゥスが一望できる所まで行くが、風の王も黙ってついてくる。

「どうせなら、盛大にいこうか」

「少なくとも、翼は黒いようだな。では、その前に契約といこう」

風の王は、至極ご満悦でルシエの顎を掴んだ。
そのまま無理やり視線を合わせられ、そこでルシエが見たのは、舌なめずりをして背徳な感情を抱いている王の顔だった。

ああ、彼は人を嫌悪している。ルシエは感じた。
それと同時に、ゾクリと恐怖とはまた違う何かに全身が震える。

「男のような女を襲っているのか、女のような男を襲っているのか。……不思議な気分だ」

「はは、好きなように捉えて良いよ」

風の王の言うように、その光景はとても甘美で幻想的だった。
言うなれば、人の辿り着けない領域の住人の逢瀬。

ルシエが笑うと、血色の悪すぎる風の王がゆっくりと近付いていく。
冷たい吐息が肌を刺し、血の涙の跡の残る白い頬が淡い赤で上気する。
そして、風の王の唇は目的の場所に触れ、そこから真っ白のおぞましい牙が覗いた。

「耐えろよ」

唇はルシエの喉元を優しく撫でながら、その牙は容赦なくそこに喰らいつく。

「がっ……は」

それは器官まで達しているんだろう、声にならない声がルシエの口から漏れ、目が零れんばかりに開かれるが、風の王は逃さないと細い肩をしっかりと掴み、長身を窮屈そうに曲げながらルシエの内に流れる赤を奪う。
自分の液体が吸われ、嚥下される音が耳に響いた。

契約を行うとは思っていたが、まさかこんなことをされるとは露ほども思わなかっただろう。
身体の横で大人しくしていたルシエの腕の先、指が何かに縋るように動き訴える。
しかし、失う代わりに陽の王とは比にならない力で満たされていくのも感じていた。
あの時陽の王は、力の一部を分け与えると言っていたが、ルシエ

は本能でこれは違うと気付いた。

「ち、ちから……力、だけ！」

全力の非難は、風の王の貪りの前ではひどく無力であった。
必死に逃れようとしても、現在進行形で大量の血を失っている身体ではか弱い抵抗しか出来ず、一際大きな嚥下の音が聞こえる。
繋がりが築かれ、血という自分自身を分け与える儀式。

「もう遅い。私は共に行くことにした」

喉元から聞こえたくぐもった声は、ルシエの一番の味方である孤独をあっさりと奪うのだった。
そして、その身体、心臓の辺りから翡翠の光が発し、月の代わりに夜を彩る。
それは牙の刺さる箇所に吸い込まれるように集中しながら、発光を止めない。

ひゅうと喉が鳴り、解放の時や喉に喰らいつかれた時の何倍も強い痛みがルシエを襲った。
大きく開かれた目尻からは生理的な涙が零れ、無意識に痛みの原因である風の王を引き剥がそうと、滑らかな髪をわし掴む。
先程は貧血で力が出なかったというのに、風の王はその強さと痛みで僅かに顔を歪めた。

「……契約を」

それでも、風の王の選択は揺るがないらしい。
ルシエの腰に腕を回してさらに引き寄せ密着し、血色の悪い唇を血で飾って自然な動作のキスで促している。

必死に首を振って拒否するが、自身の赤で汚された唇は本人の意志を無視して言葉を発した。

「我が生み出す風となり、荒らせ。名はルシエ、縛る者なり」

「我が主、ルシエ。終焉を見届ける代償に我を縛り、我を使わん」

傷ついているはずの喉は滑らかに震え、契約は成立した。

風の王は満足そうに微笑み、その妖艶さにルシエもつられて引きつった笑みを返す。

それに感心した風の王だったが、その表情は妖艶から試すようなものに変わり、抱き寄せていた身体を大袈裟に突き飛ばした。

「私の役目は終わりだが、お前はまだだぞ。最後が一番キツいはずだ」

契約の儀式の際、精霊の加護はとっくに切れており慌てたルシエだったが、風の王の忠告に驚く。

「え？」

そして説明を求めようと声を出したのだが、後が続かなかった。

突然、心臓が飛び出たいと訴えるかのように強く脈打ち、思わず仰け反る。

未だに淡く光りを纏う身体は、首都全体を染め上げた。

「――あ〝あああああ！」

まるで爆発するような発光の中心で、凡そ人とは思えない悲鳴が

聞こえた。
途切れる気配を見せない光と悲鳴。それを腕を組んで満足そうに眺める風の王の瞳は熱く滾っており、唇に残った血を舐める仕草は欲望で渦巻いている。

そして、光は弾けた。

この日ルシエが払った代償は、今まで奪ってきた分のものだったのかもしれない。
しかし、だとしたら、捧げた分は一体どこに消えたのだろう。
等価交換が成立するものなど、極々限られた事柄だけだ。特に心に関するものは、期待する方が馬鹿なのだろう。

誰かが語る。
――あれは人だったと

誰かは語る。
――あれは人ではないと

「最悪なんだけど」

首都に降り注ぎながら静まっていった光の頂点で、ルシエの声が聞こえた。

「だが、力の差は歴然だろう？」

くつくつと笑う風の王に、ルシエは首元を摩りながら舌打ちをして寄り添う。
その顔色は、青いどころか今まで以上に健康的であり、先程までの苦痛の色も喉の傷もない。

風の王の言葉通り、ルシエの体内では今、爆発しそうな程の何かが蠢いていた。
手を握り開いてを繰り返し身体の具合を確かめる瞳は翡翠に染まったままで、髪も同じく変わったまま。
そんなルシエと風の王が並んで浮かぶ姿は、兄妹にも見える。ただし、悪魔の、が付くだろう。

「気に入ったのだ、諦めろ」

兄に我侭を言おうとする妹を窘めるようなやり取りさえ、とても美しく異質だ。
風の王は意地悪く笑い、眼下に広がるウェントゥスに視線を移す。
ルシエも仕方が無いと、一つ溜息を吐いてそれに倣った。

そこには、見る限り平和な日常の世界がある。
しかし、城壁の手紙から始まり一連の騒動で騒然としているはずだ。
それでも、かなり上空に居る2人の周囲はとても静かであった。

「始まりは盛大に」

「何人生き残るか楽しみだな」

一体何をしようとしているのか、佇むだけの2人からは予想が出来ない。
それでも、首都に暮らす人々にとっては碌な事では無いはずだ。

ルシエが新しい力を得て初めての詠唱は、歌となって風の王の心を躍らせた。

右の瞳は陽の赤、左は風の翡翠。髪は翡翠のままで、長さがゆっくりと足首にまで伸びる。
神のような美しさと魔王のような冷気を纏うは、破壊の使者とその僕。

ルシエの魔法によって現れた火は風を自在に変化させ、同時に生んだ風は火を激しくさせていく。それが合わさる時、それは姿を現す。

「安らぎの旅路を」

「そして祝福を」

合わせる様に呟いた2人は、逸らす事無く作り出した光景を見つめた。

ルシエが陽と風の精石を破壊した際、犠牲はあまり出ていない。
しかし、それでは生ぬるく足りないとルシエは言う。
消えた精霊の分だけ、それに見合った魂を。被害を受けた地球の分だけ破壊を。
そうしなければ、何の為に自分が居るのか。何のために、此処に来たのか。

世界の危機を招いたアピスの人々に償いを求めたいわけでも、裁きたいわけでも無いが、それでも精石が壊れた事で抱く絶望だけでは、ルシエの気は治まらないらしい。
公平も平等も皆無、いつだって無情な世界の中で、その考えはとても愚かでしかないだろうが。

「それでも、人間が特別なんじゃない。人間以外が、特別なんだ」

「はは！　それをお前が言うか」

特別なお前が、そう囁く風の王にルシエは何も返さなかった。いや、返したのかもしれない。

しかし、それは首都に響く轟音によってかき消されて誰の耳にも届かなかった。

「人間は所詮、神の玩具でしかない。だけど、神も人間の玩具」

ルシエと風の王の足下では、大きな炎の鎌がウェントゥスを容赦なく刈り取っていた。

2人は、奪った実感も罪悪感も持たず、魔力の喪失感だけを抱えてそれを眺め続けるのである。

精石は残り8個。

それまでにアピスに人間は、どれだけ残っていられるのだろうか。

『その心に眠りし誓い
それは正しく絶対の領域
司るは敗北に砕けぬ不屈の魂
纏えば絶対の鎧として
翳せば守りの盾として
放てば打ち砕く刃として
それは他が為に背を押さん
――再び己が手で吹き荒べ』

屈しない心の詩と風の王（後書き）

これにて、風の国編終了です。

今回はある意味始まりでもあったので、丁寧に書こうと思った結果、陽の国編に比べ大分長くなってしまいました。

ギャグの無い物語ではありますが、大人のファンタジーとしてこの先も楽しんでいただければと。

よければ、ご意見・ご感想をお待ちしております。

もういいかい、まーだだよ

誰が悪かったのか。
誰が原因なのか。

人は、予想外の出来事に遭遇した時そうやって嘆く。
しかし、分かったところで何もならないだろう。探ったところで、元には戻らない。

なら、何故人はそれを望むのか。
それは、自分が無関係でありたいから。自分だけは正でありたいからだ。

では、正とは一体何なのか。
正義とは、果たして人に何を授けてくれるのだろう。
それを求める者こそ、限りなく悪なのではないだろうか。

正と悪。人とヒト。
それが、人の作り出した世界だ。
仲間外れの動物の、異端な生物の絶対。

ホモ・サピエンス。知恵のある人。
人間はいつしか、自らをそう定めた。

しかしその知恵とは、生きる為のものだろうか。それとも、個々の存在を示す為のものか。

必要で、不可欠なものなのだろうか。

きりの無い謎の問いの答えには、辿り着けることはないと思う。

そもそも、このような疑問を抱き考える事自体、細胞の無駄遣いなのであろう。

生きる事に意味を求めることこそ、無意味なのだから。

ルシエは黙々と、長閑な平野を歩いていた。

国によってその気候が様々なアピスは、決して旅に優しい世界とはいえない。灼熱の地もあれば極寒の地もあったりと、差が激しいのだ。

しかし、今居る国はとても穏やかで、その足取りを軽快にさせる心地よさがあった。

ただ、天候は曇り空。今のルシエの気分を表しているかのようである。

「何時まで不機嫌でいるつもりだ」

何より、今までの旅と違うこと。それは、同行者が出来てしまったということだ。

いつもの全身黒のスタイルのルシエが振り返った先には、深緑の

ローブで同じように顔を隠したかなり長身の男がいた。

「ゼフが要求をのんでくれるまで」

男を見る金の瞳は怒りで燃えている。

しかしゼフと呼ばれた男は、肩を竦めるだけで相手にしない。

あからさまな大きな舌打ちすら効果を成さず、ルシエは再び前を向いて歩き出した。

風の国での精石の解放から、既に1週間が経過している。

ゼフと呼ばれた男、彼はその間に出会ったわけではなく、風の国を出る時からずっとルシエと共に居た。

彼は風の精霊王だ。

「私はお前の行く末が見たくて契約をしたのだ。なのに、傍に居なくては意味が無い」

「何度も聞いた。でも、それだったら、絶対に契約に同意してない」

2人はその間、このやり取りを何度も繰り返していた。

そして、お互いが一歩も引かずに平行状態が続いている。

あの時、風の王がルシエと結んだ契約は、その魂までをも縛りかねないとても強力なものだったらしい。

お互いが何かを代償にし、決して違えることのできない呪いじみた契りが交わされるもの。

ルシエは血液と孤独を、風の王は時と力を差し出し、それは結ばれた。

だから、陽の王とは比べられない力をルシエは手に入れられたのだ。
まあ、本人はただの契約と思っていたから、不本意で詐欺紛いだったことは否めないが。

ちなみに、ゼフとはルシエが風の王に与えた名である。正式にはゼザルフで、一々風の王と呼びたくないからと、名が無かった彼に与えたもの。

それもまた、お互いを縛る契約の一端になってしまうのだが、ルシエは気付いていない。

「だから、せめて普段はどっか消えといてってこっちの要求ぐらいのんでよ」

「私はお前の」

そして、この有様である。
しつこいと、ゼフが先程と同じ言葉を言いかけたので、ルシエは溜息でそれを止めた。
精霊王は精霊でありながら、恐ろしい程の力を持っている。
そのお陰か、実体で人の目に映ることが出来るのだが、当然本来の精霊として存在することも可能だ。
ルシエは、契約については諦めることにしたが、常に共に居られることだけは嫌がっているらしい。
逆にゼフは、そうでなければ深い契約を交わした意味が無いと言う。

結局は、どちらかが妥協するか我慢し、慣れるしかないのだろう。

「あー、この前からほんとついて無い。陽の国で運全部使い切ったのかも」

「仕方が無いだろう。本来、一番最初に水を解放しなければいけなかったのだ。アレは放置されることを嫌う」

麻袋を一つ肩に持つだけのルシエと、荷物を持っていないゼフ。そんな2人の旅路は、ぽつぽつとたまに会話をするだけの静かなものだ。

頭の後ろで手を組んで、空を見上げながら歩くルシエが零した言葉に、ゼフは律儀に諭してやっている。

「だからって、精石のある国を素通りするってのもなぁ」

「物事には順序がある。それにお前も、万が一の為に治癒は必要不可欠だと言っていただろうに」

どうやら、次に目指すのは水の国のようだ。

ただ、風から水の国は徒歩で2ヶ月はかかる道のり。ゼフの力を借りて、それを半分にできるといっても、ルシエにとっては大きな痛手である。

乗り合い馬車を利用するとしても1ヶ月半はかかるので、それでも大分早いが、本人はそれでも許せないらしい。

そもそも、本当は水の精石の解放が始まりになるはずだったのだが、その理由は難易度と必要な魔力の他に、水の精霊王が治癒に強いという点にあった。

その必要性を身をもって重々承知しているルシエは、上手い反論が浮かばない。

ウィーネ杯で大斧使いに受けた傷も、レイスにつけられたものも、何とか治癒することは出来たが、大分魔力を消費したのだから。

その事を思い出しつつも、それでも割り切れないのだろう。

「急がば回れって、余裕があればこそじゃないのかと思うよ」

「駄目だ」

足はしっかりと動いていても、口から出るのは不平不満ばかり。

ゼフは、ルシエの細い背中を見ながら溜息を吐いた。

「焦ったところで、意味は無い。それに……」

気付けば、ゼフが足を止めていた。

そして、何かを言いかけて口を噤む。

ルシエはゆっくりと振り返り、フードの奥の陰に潜む翡翠を見上げる。

「それに、何だよ」

サイードの瞳は笑っていた。

何故ここで、ルシエはサイードになったのか、ゼフには分からない。

しかし、何かしら意味があるのだろう。

「いや、何もない。行くぞ」

数秒、黙って見つめ合った2人だったが、ゼフは首を振って再び

歩き出した。
結局その先を言うことは無く、それでもいつの間にか、無意味な押し問答は深い部分へと侵食していきつつある。

「ねぇ、ゼフ」

横を通り過ぎるゼフを横目に眺めながら、鋭さを消してルシエに戻り、自分と違う広い背中に苛立ちと羨望を抱く。
そして、開いていく距離を無視して言葉を投げた。

「出し抜かれるつもりも、使われるつもりも無いよ。同情も懺悔も、後悔も歓喜だってしない。終わりには、笑って馬鹿にするつもりだから」

「……」

何の反応も返さないゼフだったが、ルシエはそれで構わないと先程までと違っていくらか軽い足取りでその背を追った。
きっと、ルシエはゼフを嫌いではないのだろう。でなければ、どれだけ強制をしても彼の同行を許すはずがない。
それに、2人の雰囲気はどことなく似ている部分があった。

多くは語らず、何も明かさず、それでも所々でわざとなのかその一端を覗かせる。
2人はきっと味方では無い。
しかし、敵にもならない気がする。

「君の雰囲気は好きだよ」

ルシエは、憚ることなくそう言って、ぴったりとゼフの後ろを歩

いた。
そして、居るのに居ない、そんな不躾に自分の世界に侵入してこない無関心さが好きだと言う。
他が聞けば、ある意味赤面してしまいそうな言葉であるが、ルシエの様子から他意は無い。
ただ、次にはその瞳に鋭さが戻る。

「だから、特別に言っておく。最期に笑うのは、絶対に俺達だ」

「意味が分からん」

本当に、ルシエの言いたい事は謎だった。
ルシエになったりサイードになったり。不思議なのは、リサーナが出てくることがほとんど無いこと。
格好が関係するのかどうかは謎だが、好き勝手に言い切って、ご機嫌な様子で足に風を纏って駆け抜けて行く。
その魔法の洗練さは、以前の比では無い。やはり、王の力は桁外れなのだろう。
ゼフは、風と戯れるように恐ろしいスピードで走っていくルシエの背中を焦ることなく眺め、ポツリと呟いた。

「サイード、リサーナ、ルシエ。お前は一体、その中の誰に居るのだろうな」

お前とは、果たして誰を指すのか。
囁いたゼフは、静かにルシエの後を追う。

その後、結局ルシエは水の国へ行くことにもゼフの同行にも不満を表すことは無くなったが、その代わり、彼に対して遠慮も消えた。

すると、ゼフはあまりの自由すぎる行動に、少なからず契約は早まったかと後悔する事になるのだが、それがルシエの計算の内かどうかは不明である。

――誰にもあげない、誰にも教えない
――最初に気付くのは、一体だーれだ
――早くしないと、泣いちゃうよ
――みんなみんな、泣いちゃうよ

――もう、いいかい？
――まーだだよ

その旅路の最中で、度々ルシエと戯れる精霊の歌は、とても不思議な旋律で響いていた。

雨音は聴く

ゼフとの旅に気持ちの折り合いがついてから1週間、つまり、風の国を発ってから2週間が経過していた。
この間に目立ったトラブルは無く、2人の旅路は気味が悪くなってしまうほど平和である。
それとは反対に、アピスには小さくはない不安が広がっていた。
当然だろう。この世界の人の要ともいえる精石を破壊できる輩が突如現れ、一国の首都を壊滅状態にしたのだ。

破罪使ルシエ。

犯した罪と共に、どの歴史書にも文献にも載っていない精石を破壊する悪魔として、その名は瞬く間に世界に広がり恐怖を生み出した。

しかし、広まったのは名だけである。
どういった人物か、どんな力を持っているのか。そういった細かい情報は、噂の域を出ない不確定な憶測でしか無い。
ある酒場では、ドラゴンと人の間に生まれた子供だったと囁かれ、ある国の重鎮の耳には、風の国が流した戯言だと報告が行き、可笑しな混乱ばかりが人々を襲う。

「これはこれで滑稽だが、少し物足りないな」

「何がだ」

そしてその張本人であるが、サイードとゼフは、風と水の国の丁度中間に位置する大地の国の小さな村の宿屋の酒場で、食事を取りつつ酒を楽しんでいた。

とはいっても、精霊であるゼフに食事は必要無い。実質、久しぶりにベッドで眠れるとご機嫌なサイードの相手をさせられているのだ。

「こうやって顔を晒して少し愛想を振っていれば、誰も怪しんだりしないだろ？　騒ぐだけ騒いで、結局は他人事でしかないってわけだ。そんな姿をしているゼフにさえ警戒しないとか、どんだけ目出度いんだろうな」

クツクツと、笑いながらグラスを傾ければ氷が鳴る。

酒場の店員である女性に軽く手を振って無駄に気を引くサイードを見ながら、ゼフは大きく溜息を吐いた。

アピスでは、あまり旅人が存在しない。

ギルドを渡り歩く冒険者か、街に住めない事情がある者、吟遊詩人か旅芸人。そういった特別な職や立場の人間以外には、好き好んで望む者は居ない程である。

だからこそ、不安に思うなら尚更、怪しまなければ可笑しいはずなのだ。

風の国の首都ウェントゥスは、原子爆弾を投下されたが如く、多くのものを失った。

突如出現した炎と風で出来た死神の鎌は、ある意味平等に多くの

魂を刈り取り、消滅する際に生じた熱風は多くの身体をその想いごと燃やし尽くした。
建物は崩れ、その瓦礫までもが命を奪い、最終的な犠牲者はウェントゥスの人口の半分近くに及んだらしい。

それをたった1人、ゼフを入れても2人で引き起こしたというのだから恐ろしいのだが、まさかそんな連中が暢気に酒場にいると誰が考えるだろうか。

「しかし、ここまでくると、風の国が何かしら動いていると構えておくべきだろう」

ゼフの忠告はまったくもってその通りだったが、サイードはハッと鼻で笑う。
そして、一気にカップを空けつつ次を頼みながら頬杖をついた。

「首都は半壊、大事な王女は暗殺されて、次男は王座を狙い続け？それでさらに、俺等を追うなんて無理無理。追ってくるとすれば、自由に動ける私兵か、自分の使命も立場も忘れた馬鹿な騎士ぐらいだろうよ」

ヒラヒラと手を振りながら否定したサイードは、運ばれてきた3杯目をあおって体勢を椅子を傾けるものに変えながら、カラカラと笑う。
アルコールが入ったからか、いつになく饒舌である。

逆に、カランと氷のぶつかる音とアルコール特有の臭いが、ゼフを苛立たせた。

「しかし」

「お前は固すぎ。もう少し気楽に楽しく、面白さを追求していってもいーだろ？」

頼んだばかりだというのに、サイードはさらにもう一杯注文して、グラスの中身は氷のみに。目元は僅かに赤味を帯びているが、その顔色は病人のように青い。

２人の座る窓際の席の外では、雨がシトシトと静かに地面を濡らしている。

サイードはその光景を眺めらながら、ふと、懐かしい事を思い出した。

誰だったか昔、雨を空の涙と称した人が記憶の中に居た。雪が溶ければ何になるかと問い、春になると教えてくれた馬鹿な人。

その時の瞳は、サイードでもルシエでもなく、どことなくリサーナに近かった。

「サイード」

「んー？」

ゼフは、そんなサイードの手にある４杯目を見ながら、雨音に消えてしまいそうな程静かに口を開く。

呼びかけられても、サイードの視線は窓の外に向けられたままだ。それはまるで、喪失感を抱いているような、懐かしんでいるような切ないもの。

誰だったかも忘れてしまった儚い想い出は、その心でそっと仕舞われているのだろう。

中々次を言わないゼフに視線を戻した時は、自分が抱いたそれに

馬鹿らしさを覚えたのか笑っていたが、その姿を見ていたゼフの視線は鋭い。
フードの暗闇の中で、翡翠が怪しく光っていた。

「後悔しているのか？」

責めているのか、揺らぐなと言っているのか。
本人にはそのつもりが無くとも、哀愁漂う雰囲気がゼフを不安にさせたのかもしれない。

「何に対してだよ」

「風の国に傷をつけたこと。もしくは、こちらの世界に来たこと」

サイードは、馬鹿にされたものだと眉を寄せて、強めにグラスを置いた。
反動で跳ねた中身で自分の手が汚れ、さらに苛立ち、行儀悪く舐めながらゼフを睨む。
1週間前、確かに言ったはずだと訴えても、改めてゼフは言葉を望んでいた。
それを受け取り、サイードは思わず出そうになる言葉を呑み込む様にアルコールを再び喉に流す。

「くだらない。俺は、自分の意志でここに来た。目的も立場も理解して。殺すことに関しても、それがどういうことか分かっているつもりだ。その上で心は動かない。それが後悔していることになるのならそうだが、違うだろ？」

唇に残る後味を味わいながら、サイードは心地よい酔いを楽しむ。
そして、ゼフの反応を肴にする。

純粋にその味を楽しむ時に、精霊の力を借りる等無粋もいいところで、今日のサイードは当たり前にアルコールの成分を身体に入れていた。

「それとも、真っ当な理由が欲しいのか？　それで安心するなら、教えてやら無くもないぞ」

「……理由があるのか」

ゼフは意外そうに声を揺らした。

「当然、好きなものを守りたいからさ。……なんて、結局は私利私欲だな」

「そうだと思った」

サイードは、ケタケタと楽しそうに笑ったが、だけどよと続ける声は珍しく真面目な雰囲気がある。

そして、守るなんて想いは、救うなんて志は、自分の行動を正当化させるだけのものだと言った。

その瞳はとても冷たくて、寂しい。

「結局、守る為と奪い、大勢を救う為とひとつを切り捨て、そうやってこの世界の今の状況が出来上がった。本当にそれが綺麗な感情だったとしたら、こんな結果にならなかったと俺は思うね」

「綺麗な感情など、どこにもないだろう」

確かに、と大きく笑ったサイードだったが、その後には暫しの沈黙が落ちた。

サイードの言葉は例えれば、命を守る為に盗賊達は金品を強奪し、それを断罪し救う為に騎士が剣を持つといったことだろう。
アピスでは特に、そういったものが如実に現れている。

地球のように殺人があれば科学を用いて真相を暴き、日本のように警察官が誤発砲したところで、面白おかしく騒ぎ立てられたりはしない。
しかし、それは地球が優れているだとか、文明の差ではなく、単純に長い歴史の中で人が築き上げた社会の理（ルール）の違いだろう。

「俺は、もう十分染まった」

ポツリと零した言葉には、決別があった。
ルシエは地球を壊されない為にアピスに居るが、奇跡というものが万が一起こり帰還が叶うとしても、以前の様には生きられないと言う。

それだけ短期間で多くの死に触れ、剣を振ってそれを招きすぎたということだろう。

「俺はこの先、邪魔だと認識した奴を殺めずにいる自信は無い。例えそれが、禁忌に近いものだとしてもな。そして、大嫌いなこの世界でせめてもと、楽しみを見出すだけだ」

「だから、遊ぶというのか。お前、今のままだと、近いうちに足元を掬われるぞ」

「くっ、はは！　ゼフ、お前酔ってるのか？　それともまさか、心配してくれてんのか」

ゼフは、この会話でサイードが別段悲しみや憂いといった、今後の足枷になるかもしれない感情を抱いているわけでは無いと悟ったのか、安心した素振りを見せて忠告をする。
しかし、サイードは真に受けず、仕舞いにはからかわれ、馬鹿な事を言うなと貶してゼフはそっぽを向いた。

ただ、安心と同時に危うさは消えない。
人や世界を捨ててまで貫き通せる信念の固さの代わりに、その奥の精神はどうなっているのか。
ゼフは、言葉にならない胸騒ぎを覚え、視線を合わせずポツリと零す。

「自分を、見失うなよ」

「……善処するさ」

カラン、と氷が鳴る。
雨は勢いを増し、激しく窓を叩いていた。

その後、サイードが酔いつぶれて眠ってしまうまで、2人に会話は無かった。

ルシエは夢を視ていた。
誰かが自分の頬に触れ、くすぐったい吐息が耳を襲う。
しかし、抱くのは甘い刺激ではなく嫌悪だ。
触るなと、お前じゃないと心がざわつく。
それは一体、誰の感情なのか。

「逃がさないよ」

そう囁く声を、ルシエは知らない。

「――っ！」

「……起きたか」

激しい頭痛と悪寒が、心地良い闇からルシエを引きずり出す。
その痛みは一瞬で、ベッドから飛び起きたルシエが瞳を開けば、月明かりに照らされながら窓際で風に当たるゼフが居る。
開け放たれた窓の外では雨が上がっており、独特の湿った匂いが部屋に満ちていた。

「寝ぼけているのか？　飲み過ぎて寝たお前を運んだ私に、礼を言って欲しいものだ」

額に手を当てゼフを見つめるだけのルシエに違和感を覚えたのか、ゼフは立ち上がって傍に寄りながら問いかけた。
ルシエは、その言葉に記憶を漁る。
そして、額の手を目元に移して俯きつつも首を振った。

「寝起きでぼーっとしているだけ。大丈夫」

すると、ゼフはさらに怪訝な顔をして、ベッドの端に腰掛けながらルシエの顎を取る。

「お前、今誰だ」

「は？　どういう……」

2人きりの部屋で、ゼフもサイードも顔を隠す必要は無い。
なので、普段はしっかりと被られているフードは首の後ろに落ちていて、月の光も霞んでしまうぐらいに美しい翡翠がはっきりと見て取れる。
そこからは何も読み取れず、ルシエは問われた言葉の意味が分からなかった。
そして、次第に意識が吸い込まれてしまうように瞳の色が消えていく。
異質な美を放つゼフの顔は僅か数センチ先にあり、血色の悪い2人を照らす月光はまるで必死にその命を引き止める祈りのように降り注ぐ。

「サイード！」

ルシエの異変を感じたゼフは、珍しく声を荒げて最も自己主張の激しい人格であるサイードを呼び起こした。

その声で、色の消えた瞳に鋭さが宿る。

「わりぃ、やっぱ飲み過ぎたみたいだ。顔洗って、頭覚ましてくる」

ハッとして顎を掴む手を払いのけ、サイードは緩慢な動作で起き上がった。

しかし、ゼフを解放した際に一時的に回復した顔色は、酔っただけにしては限界まで青白く、まるで生気が根こそぎ奪われている様だ。

サイード自身、身体が悲鳴を上げているような、中身が外側から揺らされているような、そんな気持ちの悪い違和感を覚えているが、それを口に出すことなく険しい顔を向けてくるゼフを無視して部屋を出る。

それが、内容は覚えていないが今し方視た夢のせいなのか、単に旅の疲れが溜まっているからなのかは分からない。

フラフラと覚束ない足取りで宿の裏に出たサイードは、そこに流れる川を覗きこんで苦笑した。

「ひっでー顔」

明かりが無くとも月の光のみで十分に自分の姿を水面は写し、その酷さを本人へと知らせる。

さすがのサイードもあまりの青白さに驚き、気にしないでいられるよう誤魔化しも兼ねて冷えた川の水で数度顔を洗う。

「しっかし、こういう生活にも慣れたもんだな」

さらにそれを繰り返し、気が済んだ後は片手を水につけ、ぽつり

と呟いた。
瞳は水面の自分を見ていて、そこには当然銀髪に金の瞳の青年がいる。しかし、その姿を見慣れるまでは、視界に銀糸が映る度に驚き戸惑ったのかもしれない。食生活、文化、それに馴染むまでも違和感があったはずだ。
今では、当たり前にこうやって川の水や井戸を利用し、嗜好品ばかり食べていた身体も、最低限の栄養と過酷な状況下で無駄が無い引き締まったものになりつつある。

「だから、物足りないのかねぇ。……あー、違うな。やっぱ焦ってんのかも」

サイードは、頭をガシガシと掻きながら、そっと月を見上げた。
地球と何ら変わらない月。満月なそれは、静かに鳴く虫の声を優しく飾る。
新月から満月へ、月だけじゃなくアピスでの時は望まなくとも進んでいく。
ポツリと、早いなと呟いたサイードだったが、少なからず生きていることを実感できる点では、アピスに来て良かったと思っていた。
死が近ければ近いほど、逆に自分は確かに生きていると思え、追われれば追われるだけ身に染みて自惚れずに済む。

「つまんねぇし、面倒くせ」

逃げるのは、とても楽なことだ。そして、得るものが少ない。
サイードはもう一度だけ顔を洗い、ゆっくりと立ち上がった。

虫の声が消え、満月を灰色の雲が隠す。

「あぁ、そうか。従うのも楽だな。……そうだろ？」

「気付いていたのか」

そして、水を滴らせる髪を鬱陶しそうにかきあげながら、ゆっくりと振り返る。そこには、風の国で出会ったウィーネ騎士団団長レイスの姿があった。

馬鹿な騎士が一匹、粗末な網に引っかかる。

虫を捕まえた子供は、時として残酷に奪うことで命の尊さを実感していく。

握りつぶしてしまうことで蝶の脆さを、羽根を?いでしまってから蜻蛉の可憐さを。

そして、それでも尚奪うことを止めない時に、狂気が生まれるのだ。

子供は大人が窘めて諭せば良い。しかし、それが大人だった場合。さらに生まれるのが、呑むか呑まれるかの一騎打ち。

「久し振りと、言っておこうか」

どちらともなく、2人は哂った。

新月から満月へ、時は止まらない

殆どの人は逃げる事を恥じ、従う事を忠誠心が高いと称賛する。特に、位を持っていれば尚更である。

サイードと突然現れたレイスとの間に、月が作った雲の影が通った。その後光に当てられたレイスは、酷くやつれている様に思える。

逃げる者と追う者。その身を自身の為に犠牲にする者と、誰かの為に捧げ従う者。

例え、逃げる事で成し遂げられる何かがあったとしても、両者が与える印象には雲泥の差があることだろう。

しかしどうだ。爽やかさに溢れていたレイスが今や、クリーム色の髪は無造作とは言い難い乱れ具合で、髭も放置し、濃い隈の出来た瞳をぎらつかせるだけ。

輝いていたはずの誇りは、見る陰も無い。

だからとはいわないが、忠誠心という素晴らしいものも、誰に捧げるかで塵に変わるのだろう。

つまりは、だ。結局は意志というものが、人の死に様をつくるのかもしれない。

「ここは、大地の国だが？」

サイードは、焦りも驚きもしなかった。

「風と大地は同盟を結んでいる」

「あー、そんな情報あったな」

頬を掻きながら薄い反応しか返さないサイードだったが、その表情は思いの外楽しそうだ。

殺す価値も無いとみなしたレイスが追ってきたからだけでは、そんな反応は示さなかっただろう。彼の有様がきっと、琴線に触れたのだ。

サイードは、国とは面倒なものだよなと笑った。

国交、同盟、政策、画策。民の為と豪語するそれらは、果たして本当にそうなのだろうか。結果的にそうであるだけで、実際は、体裁を保つために行っているだけなのかもしれない。

しかし、それが民の平和を維持するのも事実。ただ、だから民は気付いた時には戦火に身を投じなければいけなくなるのだ。

「それに比べれば、お前はかなり恵まれていたのになぁ。気付けば、剣の持ち方も知らないのに人を切らなければいけない状況になることは無く、腕もある。なのに、選ぶ相手が馬鹿王子じゃあ、誰も羨んではくれない」

「……貴様は、どこまで何を知っているのだ」

意味深な言葉にレイスはたじろぎつつ、その手はしっかりと剣を掴んでいた。

サイードは、レイスの言葉にさあねとしか返さず首を傾げる。や

けに可愛い子ぶった仕草は、彼を煽るだけである。

「で、だ。何か様か？　そもそも、首都があんな事になっているのに、民に大人気の騎士様が国外にいては、不安は広がる一方だろ。それは騎士道に外れてるんじゃないのか」

ギシリと、レイスが奥歯を噛み締めた音が聞こえた。

しかし、サイードは、わざとらしく何か音が聞こえなかったかと耳に手を当てている。

それを受け、レイスは逆に冷静になれたのかもしれない。今更になって、サイードとの対峙の仕方を学んだ様だ。

そう、サイードの言動全てを真面目に捉えていては、頭の血管は1時間も持たず破裂してしまう。なので、自身により優しい対処法は真に受けない、それに限る。

「姫様が、お亡くなりになられた。……暗殺されたのだ」

「……は？」

そうして言ったレイスの言葉に、サイードは耳に手を当てた格好のまま口をポカンと開けることになる。

中々に間抜けな姿だが、本人はそれを気にしている場合では無い。ただ、レイスの言葉自体に驚いたのではなく、彼がそれを言った事がそうさせた。サイードは風のお姫様との別れをしっかりと済ませてあり、それどころか命令さえ受けた身だ。

「まさかお前、それを言う為だけに俺を探してたとかじゃないよな」

「貴様、知っていたのか？　これは民にさえ、まだ公表されていないことだぞ」

「質問したのは俺だ」

はぁ、と腕を揺らし僅かに身体が前のめる。そして、だからお前は嫌いなんだと、聞かせるわけでもなく呟いた。

その正義感と、従うだけの自己の無さ。矛盾し、薄っぺらいそれのなんと惨めなことか。

白を黒と偽るならまだしも、黒を白と偽り仕方がなかったと装う原動力にする。その癖、言うことだけはお綺麗で道徳的で、重みを感じない。

それが、サイードがレイスに下した評価である。

ひとつ溜息を吐いたサイードは、突然面倒くさそうな顔になった。自分のペースを乱されたことが、その理由だろう。

頭を掻きながらゆっくり身体を直立に戻し、視線がレイスからずれる。

「ま、隠して当然だろうけど。首都はあんな状態で、まさかみんなが大好き騎士様が、みんなが大嫌いな王子の駒として動いていて、実はかなり賢い聖女だった王女様の暗殺に手を貸していたんだからな」

「なっ!?」

サイードが手をズボンのポケットに入れ、再びレイスに視線をやれば、彼は途端青くなる。それが、レイスが隠していた真実であった。

お姫様の騎士でありながら、その命を狙う。サイードが知っているのはそれだけであるが、自分に関係の無い継承権争いの情報を知

っているだけでも十分である。
そして、サイードは再び咽った。

「私は、ただ国の為に！」

「ホントウに？　俺は賢くはないが、どう考えても馬鹿王子に謙って、国や民の為になる何かを得られるという答えが出せないんだが」

そして、お前の言葉はだから空っぽなんだと言った。

「信念、意志、あるのは結構。だがな、行動で示せなければ、結果がついてこなければ、何があろうと無意味だ。結局のところお前は、俺以下なんだよ」

きっと、それはレイスにとって、何よりも屈辱な言葉だ。悪魔以下だと言われて喜べる騎士がいるはずない。
言葉を失うレイスに、サイードは一歩だけ近付いた。

「んで、まじでそれだけを言いに来たのか？　違うだろ？」

クツクツと、虫の声に代わってサイードの笑い声が月光に飾られる。何度も何度も雲の陰が2人に落ちて、吹き始めた不吉な風が木々を揺らす。
答えないレイスを置いて、サイードの視線は何度か近くの木々や背後に送られていた。
田舎の村にある宿は、裏手を川と林で囲まれている。人が隠れるにはもってこいであった。

レイスにすれば、自分は正しいと信じていたのかもしれない。しかし、その結果にあったのは無情な現実のみ。

彼の中で女王は存在してはならないものだったのか、馬鹿王子と称される次男が素晴らしい人間に映ったのかは分からない。
それで国が安泰するのであれば、それはそれで良かったのだろう。
しかし、実際はレイスの今の姿が全てを物語っている。
やつれた顔、草臥れた服。自身が選んだ選択がそれを作った。その責任、その後悔は、レイス以外に持てないものだ。

分岐点はきっと、サイードとお姫様の森での出会い。今考えれば、彼女はそうする為に危険を顧みず森に居たのだ。

「私は、姫様を手に掛けてはいない」

黙っていたレイスが発した言葉は、サイードにとってやはりからっぽだった。呆れつつかきあげた前髪から覗く右目は、左と比べかなり鋭い。

お姫様の最期をサイードが知っているかどうかは別にしても、今の言葉はあまりに酷かった。
確かに、殺したのはリュケイムである。そして、恐らくリュケイムとレイスに繋がりはないだろう。
ただそれは、お姫様の死をレイスが悔やみ、自分の行動や選択を後悔した時、本人以外の誰かが慰める為に使うべきもの。
少なくとも、それを望んだレイスが自身の為に口にするのは、あまりにおこがましいものだ。
目論み、結果が伴った時点で、部外者という言葉は当てはまらない。

「へぇ……。じゃあ、こういうのもそれに当てはまるな」

サイードが心底呆れた表情をしてそう言うのと、近くの林の闇の

奥から、蛙の潰れるような声が同時に聞こえた。

一瞬の静寂の後、大気が周囲の感情に揺れる。

レイスは声の方向に身体を向けながら、真っ青になりつつ驚き、次にサイードの腕と手の形から何が起こったのか悟った。

平静なサイードと怒りに恐ろしく顔を歪めるレイス。どちらがより狂気じみているか、誰が決められよう。

「あーあ。今死んだ奴、災難だったな」

「貴様が殺したのだろう！」

この場には2人しかいないと思われた。しかし、サイードは気付いている。林の奥に、少なくは無い気配があることと、全員が自分に殺気を向けていることを。

そして、それが分かっていて、闇に向かって小剣を投げたのだ。

レイスは、サイードの行動で剣を抜いて怒鳴る。ばれていることなど百も承知と、警戒を強めた。

しかしサイードは、潜む者たちにもよく聞こえるよう、わざとらしく面白おかしく声を張る。

「何言ってんだ？　俺は、なんとなく気分的に、林に小剣を投げただけだ。そしたら、そのポメルが偶然木に当たって跳ね返り、たまったまそこに居た奴に刺さった。だから、俺が殺したわけじゃない」

まるでさも正論だと言わんばかりなサイードであったが、レイスのグリップを握る力は増す。

「貴様が短剣を投げなければ、死なずに済んだだろう！」

そうして、レイスはまたもや怒鳴る。しかし、最早彼には騎士団長の威厳はまったく無い。

「くっ、ははは！」

サイードは、レイスとの試合の時のように、突然身体をくの字に曲げて笑った。

木霊す笑い声は遠慮がなく、宿で寝ている人々の眠りを妨げたかもしれない。しかし、それでも止まらない。

あまりの馬鹿らしさに、あまりに都合の良い解釈に、サイードは哂うのだ。

「そういや、森での2度目の襲撃の時も、お前は俺が弾いた暗器がお仲間に当たったのを見て憤ってたよな」

「そうだ、貴様のせいでどれだけの者が無念な思いをしたことか」

一頻り笑ったサイードは、ふと思い出した事を口にしてレイスの反応を見る。

そして、予想通りの答えを聞いた途端、まるで今までの笑いが嘘だったかのように無表情になった。

誰かが、ゴクリと唾を呑む音が聞こえる。剣の抜かれる音もだ。

サイードは、一際大きな雲が月を隠し光が自分の元に戻ってくるのを待ってから言った。

「なら、何故姫様は死んだんだ？」

そこには決して、情があるわけでは無い。責めているでも、貶し

ているわけでもない。
それでも、背ける逃げ場をレイスから奪う。

「誰が殺したかなんて、俺には興味無い。お前がどうして、馬鹿王子に傅いているのかもな。だが、実力だけはあるお前が傍にしっかりついていれば、少なくとも死なない可能性は高かったはずだ」

「貴様が起こした騒動のせいだろうが！　そのせいで私は！」

「そりゃ、騎士だからな。民の危険に駆け付けなくては、風上にも置けないだろう。だが、お前は誰の騎士だ？」

レイスはサイードの行いを非難し、自分を正当化させようと必死だ。
林の奥には、引き連れて来た仲間がいるのだから当然だろう。誤魔化さなければ、士気に関わってくる。
しかし、どうやってもその立ち位置は変わらない上、先程からサイードは違和感を覚えていた。
隠れる者達は2人の会話に動揺する気配は何度もみせるが、自分に対する怒りのようなものがまったく衰える様子がない。
まるで、今の驚くべき事実をどうでも良いことだと切り捨てている。

顔を限界まで青くさせたレイスを放置し、暫く思案したサイード。
そして、十分彼に屈辱や慄きを堪能させた後、遊びは終わりだと囁いた。

「俺が暗器を弾くのでは無く、叩き落としていれば騎士が死なずに済んだように、姫様もお前が1人にしなければ死ななかったかもしれないな」

結局、死んだ人間は戻らないのだから、無意味な後悔や仮説でしか無い。所詮、ただの屁理屈なのだ。
それでも、レイスはまるで初めて気付いたとでも言いたいのか、かなりの衝撃を受けていた。

この件に関しては、2人は同じだ。それもさらに、レイスにとっては悪夢である。
死ぬ可能性を分かっていながら、何もしなかったサイード。死ぬ可能性を作るように、その傍から離れたレイス。
共通するのは、共に見捨てたということ。
小さな身体の活動を止めたのは実行犯（リュケイム）だが、その機会（チャンス）を与えた者とて同罪ではないのだろうか。奪う際の行動や関わり方の比重は、計量するものでは無い。

そして、サイードがレイスを嫌悪する一番の理由は、その姿勢でも言動でも無く、正しくないと指摘されただけで簡単に揺らいでしまう信念にあった。

後悔の無い人生程、つまらないものは無いだろう。
それと同時に、自分を誤魔化してまで突き進む道も充実とは程遠い。
時としてそれは、ただの我侭として片付けられてしまうこともあるが、それは結果が他人に理解されてもらえなかっただけのこと。
結局、本人の評価次第だ。

サイードは飽きたと、大きな欠伸を一つ零す。
そして、再度、本当の用事を問うた。

「……殿下が貴様を所望している。ここで我々の手に掛かりたくな

ければ、その力を殿下に捧げろ」

レイスは吹っ切ったのか、それともお得意の逃げに投じたのか。顔を青くさせながらも、本来の目的をやっとのことで告げた。

恐らく、ルシエの情報のあやふやさは、国王の仕業ではなく馬鹿王子のものだったのだろう。さすがの国王でも、首都の収拾と復興、王女の死の秘匿、それに加えて長男の事についても隠さなければならないだろうから、それだけで精一杯なはず。

その隙に馬鹿王子は、自分の力をより強固にする為、数千もの死を嘆くのではなくそれを招いた力と存在を喜んだのだ。

「……この世界は、どれだけ俺達を馬鹿にすれば気が済むんだろうな」

ポツリと呟かれた言葉。唐突に空を見上げた行動の意味。

サイードは、これがこの世界の在り方というのであれば、滅んでしまえと心から思った。全て、皆、滅んでしまえと。

そのくせ、本当にそうなってしまっては地球も道連れになってしまうというジレンマ。

だから、焦っていたのかもしれない。

アピスで時を過ごせば過ごす程、望まなくともルシエもその中に含まれていってしまうのだ。

「だから、壊すんだよ」

唯一、何故と聞いてくれた今は亡き者に向け、今更ながら答えを与える。勿論、地球に影響が及ばない範囲でだけど、と付け足して。

そして、それでも護りたいと言うならば、思う存分立ち塞がって楽しませてくれと。

ルシエにとって、例え地球があまりアピスと変わらないとしても、見てきた限り此方よりは幾分良いのだ。
比べる行為に必要なものさしは、自分の世界しか基準に出来ないのだから。

「答えを言え！」

唐突に上の空になりかけているサイードに、レイスは怒鳴る。
自棄という強気な態度を取りながら焦らすよう詰めより、事実、遠慮無しに向けられた剣が、脅迫するように距離を縮めていく。

生きたければ従え、拒否するのなら死ね。ぎらつく瞳がそう言っている。そのまま、僅かに顎を動かし合図をした。
そうすると、やっとのことで周囲に隠れていた者が姿を表したのだが、その数は凡そ３０人。
１人に対してその数は中々に多い。しかし、良く考えてみれば、首都を壊滅させた相手にその数だ。

「……舐めた真似をしてくれる」

サイードとて、そうほいほいとあの時の魔法を出せるわけでは無い。あの爆発的な魔力は、契約の瞬間に生まれるオーバーヒートだ。
その事実を知っているなら、彼等に怒りや屈辱を抱かなかっただろう。

サイードの殺気に中てられながら、レイスだけが怯まずに剣を構え、そして哂う。

「貴様こそ、さっさと剣を抜け」

未だに剣を抜かないサイードを見て、たった一つ、自分が上に立てる事を見つけ強気に戻れるレイスは、余程お気楽なのか馬鹿なのか。

「悪魔のくせに馬鹿なのか？」

悪魔を賢いと思っているんだお前というものと、馬鹿はお前の方だろという2つのつっこみをグッと我慢したサイード。

げんなりとした顔でレイスを見れば、彼は鋭い表情のままだ。

しかし、突然そんな表情が独りでに驚きに変わった。

瞬間、サイードの胃がざわついて嫌な予感を抱かせる。

その間に、レイスの顔に初めてはっきりとした余裕と、自信が浮かんだ。

「あぁ、思い出した。私としたことが、怒りに思わず忘れてしまっていたようだ」

構えを解いたレイスに、サイードは怪訝な顔しか出来ない。

左右後方を固めて黙って2人の様子を見ている30対の瞳も、指揮官であるレイスに集中した。

お姫様が何故、最期までレイスを傍に置き続けていたのか。聡い彼女は、彼が自分の兄に付いて命を狙っていた事に気付いていたはずだ。

もしかすると、お姫様は自信の想いと使命の狭間で戸惑って、聖女としての判断を誤ったのかもしれない。

「君は、違う世界……異世界から来た特別な女の子らしいね」

そしてルシエ自身、最も良しとしない自惚れが密かに潜んでいたのだろう。

戦友という2人の間柄、そこに裏切りというものが成り立つのかは定かでは無いが、たっぷりと間を開けてレイスの告げた言葉に、サイードは呟いた。

「やらかしてくれた」

映るのは幻想

レイスが放った言葉は、仲間にも含めて効果は絶大であった。
それは、ルシエにとっても最も隠しておきたかった真実であり、最初に捨てた事柄。サイードは男でリサーナは女。ルシエは人の枠を超えて精霊側にいる中性だとして、レイスが言った女の子はそこには居ない。そして、必要の無い存在だった。

異世界は違いを表し、通常の者は決して踏み込めない架空といっても支障が無い位置にある。それは特別を意味するが、ルシエは自分がそうであるわけではないと自負していた。
ただ、いくら自分が頑なにそう思ったところで、客観的にみれば希望通り捉えてはくれない。その立場は異端で別格で、何より特別だ。だから、ルシエは知られたくなかったのだ。

特別という響きは、本人の気付かぬ内に自惚れや傲慢、隙を生んでしまう。
他者からすれば、羨む者も当然いるだろう。しかし、ルシエにとっては弱味以外の何にもならないのだ。

「知った時には驚いたよ。違和感は無いし、何よりその強さだ」

サイードは、今までになく焦った表情をしていた。右手で左腕を掴み、制御不能に陥りそうな魔力を必死で押さえつけるよう努力す

る。
その結果、握られる腕に爪が食い込み、白いシャツをじわりと赤く染めた。

平然としているのはレイスのみだ。
動揺するサイードと、騒然とするレイスの仲間。この世界にの文献には、異世界（ちきゅう）という存在について幾らか記されていたりする。
さらには、地球の人間が何らかの偶然と要因が重なり、アピスに飛ばされる事すらあった。

ここで、疑問に思う人も出てくるだろう。
ルシエの場合、身体を構築し直して、魔力の芽を植えることでやっとアピスに存在できている。そうしなければ、拒絶反応で身体が崩れてしまうからだ。
では何故、普通にアピスに来れる地球人がいるのか。彼等は、飛ばされた後に死んでしまうわけではない。
全ては、地球とアピスが一心同体だということが関係していた。

一心同体であり、デルが両方を行き来できている時点で、２つの世界は繋がっていることになる。そうなると、両世界はお互いを知っているということだ。
そして、繋がっているということは、混ざり合う危険性が伴う。
地球からアピスに飛んでしまう人間は、無いはずの魔力をもっているからこそ、そのような悲劇に見舞われる。いうなれば、飛ぶというより引きずり込まれるというのが正しいかもしれない。

それこそが本当に特別であり稀な事だが、レイスの仲間はそういう事例があるのは知っていても、目にするのは初めてだったのだろう。
その驚き具合から、サイードはレイスがその事実をまだ、大きく

広めてはいないと気付く。そして、出来れば今回初めて口にしていることを願った。

レイスは、でも、とサイードの焦りを味わうかのように続けた。

「言われてみれば、男にしては確かに力が弱かったな。それに、私にはもう君の剣が通用しないのを、自分で分かっているんだろ？」

もう一度、余計な事をとサイードは毒吐く。腕を掴む力は、最早自分でもぎ取ってしまうのではと心配になるぐらいだった。

レイスが見出した勝機は、余裕はそこにある。百戦錬磨で騎士団団長は飾りでは無い。

試合でサイードが勝てたのは、剣に不慣れなことが幸いしたからだ。そのくせ、精霊の加護でスピードがあり、基本は成っていなくて滅茶苦茶な型。それが結果的に翻弄することに繋がり、会話も一因となって勝つことが出来た。

しかし、今回は違う。

レイスがサイードの剣技で戸惑う事は最早無く、自身も幾分剣に慣れた。ゼフに指導を受けてさえいる。再び剣で勝つには、経験や積み重ねた時間の差が大きすぎるのだ。だからこそ、サイードは指輪を剣に変えていない。

と、そこまで考え、あることに気付く。

右手を腕から離し、瞬きをしたサイードは、途端クツクツと笑った。

「なぁ、お前が用があるのは、首都を壊した奴だよな」

「……君は本当に、空気を読まないね。ある意味才能だ。そうだよ、数千という命をたったの数分で奪った悪魔に、私達は用があるんだ」

それはレイスにとって、当たり前で不可解な質問であった。

そしてサイードにとっては、とても重要なもの。

「それは助かる。なら、はっきりと返事をしてやろう」

満月を背にするサイードは、前方にレイス、川を挟んで後方も両脇も四方を敵に囲まれている状態で俯いた。その上で、スイッチを切り替えるように大きく深呼吸をして瞳を閉じる。

殺気と怒気にざわついていた木々は途端に黙り、風さえも邪魔をしないようにと息を呑んだ。

レイスは、今までのフラフラして苛立つサイードの態度が粉散したのに気付き、そして、異様な変化は現れた。

「せっかくのお誘いですが、お断りさせて頂きます。こうみえて忙しい身なので」

月に負けない輝きを持ち風に靡く髪は銀、全てを見透かすようなゴールドの瞳。低くは無いが高くも無い背も、華奢な身体も、肌理細やかな肌も何一つ先程とは変わらない。

しかし、声はサイードよりは高く、女よりは低く。口調は激変し、柔和な表情。

それは、彼が知るサイードでは無い。

「一体、何が……」

レイスもその仲間も、明らかに動揺した。

視覚は確かに今までと同一の情報を送るというのに、どうやっても先程の青年とは別人にしか思えない。何より、視覚以外の感覚が、ひいては第六感さえもが、全力で警告を発し危険を訴える。

「あぁ、一つの身体に複数の人格があるとか、そういう訳では無いので。個人的に区別しているだけです」

その方がミスをしにくいからと、ルシエはクスクスと肩を揺らして笑った。

すると、全員がビクリと肩を震わせるのだから、その様が酷く滑稽で尚更笑ってしまう。

「それが本性か」

「それはどうでしょう」

ニコリと人当たりのよさそうな微笑みをレイスに向けるが、彼はルシエの瞳の光の無さにたじろいだ。

「ただ、ウェントゥスを半壊した悪魔ではあります」

そしてルシエは、風の力で飛びあがろうとして、ここでやっとゼフが駆け付けていないことに気付いた。

ゼフに頼むのと、精霊に加護を得るのでは、消費する魔力が違う。仕方なく、ルシエは地に立ったまま対峙することにする。

「それで、交渉は決裂ですが、……どうしますか？」

そのまま、ゼフのことは気にせずに聞いた。

レイスは、無意識に震える手足を叱責し、乾いた唇を抉じ開ける。

「なら、討つ」

「ふふ、討つのですか」

表現が気に入ったのか、ルシエは笑い声を上げた。その反動で髪は揺れ、未だ濡れているそこから銀の雫が舞う。

満月を背に立ち、雫を纏うその姿はとても幻想的で、普段であれば見る者の中にはそれこそ精霊だと思う者もいたかもしれない。

「それは困りました。秘密を知られてしまった以上野放しには出来ませんし、無かった事にするしかありませんね。……そう、貴方方と出会わなかったことに、ね？」

しかし、口から出た言葉は不穏。唇に人差し指を当て、首を傾げても幾らも半減されない。

その笑顔はあまりに純真で愛らしく、彼等に身も凍るような恐怖を感じさせただけだった。

そして、それは時として動く活力になる。

「灼熱の刃、大蛇となりて有を無に」

「手加減は無用だ！　かかれっ！」

ルシエの歌うような詠唱を合図に、３０の騎士は一斉にたった一人に向け剣を振りかざす。

浅瀬の川は用意に越えることができ、ルシエは迫り来る敵を前に、腕を身体の周りで半円を描くように振る。

ユラリと大気が揺れた。

「っ！？　離れろ！」

「あっは、遅いですよ」

何かを察知して即座に指示を飛ばすレイスであるが、一瞬の判断が生死を分けるのが戦いだ。炎の蛇が５匹生まれ、ルシエの身体を中心として渦状に天へと上る。

「……あ」

最期の言葉を発せたのは、２０代の若い騎士１人であった。迫った勢いを殺せず、目の前に現れた炎の蛇に触れてしまった４名の騎士は、呆気なくその腹を満たす。

赤い蛇に囲まれるルシエの瞳は紅く輝き、肩まで伸びた同色の髪は大蛇とそっくりに揺れていた。

「凄いでしょう？　骨も残さず食い尽くしてくれるので、埋葬する手間も省けるんですよ」

蛇の１匹が月に伸びていた首を足元にもたげ、ルシエが当たり前にそこに乗れば、それを残して他の４匹は消えていく。

「貴様はどれだけ命を軽んじれば気が済むのだ！」

せっかくの魔法をあっさりと消し、緊張感の無いルシエに１人の騎士が吠えながら向かうが、大蛇の尻尾が軽々と肉体を炭に変えた。

それでも、誰一人怯える素振りを見せない。

その様子を些か不思議に思いつつ、ルシエは血の様に変化した髪を弄びつつ跳んだ。

慌てたのは騎士よりも蛇である。急いで追っていこうとし、それを見たルシエがニコリと微笑めばあっけなく消えてしまう。

最後の一匹まで何故消したのか、そのまま一掃してしまえば楽なはずだが、ルシエは空中で華麗に回転して川の水面に着地した。

空を仰いで追った騎士達は、不味いと焦る。全員、当に川を越えてしまっており、囲んでいた状態から向き合う形になったのだ。

水面に立ったルシエは、静かに敵を見渡した。最後尾に居るレイスを除いて、一人一人を観察する。

すると、見えてきたのがそのアンバランスさだ。騎士と呼ぶには年を取りすぎている者、死地に赴くには早すぎる者、明らかに剣を持って日が浅い者。

彼等は皆、正義感や騎士道で此処に居るのでは無い。

その手に、胸に、頭に、心に。残された品や記憶を抱いて剣を持っているのだ。

ルシエとゼフがウェントゥスを襲った際、父や母、恋人や家族、友人や仲間、そういった自分以外を失い、嘆き、復讐を誓ったからこそレイスに付いてきた。

「そう仰られましても……。何故、重んじなければいけないんですか？　命あるものいつかは死ぬ。その死が、生物としてか人としてかなど、価値観を引き合いにしたところで何になるというのです。まぁ、此方からは不運でしたねとお悔やみ申し上げるしかありません」

それとも、黙祷を捧げれば満足ですかとルシエは淡々と言った。

「あ〝あああぁぁ！！」

瞬間、理性というストッパーを外した連中が、川の水に足を取られるのもお構いなしに走った。

ある者は言葉にならない咆哮を、ある者は失った人の名を、ある者は涙を。様々抱きつつ、剣を狂気に月を切る。

それでも、現実は正常な心に傾くとは限らない。

「そう焦らなくとも、輪に戻りますよ。川の水は綺麗に、美しくあって欲しいですから」

残念ながら、彼等の剣は切っ先を月に届けることが叶わず水面を叩くだけであった。

ルシエはふわりと跳び、再び地に足を付ける。

彼等は、川岸に戻っても攻撃の一手を緩めず突進する。

「……炎の息吹は安らぎとなり、焼き尽くせ」

そして、技術も何も無い、ただの大きな火の玉に呆気無く呑まれて死んだ。

ルシエは遊んでいた。子供がボールを追いかけるように、無邪気に命と戯れる。

普段であれば、もっと別の感情を抱くのだが、今回のはそうしなければならないほど何も感じられないのだ。

生き残ることを捨て、ルシエに一矢報いることしか考えていない者たちと向き合ったところで、面白味も何もないらしい。

確かに、我武者羅とやけくそが違うように、死を覚悟しながら生きる望みを捨てない事と、死を覚悟し生きる望みを捨てて立ち塞がるのでは、剣の重みが変わってくる。

「どうせなら、もっと楽しませて下さい」

諦めない強い意志は、そう簡単には持てないだろう。しかし、姿はたとえ無様でも滑稽でも、諦めきれない想いもまた美しい。

勿論、ルシエがそう思っているわけでは無い。

ルシエの場合は、絶望しながらも諦め切れずに藻掻く姿を笑い、踏みにじりたいのだ。

「貴様に、奪われる者の気持ちが分かるか！？」

「ふふ、貴方も十分奪う側でしょう？」

最後尾から吠えるレイスと一度だけ視線が交じり、ルシエは据わった瞳で返した。偉そうに言っても、攻めてくるのは雑魚としか言い様が無い俄か騎士ばかり。

彼等にこの中で自分がという想いは無く、皆が皆、この中の誰かがと託してばかりだ。そのような攻撃、精霊の力を用いているルシエには何の効果も無い。

当然、精霊の力は万能では無いどころか微弱で、魔法はそもそも単体で爆発的な力を発揮するよりも、補助として用いるのが本来である。

ただ、他の魔術師と違うのが、ルシエの力には精霊たちの憎しみや憤りが込められているという点だ。人が精霊を穢し殺したように、精霊のかわりにルシエが、人間のルシエが奪い、殺す。

そんな矛盾があるのだから、あまりの馬鹿らしさに楽しまなければやっていられないのだろう。

事実、ルシエは楽しいから実行する。損しかないのであれば、お人好しには決してなれないルシエが、その身を甘んじて投げる事は無い。

「失礼ですね。これでも、奪われる側でもあるんですよ？　今だってほら、大切な限られている時間を、貴方方に奪われている」

ルシエは静かに地面に手を着け、小さく詠唱した。

すると、最前列で対峙していた3人が、足元からの炎の噴出に呑まれる。

その光景を見た全員が真っ青だとしたら、攻撃を収めた時に顔を上げたルシエは顔面蒼白。段々と焦点が定まらなくなってきている瞳で笑う姿は、果てしなく壊れかけていた。

「知っていますか？　時間はお金では買えないんですよ」

そんな時、ルシエの脳裏にふと、ゼフの言葉が思い返された。

――近いうちに、足元を掬われるぞ

身体を起こした際にふらついた隙を狙い、敵が迫ってくる中、どうしてか聞こえたのだ。稚拙な攻撃を避け、淡々とあしらっていけどもそれは消えない。

予感というものだったのか、ただの油断だったのかもしれない。

どちらにせよ、騎士しかいなかったはずのこの場で、突然の後方

から感じた殺気に意識が向いてしまった瞬間、ルシエはミスを犯した。

「今だ！」

レイスの声に慌てて視線を戻そうとするも、ルシエはその途中で足に全力で力を込め、彼等に向かい跳ぶ。そうしなければならないと、思考ではなく脊髄が判断したのだ。

その際に映ったレイスは、この後に負うことになる罪を分かりつつ、それでも笑っていた。

サイードとそっくりに、口元をニヤリと上げて悪魔のように笑う。

その姿だけは嫌いじゃないと、ルシエは頭の隅で思った。

時を少し遡り。

サイードが顔を洗うと部屋を出て行った後、ゼフはフードを被り直して顔を隠し、窓から外へと浮かび先回りをして宿の裏手へと来ていた。

そして、足下の林に目を凝らして睨みつける。

「まあ、余裕だろうな」

正確な数を把握し、力を見極め、ルシエを追ってきた不届き者の観察をした。結果、自分が出る必要は無いと判断し、傍観に徹することにしたのだ。

そうしている間に、サイードは川に辿り着いて顔を洗っている。

ゼフはその後姿を静かに見つめ、月を仰ぐ。

「それ以前にアレのお守りは、荷が重そうだ」

深い溜息は若干の後悔を共に。

額に手を当て吐いたそれは、少なからず疲労が込められていて、それだけサイードの酒に付き合うのが大変だったということか。勿論、それだけでは無いだろう。

そして暫しゼフがルシエとの出会いを振り返っている間、下ではサイードとレイスが対峙していた。

「似ていればまだ……、いや、その方が困るな」

独り言は、眷属のシルフの耳にしか届かず、逸らさない視線の先にはルシエしか映らない。

「何故、こんなにも早く私を解放してしまったのだ」

悲しみを含んだ言葉は、一体何を意味するのか。そのまま、ゼフは黙ってルシエの動向を見守り、陽の力を行使し始めてからは時折感心していた。

介入する気は、最後まで無いつもりだったのだろう。しかしそれは、風の雰囲気が変わるまでだ。

ルシエの後方、川のさらに奥の林から月の光に反射した銀に気付いた瞬間、ゼフは慌てた。急いで間に入ろうとするも、何故か駆け出そうとした姿勢で不自然に止まる。

「どこまでも下劣なっ！」

強く噛み締めた口から絞り出した声には、逆らえない悔しさと嫌悪が滲み出ており、突き出した手を握り締めれば、自身の長い爪が肌に食い込んだ。

感情に呼応して乱れつつある風に触れられながらゼフが見た先では、ルシエの身体が穢される瞬間をしっかりと映している。

「え？」

それは、とても軽い衝撃だった。

道を歩いていたところ、謝ってすれ違いざまにぶつかってしまい、お互いに頭を下げるだけで事足りそうな程に軽い衝撃。

しかしそれは、無意識に動けたお陰である。レイスが叫び笑った瞬間、ルシエは全力で跳んだ。

おそらく、地球に居た頃に散々経験した神の試練が身体を突き動かしそうさせたのだろう。右前方に最大限跳ぶ。

一歩間違えば、目の前の騎士の集団に飛び込むことになったのだが、その結果、軽い衝撃で済んだのだ。

それでも、ルシエの左肩と左脇腹からは暖かくぬるりとした感触のものが流れ、全身が熱くなる。

呆然としつつ、ルシエはその場所へと視線を落とした。

そこからは、身体を突き抜けて土の槍が飛び出ていた。鋭い先端には服の切れ端がかかっており、下にいくほど太くなるそれは、体内を突き抜けてきた為にどす黒い斑点をつけている。肩も貫通はしていないが、本来無いはずのものが内にある感覚がした。

目の前では、そんな自分の姿を嬉しそうに見つめる視線が。恐る

恐る左脇腹の槍に触れようと腕を動かせば、かなりの激痛がルシエを襲った。

それでも触れれば、手が濡れる。目の前まで持ち上げて何が掌に付いたのか見れば、そこは赤かった。

赤い血で、べっとりと濡れていた。

「なんですか、これ」

問いかければ剣の鳴る音が返ってき、足下を見れば、加護を受けていないはずなのに、空中に浮いている。

ゆっくりとしか動けず、何とか首を動かして振り返えった先川岸の地面からは、長さの異なる土の槍が数本出現しており、その中の端にある2本がルシエを串刺しにしていたのだ。

そして、川の向こう岸からは、弓を構えて凛と佇む土色の髪に瞳の1人の女騎士がいた。

ルシエはやっと理解した。そして、戦慄する。

もし、跳ぶ前までいた場所から動かなければ、それだけでは済まなかったと。何故なら、先程まで自分が居た場所の前方では、回避しきれずに土の槍の餌食となってしまった騎士の無残な姿がある。

ある者は腹を、ある者は胸を、一番酷いものでは顔を槍に貫かれている。

そんな攻撃を受けたというのに、左脇腹と肩を負傷しただけで済むなど奇跡に近い。

それでも、ルシエは最悪だと思った。後方では、槍を伝って自身の血液が大量に地面へと落ちていく。

「流石の君も、この攻撃は察知できなかったみたいだね。しかし驚

いた。まさか、急所を外すとは」

レイスはそう笑いながら、ここにきてやっと、最後尾から最前へと移動した。

ルシエは攻撃自体は予想外だったが、女騎士を察知できていないわけではなかった。

精霊を味方に付けている限り、そして精霊が居れば、ルシエに潜む行為は通用しないのだ。どれだけ上手く身を隠そうとも、精霊に教えてもらえればどうやっても筒抜けとなる。

それでも今の状況に陥ってしまったのは、ルシエ側に問題があったからだろう。

レイスはとても嬉しそうに、巻き添えにした仲間を視界から外し、ルシエの首筋に剣を添えた。

チラリと一瞥するが、ルシエには然程脅威には思えない。磔に似た状態にされ、身体から大事な水分が抜けていくが、それでもレイスには恐怖できなかった。

それは、同族愛にも似た感情なのかもしれない。

「油断大敵だ。大地の純血種は特有の技を持っているんだよ。土に干渉し、自在に操れる力をね。しかも、だ。この国では純血種が未だに多く、全員が全員王族とは限らない」

レイスは雄弁に語り、やっと捕まえたと囁いた。

ポタリ、ポタリと伝う血液は、槍だけではなくルシエの足下にも染みていく。

どこかぼんやりとした意識で、ルシエはレイスを見ていた。

「貴方は、彼（サイード）を可哀想だと言ったよね」

そして、ひっそりと目を細める。なんとか右腕を上げて、そろりとレイスの頬に触れれば、彼の体温は自分と同じくらい冷たい。

「悪魔の虚言など、私には利かない」

「ふふ、そんな特別な力、実際にあると思っているんだ。可愛いね」

ルシエはまるで死化粧を施すように、小指に付着した赤でレイスの唇を飾った。微笑は柔らかいが、その額には大粒の汗。やせ我慢はしていないのだろうが、身体は確実にダメージを膨らませていく。

それでもルシエは笑った。この痛みは、去年、車に轢かれて数メートル引き摺られた時のより軽いと思いながら。

「確かに、サイードは可哀想かもしれないけど。貴方は、虚しそうだ」

「貴様に言われたくはない！」

払いのけられた腕は、無抵抗に揺れて傷へと響く。ルシエの足下には、真っ赤な水が溜まり、ポタリポタリと尚もその広さを増していった。

「悪魔は居るべき場所へ帰れ！」

そして、ルシエの首に添えられた剣の刃が皮を裂き肉に食い込み、最大限蔑んでくるレイスを見ながら、この世界で初めて鮮明に死を感じた。

雑音が消え、自分の血液が落ちる音だけが響き、視界が景色を失

い、傷口は煮えたぎる様な感覚がする。

こんな時、勇者や正義のヒーローと呼ばれる立場の者であれば、窮地に陥った瞬間に秘められた内にある力が覚醒するという場面が展開出来たかもしれない。しかし、ルシエの場合は、残念ながら自分の力というものを理解し、限界さえ知っている。

それでも、死ぬかもしれないと思った瞬間に無を感じ、心地良さに酔いしれた。

そこは、誰もが望み、誰も辿り着けない場所。

「あぁ……」

ルシエの口から出たのは、絶望でも悲しみでも無い、感嘆だ。ただそれは一瞬で、意識の奥で身体の中から異物が無くなる感触がし、それによって現実へと無情にも戻される。

「ルシエ！」

突然の変化に驚き瞬けば、すぐに景色も音も戻り、ルシエの目の前にはゼフが居た。

声は焦り、必死さが滲み出ている。そしてルシエは、ゼフに抱きかかえられる形で空へと移動していた。

「あれ？　ゼフだ」

「何を暢気なことを！　何故私を呼ばなかった！」

レイス達は突然の乱入者に驚き、大きくざわつく。反対にルシエは、きょとんと呆けた。

目の前で怒り狂うゼフを見ても、暫く状況を掴めなかったようだ。ただ、起き上がろうとして痛みに呻き、咄嗟に押さえた傷で自分の状態を思い出した。

「あぁ、来たければ来るかなと思って。それにしてもまさか、大地の純血種に固有スキルがあったなんて、デルも教えてくれてなかったしさ。油断しちゃってたかも」

ゼフは、会話よりもまず傷を見るのが優先だと、所謂お姫様抱っこから片腕で固定するものに変え、肩と脇腹へ視線をやる。予想以上にそこからの出血は酷く、小さな舌打ちが状態の悪さを表した。

「仲間が出来ていたのか……！」

レイス達といえば、空中の2人を見ながら強く唇を噛んでいるのだが、その相手がまさか彼等が讃え崇めていた風の精霊王だと、幾らか真実を知っている彼ですら思い至らないのだろう。

「なんと愚かな！」

ルシエを逃がしたことにプラスして怒りを増し、隠し玉としていた女騎士に指示を出している。

「どちらが愚かだと。犠牲の上に成り立つものを、どうして誇れるというのだ」

そんなレイスに、ゼフが一言呟いた。それは訓えだったのか、ただの言葉だったのか。彼は一度だけ、巻き添えで散ってしまった命に視線を向けて短く目を閉じた。

その間に、新たな攻撃が繰り出される。土の槍や飛礫が迫るが、風の壁が見事に防いだ。

ルシエはレイスやゼフの行動を見てから、自分の身体に視線を移していた。

流れる血、切実に助けを求めてくる痛み。それを感じながら、静かに考える。そして、怒った。

こんな状況を作り出してしまった驕りと、ミスを招いた自分を最大限罵倒する。

「取り敢えず、今は退くぞ」

しかし、罵倒が2周目に突入してすぐだろうか、ゼフの言葉に我に返った。

「え？　どうして？」

「どうして、だと？　お前、自分の傷がどれほどのものか分かっているのか？　急所を外れてはいるが、出血が多い！　今すぐ止血しなければ、手遅れになるというのに、何をしようというのだ」

ゼフの言うことは正しかった。正しすぎて、反吐が出る。ルシエはそう思い、憤りと共に睨みつけた。

医学の知識の乏しいルシエだが、自身の状態を一番理解しているのだ。血液は止まる事を知らず、服が吸収しきれない分は容赦なく下降し、ゼフのローブさえ汚し意識を遠くさせてくる。指先は冷え、そのくせ傷口は熱い。

しかし、駄目なのだ。ルシエの中で、今日この瞬間には、逃げという選択肢が存在しない。

「……だ、嫌だ！」

まるで駄々っ子の様なルシエの我侭に、ゼフは唖然となった。次には、その馬鹿さ加減に苛立ちを通り越す。

「死ぬつもりか！」

そんな事、させはしないと抱く身体を問答無用で押さえつける。

それでもルシエは頭を振って拒絶した。

今は逃げるのは嫌だとそう言って、弱った身体のどこにそのような力が残っているのか、腕だけじゃなく足まで使いゼフの拘束から逃れる。

「じゃあ、血を止めれば、逃げないでいいよね」

「……は？」

今の状態で魔力を消費するのは自殺行為に等しい。それが分かりつつ、ルシエは空中に1人で立った。

片足の魔法の調整が上手くいかず一度大きくふらつくが、ゼフにそう言った時にはしっかりと背筋が伸びている。ただ、据わった瞳からは、安心できる要素が無い。

そして、自身の両掌を見やり、痛いんだろうなぁと独りごちた。

「何を」

「ん？　だから血を止めるんだよ。ゼフは、鬱陶しい土の槍を防いでおいてね」

「だから何を！」

ゼフは何を仕出かすのか不安でたまらず、止めようと駆け寄ろうとしたが、目の前に迫った土の槍を防ぐ気配を見せなかったルシエに、慌てて風の盾を出してやらなければならず、不本意ながら従う形になってしまった。

忌々しくレイス達に目を向ければ、さらに他の騎士もどこからか弓を取り出し、こちらに照準を合わせているではないか。

そうしている間に、ルシエは瞳を閉じて集中しており、戻りかけていた髪色が再び変化する。

掌は次第に赤く輝き始め、ゼフが嫌な予感を抱くと同時に、それは左脇の傷口へと前後から包むように触れた。

「っ！　あ〝あぁっ！」

ゼフだけではなくルシエ自身の耳にも、ジュッという嫌な音が響く。そして、鼻を突く臭いは肉が焼けるもの。

「なっ……にを」

「う、はぁ、いっつ。後、肩だね」

ルシエは、血を止める為に傷口を焼いたのである。触れた部分の服は見事に焦げ、そこからは血では無く火傷で真っ赤に爛れた肌が覗いていた。

あまりの激痛に一気に汗を噴出しているルシエは、顔を歪めながら笑い、右手を左肩へとまわした。

「っ……、う、あ」

痛みを知ってしまったせいか、震えながらだったが、意を決した様子でそれを行う。
なんとか乗り切った時には、ごっそりと消えてしまった体力のせいか、空中でがくりと膝をつく。やっとのことで駆け付けたゼフは、慌ててその右腕を掴んだ。
俯いている顔からは、重力に従い汗か涙の雫が地面に叩きつけられていた。

「……焼肉みたいに、ジューシーな匂いだったら、まだ少しはマシだったかも」

ただし、どうやらある意味元気ではあるようだ。
なんとも的外れな言葉はあまりに場違いで、無理に笑いを誘おうとしたのだとしても、ゼフには言葉の意味が通じない。

この奇行に仰天したのは、ゼフだけでは無かった。
暫く攻撃さえも止み、皆がルシエの次の動向を待っている。

「ねぇ、ゼフ」

「な、んだ？」

血は、幸か不幸か、ルシエの目論見通り止まっていた。そして、呼吸も落ち着いた頃に、その場に静かな声が響く。
ゼフは、返事はするが、狼狽は収まっていなかった。

「土がね、槍が、身体の中から飛び出してきたんだ」

「あ、あぁ……？」

「大量に出血して、首に剣を突き付けられて、切られそうだった」

収まっていないというのに、さらにルシエの言葉が勢いを強くさせる。独り言のようなそれは、絞り出すようにひっそりと全員に届いていった。

首の浅い切傷を、傷を無視して左手で触れながら、ルシエの口は止まらない。

「流石に焦ったよ」

左手は、陽の力で焼いたことで刺し傷から火傷に変わった脇腹へと移動する。

その外側は、高温すぎる熱で触れてしまったからか僅かに黒ずみ、それでも厭わずに触れれば激痛が全身を刺す。

自虐的な行為であったが、何か意図があるように思えゼフが止められずにいれば、次に彼のローブを掴んだ。

そこにも大きな染みを作ったルシエの血液。まるで慈しむかのような仕草で触れれば、ベチャリと嫌な感触が指に伝わる。

暫くそれを堪能したルシエは、ゆっくりと掌を目の前に掲げた。当然ながら、その手は赤くなっていた。

「凄く痛かった。痛くて、痛くて、ゼフが来てくれなければ、きっと……」

そこで、ルシエは唐突に顔を上げる。

その視線は、地に立つレイスに向けられた。彼は、何かに魅せられているように、ルシエに釘付けである。

そんなレイスが見たルシエは、ゆっくりと血に染まった手で左半分顔を覆い、右目を大きく見開いていた。
笑っている、とレイスの唇が無意識に動く。

「ほんと、死ぬかと思ったよ」

かすれた声で絞り出された言葉。ズルリと手が滑り、美しい顔が5本の線で彩られる。まるで、最初に出した炎の大蛇の様であった。

あまりの不気味さに、ゼフまでもがそれを見て足を下げたのだが、ルシエは気付いていないのか、周囲を無視して感情を高ぶらせているのか、髪が浮き一気に足首まで伸びていく。

そして、魔力が爆発した。

「あはっ！あはははは！あはははははは！」

そこにあるのは、異質、不気味、狂気――狂喜。
子供の様に無邪気な笑い声だったが、この状況でそう思える者はいないだろう。
狂った様に笑うルシエに、全員が震え、中には剣を落として両腕を抱く者までいた。

「レイス！　君に謝らなくてはいけない！」

「っ！？」

ルシエの頭から、傷の痛みがすっぽりと抜け落ちる。
その場で立ち上がりゼフの腕から逃れてクルクルと回りながら、ルシエはレイスに向かって叫んでいた。

標的となってしまったレイスは可哀想に、酷く怯えている。
それを視たルシエは、首を傾げて不可解だと訴えるのだが、自分では己の可笑しさが分からないのだろう。
誰に、何にそれほどまで怯えるのか、寧ろ喜ぶべきなのだと機嫌を悪くした。いや、僅かに尖らせた唇から、不機嫌というよりは不貞腐れたが近いのかもしれない。

「レイスってば、可笑しいね。悪魔を討てそうだったのに」

ここから、ルシエの演説が始まった。

人が本当に敵うのは、同じ人だけだと思っていたと。

銃や剣、武器というものが無ければ、生身だと身近に居る犬にだって劣るのだから、強ちそれは間違いではないのだろう。
大型犬は、その姿から容易に恐れを抱けるが、小型犬の力を知る者は実際少ない。例え、小指より細い犬歯であっても全力で噛み付けば、人の神経など容易に断てるということを知ってるだろうか。

そして、武器を持っていたとしても、大自然を駆け抜けるムーやシマウマの群れに迫られてしまえば、大した抵抗も出来ずに易々と跳ね飛ばされ踏み潰される。

自分に対峙するのは、そういうものに等しいと思っていたとあっさりと言ってのけたルシエは、さらに笑みを濃くしていた。

「自惚れていたよ、慢心していた。つまらなくなんか無い。面白い！　楽しい！　こうでなきゃ、そうだよ、こうあるべきなんだ！
抗い、歯向かい、でも、もっとだよ。もっと、もっと、もっと、も

っと！」

狂った様に繰り返すルシエ。動くたびに、傷は確実に悲鳴を上げているはずだ。しかし、それすら喜びに変わる。

だが、暫し狂った様に笑ったルシエは、ピタリと動きを止めた。

内から漏れる魔力に靡いていた髪は静かに背中を叩き、するすると縮んでいく。

表情も次第に消えていき、ゆっくりと口角が下がった。

そうして、言った。無表情で、まるで魂が抜け落ちたように。

それは、悪魔の囁きだったのだろうか。

「じゃないと、奪い概が無い」

その時のルシエの瞳には、何も映っていない。――何も、無かった。

1人の騎士の結末

まるでそれが当然かのように、定めかのように、ルシエは言い放った。

さらに、それだけでは終わらない。

「飛び、舞い、踊り。さながら妖精の如く」

「ルシ、エ？」

ゼフが戸惑いの声をかける中、指をそっと唇に当てながら表情を変える事無く詠唱を始める。

レイス達は、途端我に変えるのだが、矢が放たれても意に返さずにルシエは動かない。

尋常ではない魔力が凝縮された気配がし、当たりそうな矢は全て人為的な風が方向を変えさせていくのだが、それはゼフの意志では無く、ルシエに従う契約がそうさせていた。

さらに、その姿に戦意を根こそぎ奪われてしまい、退路を得ることに必死になりはじめた敵は、次第に大きく悲鳴を上げる。

目的も、覚悟すらも奪ったルシエの狂喜。何も映さない瞳は、それでも逃がしはしないと希望さえ失わせた。

レイス達は逃げ場を失っていた。故に、無駄だとわかりつつ矢を放つしか出来ない。

大地の純血種であった女騎士が私では無いと叫ぶ中、彼等は四方を突然せり上がってきた土の壁で囲まれている。

それは、大地の精霊であるノームがルシエの願いにより作り出したもので、いくら純血種といえど、活路を見出すことが出来ない様だ。

「翼、尾、爪。それは火炎に身を捧げた証」

通常と違い、一文では終わらない詠唱。隙は大きくなってしまうが、その分威力も通常とは段違いなのだろう。紡がれる毎に、ルシエの全身を淡い赤の光が覆っていく。

まず、バサリと背中から翼が生まれた。天使の翼に似て美しく非現実的で、次には竜のように太くしなやかな尾が現れる。そうして最後に、ルシエが唇に添えていた指を離して腕を下ろせば、両手から足まで達する長い爪が。

全て炎で形成され、其々の周囲の空気が揺れていることから、相当な温度だということが窺えた。

「陽は照らし、火は祓い。それが形と成りし時、陽は眩ませ、火は滅する」

その姿は美しいとしか言えず、赤い瞳と腰で止まった髪が見事に調和していた。

「赤く、紅く、朱く。我を飾れ。さすれば、望みの宴が始まる」

最後の詠唱を紡ぐ際、ルシエは瞳を伏せ、魔法は完成した。

しかし、それは幸福を齎してくれる天使の歌では無い。姿だけはそうかもしれないが、その者の本質を表す瞳が違う。

果たして、悪魔か死神か。

「陽の……」

呆然と見守っていたゼフは、思わず呟いてしまったのだろう。最早、今のルシエの姿は人とは言えない。

今にも自身の炎に呑まれてしまいそうなほど、精霊（ゼフ）側に近かった。

「ねぇ、助けて欲しい？　……救われたいのですか？」

粗末な土で出来た鳥籠の上から、無機質な声が人々へと降り注いだ。すると中からは、縋ろうと必死で醜いさえずりが、いくつもいくつも返ってくる。

ルシエはそれに対しやっと表情を変え、しかも、慈愛に満ちて朗らかな笑みを浮かべるのだが、ただ1人、レイスだけが引き締めた顔をして生気に満ち溢れていた。

人は死を恐れ、懼れ、畏れ。終わりだと嘆く。

しかし、人が最も力を発揮するのは、それを強く感じた時だ。

だからルシエは、生を踏みにじり、虐げれば、更なる場所に進めるはずだと信じてやまない。

「その先にあるのは、きっと――」

光の戻った瞳でレイスと向き合い、ルシエは答えた。

「良いでしょう。助けてあげます」

君の覚悟を踏みにじる形でね、と。

それからはあっという間であった。

バサリと背中の翼を羽ばたかせたルシエは、籠の中の鳥達の望み

を叶える為に飛んだ。悠々と、楽々と。

悲鳴と怒号が奏でるワルツで、次々に相手を代えながら華麗に踊る。

ステップを踏むたびに翼が、尾が、爪が人々の身体を掠め、僅かに触れただけでその者を灰にしていく。

「悪魔め！　人の心を弄べるだけ弄び、そうして魂を喰らうのだな！」

「いやですね、助けてと言ったのはそちらでしょう？」

次第に敵は、肉体での抵抗を諦めて罵倒を盾に対抗する。

当然、大したものにはならないが、それ以前に絶望が心を壊していくのだった。

ルシエは、まるで赤子の相手をするように、柔らかく暖かく、許してと助けてと言ったから、自分に利益が無くても珍しく従ってあげているんだよと言う。

これは、ルシエなりの礼らしい。自惚れを戒めてくれた敵に対する、自分に出来る最高の謝礼。

「これのどこがっ！」

思わずレイスが叫べば、恍惚とした視線が彼に注がれた。

「死ねばもう、怖がらないで済むでしょう？　痛い思いをしなくて良いんですよ」

「なっ……」

絶句。空しい音と共に、レイスそのものでもある剣を、彼はとうとう自ら手放した。

「生きる苦しみから、助けてるんです」

追い討ちをかける言葉に、レイスは瞳を大きく厚い手で覆う。それでも、耳からは失われる生の最後の訴えが止まらない。

1人、また1人と救いを施されていく中、レイスに出来ることは何も無かった。

「貴女には特別な、一層の感謝を」

「や、やめて！　娘が、夫が待っているの！」

特に、大地の国の民で胸に宿った清い騎士道から付いてきてくれていた純血種である女騎士の声が、一際レイスの胸を抉った。

切実な訴えすら、ルシエは所詮他人でしょうと残酷な言葉で返すのだから、最早これは一方的な虐殺だ。

お姫様にしたように、それ以上に美しい光景を作り出しながらルシエが跪いて女騎士の手の甲にキスを落とせば、彼女は灰となって風に浚われた。

後に残るのは静寂。本当に微か、レイスの喉の震える音が止まらない時を教えてくる。

ルシエは土の壁を平らな大地に戻し、恐ろしい光景を作った魔法を消した。

翼も尾も、爪も煙となって跡形もなくなり、立ち上がってレイス

へと近寄る。

「泣いてるのですか？」

膝をつき拳を地に叩きつけたレイス。それを、歩み寄りながら不思議そうに眺めるルシエ。

お姫様の命を陥れて、国を出てついてきてさえくれた者を犠牲にしてまで望んだレイスの結末は、あまりにも残酷であった。

「……貴様は」

「はい？」

レイスを待っているのもきっと、肉体すら奪う絶望であろう。そんな彼が出来るのは、残っているのは、今まで培ってきた剣の腕では無い。――言葉であった。

小さすぎた呟きが聴き取れず、首を傾げたルシエに真っ直ぐに向けられた瞳は、とても輝いていた。

「君の！　君の、元居た世界は、皆、そのように生きているのか」

突然の質問に、ルシエは遠い地球を想った。

魔法など無い世界。今ではあちらの方が幻想になりつつある。

科学の発達した世界。この世界が同じような発展を遂げることはあるのだろうか。

空はどちらも同じ。ただ、夜の輝きは若干差がある。

愛しそうに目を細めたルシエに、レイスは気付かなかった。

「皆、必死に生き、理想を抱き、日々を乗り越えている。それを、

こんな塵のように扱うのが、当たり前であっていいわけがない！
いくら精霊の為だとしても、同じ人間にこんな仕打ちが出来るはずがないだろう！？」

「つまり、人間じゃないと言いたいのでしょうか」

「そうだ！」

大の男が泣く姿など、平時であれば情けなく思えることだろう。
しかし、ルシエはその涙が美しく見えた。
反対に、頭の隅でサイードが鼻で笑う。

結果、２つの感情が混ざって苦笑を携えながら、レイスが落とした剣を足で蹴って遠ざけて、ゆっくりとしゃがんで目線を合わせる。
その動作で傷が疼いたのか、チラリと視線を肩に送っていた。

「残念ですが、元の世界は……居た国はですけど、剣など持つ必要の無いここより何倍も平和な場所でした。人の死を見る機会はあまり無かったですし、仕方無く殺すなんてこともまずあり得ない。禁忌とも言える程です」

だから、当たり前じゃないと片膝を立て、腕を置きながら言う。
流れ続けるレイスの涙は、もう片方の傷の響く左手で掬われて、ルシエの指を飾った。

「だったら！」

「貴方の言う人間の定義とは、一体どのようなものなのかな」

何故そのような事が出来るのかという質問は、まるで、誤魔化す

ように逆にレイスが問われることで阻まれ、次元の違いすぎる話題に彼は思わず涙を止めた。

不気味な静寂である。土の槍は幾らか形は崩せどそのまま、死体がぶら下がった状態で。残りは全て、灰となって当に空気中に消えてしまったが、僅かに地面に残ったそれは、つい先ほどまで息をし、動き、感情を持っていた。

そんな場所で、2人はまるでカップルが星を眺めながら未来を語り合っているようにも見える。

ただし、些か一方的で、レイスは死に近い場所にいるが。

「殺す行為に何も感じない。弄び、踏みにじることを平気でする。それが人間じゃないと言うのであれば、確かに否定は出来ません。しかし、皮膚が裂けて血管が破れれば、貴方と同じ成分で色をした血液が流れますし、身体の構造も一緒です。間違いなく、人間ですよ」

肩を指差してこのようにと示せば、レイスは大きく頭を振った。そういう意味じゃないと、言葉が上手く通じないことに驚きながらだ。

勿論、ルシエも彼が何を言いたいのか分かっていないわけではないが、だから何だで終われる程度のものでしかないのも事実。

それこそ、ウィーネ杯でサイードが抱いたものと変わらない。

「私が言いたいのは心だ。人間が人たる上で最も重要な、精神だ」

「へぇ。では、それは誰が決めたのでしょう。目に見えない、形すら無い。同じものが一つとしてないのだから、定めることは出来ないでしょう」

「君にも父上や母上がいて、温もりを与えられ、そして優しさを知

り。支え、助け合って生きてきたはずだ。生かされているはずだ！」

噛み合っているのかいないのか、段々と微妙になってきているのだが、必死なレイスは気付かない。

その姿を眺めつつ、だからこそ心は形を望まなかったのかもしれないとルシエは思った。

器官の一つとして存在してしまえば、壊れたら最後、消えてしまう危険が生まれる。手を加える事が可能になるかもしれない。それを恐れたから、心は目に見えないものであることにした。

そうすれば、壊れても直せるかもしれない。定まっていないから、自由に変化ができる。ただ、それにもデメリットはあって、こうして自分の様な存在が出来てしまったのだと。

少しロマンチックすぎたかと、思わず笑いかけてしまったルシエに、理解してくれないのかともどかしさを感じてしまったのか、レイスは突然上体を起こし細い肩を掴んだ。

予想外の、しかも傷のある部分を容赦なく掴まれたことで、抑える余裕も無くルシエは思わず呻くのだが、レイスは構わず叫ぶ。

「友や、家族がいるだろう！？　皆、１人では生きていけないんだ！」

つまり、レイスは良心を持てと言うのだろう。慈悲や尊重、手を取り合って生きていけと。

アピスの人々の要である精石の破壊という責務を負っているルシエ。確かに、もっと穏便で犠牲の少ない遣り様はいくらでもあることだろう。

それは、本人だって気付いているし、その上でこの道を選択している。

だから、この質問にあえて言葉通り答えるとすれば、残念ながらレイスの期待には応えられない。

「いませんよ」

「……は？」

そう、ルシエにもサイードにも、リサーナであれいないのだ。アピスで出会った人物なら、レイスも含めて何人もいる。ただ、お姫様でさえ便宜上戦友としただけで、本来の意味では共に戦った他人。

「貴方は、何度も惜しいところまで近付くくくせに、最後で選択を間違ってしまうのでしょうね。姫様然り、ウィーネ杯でのサイードとの試合然り、リサーナ然り」

ふふ、とペットを愛でるように笑ったルシエの前では、レイスが目を見開いていた。

リサーナという少女は、覚えたのが最近だというのもあるが、忘れようにも忘れられない存在。

情け無い結果を導いた部下を全力で叱責した後に待っていたのは、元上司からの厳しい説教と呆れだった。

まさか、あれさえも目の前の者だったとは、その影の大きさにレイスは絶句した。

「全て、ぜーんぶ、この世界で作ったモノです。親も、友人も、恋人だっていない」

そもそも作る気さえ無いのだと、語らずともレイスは察した。ただ、彼が知らないのは、地球でさえそういった存在とはほぼ無縁の

暮らしを目の前の者はしてきたということだ。アピスに来た理由が、人生のやり直しであれば違うかもしれないが、ルシエの内面を知っていれば、それでさえ自信満々で後押し出来無かったりする。

「そういうことじゃ……」

結局、どうやったって2人は――サイードも含めて3人は、水と油で反発するしか出来ないのかもしれない。

ルシエの中に、一人相撲、空回り、そういった意味の単語が浮かんだ。

「でもまあ、これでも一応、良心や優しさは存在するんですよ？それがただ、他とズレているだけだと思います」

そのズレがそもそも可笑しすぎるのだという訴えは、レイスの背中に生まれた気配によって言葉にさえ出来なかった。

「ゼフ、我慢してくれてありがとう。最後にさ、レイスを抑えてて欲しい。それが終われば、当分君の言う事に素直に従うから」

「……絶対だぞ」

レイスが反応するよりも先に、まずルシエが立ち上がって背後に降り立ったゼフに声を掛ける。

ゼフは、今の今まで黙って成り行きを見守ってくれてはいたが、纏う空気が怒気しか無い。にこやかなルシエと正反対な彼は、足下で転がるレイスをぞんざいな扱いで立ち上がらせ、後ろから羽交い絞めにした。

「抵抗する気は！」

「するよ」

死はとっくに覚悟していた。一層、清々しささえある。そんな自分に暴れる意志は無いと訴えかけたレイスであったが、目線の少し下にいるルシエは、今までと打って変わって怪しい笑みを浮かべた。

「絶対に、抵抗するよ」

残虐さが増した時、その口調が子供染みたものに変わったていたことを、忘れかけた恐怖と共に思い出す。

飄々として掴み所の無いサイード。礼儀正しく平凡な少女リサーナ。柔らかな空気を纏いながら、無邪気で非道なルシエ。

レイスはゼフよりも、アピスで誰よりも、その多面性を見た人物だ。どれが素顔かという疑問は、とっくに通り越していた。

「そうか、君は……」

そして、レイスは気付く。ゼフが背後で訝しむが、その先は言葉にしては駄目だとレイスは思った。

「私も、君のようになれれば、叶ったのだろうか」

「ふふ、馬鹿だね。叶うんじゃない、達成だよ。そして、その先に得るものは何も無い。失う為に歩くからこそ、どうとでもなれるのさ」

朗らかな笑顔と、引きつった笑顔。水と油は溶け合えないが、水は上昇し油は下降することで、同じ器に存在できる。そこに炎が生じれば、高まる温度に反発するしかないが、冷えていればなんて事

は無かった。

「……あ、忘れていたよ」

と、そこで、ルシエが突然声を上げてレイスに詰め寄った。静まりかけた感情が一気に危険を高めて、ぎょっとするレイスを他所に、ルシエは遠慮なく瞳を覗きこむ。

「異世界から来たって事と、女だってこと、誰に明かした？」

本当に、忘れかけていたのだろう。しっかりしてくれと、ゼフが気付かれないように溜息を吐き、逆にレイスは、ここではぐらかした場合、何をされるのか敏感に察知して慌てて首を振る。

「誰にも、誰にも明かしてはいなかった！　嘘ではない！」

人は嘘を吐く時、視線がほんの僅かに左に逸れる傾向がある。それが嘘だと認めているだけ分かりやすく。だから、バレない嘘吐きは、全てを塗り固めるのではなく、真実を絶妙な割合で混ぜるのだ。

「素直が一番だ」

レイスの言葉が真実だと判断したルシエは、そして長ったらしく不自然な前置きを終えた。ここからがやっと、お楽しみの始まりである。

ルシエは、レイスが諦めと喪失感を抱えながら、解放感でも満たされていると気付いていた。

そもそも、レイスとルシエの救いについての概念と価値観には大きな違いがある。

「ほんと、馬鹿だね。死にたく無いと泣いた者を生から助け、死を受け入れている者に同じことをするとでも思った？」

「……だったら、何を」

それ以外に何をするのだと理解できないレイスであったが、傷を厭わず左手で自分の額に触れてきた時のルシエの表情で、とてつもなく恐ろしいことが起こるというのだけ分かった。

まるで、新しい玩具を買い与えて貰えた子供のような嬉々とした顔。蕩けそうな美しい天使の笑みは、悪魔の宣告。

時間よ止まれと願ってしまう自分を、精霊王は赦してくれるだろうか。レイスは、意味も無く思った。その背中に居る者が本人であるのだから、皮肉で哀れである。

「後悔、してるんだよね。姫様を裏切ったことや、仲間を犠牲にしたこと。それの罪悪感に押し潰されそうで、だけど許されたくは無い。他の何を貶されてもいいから、そういった件に関しては、許されないことを望んでいるんでしょう？そして、死ぬことで、最大限償おうとしている。……違うかい？」

「ま、さか。やめろ！　やめてくれ！」

ルシエの言葉は、一言毎にレイスの表情を真っ青に変化させていった。そして彼は、ルシエの予想通り、みっとも無く情けなく抵抗を始める。

しかし、可笑しなことに、死の恐怖のものとは全く違っていた。

「ほら、抵抗した。あは！　だからそれから助けてあげるよ」

今更足掻いたところでどうにもならないと、ゼフの拘束の力が絶望へと追い遣る。
今更生きようとしたところでそれを許すつもりは無いと、ルシエははしゃぐ。

「あ、そうそう。ちなみに、優しさなんだけどさ」

何時そうされるのかという恐怖と、それ自体への恐怖が鬩ぎ合う中、まるでレイスの反応を堪能するかの如く、ルシエは言う。

「母親の多くは、子供に対して、人に優しくありなさいと教えるよね。でも、それってさ、見返りがあるからこそじゃないのかな。優しくした分返ってくるんだよって言葉、現に聴くじゃない？　勿論、それを見越した下心で教えてるわけじゃないっていうのは分かるんだけど。ただ、仮に優しくして罵倒されるのが当たり前だったら、誰もそんなことしないはずだよね」

何を語るのか。レイスの耳には、最早言葉が意味を成さない。ただただ、目を見開いて絶望を訴え、懇願する。
ルシエは笑いながら、その顔が見たかったんだと歓喜した。

「救いも同じ。報酬や感謝、そういったものがあるから行いたくなるし、行うべきだと言う。たまに、喜ぶ姿が見れれば十分だってのたまうのもいるけどさ、それだって、見る事で得られる何かがあるからこそだ。所詮、偽善者でしかない」

額に触れていないもう片方で、うっとりとレイスの美しかった髪に触れながら、ルシエの言葉は続く。

「一方的で迷惑にならないのは、助けたいと想い、助けて欲しいと

願う利害の一致。結局は自己満足の合成によるシアワセだ。自己を取っ払うだけで、浸れるんだから非難はしないけどね」

そして、これは一方的な救いだよと、純粋な自己満足だとルシエは語った。

実際、これから行う行為によって、危惧する存在が減るのだから一石二鳥でもある。

最後に、レイスの人生の結晶でもある利き手の剣だこを愛しそうに一撫でし、地獄は訪れた。

「……と、いうことで。今からレイスの記憶を消して、自責の念から救ってあげる。残りの人生、全てを忘れてお気楽に、能々と暮らしなよ。1人だけ、シアワセになれたらいいね」

「待て！　それだけは！やめろ、やめてくれ。いやだ、いやだあああぁ……！」

悲痛な叫びは次第に弱弱しくなり、夜の闇に呑まれていく。

レイスの額に触れる指は、そこだけ淡く緑に光る。それは、シルフの悪戯。大切な何かを奪う魔法。

想像もつかなかったことだろう。死よりも残酷なものがあるのだと、それ以上に恐れるものがあったとは。

ゼフの腕には、レイスの力が抜けていくのが伝わってきていた。風に乗って流れていく、彼の大切な軌跡。

いくら身体が生命活動を維持していようとも、レイスは死んだ。死よりも残酷な形で、終わりを迎えた。

これをチャンスという者もいるかもしれない。いくらでもいるのだろう。だとしても、本人が望んでいなければ、所詮は他人の無責

任な評価でしかない。

ゼフが拘束を解けば、レイスはあっさりと地面にずり落ちていき、虚空を見つめる瞳には彼の要素は一切無い。

「あっは！　心が本質だったら、誰にも区別はできないよ。少なくとも――」

その全てを見届けたルシエは、静かに呼吸をするレイスだった肉体をまたいで、ゼフの胸の中へと擦り寄っていく。……というよりかは、倒れこんだのだろうか。

何とかローブを掴んだその身体を抱き上げる、細くとも安定感のある腕。ルシエはゼフの首筋に顔を埋めて、次第に震え出す。

「俺は、そう思う。くっ、くはは！　……そこそこ楽しかったかな。でもまぁ、嫌いなのは変わらないけどね」

満月の下、１つの身体から２人の言葉と笑い声が響いていた。

兆し

「……はぁ」

今までの喧騒が嘘のように、静まり返った場で深く疲労の濃い溜息がひとつ。ゼフは、今まで張っていた結界を解除した。

小さな村だったからまだ良かったものを、ルシエを筆頭に全員が周囲を気にせず騒ぐので、彼がそういった気を回すしかなかったのだ。

腕に抱くルシエは、寧ろ今までよく動き回れていたものだと関心するぐらい重傷で、意識を失って荒い呼吸を繰り返す。

ゼフが、視界に僅かに映るレイスを意識する様子は無い。

「いい加減出て来い」

「あー、やっぱバレてたか」

それどころか視線は林の中へと移され、低い声が何かを促す。固定した先からは、1人の男の声。ゆっくりと姿を現す謎の男の足下には、その者が背負う大剣までしっかりと影を浮かべていた。

「コレを連れてさっさと失せろ」

「え、見逃してくれんの？」

コレ呼ばわりされたどころか、ゼフに足蹴にされて無抵抗に転がるレイス。金の髪と瞳の褐色な肌の男――リュケイムは、意外そうにゼフを見ていた。

一見ゆるい雰囲気にも思えるが、道化師はそんなに馬鹿では無い。警戒は、彼の人生の中で最大のものである。

ただ、ゼフは気にせず、むしろ此方が見逃す側だと、己の力量を見定められたことが驚きだった。

「ルシエが生かしたのであれば、私は捨て置くだけだ」

「いやぁ、悪いね」

リュケイムは、一部始終全て監視していた。その対象はルシエではなく、レイスであったが。そして、彼の視線がルシエに移る。

目を細め、敵意だけは出さないように気を付けながら、血塗れの小さな身体を眺める。リュケイムには、ルシエの状態がかなり悪く思えた。

なのに、ローブ（ゼフ）の男が仲間だとすれば、何故慌てないのだろうか。浮かんだ疑問は、この監視で出てきた幾つものキーワードから自己解決するしかないのだが、リュケイムからすればあり得ない結果が導き出され、彼の身体は僅かに強張る。

それを察知したゼフは、関心の息を吐きながらふわりと浮かんだ。

「彼……彼女？　あー、ややっこしい。そいつも、俺に気付いてたでしょ？」

「当然だ」

口にしていたらきっと、リュケイムは問答無用でゼフに殺されていただろう。気付いていないから許される無礼であって、気付いたら跪き平伏さなければならない。

「だったら、判断は俺に委ねると解釈させてもらうわ。で、アンタあんまり傷とかに詳しそうじゃないから」

ほらよ、とゼフに投げられたのは小さな袋。中身を確認すれば小さな粒が2種類入っており、リュケムは血止めと化膿止めだと言った。

「よっこいせ」

まさかそんなことをされるとは思わなかったゼフだが、リュケイムは気にせずレイスを担いで林へと歩き出す。

「俺はさ、正直精石なんてもん、無くて良いと思ってる。勿論、感謝と敬意は持ってるが、全部を精石まかせの都合の良いようにする今の状態の方が、精霊王を侮辱する行為に近いと」

そして、独り言のようにゼフに言った。ゼフは黙って聞いている。

「礼、言っといてくれよ。そいつの中の、坊主と青年に」

そして、レイスに優しく笑いながら続けられたのは意外な言葉だ。坊主はサイードで、青年はルシエだろうか。リュケイムが、2人は其々別人だと始めから区別できるのは、彼もまた道化師だからだろう。

「部下（レイス）を殺さずにいてくれて、俺に殺させないでくれて。後、王女殿下を安らかな御心にさせてくれたのも、ありがとなって」

リュケイムがここに居たのは、もしかしたらレイスを消す為だったのかもしれない。それを彼は、あまり望んでいなかったのだろうか。

真相を知るのは、リュケイム程の道化師相手であれば難しいだろうが、きっと間違いでは無い。

ゼフは黙って、その背中を見送ることなく、自らも動く為に一度宿の部屋へと戻る。

ルシエをベッドに下ろし、フードを落とした時、彼は珍しく楽しそうに笑っていた。

「面白い人間も居たものだ」

それには、ルシエも含まれているのだろうか。本人は、意識を失い苦しそうな表情を浮かべているだけであった。

小さい頃から何度も見た夢。数人が一人を囲い、少し離れた場所で一人がそれを眺め、さらには数人がその一人を眺める。

皆一様に美しく、でもその光景はそう思えなかった。

何かの一場面が切り抜かれた静止画だけが浮かぶ夢は、悪夢のように胸に巣くう。

目が覚めれば毎回冷や汗を掻き、熱を出したりすれば必ず現れ。

気持ち悪くて仕方が無かった。

今も、そうだ。

囲われてるのは、金髪の女。囲っているのは6人。それを陰から覗いているのは黒髪の性別不明の奴。その黒髪を見ているのは、4人の女。全部で12人。

背景の無い真っ白の中、それぞれ様々な表情で止まっている。

それを眺めるだけの、不気味な夢だ。

目覚めの合図は、それがガラスの様にヒビを刻んで粉々になる音。

アピスに来て1週間程経った頃だろうか。此方で初めてそれを見た。

魘されるような悪夢ではない。ただそれが、2週間、1週間、5日、3日。段々と間隔を狭めながら見るようになると、寝付きが悪くなり、寝覚めが悪くなり。うんざりした。

ただ、今日は何か違和感がする。身体が異様に熱い気がするからだろうか。
焼け付く痛みもある。

そこまできて、ふと違うと気付いた。

小さい頃から、何百と見てきたのだ。全員の細かい所まで覚えている。昔は一人一人に名前を付けたりして遊んだりした程だ。

そう、これは今まで見てきた静止画では無い。

視線の先は、その変化に縫い付けられて、そこでは囲まれている金髪の女の口が開いていた。いや、動いてる。

そして、女は言った。

――駄目よ？　約束は、絶対なんだから。

パリンと、全てが砕けた。

「……っ、う……」

「痛むか？」

決して快適とは言えない環境、身体の下からくる振動により強制的な激痛に呻く1人の少女がいた。彼女に心配そうな声を掛けるのは、聞き覚えのある者のものだ。

自分のおかれている状況を忘れているのか、少女は起き上がろうとして失敗し、さらに痛みを感じている。

リサーナとゼフは、粗末な荷馬車に乗っていた。

「今、誰」

「リサーナだ。だから荷馬車に乗れている」

なんとか瞳をこじ開けるが、視界どころか記憶さえも朧気で、リサーナは自分が今誰なのかも分からなかった。

喋るのも、それこそ息をするのも億劫そうで、何とか絞り出した単語が精一杯だったのだろう。大きく息を吐くが、それさえ熱く痛みを伴う。

レイスから記憶を奪った一夜から、今日で2日目。その間、意識が覚醒することは殆ど無く、ゼフはそこで人間の弱さを思い出した。そして、リュケイムに薬を渡されなかったらと、ゾッとする。

「一応、医者に手当てはしてもらったが、その傷を癒すには水の国に行くしかない」

「そこまで、なんだ」

かなり包み隠しての言葉を、リサーナはしっかりと理解した。

このままでは死ぬのだと。それだけ、傷が酷いのだと。

アピスには、医者と治癒術師という存在がいる。医者は地球と同じだが、治癒術師は魔法で傷を癒せる者のことだ。

医療技術は地球より格段に劣るアピスだが、反面、外傷は治癒術師の力量にもよるが軽ければ一瞬で治せる。

おそらく、医者は患部の消毒をして包帯で巻く処置が精一杯だったはずだ。

そして、もしかしたら言ったのかもしれない。ゼフに対し、諦めなさいと。

リサーナは、大した知識もないのに無茶するんじゃなかったと苦笑した。

「疲れた、顔」

そして、ゼフを見て申し訳なくもなる。

普段は見えない表情も、覗きこまれていることで僅かに窺え、綺麗な翡翠は僅かに陰って寝る必要も無いのに濃い隈が刻まれていた。

今までと同じ手段で移動しても、確実に間に合わないと無茶をしているのだろう。

「4日」

「う、ん？」

力無い微笑みに、ゼフは声を絞り出した。

「なんとか、４日持ちこたえろ」

「という、ことは……最低、１週間は、見越しとかないと、いけない、ね。無茶、言う」

そんな捻くれた返しにも、ゼフはいつのものように鼻で笑って返せない。

傷が膿み力尽きるのが先か、ゼフが水の国に辿り着くのが先か。

どちらにせよ、死神は直ぐ脇に控えている。

何も出来ないリサーナは、ただ眠ることにした。ゼフと、近くに存在している水の精霊の微弱な力に頼る以外、他無かった。

ほんの僅か休息をしたゼフは、その後すぐに荷馬車から降り、再び空を駆ける。

――約束、したからね

誰かがそう囁き、２人の様子を見守っていた。

浴びるのは、悲しみと歓喜の雫

溢れる水源と、水の精霊王の眷属であるオンディーヌの治癒の能力により、憩いの国として知られる水の国。

そんな国の首都の次に大きく、世界で最も安全な場所としても有名な街アズレイには、自慢の広場がある。

そこでは、大昔に造られたという大きく美しい噴水を中心に、緑に溢れ花が咲き乱れていた。家族と、友人と、恋人と過ごす有意義な時を与えてくれる場所であり、平和の象徴。

しかし、現在人々が最も集まる噴水の周囲は、重々しい空気となっている。

その理由は、噴水の中心で、空に飛ぶ水を楽しそうに浴びる美しい女性が象られた像の右目にあった。

スカイブルーのクオーツがはめ込まれた美女は、両膝をついて両手を掲げ、空へと想いを馳せている。それは空を映しているのか、水の力を凝縮させているのか。とにかく、そのクオーツこそが水の精石である。

まさか唯一無二の精石が野ざらしにされているとは、アピスの人々であっても初めて目にした際は驚くことだ。

しかし、いくら雨風に晒され続けても、その輝きが失われることは無い。美女は常に、水の国の成り立ちをその右目で見てきているのだ。

そして、最も安全な場所と言われるのは、精石が放つ気配の柔らかさを浴びながら生活している人々の温厚さからきているのだが、

勿論、盗み出そうとする不逞の輩は五万といた。
だが、誰一人として、美女から右目を奪うことは出来ていない。
抉り出そうとしても決して抜けず、美女を地に押し倒そうにも、台座にも彼女にもヒビすら入れられない。
なので、普段は衛兵が定期的に見回りに来る程度だった。

しかし、とある噂が世界中で囁かれ初めてから、長閑な噴水の周囲は仰々しい場所へと変化する。見回りだけだった管理体制が、衛兵だけでは無く首都から派遣された騎士まで加わり、昼夜問わずの厳重な警備。その数なんと５０人。
一般人は、近付く所か見る事すら叶わなくなってしまった。

何故、そんなことになってしまったのか。全ては風の国の首都が半壊した事が原因だ。
天災レベルに多くの犠牲者を出した一夜が、故意に引き起こされたものだというのは、今や子供でも知っている。
ただ、だから警戒しているのでは無い。幾つもの不確定な噂の中の一つに、悪魔と呼ばれるその犯人が、精石を破壊する能力を持っているというものがあるのだ。
それを知った水の国の権力者達は、一部では風の国のデマだと言う者もいたが、それでも即座に精石の警備を命じた。杞憂で終わればそれで良いと。
精石そのものを安全な場所で保管できればそれが一番だったが、残念ながら我侭な美女は、水浴びを止めるつもりは無いのだから。

水の国は中々に危機管理能力に優れているらしく、それによって人々が不平を漏らすかもしれないとも想定しての警備の数だったのだが、民すら精石の無事と加護の永続を願って、許される範囲まで近付き膝を折った。

そうして、仰々しくはなったが今までと変わらずの平穏な日々の、ある晴れた昼下がりのこと。

精石の間近で任務に当たっていた騎士数名が、ピシリという不吉な音を耳にした。慌てて精石に目をやると、その瞳は普段と変わらず輝いている。

彼等は、念の為周囲に怪しい奴がいないか調べさせるが、これといった連絡も無い。

仰々しい噴水の周囲を除けば、草の上で寛ぐ者、デッサンに励む者、美しい旋律の歌を口ずさむ者、愛を語り合う者。今まで通りの風景だ。

そして、騎士達が気のせいかと思った矢先であった。

――ピシ、ピシ、パリン！

まるで泡が弾けるように、雛が卵から羽化するように。小さな音を発てながら、水の精石は粉々に砕けて消える。

光を放つわけでも、突風が生じたわけでもない。その瞬間を見ていた騎士達は、だからこそ呆然とするしか無かった。

癒しの象徴であり、癒しそのものでもあった精石を、水の国はあまりに呆気なく失った。

それでも、瞳を失った美女の像は楽しそうに微笑む。いや、もしかしたら、よりいっそう微笑みを深くしたのかもしれない。

解放を、祝して。

「残念だが、私には無理だよ。諦めて他を当たってくれ」

「誰も完治させろとは言っていない！　出来る範囲で治癒してくれと言っているのだ！」

「しかし、それでは治したとは言えんだろう？」

「くそったれが！」

苛立ち、憤る声と冷静で冷淡な言葉が、ある宿の一室で交わされていた。

椅子が派手に蹴られるが、扉は無情に閉まる。ベッドで眠っていた者は、その大きな音で固く閉じていた瞳をうっすら開いた。

「また、なの？」

「これで5人目だ……。これだから人間はっ！」

禍々しい殺気を放つゼフだが、直接床に座ってベッドに腰掛けて項垂れている。弱々しい動きの腕が、彼のフードを優しく落とし髪を撫でた。

「そんなに、焦らなく、ても……。ここは、オンディーヌが多い、から。まだ、頑張れる、よ」

リサーナは、なんとか出せている声でそう言った。指先は冷たいが、額からは汗が流れて熱があるようだ。

ゼフは約束通り、あれから4日で腕のある治癒術師が最も集まる街アズレイに辿り着いた。隈はかなり濃くなっており、美しい翡翠も大分輝きを失っているところから、相当無理をしたのだろう。

「これ以上熱があがれば、お前であっても……」

ゼフがリサーナの額に手をやり、苦々しく零す。そこからは、異常な温もりが伝わってきた。

熱が出ているということは、傷が化膿してしまっているのだろう。このままでは、体力を失うばかりだ。

アズレイに着いたのは昨夜の事。宿の女将は、それはもう驚いたことだろう。顔を隠した怪しげな男が、腕に死にかけの女を抱えながら夜遅くに現れたのだから。

そしてゼフは、それからずっと、街中を治癒術師を探して駆け回っている。

しかし、その結果は先ほどの会話からも分かるように、全員が全員匙を投げるという最悪のものだった。

それは、治癒術師には——魔術師全体にいえることだが、明確な資格と体制が無いのが原因だ。その為、腕前は治した数に比例し、流石に擦り傷をいくつ治したところではならないが、ある程度の傷を治し、死者を出さなければ、人の評判と噂が術師のレベルを定めていく。

だから、リサーナの治癒は拒否され、そしてそれは、紛れもなく

彼女が死にかけていると言葉より無情な形で示されている。

そもそも、普通であれば当に死んでいてもおかしくはなかった。

水の国には治癒と幻術に秀でた精霊オンディーヌが多く、無償の助けをしてくれているからこそなんとかなっている現状。意識がまだあるだけでも、奇跡である。

「水が起きていれば……！」

ゼフは、力を持っていながら、何も出来ない自分に苛立って仕方が無かった。

幸か不幸か、アズレイは水の精石のある場所でもある。しかし、解放はルシエにしか出来ず、今の状態でもし実行しようとしたならば、魔力も体力もほとんど失っている状態故、その先には確実な死しかない。

他人を頼るほか2人に打つ手は無く、それさえも絶望的であった。

リサーナは、微かに笑った。

「どうした」

「いや、自業自得、だよなぁ、って」

弱々しい動きで首を動かし、悪魔が人の助けを欲しているのが皮肉だと言う。

ゼフも、思わずそれには苦笑して同意した。

ただ、それがリサーナの自分への慰めだと理解しつつ、悪魔と言って欲しく無いゼフは、彼女の額のタオルを冷やすために立ち上がりながら口を開いた。

「確かに、お前は正しいことはしていない。しかし、間違いを犯しているわけでもないだろう」

「気休、め？」

冷やしなおされたタオルが気持ち良いのか、ほっと溜息を吐きながら、今度はリサーナが苦笑する。

頬に添えられたゼフの掌の冷たさもまた、彼女の心を穏やかにさせ、ゼフの瞳もとても柔らかにその表情を見守っていた。

「違う。人間からすれば、間違っているのだろう。しかし、精霊（わたしたち）からすれば、それこそ自業自得なのだ」

しかし、その言葉を聞いたリサーナの瞳は揺れた。一瞬、リサーナでは無い色を持った気もする。

――わたしたち

その中には、リサーナも含まれていた。

しかし、彼女は人間である。それは、未来永劫変えられない。

人間でありながら、精霊側。精霊側でありながら、人間。

その足場は僅かしかなく、立場はあやふやだ。

「……そう、だね」

今更な事実に揺れてしまった精神は、傷のせいで弱っているだけだと誤魔化したリサーナは、悟られないよう殊更苦笑を強くした。

「お客さん、少しよろしいですか？」

そんな時だ。控えめなノックの音と声が、２人の会話に割って入った。

ゼフはさっとフードを被り、リサーナが気配を探ろうとするのを手で制して指で扉の向こうの人数を示す。

「気配、消して」

「もうやっている」

敵意の無い気配はどうやら３つ。何が目的だとしても下手に言及されないようゼフに精霊化を命じれば、彼は既にやっていたらしく、どちらにせよ視えてしまうリサーナは頷いて目を閉じた。

どうやら、寝たふりを決め込む様子だ。

「良い、入れ」

「お客さん、失礼しますね」

そんな２人を知るわけもない扉の向こう側では、上からの高圧的な男の声に対し、宿の者らしき相手が動揺しながら答えている。

開いた扉の前には、３人の人間が居た。

精霊化したお陰で悟られないゼフが監視する中、彼等は了承も得ずに部屋へと入ってくる。１人は、昨夜自分を迎えた宿の女将であったと気付いたが、見覚えの無い残りの２人に対し、彼は警戒の目を向けた。

反対にリサーナは、寝たふりをしているので状況が分からず、しかし気になって仕方がないのか、僅かに瞼が痙攣している。

「この子か」

「はい、もう見ていられなくて」

「……可哀想に」

そうして、リサーナが目を開けたい衝動と葛藤と戦っている間に、訪問者の3人は、彼女のベッドの前まで来て何やら会話をしていた。

高圧的なのは老齢の男で、もう1人の謎の人物は年若い女。女将はその2人の後ろに付くように立った。

その女将を抜いた2人は、青いラインが目を引く騎士の軽装に似た白い服を着ており、左胸には水の紋章である半漁の女の刺繍がある。

女はベッドの脇に片膝をつくと、徐にリサーナの額のタオルを取って手を当てた。

ゼフは黙って様子を見守っている。

「っ！　凄い熱。どうしてこんなになるまで、放置されているの。術師は呼ばなかったの？」

「それが、この子を連れてきた方が、何人か頼んでいたみたいなんですが」

「断られたのだろうな」

どうやら全員、敵意を持って部屋を訪れたわけでは無い様子だ。

それどころか、リサーナの状態の酷さに憤り、女将の言葉に女が舌打ちまでしている。

ゼフとリサーナは、もしかしたら、と淡い期待を女将に向けた。

――治癒を頼んでくれたのかもしれないと。

「……先輩。これは、普通の治癒術師を探しても無駄かと思います」

「仕方が無いな。取り敢えず、起きてもらおう。判断はそれからだ」

ただ、予想しろとは無理な話ではあったのだが、リサーナはこの時点で起きるべきであった。

女の横に立っていた男が動き、彼女の身体に遠慮なく腕を伸ばす。

「っ――!?」

リサーナは、声にならない悲鳴を上げながら飛び起き、流石のゼフも唖然とする。

「先輩!」

「これが一番手っ取り早い」

「一瞬あの世が見えたわ!!」

静かだった部屋は、一瞬で賑やかになった。ただし、男の行動に非難の目が集中する。

一瞬元気を取り戻したかのように起き上がって大声を上げたリサーナであるが、身体が回復したわけではない。

そして、寝たふりはやめておけばよかったと、人生で最大の後悔を経験したリサーナは、フラリとベッドへ倒れ込んだ。

何が起きたかは、あまりの男の奇行に詳しくは控えるが、意識を取り戻させるためだとしても、怪我人にするべきことでは無いとだけ言っておこう。

「そんな気力があれば、後一週間はいけるな」

危うくベッドから落ちそうになった彼女を支えてくれた男の手は、先ほどの奇行とは打って変わって優しさが籠められていた。

「今ので、3日に、なった」

「十分だ」

年寄りになると、若者の皮肉も可愛いのだろう。男はリサーナの恨みの視線に笑い、蒼い瞳を揺らした。

彼女がそのまま横に視線をスライドさせれば、その先には男と同じ色の瞳の女がいる。

女将はその後ろで、あんぐりと口を開けて呆然と取り残されていた。

視覚ではっきりと情報を得ることができるようになったリサーナは、一瞬だが確実にゼフと視線で会話をし、彼は僅かに頷いていつでも動けるように3人の背後に移動する。それを確認し、視線を男に戻したリサーナは目を細めて苛立ちを映した。

どうやら謎の2人がオンディーヌと契約を結んでいると気付いたらしく、そこから情報を得ることが出来ないのが理由なようだ。

出来る事が出来ないという憤りに、我慢ならないのだろう。尚更、自分の弱さを自覚する。

「で、だ。お前、誰？」

ただそれも、恨みの視線を無視した男の言葉に消えてしまう。

それは此方のセリフだと、リサーナとゼフの気持ちがシンクロし

た。

「じ、じゃあ、私はこれで」

しかも、女将は空気に耐えられなかったのか、リサーナに対して安心していいからねという言葉を残し、あっという間に逃げてしまった。

視界の端でその行動を映しながら、リサーナは答えずに男を睨んだ。明らかに、名乗るつもりは無いと瞳は言っていて、男も一歩も引かない。

その影で、お互いに相手の情報を忙しなく奪おうとするのだから、男が一般人では無いのは確かなのだろう。そうなると、黙って2人の様子を見ている女も同じだ。

2人とも腰に剣を携えていないので、騎士では無い。オンディーヌと契約をしていると分かった時点で、魔術師であり治癒術師だと気付いてはいるのだが、そうだとしてもリサーナにとってそれが安心する要素にはならず、期待はあれど布団に隠れた手は小剣を握っている。

そして、警戒とは別に、違うことでも頭を働かせなければならなかった。もし、彼等が期待通りだとすれば、それを逃してはならないのだ。

女が1人、宿で寝ている状態を押しかけてきたのだから、警戒しても言い訳は立つ。だが、怪我そのものを言及されれば、正直に言えるわけがない。

その誤魔化しも考えなければならず、リサーナは必死で頭を働かすのだが、熱で朦朧とする状態だと情報を得るだけで精一杯であった。

「先輩、いい加減にして下さい！　貴女も、大人しく寝てなきゃだめじゃない」

長く続いた睨み合いは、様子を黙って見守っていた女の一喝で幕を閉じた。

男の手を払いのけてリサーナの肩を掴んだ手が、有無を言わさず枕を背もたれにして身体を起こした形にさせる。

「ほら、先輩は後ろを向いて。傷はどこ？」

そして、自己紹介や自分たちが何故部屋に来たのか等の説明を後回しに、拒否権は無いと強気に聞く。

女は一目見ただけで、リサーナの熱は怪我からくるものだと見抜いていた。

「……左肩と左脇腹」

リサーナとしても、治癒してくれる可能性があるのであれば、警戒しつつも従うべきだと判断する。

答えながらのろのろと服を脱ごうとすれば、女はそれを制して素早く上着を剥いだ。すると、その下にあるのは素肌ではなく、半分

以上の面積を占める包帯だ。そこは、傷の度合いを示すかのように血が薄っすらと滲んでおり、さらに化膿しているのでその色以外にも染まっている。

想像以上だった傷に、女は思わず息を呑んだ。そして、小さくよく生きていられたと本音を零す。

リサーナの頭では、まだ傷の言い訳が思い浮かんでおらず、恐る恐る包帯を外そうとしている手に困惑した。

その様子を、背を向けているはずの男が悟られないように観察している。

今はまだ、誰かも分からない人物が部屋を訪れて、流れに呑まれて従っている少女でいられているだろうが、それでも、死にかけているはずなのに気丈に振舞え続けていられれば、段々と怪しむものになってしまうだろう。

気を張れば、安心できるゼフだけが居る時の様に弱々しい姿を晒すことは無い。

リサーナにとって当たり前のことは、普通であれば出来ない事。傷の度合いは、それほどのものなのだ。

「盗み見る、ぐらいなら、普通にして」

しかし、それに気付くどころか、リサーナは男に向けてそう言った。彼は、気付かれていたことに僅かに驚き、彼女の言葉によって自分に非難の目を向けてくる女にバツが悪そうに笑う。

「そりゃ、助かる。大丈夫だ、そんな貧乳見たところで」

「いい加減にしないと、縫いますよ？　色々と」

驚きを悟られないように誤魔化せば、仲間である女の方が手痛い反応だ。男が観察するリサーナは、包帯に張り付いた傷が痛むからか眉を顰めて、特に不審な点は無い。

たまたまか、と男が思っている間に、肩の傷は空気に晒された。

「これ、は」

「もう一方も診てからだ」

思わず止まった手を、男が急かす。傷を見た途端、男の表情が真剣なものに変わり、リサーナは焦った。

尚更、目を合わせては駄目だと視線を次に外される包帯に縫い付ける。

実は、始めの睨み合いをリサーナは後悔していたのだ。熱に浮かされた頭は、判断力や思考すらも奪う。

2人が只の治癒術師では無いと気付き、特に男は歳を食い人生経験がある分、性根を読み取り自分の瞳から何かを感じ取ってしまうかもしれないと危惧する。

リサーナがいくら平凡で演技に長けているとは言え、何度か瞳に変な評価を受けている身だ。迂闊だったと痛みによるものと装い、唇を噛んで意識をよりはっきりさせようとする。

「2人は、どうしてここに？」

そして、意識を自分の動きだけに向けさせない様、真正面から聞いた。

「私達は、高位治癒術師なの。丁度、下に食事をしにきて、女将から貴女の話を聞いたのよ」

聞いたからには放って置けないから、と女はすんなりと答えてくれた。
男は観察の視線から、今度は傷を診るものに変わっており気を抜けるわけではないのだが、それでもリサーナは内心ほっと安堵する。

「っ！」

「……肩でも、十分なのに」

その隙を狙ったわけでは無いのだが、女は脇腹の包帯を剥がし終え、途端、部屋の空気が変わった。
高位治癒術師であれば、幾つもの傷を診て治癒してきているはずだ。そんな者でさえ怯んでしまう程のものは、一般人であれば卒倒してもおかしくは無い。
リサーナの傷は真っ赤に爛れ、血と組織液の交じったものを滲ませながら彼女を蝕んでいた。

「触っては駄目よ！」

脇腹の包帯を外した際の激痛は、リサーナに大きなダメージを与え、彼女は思わずそこを抑えて蹲りかけた。
女が慌ててそれを止め、背もたれにしている枕に押さえ付けて、手で瞳を閉じさせる。その手は淡い水色の光を帯びながら、リサーナの激痛を和らげていった。
荒くなった熱い息は段々と落ち着いていくが、女は気付かない。その影で、リサーナが薄く笑っていたことに。

自分が、名も知らない相手になすがままにされる程切羽詰っていることや、治癒術師の2人が何も気付かずに悪魔に手を貸していること。その全てが可笑しくて、思わず笑う。

それと同時に、リサーナは何故かアピスに来て初めて泣きそうになった。

優しさに良心が痛んだわけではない。ルシエやサイードであったなら、ほくそ笑んだことだろう。自分（リサーナ）だからこそ、そうなったのだ。

ゼフだけが気付き、悲しげにそれを見ていた。

「火傷の下に、……刺し傷？　どうしてこんな怪我を」

「え？　あ、えっと」

しかし、その気持ちも、女の零した疑問に気にしていられなくなる。

散々困っていたくせに、結局良い案が浮かんでおらず、リサーナはどもるしかない。

正直言うわけにはいかないが、かといって単純に襲われましたで済ませるのも不自然。そんな時、途中から黙って傷だけ診ていた男が、徐に容赦なくリサーナの身体を触り出す。

ぎょっとした女とリサーナだったが、男は気にせずに肩と脇腹の傷を交互に見やり、顎に手をあて考え込む。

緊張から冷や汗が出てくるリサーナだったが、しばらくすると、男はふむと1人納得して口を開いた。

「無茶な止血をしたものだ。肩と脇腹、出血を止めたのは正解だが、その方法が悪すぎる」

瞬間、警戒は最大に。流石、高位治癒術師というところか。同時に、下手な誤魔化しをしなくてよかったと、リサーナは心から思った。

「止めなきゃ、死ぬと、思ったから」

そして、咄嗟に出た言葉は、我ながら厳しいとしか言えないものだった。ゼフも、視線だけでそれは無理があるだろうと非難している。

しかし、言及されると構えたリサーナの予想を裏切り、女ですらそれに突っ込んでくることは無く、黙って治癒を施し始める。

何があったのか、どうやって止血したのかも、それ以前に素性さえ聞かずにだ。こうなると、助かる反面、逆に警戒してしまう。

「一度に治すのは無理だな。せっかくだから、アイツを寄越すか」

「はい」

2人はそれだけ言って、説明もせずに勝手に話を終わらせた。

流石に戸惑うリサーナとゼフであるが、彼等は金銭を要求することも無く部屋から出て行き、半ば呆然と見送るしか無かったのである。

時は、僅かに進み、謎の2人組みが訪れてから数時間後。外は、

すっかり闇に支配されていた。

「信用するのか？」

２人きりになった部屋では、小さな言い争いが勃発していた。

リサーナは、大分具合の良くなった身体を起こして、仁王立ちするゼフに咽った。

「するわけないじゃん。でも、治癒してくれるのは確かなんだから、それを受けない理由はないでしょ？」

「しかし、何かしら裏があると考えた方が良いだろう」

ゼフの言い分には、リサーナも勿論同意する。あの２人が何を考えているのか分からない限り、警戒しないわけがない。もしかすると、その正体に気付いている可能性もあるのだ。それは、彼女に常に付き纏う危惧である。

ただ、治癒をしてくれたのは事実で、会話から想定すれば完治するまで面倒を看てくれるらしい。であれば、まずは最大の障害となっている傷の問題を解決するべきだ。

それに、誰かを寄越すらしいが、もしそれが治癒ではなく捕縛や討伐を目的としているのであれば、返り討ちにするだけ。その前に密告していると気付ければ、逃げれば良い。

ゼフにはそれが容易く、そうなったとすれば、リサーナはその身を犠牲にして水の負うを解放するだけだと考えていた。

つまりは、なるようにしかならず、なるようになるということだろう。

「どっちにしろ、タダで死ぬつもりは無いから安心しなよ。私がこ

こで死んだとしても、ある程度この世界も地球も持つだろうし。その間に、代用は見つかるでしょ」

そして、リサーナは、とんでもないことまで言い出した。

ゼフは、呆れるどころか本気で怒りを抱いたようだ。

「私は、お前以外と契約するつもりはない」

「はは！　っ、ゼフはほんと、嘘が吐けないんだねー」

しかし、リサーナは笑った拍子に傷を痛めながらも、楽しそうである。

ゼフはより一層表情を歪ませるが、それすら何のダメージにもならないようだ。

長身すぎる男に仁王立ちで睨まれる迫力は相当なものだというのに、リサーナは軽く、だって事実でしょと返している。

ルシエが解放した精霊王は、現在2人。本人にとって、たったの2人だ。それでも、世界の均衡はかなり改善されていた。

精霊を視覚できるまでには至っていないが、それでもルシエは、脆弱だった力が回復してきているのを感じているのだ。

だからこそ、いくら自分が最後の頼みの綱だとしても、最期にはならないと思っている。ルシエの死と世界の滅亡は比例しない。

そもそも方法は、状況が変われば幾らでも見つける事ができ、代用なんてものはそこら辺に転がっているものだ。

ゼフは、決して彼が持つ情報全てを曝け出しているわけでは無いが、事実を口にしない代わりに嘘も言わない。

故に、否定をしなければ肯定になるとリサーナは知っている。

リサーナは、合わせていた視線を窓の外に移しながら膝を抱えた。

「お前は、本当に危ういな」

「……何が？」

そんなリサーナを窓側に追いやり、同じようにベッドの上に座りながらゼフは言う。

彼女が顔を向けずに返すと、彼は無理やり顎を掴んで視線を合わせさせた。

幾らか美しさを取り戻した翡翠は、真っ直ぐに注がれている。

「私には、生きようとしている様には見えない。死の概念がない私でさえ、それを恐れないその姿が恐ろしく見える」

「ははっ、何それ」

リサーナは噴出しながら、カツラをずるりと外した。

「んなわけないっつーの。死は当然怖いさ。ただ、それ以上に恐れるものがあるだけだ」

くるくると、カツラを指で回して遊びながら、サイードは呟く。

死が、安寧でもあると気付いただけだと。

ゼフは正直、ここでリサーナからサイードになってくれてホッとした。

彼にとってリサーナは、一番表に出て来ないからこそ最も作られていると感じる存在で、何より嘘の塊だ。

ただ、続けられた言葉は今までで一番サイードらしくないものだった。

「だから俺（サイードリサーナ）は私であり、あいつ（ルシエ）はあの子（紗那）だった者なんだよ」

明らかに意味が分からないと訴えるゼフを無視し、サイードは頭を振って寝てしまった髪を整える。

ゼフは夜に浮かぶその姿が美しいと、素直に思った。

「生きる事に意味を求めるのを辞めた途端、世界が広がった気がした。そしたら案の定、自分の生きていた場所は狭くて小さかった。様は、受け入れて流されたいだけだな」

「意志に関係なく、か？」

ゼフが思わず伸ばした指は長い爪が髪を弄び、サイードは気にせず窓の淵に肘をついて、再び外を眺める。

傍から見れば、男同士で際どい間柄に思える光景で、サイードもそれに気付いたのかゼフの手を払いのけていた。

「意志なんてものは、貫き通せなければ所詮ただの願望で羨望だ。夢も、追い求めて追いつかなければ、ただの幻想。俺は、やりたい事をやるだけだな。それこそ、もう嫌だと思ったら、救世主で悪魔な今の状況だってすぐに投げ出す」

きっぱりと言いきった言葉に嘘は無かった。

しかし、それに対し、意外にもゼフは笑う。

「お前は、そんな無責任な放棄はしない」

ゼフは、サイードが一番素直で不器用だと思っている。

買い被りだと言おうとした口は、ゼフがあまりに優しい手つきで

頬を撫でた事で固まってしまっていた。

「お前の言うやりたい事は、己に出来ることと同義だろう？　お前は確かに無鉄砲だが、簡単に投げ出す無責任では決してない」

そして投げられた言葉は、サイードにそってそれこそ先程以上に買い被りなもの。

だが、今度こそ反論しようとして笑いながら横を向いた時、まるで世界がそれを認めないかのように、身体に異変が起きた。

「っ！？」

頭を横に動かしたことでスライドした視界が、そのままぐるぐると回り続け、身体は制御を失いグラリと傾く。それに加え、解放の時に似た激痛が頭に生まれ、無意識にその部分を手で抑える。

もう片手は、ゼフの身体を掴んでおり、何とか倒れずにすんでいるという状態だ。まるで、内側で何かが暴れているような感覚だった。

可笑しいのが、サイードの異変にゼフが戸惑っていないところだ。彼は、冷静にサイードを支え、さらには線の細い身体で包み込んでくる。

その時、弱さをみせないサイードから最も弱いリサーナに思考が代わったからだろうか。お互いに伝わる体温に戸惑いを感じたリサーナだったが、それがどちらのものだったのか分からなかった。

「大丈夫だ、眠ってしまえ」

しかも、考える前に、赤子をあやすように囁かれた言葉によって、

深い闇へと誘われてしまう。

「……2度も、過ちを犯すつもりはない」

さらには、頭の片隅で聞こえたものが、心を引き裂くが如く悲しみを抱かせる。髪に落とされた口付けが尚更、そうさせた。

この時のゼフの表情を見ていたのは、窓の外に浮かぶ細い月だけだ。それは、空が醜く嘲笑っていると思わせるような形をしていて、彼は忌々しげに睨みつける。

暫く腕の中の身体を抱きしめていたゼフは、そっとベッドに横たえて脇に腰掛けながら、自分の両手を眺め続けた。

伸ばすことの出来なかった手。

もう2度と離しはしないと思い、やっと伸ばせた手で掴もうとしたものの、それは純粋な想いでなければ届かないのだろうか。代わりを求めてしまったから、掴む事が出来なかったのだろうか。

後悔を背負う一人の王は、影を追い求め続けたために光に気付けなかった。

「調子はどうだ？」

「大分楽になったかな」

リサーナの元に、謎の治癒術師２人組が押し入って来てから３日。彼女は、その間に食事を取れるまでに回復していた。

高熱も今では微熱にまで下がり、命の危機を脱している。

「頭痛は？」

「痛いのは相変わらずだけど。まあ、寝てれば大丈夫って感じ」

それもこれも、老齢の男がアイツと言っていた、今現在部屋を訪れている者のお陰である。

ベッドの上で身体を起こしているリサーナの身体に、包帯を巻き直している少年。歳は１５程だろうか。

灰色の髪に青い瞳のあどけなさの抜けていない彼は、あの２人組と同じ服を着ていた。

２人組が去った次の日の朝。謎の頭痛とゼフによって眠りへと誘われたリサーナが目を覚ました時、少年は当然のように治癒を施していて、もし彼等が敵であったなら、彼女はとっくに捕まるか殺されていたということになる。

まあ、ゼフが居るので簡単にはそうならないだろうが、取り敢え

ず、彼等は純粋にリサーナを助けてくれていたのだ。

「そうか」

かといって、友好的なわけではない。リサーナと少年の間には事務的な会話しかなく、例の2人組と同様に素性を探ろうともしなかった。

それはリサーナも同じで、せっかく探られないというのに、相手にその機会を与えようとはしない。

「魔力抵抗はどうしようもできないから、今日も後から頭痛がするからな。安静にしておけよ」

声変わりが終わったばっかりの、見た目との違和感が少し残っている少年は、ぶっきらぼうにそう言い、それきり2人の間に会話は無かった。

ちなみに、魔力抵抗というのは、言葉そのまま魔力に抵抗する力のことだ。

肉体という器に備わっている魔力というものは、生まれた時から容量一杯にあるというわけではなく、自然界に溢れるものと内に眠る魔力とで徐々に慣れながら、大体１５歳前後で限界まで満ちていく。だからこそ、命はその不可思議な力と共に生きていくことができ、逆にそうでなければ、人間を例にすると、強大な魔力を持っている子が産まれた際、その力に器が耐え切れずに外気に触れた瞬間に破裂してしまう。

なので、この抵抗力は、成長していけば自ずと弱まり無くなっていくのがアピスでの常識だ。

極稀に、１００％の抵抗力を持っている者も生まれたりもするが、その場合は魔術師にはなれないが、代わりに魔法を打ち消す力を持

った存在となる。

そして、リサーナであるが、ついこの間まで地球に生きていた彼女の身体は、魔力に慣れているとはいえず、中途半端に高い抵抗力を持ってしまっていた。その為、自身と自然界の魔力両方に身体が反応してしまい、魔法を使ったり使われた場合、何らかの影響が出てしまう。

つまり、治癒を初めて受けた日の夜の激しい頭痛や、異常な顔色の悪さ。さらにいうと、精霊王を解放した際の倦怠感がそれにあたる。

身体の再構築は魔力を宿す為のものでしかなく、種から芽になり、やっと魔力の情報が行き渡ったぐらいなので、当然の不調だったということだ。

ちなみに、懇切丁寧に説明をしてくれた治癒術師の少年だったが、そこに至るまでが大変だったりした。

リサーナが幼い少女だったなら、その魔力抵抗から数回に分けたのだろうが、少年は当たり前に治癒をしようとしたのだ。傷の深さから、彼の魔力が高いというのもあるのだが、理由は先ほど説明した通り、魔力抵抗なんて皆無だと思ったからだろう。

結果、その途中で目を覚ましたリサーナの身体は激痛となって少年の魔力に反応し、彼女は悲鳴を上げながら飛び起きた。

「あの糞爺……。この女の魔力抵抗が高いから、俺に回してきやがったのか！　めんどくさっ」

残念ながら、リサーナが涙目で痛みに耐えていた横で少年が零した言葉は、身を案じてくれる優しいものでは無かった。だから、この時思わず、痛みによる驚きと怒りで少年を殺そうと思ってしまったのは、まあお相子に出来るだろう。

「顔色が良くなったな」

そして、少年が出て行った後、つい一昨日の事を思い出していれば、気配を殺していたゼフが声を掛けてきていた。

そのゼフも、無茶をしていた疲労はすっかり回復し、2人とも可笑しい血色から、血色の悪い人と思われるぐらいの顔色になっている。

「お陰様で。というか、最近の疲れの原因は、ゼフにもあったってことだよね」

リサーナは、新しい情報を整理したことで気付いた点を遠慮なく口にし、ゼフは僅かにバツの悪そうな感じで視線を外す。

その反応から、どうやら彼は魔力抵抗というものを知っていて、尚且つルシエがそれに毒されていると気付いていたらしい。

「……別にいいけどさ。知っていてもどうせ、魔力は消費しただろうし」

リサーナは、これといって負の感情は抱かなかったようだが、それでもゼフにしてみれば後ろめたい部分はあるようだ。

言わなかったのは、意味があるのか無いのか、それか言えなかったかなのだろう。結果が変わらなければ、どちらにせよだとリサーナは思った。

それにしても、治癒術というのは相当なものである。

ほんの2〜3日前まで死にかけ、身体を動かすどころか息をするのも一苦労だったというのに、短期間で食事も会話も、立ち上がるのはまだ無理だが、身体を自力で起こすのも可能となったのだから。

勿論、魔力抵抗は病では無いので、治癒を受ければ数時間後にはその影響は受けてしまうが、それでも纏わり付いていた死が嘘のようである。

「ねぇ」

「駄目だ」

だからなのか。突然の改善による気持ちの和らぎからか、リサーナが何かを言おうとすれば、ゼフは予測していたとそれを防いだ。あまりの早さに若干ふてくされる彼女であるが、ゼフはそれに大きな溜息を付け加える。そして、強気な態度で窓を閉めた。

「けちだねぇ。大丈夫だって、……たぶん」

「何の為に、私が必死に助けたと思っているんだ。状況は確実に好転している。危ない橋は渡らせん」

閉じられた窓の先には緑豊かな美しい広場があり、そこにはルシエの目的である精石がある。

ただ、今の状態であれば、死ぬか生き残るか五分五分だろう。お世辞にもルシエの魔力は高くて才能があるとは言えず、体力そのものもやっと回復する余裕が生まれた程度。

リサーナもそれは分かっているからか、言ってみただけだと誤魔化して横になる。これから襲ってくるであろう影響を回避するには、眠る以外良い方法が無いのだ。

「おそらく、後一度治癒を施してもらえれば、後は自然に治るのを待っても大丈夫だろう。それまで我慢しろ」

まどろみながらそれを聞いたリサーナは、気付かれないようひっそりと身震いをした。その脳裏に、青い瞳がちらつく。

人だから分からないことがあるように、人だからこそ気付ける部分もあるのだと、リサーナは自身にそう言い聞かせた。自分が何か別のものに変わっていっているから、察しているのでは無いと。

とりあえず言えるのは、眠りに落ちていくリサーナが次に目を開けたとき、そこに映るのは宿の部屋の天井ではない。

平和しか知らないようなアズレイの街が、穏やかな月の子守唄に包まれる時間。どうしようもない衝動に駆られ、人気の無い道を息を切らせて走る者が1人。

「俺は……」

目的の場所に辿り着いたのか、建物を見上げながら暴れる心臓を落ち着けるように胸を掴み、その者は中へと侵入した。

有り触れた宿、寝静まる廊下。階段を上り、焦がれる相手の居る部屋の扉の前に立ったところで、彼は小さく息を吐いた。

恐る恐る健康的な血が通る手がノブへと伸びていき、軋んだ音が彼の訪問を告げた。

「やっぱり、来たね」

彼は、まさか待ち受けられているとは思わなかったのだろう。扉の先で、月に照らされたその部屋の使用者が、ベッドの上で起き上がっているのに驚き固まる。

それでも、力を加えられた扉は止まる事無く、内側の壁を叩いた。

「こんばんわ。黒を捨てたい白の側の少年」

「……なん、で」

灰色の髪の青い瞳を持つ少年は、自分が受け持った患者であるリサーナに呆然と呟く。

彼女は柔らかく微笑み、手招きをした。

「ここは、こんな時間にどうしたの？　と聞くべきかな」

「気付いてたのか？」

「気付かないほうが、三流でしょう？」

くすくすと、女らしい笑い声が部屋に響く。

少年は、導かれるように部屋へと足を進め、リサーナの目の前に立った。

「俺の身体に染みついている臭いは、無くならないの、かな」

「無くしたいのなら、そもそも罪にならなかったでしょうよ」

何故、少年が夜更けにリサーナの元に訪れたのか。それは、2人にしか分からない何かがあるのだろう。

異変を感じたゼフが、慌てて具現して行動しようとするが、それをリサーナは目線も合わせず制していた。

少年は、浮かされたようにベッドの横に跪き、リサーナの頬へと手を伸ばしている。それを彼女は、拒否したりしない。

「お前からも、同じ臭いがする。……こべりついた、血の」

「そうだろうね。同類だね」

それは、堕ちた者にしか分からない感覚なのだろう。

少年にもいえることだが、リサーナは、彼が部屋に初めて訪れた際、真っ先にそれに気付いていた。

何故なのだろうか。浴びた返り血は、流せば臭いも色も消えるはずなのだが、数が増す毎にそれは濃くなり纏わり付く。

それこそが、奪うことそのものなのかもしれない。穢れ、なのだろう。

とにかく、2人はお互いに、穢れているのだと知っていた。

「気付いてたなら、どうして」

どうして、追求しなかったのか。焦点が定まらなくなってきた瞳で、純粋に綺麗なだけだった青い瞳を濁らせながら、少年は聞いた。

しかし、逆にリサーナは問いたかった。

彼女は傷を治す為に、少年は自分の業を磨くために利用し、共通

点はお互いに真っ当では無いということだけだ。そこに、素性や過去は不必要である。

とりわけ美人では無い目の前の少女を見て、少年は何かに惹かれていた。

「頼みが」

「それは私の台詞」

触れた場所からは温もりが奪われ、冷たさが少年に移る。

少年は、リサーナの茶色の瞳を見て、違うと思っていた。

そしてリサーナは、少年の青い瞳が、月明かりに照らされる辺境の湖のように綺麗に映っている。

ただ、部屋を満たすのは嗅ぎ慣れてしまった、嫌悪を通り越してしまった生臭いもの。

しかし、共通点は共有点にはならない。

最初にリサーナが言ったように、2人は同じにみえて同じではない。彼等は違うのだ。

頬に触れる腕を取ったリサーナは、ゆっくりと身体を起こしてベッドの上で膝立ちになり、少年に顔を近付ける。

警戒してビクリと揺れる彼を無視し、彼女は吐息を混ぜ合わせながら笑った。

「理解出来ても、同じでは無いんだからさ」

ハッと瞬く少年の頭を、リサーナは撫でた。

血の臭いが纏わり付いているということは、少年もまた、誰かを

殺めたことがあるということだろう。
こべりついているのならば、決してその数は少なくは無い。
ただ、彼等の違いは、堕ちた所から這い出たか、現在進行形で奈落の底へと堕ち続けているか、だ。勿論、後者がリサーナである。
治癒術師の少年は、その称号の通り、救うことを職としている。
それが善人であれ悪人であれ、だ。

「それに、君がするべきは治療すること。私が求めるのは、治療してもらうこと。憐れんで欲しいのなら、嘆けばいいだけ。償いたいのであれば、この先も今まで通り、持った力を使い続ければ良い。それ以上も以下も無い、でしょ？」

「でも、俺は」

「汚れの無い、まっさらな人が居ると思うの？　それに、汚れを汚れだと思えるのなら、君は真っ当じゃない。這い出たいのであれば、もがく以外出来る事は無いと思うよ。奪うということは、１つ救えば帳消しになる程甘くは無いと分かっているから、君は捨てたいんでしょ」

２人の会話は、本当に分かる者しか解(わか)れないものだった。
リサーナの言葉に口を噤んでしまった少年に、彼女はにこりと笑った。

不幸は、人に心がある限り避けられないものだ。それと幸せが同量に降り注ぐことも、まず無い。
だからこそ人は幸せを求める。そして、不幸を嘆く。だが、不幸こそが幸せを導き、だからこそ幸せは素晴らしいものとなる。
そして、不幸が人の原動力となり、糧となるのだ。
人はどうしてか、幸せだった事を思い浮かべろと言われても、す

ぐさまこれだと記憶を掘り起こせない。しかし、不幸をと言われれば、いくらでも出てくる。
それこそ、不幸が人を形成しているのだと、言葉にするより分かりやすいものではないか。

リサーナは、その幸せを掴んだ者がわざわざ捨てるようなことをする姿こそ、愚かで醜悪だと感じていた。
だから、少年はとても美しく映っていた。
それは、結局淡く弾けて記憶に残りにくいものではあるが、焦がれるのであれば、我武者羅に喰らいつけと。

「いい加減、やきもきしてたんだよね」

そこまで優しく諭してあげるようなことはしないが、リサーナは瞳の奥でそれを伝え、深夜の訪問を非難するでも、少年の勝手な切望を拒否するでもなく、自分の利益の為にそう言った。

刻一刻と過ぎていく時間の中で、寝ていることしか出来ない自分。焦りは禁物だと言われる上に自身も思うが、人間であるリサーナだからこそ、精霊には無い物差しで先を計ることが出来る。
猶予なんてものは、ルシエの中に始めから無かった。

少年の過去は、彼にしか分からない。それでも、きっと、彼は生きる為に汚れてきたのだろう。アピスはそういう世界である。
生まれた時の白から、現実の中で黒へと。そして、治癒術師として生きている今、黒から白へ。

リサーナにとって、そこに残る黒こそが、とても胸を躍らせるのである。
そして、少年の耳元へと身体を伸ばし、残り少ない黒を頂戴と囁

く。黒から黒へ移ったところで、誰も咎めたりはしないよと。

「出来れば、魔力抵抗を下げる方法で。どうせだから、治癒もしちゃってよ」

拒否させないよう、触れるだけのキスを終え、リサーナは同意を求めて首を傾げた。その姿こそ、リサーナ本来の役割で相応しいもの。

されるがままだった少年は、操られるようにゆっくりと彼女の身体を押し倒していく。

青い瞳は、少年が昔宿していた色の残骸を浮かべ、目の前の女に釘付けとなる。

『黙って、消えてな』

一部始終を見守っていたゼフが、これから先に起こる事を察して姿を現そうとしたが、それは少年に抱きしめられるリサーナが声無く放った言葉によって叶わなかった。ゼフとしては、何が何でも止めたいものだったが、繋がれた契約によって抗う術が無い。

その時の苦渋を噛み殺したような表情が可笑しくて、リサーナは口元を歪めながら、心の中で高笑った。

「私は、黒しかいらないの。だから、代わりに白をあげるよ」

そしたらきっと、誰にも負けない強さが手に入る。彼等は、そう信じて止まない。

「いい、のか？」

最後の確認をする少年に、リサーナは揺れる瞳に視線を合わせ、

真っ直ぐに言った。

「治療の一環だと思えば、何も気にせずにいいよね。今日、君を此処に導いた欲望はきっと、内に残る黒が私を求めているからだよ」

人は、悪魔が怖いのでは無い。誰もが簡単に悪魔になれるからこそ、怖いと感じるのだろう。

恐らく、自分では止められない隠したい本質が怖いのだ。

だからこそ、リサーナは囁く。悪魔として囁く。

「偽りは、いらないんだ」

名も知らない2人の男女は、そうして肌を合わせるのである。

混ざり合う時（前書き）

はっきりとした描写は避けているつもりですが、不適切な表現があればご連絡頂けると幸いです。

「気付いた時には、もう、殺るか殺られるかの二択しかなかったんだ」

そこには、快楽があった。

「守ってくれる存在なんて、夢の夢だった」

そこには、縋りつく欲望があった。

男と女、2人きりの暗い部屋。ベッドの上で語り合うとなれば、行われる行為は1つしかない。

両者が幼ければ朗らかな光景にもなっただろうが、彼等の経験は平凡とは真逆の世界で繰り広げられた事柄によるものだ。

リサーナは、前戯など必要無いと初めに言ったのだが、少年がしたいのだと訴えた為に甘んじて受け入れていた。

次第に熱を帯びていく互いの吐息は扇情的だが、その目的はとても利己的だ。

今の少年は、治癒術師としての彼では無く、今に残る過去の彼である。その為、リサーナの傷に感(かま)けるなんてことはなく、彼女はまだ完全には消えていない痛みに時折顔を顰めていた。

「それ以外に食いつなぐ方法なんて知らなくて、そんな余裕も無くて。知り様は幾らでもあったはずなのに、後悔した時にはもう汚れきっていた」

少年は、同意も否定も、寧ろ届かなくても構わないと、ただただ、今まで秘めていた想いを吐き出しながら温もりを求めて縋りつく。

リサーナが何かを告げようとすれば唇でそれを塞ぎ、咥内にまで押し入る。そのまま、自分の罪を移すかの様に唾液を与え、組み敷いた身体を配慮も何も無く掴んだ。

「それを、欲しい奴がいるなんて、思ってもみなかった」

潤んだ瞳は何を意味し、熱い吐息は何を交え、その行為は何を成すのか。

茶色い髪は少年を慰め、灰色の髪はリサーナを湧かせ、2人は其々の色を混ぜ合わせて少年の髪より澄んだ灰色を作り上げていく。

「無駄じゃ、無かったんだな」

そこには、今の自分と昔の自分が混ざり、偽りを捨てた本来の姿があった。

過去があるからこそ、今の自分がいる。それは尤もな意見であり、当然である。しかし、誰であれ全ての過去を受け入れるには、それこそ人生を通してでないと難しく、IF(もしも)を抱かずにはいられない。

1人で越えられるのであれば、人間は孤独を傍らに生きていけるだろう。それが出来ないからこそ、孤独ではいられない。

では、それに対して人はどう反応しているのか。
同じような境遇の他人に手を差し伸べ、共に築かれてしまった壁を越えようとするのか。それとも、自分以外を疎んで同じ場所に引き摺り込もうとするのか。
どちらも、当たり前に見られる光景ではある。
虐められっ子が虐めっ子に変貌したり、依存し合っていると思える恋人。それは、世界中に転がっている。
だが、誰だって気付いているはずだ。どうやったって、他人同士が完璧に同じ場所にいられるわけが無い、と。何故なら、自分の中には自分しかいないのだ。

だから、分かり合いを求め、衝突をしていく。共に立てはしないが、交わる事は出来るのだから。
そして、共通点により何かを共有し、分かち合い、時に踏み台とする。

そう、今の彼等のように。

一度合わさった2人の色は、重なった部分から欲する色だけを取り、再びそれぞれのものへと戻っていく。

「っ、う……あ……」

「あり、っがと、な」

繋がった瞬間にリサーナに与えられたのは、彼女の大嫌いな言葉だった。全てを放たれた時にはもう、少年と彼女の間で共有できる要素は掻き消える。

哀れだと思う。
選択の自由も無く、世界の仕組み、社会の仕組みにより汚れて生きるしかなかった少年の不運さを。

愚かだと思う。
幾らでも方法がある中、わざわざ黒を求めて自分を追いやっていくリサーナ達の姿を。

それでも、彼等は焦がれて止まないのだろう。理由なんてものも無く、ただただ、心のままに。
そうやって、染まりきった黒を、染まる事の無い黒をルシエは求めるのだ。

「じゃあ、バイバイ」

「ぐっ……！？」

情事の後、息が整わない状態でリサーナは指輪を瞬時に剣へと変え、その柄頭で少年の鳩尾に衝撃を与えた。
今の今まで熱を共有し合っていたその身体は、虚しく布の上へと倒れる。
ベッドから床へと立ち上がり、少年を見下ろしたリサーナは、一糸纏わぬ姿で月光を浴びた。

「朝日と共に、新しい自分になれるといいね」

太股を伝う白に嫌悪を感じながら、リサーナは少年の閉じられた青にキスを落とし、一度だけ頭を撫でる。結構な強さで殴られた彼は、目を覚ますまで時間を要するだろう。

「まぁ、汚れは落とせても穢れは拭えないんだけどね」

でも、君は生きているんだから。

ひっそりと呟いたリサーナは、気だるい身体に鞭を打ち、余韻の残る熱い内側を無視しながら支度をした。

そして、行為の効果で回復した肩と腰の調子を確かめ顔を上げれば、そこにはもうリサーナはいない。

「どれぐらい遅れを取り戻せるか。トラブルはもう、懲り懲りだな」

居たのは、闇夜に紛れる放浪者。――怪しい旅人（サイード）。

望まないものばかり手に入るのは、無いもの強請りだからなのだろうか。その身体はこの時にはもう、あれだけ苦労させられた魔力抵抗は無くなり、魔力の芽は花を咲かせていた。

結局、ルシエの持つ魔力は平均程度のものであったが、重要なのは、それがアピスに根付いたのと同義となること。この世界の住人になったということだ。

だから最早、理由なんてない。地球を理由には出来なくなってしまった。

お釈迦様の下ろした蜘蛛の糸は、所詮一本では大した支えにならない蜘蛛の糸。それすら失ったのなら、単純にいこうかとサイードは笑う。

「気にいらない。それで、十分だな」

さぁ、水の解放を。代わりに枯らすのは、希望という名の生きる源だ。

颯爽と宿を後にするサイードの背中に、後悔という二文字は存在しなかった。

魔力抵抗を完全に無くすことは、故意には不可能である。それは、人間に限らず、自己防衛の機能や理性が働く為だ。

しかし、長い歴史で研究されたりしてきた結果、人間は肉体の成長と合っていない魔力抵抗を低くする術をいくつか見つけていた。

勿論、それが必ずしも通用するとは限らず、全てが簡単な方法だとも言い難い。ただ、ルシエの様に単純に慣れていないだけであれば、かなり簡単で有効な方法があった。

唯一の条件が、女であること。そして方法が、精霊と契約している男との交わりだ。

魔力とは命の結晶であり、それが根源な力である。だからこそ、人の持つ命の源と命の揺りかごを繋げ、放ち満たされることにより、内側から抵抗する必要が無いのだと刻み込む。

潜在的に魔力抵抗が高かったり、自然の流れを無視して低くするのは無理だが、慣れさせるのはこの方法が一番だ。

当然デメリットやリスクが無いわけではなく、男には無効だとい

うのと、身篭ってしまう可能性があるというのは言わずもがなだろう。

治療の一環だとしても、好いてもいない男に抱かれるなんて。そうやって拒否する女もいなくは無い。地球だったら、道徳的観点からも批判されかねないかもしれない。

しかし、リサーナは、たったそれだけで倦怠感や解放時の激痛が和らぐのであれば嬉しいものはないと喜び、むしろ少年を唆した。

何故この方法を彼女が知っていたのか。それは、アズレイに小さいながらも書店があったことと、リサーナが情報に貪欲だから。

魔力抵抗という新しい知識を得た彼女は、精霊に頼み、それに関する書物をいくらか書店から拝借して、地味な障害の解決策を探した。

それが今回の方法だっただけだと、リサーナは別段深く考えたりしない。獲物が自分から求めてきてくれたのは予想外ではあったが、それもラッキーでしたで終わる。

ルシエが実行犯だとすれば、サイードが暗躍し、リサーナが2人の為に情報を収集するというところか。

経験豊富とはお世辞にも言え無いが、冗談でも生娘にはならないリサーナだ。初めから、手段の一つとして身体を使うことも考えていた。

それは褒められないかもしれないが、責められるものでも無い。

しかし、宿を出て、薄っすらと明けてきた空の下に立った時、サイードを待っていたのは鬼の形相なゼフだった。

「貴様っ！」

この時ほど、サイードが状況を掴めなかったことは無いだろう。

視線が合ったと思ったら、怒っていると気付く前に胸倉を掴まれ吠えられる。
何かあったのか、と思えればよかったのかもしれないが、その怒りは明らかにサイードに向けられており、そうなると心当たりは1つだけだ。

「あ゛？　なにすんだよ」

身長差から、僅かに身体が浮き上がり息が詰まりながらも、久し振りの瞳だけしか出ていないスタイルで負けじと睨み、すぐさまサイードも売られた喧嘩を買う体勢に入った。
その際、右手の人差し指と中指を合わせてすっと横にスライドさせていたが、ゼフはその動作に気付いていない。

「人間と交わるなど！」

どうやら、相当許せないことだったらしい。しかし、サイードには理解が出来ない。だからといって、何故自分が怒られなければならないのだと。

ゼフはフードが落ちようが、大声を上げていようが構わず、冷えた目を見下ろす。

「貴様は何がしたいのだ！」

しかし、そう言われた瞬間、サイードは脱力した溜め息を吐き、うぜぇとマスクの下で呻く。そして、それはこっちの台詞だとゼフの横腹に足を繰り出しながら言った。

「はっ！　何言ってるんだ？　勘違いするなよ」

残念ながらそれは軽々と避けられるが、２人には僅かな距離が出来る。
ゼフが抗議に声を荒げようとするが、その前に舌打ちをしてサイードは言った。

「何か？　てめぇは、俺の親になったつもりなのか？　……あぁ、それとも、一緒に旅してるから仲間気分に浸ってるのか。はっ！　冗談じゃない」

そこに含まれていたのは、呆れと失笑。尚も畳み掛けるように、サイードは一言の邪魔も許さないとゼフを睨んだ。
その先では、翡翠が大きく揺れている。

「仲間、友人、ましてや恋人でもないだろ。俺にとってお前は、居なかったらそれでいいし、居るなら居るで都合がいいだけの存在なんだよ。誰といつ寝ようが、口出しされる謂れはない」

聞いていれば大人な修羅場の１ページにも思えてしまうが、嫌なら消えろと言われるよりも冷たい言葉だ。
しかも、今回はゼフがいなければ確実に死んでいただろう。その問題が解決してすぐのこれだから、ゼフへのダメージは尚の事。
売り言葉に買い言葉で済ますのは、サイードの瞳の鋭さの前では難しかった。

ゼフは当然、誰のお陰でと憤り、今にも殴りかかりそうな勢いで拳を握っていた。
その手は、戸惑いながら開かれたり、再び握られたりを繰り返し、しばらくの後、ゼフはそれをすぐ側にあった建物の壁にぶつける。
風を纏ったそれをくらった壁は、大きな音と共に窪んでパラパラ

と破片を落とす。
ここまでくると、人が異変を感じないのは可笑しいのだが、そこは狡猾なサイードだ。胸倉を掴まれた時にしていた指の動作は、2人の周囲に結界を張るものだった。
魔法には2種類あり、属性が関係するものは該当する精霊と契約していなければ無理だが、気配を殺したり結界を張ったりと、そういった類はどの精霊と契約していようとも使用できたりする。
冷静沈着なゼフに似合わない八つ当たりを前に、サイードはうろたえる事なく肩を竦めた。
「おー、怖い怖い。痛いところを突かれて、動揺でもしたか？」
「……」
それどころかさらに煽り、いい加減我慢が限界だったのか、ゼフはサイード目掛けて風の塊を投げつける。
サイードは、軽々と右手を払うだけで消し去り、それを見たゼフは驚愕していた。動作にも魔力にも無駄がみられず、そもそも今までであれば、その攻撃を回避するのに剣を使っていただろう。
つまり、完璧に魔力が馴染んだということである。
そして、サイードも実は驚いていた。今の攻撃は威嚇では無く、寧ろ殺す気が無いと放てないものだったのだ。
「……殺したら困るんじゃねぇの？　お前等が」
「そうだな。だが、死んだ方が幸せだろう」
ゼフは呟ってそう言った。自棄になったかに思えるが、そこには慈悲がある。

「確かに、俺は死んでも困りはしない。だけどな、それは違うだろ」

誰もが幸せを望んでいるなど、夢物語も良いところだ。望む未来が幸せだけであれば、どの死顔も安らかだろう。

ましてやルシエは、幸せになろうとは思っていない。なりたいとすら考えない。ただ、楽に生きたいとは思ったことはある。現在も、出来る限り楽に進みたいと。

それはある意味怠惰でしかないが、常に気を張って全力で行く動力（エネルギー）を持っていられる生き物はいないだろう。

「お前だって、生きたいから産まれたわけでも、死にたいから生きているわけでもないだろ？　……幸せじゃないといけないと、誰が決めたんだ！？」

馬鹿にするなと、珍しくサイードは声を揺らした。そして、ゼフから視線を外して己の掌を見つめた。

何かを必死に留めようと、零さないように、両手の小指を付けてグッと指を折る。マスクの下で、だから1人が良かったんだと呟きが聞こえた。

「今更だ。どうせ俺達は、修正も上書きもされず、零れ落ちて無くなるだけの消耗品なんだからな」

俺達とは一体誰までを含むのか、見当が付かない。それはゼフも同じで、訝しんでいた。

サイードはきっと、らしくない動揺を抑えたかったのだろう。それも、彼自らでは無く内の誰かに窘められて。

その証拠に、金の瞳は左右で別の色を持っていた。

どんなに小さな事柄でも、リスクの無い行動は存在しない。大きなものになれば、むしろリスクしか無い場合さえある。

全てのことに対し、それを考えて動けと言われても無理はあるが、少なくともサイード達を取り巻くものはリスクしかない。

今更ではあるが、地球で一般的な暮らしをしていた者であれば、突然このような環境に飛び込んで平静でいられるわけがなかった。

ただ、人というものは、これと決めた何かを達成しようと強く誓った時、常識から外れた精神で動けたりする。河内紗那には、それに該当するものがあったのだろう。そして、それを抱きながら自ら消えた。

であれば、彼女が作ったサイードもルシエもリサーナも、躓きはすれど立ち止まることを許さない。揺らぐのさえ、許さない。

それは、自身でどうにか出来るわけではないが、だったらその要素全てを持たなければ良いとサイードは思った。

実際、今回の怪我で、自惚れがどれだけ身を滅ぼすか痛みと共に知り、地球を考えるあまり焦ってしまうことが、どれだけ判断を危めるか気付いた。

面倒なことに、何も感じずに突き進むのは無理があり、どこかに拠り所が無ければ心というものは簡単に壊れてしまう。廃人になるのは誇り(プライド)が許さず、目的の為に機械人形になるのも無理だ。だからこそ、楽しむという感情だけは捨てられないし、捨ててはいけないが、その代わりに無くしてしまう前に捨ててしまおうと彼等は決めた。

作り上げるのではなく、なりきるのでもなく。自分を悪魔にすれば、悩む必要も無いのだと。

腕を下げたサイードは今までとは違う鋭さと、僅かな間で改めた

考え方によって出来た余裕を携えてゼフを見た。
そして、徐に布を剥いでマントを脱ぎ、マスクを引っ張る。強引にしたせいで、マスクと一体化しているピアスが耳朶を傷つけるが、その痛みさえ覚悟に変わる。
ゼフは、その行動が姿を隠すのを辞める為のものだとは思わなかった。本当の意味で、宣言する為だと気付く。

目の前に立っている青年は、そうして挑戦的に笑った。

「ここまで来て、今更死んでやるものか。馬鹿にするなよ？　風の国で悪魔だとルシエ（あいつ）が宣言し、魔力抵抗をリサーナが解消してくれた今、俺はもう前の世界を理由には出来ない。お前の思っている俺達はもういないってことだ」

サイードはそう言って、麻袋に入っている変装用の道具の一切を地面にぶちまけた。
その中には当然、リサーナになる為のものもあるのだが、それさえ不必要だと気にせず足蹴にする。

「俺達は、俺達の好きな様にする。嫌いだから壊し、必要だから壊し、気に入らないから壊す。世界を、人を、精石を。それが結果的に、前の世界を救うことにもなるだけだ。悪魔な救世主？　はっ！　冗談じゃないね」

「だったら、何になろうと言うのだ」

使命まで放棄するつもりか、とゼフは凄んだ。それに対し、サイードは俺の話を理解できてるのかと、小馬鹿にしながら否定した。

「お前等にとって必要なことが、俺達の欲望に一番副えるんだ。だ

から、共犯者になるんだよ。そっちも、結果が伴えば、道具が何を考えていようがどうでもいいだろ」

サイードは、いつの間にかほとんど黒の無くなった空を見上げた。そして、あの青い星が異世界だと、清々しい気持ちと共に呟く。

昇る朝日の眩しさを掌で遮りながら、好きだと言っていたものには2度と触れることは無いのだとルシエとなって微笑む。

携帯では無く剣を傍らに、赤ばかりのこの世界で歩いていくんだねと、リサーナが2人の背中を押す。

本の中の輝かしい主人公は何故、直向に生きられるのだろう。優等にしろ劣等にしろ、周りとの違いばかりに気付き、それでも染まらずにいられるのか。

お人好しを理解出来はしないが、だからこそ守られ、知らないままで物語は進んでいけるのかもしれない。

しかし、彼等は知っている。知ってしまっていた。剣を振りすぎれば肉刺が出来て皮は厚くなり、人を切れば想像以上に血が噴き出してくる。気持ちは無くても演技をしながら、交わらない感情を持って温もりを混ぜることができ、褒められない所業によって楽しめる事を。

「奪う側からすれば、ハッピーエンドなんてすぐそこに転がっている石ころと同じなんだよ」

サイードは足下の石を拾って、投げて掴んでを繰り返しながら、乾いた笑いを漏らしてこんなにも軽いんだと言った。

「……虚しいな。人を哀れむことなど無いと思っていた」

その姿がどう映ったのか、誰に見えたのかはゼフにしか分からな

い。ただ、呟くように言った後、暫く傍を離れると告げたところから、同情はしなかったのだろう。

「虚しい、か。……可哀想なら、言われ慣れてたんだけどな」

ゼフが消える様子を見届けた後、ぽつりと零されたものは、悲しみよりも新鮮で驚いた感じであった。

彼等が仰ぐように見た朝日に染まった空は、2度と晴れることが無いだろう。何かを刻むように強く握られた拳の中では、小石が砕けていて、掌を下に向けて開けばパラパラと散っていく。

脱いだマントとマスクを拾い麻袋に入れ歩き出した背中は何も語らない。ばら撒かれた持ち物は、踏まれた瞬間炎に包まれて灰と化した。そして、今まで張られていた結界は砕け、パキンと乾いた音が出発の合図となる。

その数時間後にアズレイに響いた歌は、とても透き通った美しいものだった。

――可哀想は見下されている、だから良かったんだ。だけど、虚しいは同じ目線でいようとしてくれているからこその言葉だったんだよね。

――そうだよ、この内は空っぽだ。空っぽだったし、空っぽになった。

――何も無い。何も、無かったんだ。

静寂な煙のその先で

その日のアズレイは、いつも以上に過ごしやすく穏やかな天気であった。家を支える男達は爽やかな気分で仕事に赴き、家を守る女達は家事に精を出し、子供達は遊びに夢中になる。

昼過ぎになってもそれは続き、自慢の広場はとても賑やかだ。そんな中、仰々しい風景の広がる噴水から少し離れた場所にある質素なベンチでは、1人の目見麗しい青年が膝に軽食を置きながら黄昏ている。

サイードを見た女性の何人かは、声を掛けようかどうか悩む仕草を見せるが、結局誰もが彼の持つ浮世離れた雰囲気に断念しており、そこだけが神聖な静けさを醸し出していた。

「1人とか、久し振りだな」

サイードの左手にはパコという葉巻があり、煙を吸ってはしかめっ面をしている。煙草自体吸った事が無いというのに、パコはそれ以上に苦味がありお世辞にも美味いわけではないのだが、今のサイードには丁度良かった。

「もしかして、これが世に言う、女を抱きまくる男の心情ってやつか」

何時もなら、呆れながらも馬鹿かと返ってくるような言葉にも、今は無言しか返ってこない。

ゼフと喧嘩をし、そのお陰かどうかは微妙だが、自分の立場については揺らがなくなり焦りも消えた。

「……あー。最悪だ」

しかし、いつの間にか横に誰かがいる環境を当たり前に感じていたことを自覚し、今度は腹立たしさに憤る。結果、パコに手を出したのだ。脳みそが揺れれば、それに気を取られると思ったのだろう。

独りが心地良いと胸を張って主張しても、結局それは勘違いにしかならない。ただ、独りが一時的に楽に感じるのは確かである。

サイードの視線の先に映る、一見仲睦まじく見えるカップルや家族。彼等も、時には喧嘩をし暴言を吐き、傷つけあったりするのだろう。

羨ましいと思うこともあると、サイードは素直に認めた。

ただ、そうなりたいと思うことは無かったし、これから先も願うことはない。誰かと言葉を交わせば、それだけで孤独では無くなるのだから。例え、売買の会話だけであっても、道を訪ねるだけであっても。

それでも満たされないのであれば、紛らわし続ければ良い。愚かであっても、その時にその衝動を抑えられれば十分なのだ。

「気持ち悪く無くなってるのは、予想外だったな」

ただ、呟いたその変化はあまり好ましくなかった。

彼等は、公園や人の多い場所をあまり好まないはずなのだ。それは当然、河内紗那からきているのだが、彼女は生前穏やかな空気の

流れる場所を嫌っていた。
何故なら、そこに広がる光景が、偽りに見えて仕方がなかったのだ。カップルに対しては、どうせ別れる日がくるのだと。家族に対しては、もしかしたら親が浮気をしていたり、子供が影で素行が悪いかもしれないのにと。
馬鹿馬鹿しい妄想で、羨みで妬みでしかない感情だと分かっているから、尚更彼女にそういった場は地獄だったのだろう。

それを思い出し、サイードは苦笑する。
空は見上げなかった。仰ぎもしない。その代わり、頭を垂れていた。

「慣れって怖いな」

乾いた笑いと共にサイードが見つめた掌は、変わらず白味の強い象牙色。
しかし、実際は赤すぎる赤で、見えない何かをいつの間にか掴んでいたのだと自覚する。

「……だから、嫌だったんだよ。ゼフの野郎」

大きな溜息は額を押さえた手が邪魔をして風に乗れず、もっと早くに地球を捨てていたらと、無意味な考えが過ぎった。
サイードにとって、それは弱さでしか無い。辿った道を振り返ることすら許せ無いことだというのに、何かを当たり前に感じるなど、自分を3回は殺したくなる。
なまじ同行者が力を持っていて、強い自己もあるから腹立たしい。所詮精霊だと思えれば楽なのだろうが、向こうの方が全てにおいて格上だからそれも難しいのだ。

「よっこいせ」

そうして、サイードがその葛藤を払う解決策を考えていた時だった。何者かが、彼の隣に気の抜ける声と共に腰を下ろした。

ゆっくりと視線を横にやれば、そこには宿に押し入ってきた、あの老齢の男が彼に朗らかな笑みを向けている。ただし、目はまったく笑っていなかったが。

「……なんだよ」

当然、その男はリサーナしか知らない。今は顔を隠していないので、怪しむ要素は無いはず。

サイードはどこにでもいそうな、少し反抗的な青年を装って反応した。

「これは驚いた。声まで変わって聞こえるぞ」

しかし、男は豪快に笑いながら、確信を持ってそう言う。はぐらかしても無駄だ、と。

「にしても、どう見ても男だ。しかも、声を掛けるのも憚れる程のな。貧乳に生んでくれた親に感謝せな」

「悪いが人違いだろ。ボケるなら他所でしてくれ」

それでもサイードは、人違いだと貫き腰を浮かす。心の中で、勘弁してくれとうんざりした様子で。それに対し、男はサイードの右腕を取ることで返した。

何をするんだと眉間に皺を寄せたサイードであるが、その奥の別

の意味を男は見逃さない。

「誤魔化しは賢くないな。動きを見れば分かる奴には分かる」

結構な歳のはずの男は、声も姿勢もしっかりしており、威圧感は重ねた時間と相まってサイードには出せないもの。彼は思わず呑まれそうになり、慌てて耐えた。

「だから」

「パコを左で吸うのは、リハビリか？」

そして、尚も人違いだと訴えようとして男の遮りに無駄だと知る。ハッと自分の左手に視線をやり、掴まれている右腕に移す。

「もう、痛みは殆どないはずだろ」

思わずでかける舌打ちは、男が一度自分側にサイードを引き寄せてから押した事で、うめき声に変わる。

膝の上に置いていた軽食は無残に床に落ち、さらに持ち主の足に潰される。

本人が自発的に立ち上がろうとしたのは止めたくせに、ベンチから押し出される形になり、サイードは体勢を立て直しながら左肩を押さえていた。

よく見れば、立っている足の重心も僅かに右寄りだ。

「てめぇ……」

「はっはは！　そうだよなぁ、分かる分かる。傷は治っても、受けた痛みはそう忘れられないもんだ。ましてやあれ程の傷、無意識に

庇ってしまうのも無理は無い」

それは、男の言葉通り無意識の反応で、サイードは悔しそうに男を睨みつける。

そして、今の言葉は、男がサイードに用があり、しかもどこかで彼を観察していたということだ。無意識の仕草に違和感を持つことは素人でもあることだが、赤の他人に常にアンテナを張っているのは武術に長けた者ぐらいだろう。

バレたこともそうだが、気配に気付けなかったのが、何よりサイードを警戒させた。

ただ、解せないのが、男の目的は何なのかだ。

悪魔だと気付いていると考えれば簡単だが、今までとは違い、男は治癒の手配をしてくれた人物。自身も治癒術師だ。

それに、仮にそうだとしても、包囲されている気配は微塵も無い。騎士でもないような、しかも老人がたった1人、ましてや丸腰で対峙したりはしないだろう。

「ま、座れ」

「立たせたのは誰だよ、糞爺」

「アイツといい、お前といい。最近の若い者は短気で困るわ」

軽い態度の裏にある挑発的な視線が、今の状況が良い事では無いと示している。

男は隣を指差し促すが、サイードは応じなかった。

ベンチに腰掛けて一見穏やかに笑っている老人と、それを睨みつける青年。第三者が見れば通報ものだろう。

サイードは、男の契約精霊に語りかけることはしなかった。正確には出来なかった。

その頭の中では今、いくつもの可能性と危険性をはじき出しており、安易な魔力の消費は控えたい。ゼフが居れば楽なのだが、足を引っ張るのは自分の魔力の大きさだ。

周囲に映る人間が全員敵で殺気を隠しているだけだとすれば、逃げることに全力を尽くさなければならない。しかも、その場合はこの街を地図から消す形でだ。でないと、サイードの素顔がバレたままになってしまい、後々にそれが尾を引いていくだろう。

だったらウェントゥスの時は、と思うだろうが、あの時はサイードとルシエの変化を見た者はおらず、大地の国で見た者は1人を除いて皆死んでいる。その1人も、利益があるからそうしたままでだ。

大した違いはないようにみえて、それがルシエ達にはとても重要なことだった。

さらに、アズレイを消すことも難しいときた。風（ゼフ）は攻撃と防御、偵察にも長けるオールマイティな属性だが、ここに居る水の精霊王は、治癒と幻を主とする補助特化の属性だ。解放時のオーバーヒートをもってしても、破壊は難しい。

つまり、サイードは男も含めて周囲にバレている考慮もしつつ、サイードと悪魔の繋がりを知らずに男が接触してきていると願い、対処しなければならない。

万が一前者であれば、その時は腹を括って逃走犯になるしかないだろう。

勿論、腹など当に括っているのだが、せめて半分の精石を壊すまでは影で動くのがサイードの理想。

君は大胆なのか慎重なのか、面白い性格をしているよねと、焦るサイードを無視して笑ったルシエに、彼は他人事じゃないぞとその暢気さを恨んだ。

「今度はだんまりか。まだまだ若い。その甘さが今回の怪我に繋がったんじゃないか？」

「関係無いな」

そして、暫しの沈黙を経て、男が動く。

ニヤリと、不気味に貫禄のある笑みを浮かべながら、皺の多い唇が告げた。

「まあ、だったら用件だけ伝えようじゃないか。……悪いが、死んでもらおう」

刹那、空気が震えた。

長閑だったはずの広場と、幸せそうに歩いていた筈の木偶（ひとぴと）。

急に感じた殺気に背後を振り返ったサイードの目の前に、大量の水が濁流と化した攻撃が襲いかかる。

その奥では、通行人全てがサイードに向けて掌を突き出しており、そこから水が生まれていた。

そして、老人もろともその身体は濁流の中に消える。

偽りの安寧。何故ルシエ達は、それを嫌悪するのか。

崩れ去る平穏。何故彼等は、それに喜悦するのか。

巨大すぎる攻撃に呑まれる瞬間、サイードは朗らかに笑っていた。

美女の憑依、悪魔の光臨

「……何者だ、糞爺」

「まさか動じないとはねぇ。老いぼれは驚きだ」

サイードがゆっくりと振り返れば、男は手を叩きながら目を丸くして笑っている。

2人は無傷だった。

それどころか、身体も周囲も水が襲った痕跡はなく、仕掛けてきた通行人はまるで何事も無かったかのように其々の行動を続行する。

戻った平穏は、2人を置き去りにしていた。

あの時サイードは、突然の、その瞬間まで殺気すら感じさせなかった奇襲を全力で防御しようとし、目前で止めた。

その時彼は、改めて自分に魔法が染み込んでいることを実感する。

「何が目的だ?」

先程の攻撃は、水の精霊の得意とする幻術。

だからこそ、印象(インパクト)を与える大規模な攻撃だった。殺傷能力も低く

は無いが、もし本物であれば、確認の手間が大きい上に確実性に欠ける。

この期に及んではぐらかす男に、サイードは警戒するのも馬鹿らしくなり、真っ向から対抗することにした。

「俺を、試したな」

何より、今ので悪魔と気付いていたわけでは無いと分かった。

そうなると、サイードの言った通り、男が彼に何かを求めていることになる。

案の定、男はその言葉に満足気に頷き笑いを沈めて、真っ直ぐにサイードを見る。

「悪いな。アイツの壁を取っ払うのに、お前を利用させてもらった」

「別に。それは構わない」

こっちも利用した側だから、とは言わない。男は分かりつつ、そこには触れずに先程の幻術に対する地味な非難を笑った。

「まあ、まさか誑かすとは思わんかったがな」

そして、大人気無く対抗する。2人を繋げるのは、捨てたがりな治癒術師の少年。

ただし、サイード側にとっては、既に過去の者だ。

「色々な意味で一皮向けたってところか！」

「下品な爺だな」

にしても、本当に歳の割に元気な男だ。警戒が薄まり、再びベンチに腰掛けて、その言葉に心底脱力したのか項垂れるサイードの隣で、生涯現役だとかなんとか言っており、さらに精神的な疲労が増す。

その様子を実は、男が悲しそうな目で見ていたことに、サイードは気付かなかった。

「アイツは、過去を捨てる必要があったのだ」

「……治癒術は、迷いに敏感だからな」

決してリサーナに、善意があったわけではない。感謝すら持たず、取引にも似た行為だった。

ただ、それが結果的に、今後の少年の方向性に多大な貢献となったらしい。

「綺麗なものだけじゃあ、皮肉なことに人は生きてはいけん。だが、引き摺るぐらいなら他人に押し付けた方が成長する上に、負担も減る」

突然2人は、ぽつりぽつりとまともな会話を始めた。

先人の言葉には、不思議な魔力が宿る。これは諺に似た訓えであり、1人分の人生の軌跡が形になっているという意味でもある。

サイードは、自分が正しいと驕っているつもりはない。意味があると感じれば、それが王様であれ子供であれ、しっかり耳を傾ける事が出来る。重要なのは中身であり、誰が言っているかは関係無いのだ。

今だと、目的の知れない治癒術師の男がそうである。彼が語ろうとしているものは、少なくとも無駄じゃなさそうだと判断した。

「お前は、抜けださない道を選んだと思えてな。そして、アイツは抜けだしたいと思っていた」

「馬鹿正直な治癒術師じゃ無かったんだな、あんた」

女で弱っているから助けてくれたと思っていたと暴露したサイードに、男は愉快だと笑う。長く生きれば、嫌でも人の内側を感じられるのだと。

「治癒はな、癒しであり罪でもある。存命させればその者の未来を伸ばし、そこにある苦しみの種にもなるということだ」

そして男は、だから自分は患者を選ばないと言った。相手が悪人であれ善人であれ、大人であれ子供であれ、自分の力が及ぶのであれば功績は二の次で良いらしい。

気が付けば、サイードは顔を横に向けて男と視線を合わせていた。皺の刻まれた皮膚にはめられた青い瞳と、血色の無い肌で引き立つ金の瞳。繋ぐ者と断つ者は正反対な立場だが、どちらも背負っているのは変わらない。

歳が違えば同じ目で物事を見れないが、だからといってそれが必ず偉いとは限らないのだ。

「傷の度合いで患者を選ぶのは、当然三流だ。しかし、誰も彼もを治せば、お前の言う通りに馬鹿正直にしかなれず、結局良い様に使われてしまう。だから、一流な老いぼれはお前を利用した」

「良いじゃん、それ。どっちみち、患者も治癒術師を使っているわけだし？　治癒するにも傷を診ない事には魔力の調整が出来無いから、治癒術師だって学ぶ為に患者を診る。そこに正当な報酬があれ

ば、利用していようが善意であろうが、利益なのは一緒だ。……一流かどうかは置いといてな」

サイードの反応は、男に大きな興味を抱かせた。この若造には、世界がどう映っているのだろうか。どうやら、最近の若者から生意気な小娘ぐらいには格上げになったようだ。

ただ、尚の事、男の目的が分からない。そう思っているのであれば、わざわざ利用した事実を告げる必要は無いし、態度からは謝罪する様子が微塵も感じられない。

しかし、サイードは薄々理解したようだった。変わり者な爺さんだと笑い、男が来る前までの葛藤を忘れていたことに気付く。

「生き道とは、斯くも無情なことか。丁度、治癒術師団の人員を求め、国中を回っていた際にあの小僧に出会った」

「んで、素質があったと」

頷いた男は、ここで何故か申し訳なさを漂わせながらサイードを見る。その姿は、治癒術師から1人の老人へと変わっていた。

「表があれば裏があり、善人がいるなら悪人もいなくては世界は成り立たない。だがな、老いぼれは関わりを持たれてきた分、関わっていく必要があるのだ」

それが後は消えていくだけの者の役割なのだと言い、そしてサイードを探していた目的の一つでもあった。

サイードの生き方が、人として生きるにはその道から外れていると諭す必要があったのだろう。

内容としては、レイスの言っていた言葉と似ている。しかし、言

い回しと経験が違うだけで、こんなにも重みが変わってしまう。これこそが、魔力と比喩された経験の違いだ。

しかも、男がそれを当たり前に進んできたからでは無く、逆を歩き今があるからこそ、サイードは素直に受け入れられた。

「まあ、老いぼれの戯言として」

「そうだな。余計なお世話だと言いたいところだ」

男の言葉を遮り、言い放ったサイード。しかし彼は、ベンチから立ち上がり男に背を向け、精石のある方向に視線をやりながら考えを述べた。

「結局、タイミングとか、辿ってきた道の違いだと俺は思う。……運命、って言ってしまえばそれだけかもしれないが、それだと聞こえが良いだけで、今までの苦労とか努力とか、感じてきたもの全てが軽薄になって空っぽで、虚しくならねぇ？」

瞬間、男は瞠目した。それは経験談とかでは無く、だからこそのものだと感じたからだ。

そして、男が返事も忘れてサイードの背中を見ていれば、彼はさらに続ける。前髪を弄り、軽い調子で、自分達はそれで良いんだと思いながら。

「あの少年がラッキーで、だからあんたと出会って、抜け出す切っ掛けを見つけて、掴んだ。そういう奴だったから出会えた、と思った方が何倍も楽しいじゃん。そして、少年がそうだったから俺も俺でいられる。善人がいれば悪人も、ってあんたが言ったんだ」

自分を不幸だとは思っていないし、後悔もしていない。だから、

切っ掛けを見つけても選んだりはしないと、サイードは恥じる事無く語り、左肩を軽く回していた。
男は、どこか胸の痞えが取れるような、肩の荷が下りるような、そんな不思議な感覚を抱く。
もしかすると、自分の弱さに後ろめたさを感じていたのかもしれない。もっと違う悩みだとしても、男は誇れない生き方の中で歩き続ける背中に、何か新しいものを見たのだろう。

教えるには知識がいる。教わるのにも、それ相応の姿勢がいる。しかし、訓えは受け手によって様々な角度から、様々な意味を語るのだ。
治癒術師として男は語り、老人として諭し、サイードはその代わりに述べる。
言うのでは無い。言葉は、そこに乗る想いによって、伝え方によって、全然違うものに変化していくのだ。

「お前は、過去が今を形成してくれていることを、しっかりと分かってるんだな」

「そんなご大層なもんじゃないさ。幸せをつまんないって、不幸の味に魅了された可哀想な下衆だ」

水を含んだ爽やかで涼しい風が、2人の間に流れる。
結局、褒められるにも貶されるにもそれ相応の苦労があり、本人以外どれが良いとは選べないということなのかもしれない。
サイードはゆっくりと振り返り、男の瞳に小生意気な片方だけ口角を上げる笑みを映した。

「ま、最期に笑った奴が勝ちで良いだろ」

その姿が余りに切なく美しく、そのくせ幼い可愛らしいものにも感じ、男は一瞬呆けて、次に大きく笑った。

なんとお気楽で、なんと浅はかで、なんと単純な考え方だろう。責任も、意味も何もかもを放り投げた、自分本位な幼稚さ。

しかし、ややこしくしたのは人であり社会であり、生きるというのは本来そういうものだったのかもしれないと錯覚する。

どういった生き方をするべきか色々な意見があるが、その基準は全て歴史にあり、完璧な答えはどれだけ人が朽ちても見つからない果てない荒野の中にあるのだ。

「で、あんたの目的は、結局何だったんだよ」

サイードも、男との時間によって、新しい何かを得たのだろうか。楽しかったから。それだけだとしても、葛藤を紛らわせたのだから良いのだろう。収まらない笑いを前にして、彼は確認の為に男に問う。

精石の破壊もサイードを形成するものの1つで、何より彼は悪魔なのだから。

「……アイツの闇を受け取った者が簡単に消えれば、それがさらなる壁を作る。しかも、今度こそ潰されてしまう程のな」

成る程、とサイードは思わなかった。

むしろ、何て甘いことをと半ば呆れ、しかしこういった種類のお人好しは嫌いじゃないと感じる。

男がリサーナの手助けをしてくれたのは、初めから彼女の為というよりも少年へのものだったらしい。それは、利用したと言ったところから明白であり、サイードもその方が警戒せずに済む。

そして、こうして彼等が対峙した理由。それは、少年の闇を引き継いだサイードがこの先も、裏の世界で生きていけるかどうかの確認だ。

治癒をした人間が、また同じ場所へと戻って死の隣での生活を送ることに対しての懸念では無い。むしろ、選別に近いだろう。

さらに、男が突然感情を映さない瞳に変わったことから、基準に達していなければ、彼の手によって消されていたかもしれない。

治癒術師団と、男は言っていた。となれば、当然多くの術師がおり、もしリサーナとして傷を負ったり死んでしまえば、その情報が入るとも限らないのだ。

だから、少年が耳にする不安を抱き続けるよりかは、自分の手で隠す方が何倍も安心できる。

その姿は弟子が可愛い師匠とも、過保護とも言える。そして、行き過ぎた依存にも思える考えだ。

しかし、サイードは歪んでいると思わなかった。

才能がありそれを見初め、保管したいという感情。人に当てはめればとても自分勝手だが、かといって全人類を救える者は夢を壊すようで悪いがほぼ不可能だ。

それこそテレビの中のヒーローか、純粋な子供か、現実を知らないオシアワセな自惚れでなければ、全ての人を救うなんてことを豪語出来ない。

そして、其々が知ってしまっているから、全ての人は無理だが見える範囲は救いたいと叫ぶ者達を尊敬し、共感し、賞賛するのではないだろうか。

「あんた、よく変人って言われるだろ」

サイードは、男のとても現実的で利己的で、それでいて少年の意

志にも副う成り立ちと、自覚しつつも貫き通す潔さが好ましかった。
少し遠まわしで、それでいて本心を述べた男からすればサイードの反応は予想外で、しかも通じた上でのそれだったから尚更驚く。
男は、クツクツと印象の悪い笑みを漏らすサイードに、苦笑を返すしかない。

「確かにそうだが。……お前の方が、何倍も変人だ」

自覚している、と褒められた時にみせるような勘違いの反応をしたサイードは、一度男から視線を外し、肩を軽く竦めて言った。

「それで、あんたの判定は？」

そろそろ、この不思議な一時が終わるということなのだろう。
男も理解し、大きな溜息と共に立ち上がる。

サイードの後ろには、水の美女の浴びる希望の雫が空に上がっており、男の方には日常が広がっていた。
目を細めて男の背中に広がる光景を見るサイードを、男も同じように見る。

未来に繋がっているのはどちらかなど、本人達でさえ分からない。
しかし、男は色々な形の終わりを見てきた者。
その時に人が醸し出す雰囲気、臭い、呼吸、思考、言葉。それを自覚無くとも身体が何度も感じ、覚えてきているのだ。
第６感と言えばいいのだろうか、とにかくそういった経験が視る能力になる。
治癒術師は生に密接に関係する職だが、その実、死を診ると言った方が近いのだ。医者も勿論そうで、でないと、それを出来る限り遠ざける手段を見つける事は出来ない。

生を伸ばすだけであれば、極端にはなるが血を止め包帯を巻くだけで良いのだから。

そして、そんな男がサイードに感じた結果だが、彼は皮肉なことだとおもわず呟く。

裏の世界、社会から外れた場所を歩いているというのに、死を相棒に生きていると感じた青年は、男が今まで視てきた者の中で誰よりもそこから遠い場所に居るように思えた。

「お前は死なないだろうさ。どれだけ、堕ちていこうともな」

男の下した判定が絶対ではないが、それでもまるで、世界の終わりを示すお告げのようであった。

サイードにとっては、目的達成への大きな後押しになるかもしれないが、被害者側がそう感じてしまう程の決意と意志。

その動力源は一体何なのか、それが気になって仕方が無い。

「そりゃどうも。……まあ、当然と言えばそうなんだけどな」

男の判断に、サイードは笑う。

ただ、後半だけは俯き囁く程度で、男にまで届くことは無かった。

そして、男を残してサイードはより噴水に近い芝生に向かって歩き出す。

「アイツの前には2度と、現れるんじゃないぞ」

「むしろ、また会ったら奇跡だ」

次元の視えない背中を見送りながら男が言った忠告に、サイードは振り返ることなく手を振って返し、彼等は別れた。

これもまた、1つの共有の形だったのだろう。立つ場所は真逆だとしても、生きていれば交わらないことのほうが難しい。

その直ぐ後。広場に誰も聴いたことの無い歌が響く。
透き通るスカイブルーの流れるような美しい髪と、全てを受け止めてくれそうな力のある瞳をした人物により紡がれたそれは、行き交う人々の足を止め視線を縫い付けながら、希望を枯らす。

「さあ、契約をしようか」

広がった、切り離された世界。その中で、新たな出会いが生まれる。

「……やっぱり、序盤で運を使い果たしたのかな」

しかしどうしてか、待ちわびていたと歓喜する言葉に対し、ルシエの声には珍しくこの世の終わりのような絶望があった。

『癒しを求めるのは
腐を抱くが故

腐には枯れることのない
癒しの一片を
癒しには止むことのない腐を

癒しは満たし
腐は蝕み

降り注ぎ
絡みつく

選ぶのではない
受け止めよ

いざ示さん
己が根底を』

――残る精石は、後7個。

孤独を望む旅は、出会いによってその心の砦を強くする。
それを繋ぐものが共有。
でないと、物語は紡がれない。

美女の憑依、悪魔の光臨（後書き）

その背に黒の羽根を　をお読み頂き、ありがとうございます。
これにて水の国編終了です。
水の精霊王が出てきてない、と思ったあなた。
引き伸ばしたわけではないですが、この章で登場させるには、水はあまりに……。
なので、次の章までお待ち下さい（笑）

よければ、ご意見ご感想をお待ちしております。

Xの王道は逆さまに

世界は、混沌の時を迎える。

水の国の精石の破壊。それは、人目のつく場所、もっと言ってしまえば隠せない場所に置かれていたことにより、全ての国にその事実を伝えることになる。

これを受け、風の国は隠蔽するのは得策では無いと判断し、王の名で破壊されたことを正式に名言した。さらには陽の国も、大した被害を受けていなかったからこそ隠し通せていた事実を公に。

何故今頃、真っ先に公表していれば。風の国はまだ、首都の復興を優先したと言い訳できる。しかし陽の国は、それにより非難を浴び、ムスイムの若き王は前王の失態で最近露見したのだとした。

――破罪使ルシエ。

その姿を晒したのは、風の国でのみだ。しかも夜だった為、瞳の色は分からず顔もおぼろげで、銀の髪をしていただとも、緑だったともされはっきりしない。

結局のところ、追うべき悪魔の鱗片も掴めない人々は、これ以上精石を破壊されないように警備を強化するしか策が無いのだ。

しかし各国では、王を集めた協議の場を開くべきだと其々で訴えられ始めた。正確にいうと、８ヶ国の王による会議。

アピスは、技術の先進がまだな為惑星かどうかは定かではないが、海に囲まれた１つの巨大な大陸が８つに分けられ、さらに２つの大

陸が空に浮かんだ世界である。
では何故、１０ヶ国全てでとならないのか。
海は魚介の宝庫だ。しかし、陸以上に危険が多いせいで航海の概念が無い。
空にある２つの大陸は、大海原のどこかに浮かんでいるとされ、実際に目にした者はおらず文献の中の存在だった。――光と闇の国。

其々の国に住まう民は、精石の恩恵により日々を過ごせるとその信仰を神より近しい精霊の王に向けており、精石は精霊王が授けてくれた物だと信じきっている。デルの語った始まりは、歴史の中に埋もれ消えて、欠片も残ってはいなかった。
故に、文献でしか知らない国だとしても、精霊王を否定することに繋がる為その存在を否定したりしない。

破壊された３つの精石。精霊王の怒りに怯える民と、破壊に怯える他の民達。
連鎖する負。気付けば、様々な悪行が破罪使によるものだと、ルシエの知らぬ所で罪だけが重なっていく。

しかし、その影で、元々負を多く抱く人々は、自身の不幸を恩恵が足らないからだと被害妄想を掲げ、精霊王に恨みを持っていたりする。
そういった者達は、逆に破罪使に対し馬鹿みたいな感謝と期待を浴びせていた。
神がいれば邪神がおり、天使がいれば堕天使がいる。物事には常に表裏があるが、それがまさかルシエにまで向けられようとは驚きだ。

――最期に笑った奴が勝ち。

一体、誰がその権利を奪い取るのか。
ルシエと人。その戦いに思えるこの旅だが、ゼフの様子や事の流れからして、それだけでは無い気がする。
神のみぞ知る真実？　いいや、命は常に意志によって回る。
幾つものそれは、絡んで解けない糸の様に。しかしそれにも、端はある。
辿り着く終焉は一体何にあり、始まりはどこからなのだろうか。

煌びやかな一室では、３人の人間が暗い顔をして静かに会話を繰り広げていた。
威厳があり人の上に立つ者の雰囲気を持った壮年の男と、若くはあるが志の強い瞳を宿した少年。そして、身なりは平凡だが腕の立つ雰囲気のある男。
彼等は小さな円卓を前に、其々が持つ身分関係無く討論している。

「では、私を訪れた者も同じ人物だと？」

「あの者は、正直底が知れません。偽ることは、間者であれば特別

なことではありませんが、それにしてもあれは異常です」

「それ以前に、精石が精霊王だった事実の方が重要だ」

彼等は、護衛にすら聴かせられない重要な案件について語り合っていた。

その中心になる情報のほとんどは、身なりの平凡な男から齎されたものである。

その男と少年の持つものを元に思案するのが、壮年の男の役目だ。

「確かに、私も気付いた時には驚きでした」

「……気付いた、ということは、リュケイムが彼に直接告げられたわけでは無いということですね」

少年の問いに、リュケイムははっきりと頷く。

ここは、風の国の首都ウェントゥスにて、奇跡的に無傷で済んだ城の王の私室である。

つまり、今居るのは、風の国王と私兵であるリュケイム、そしてサイードによって命を救われた王の長子であった。

「彼……というか、彼女が正解です、王太子殿下」

「女性だったのですか！？」

先程から、部屋には驚きの声が何度も上がっていた。

魔力の侵食による命の危機を脱した後、暫くその生還を隠されていた王子は、妹であり王女であったお姫様の弔いが済んだ後、今まで数々の悪行をしてきた弟の馬鹿王子の幽閉が実行されてから、正

式に次期王となることが決定している。
とはいっても、首都も城の内情も荒れに荒れている現在。体制の立て直しは一向に進まず、帝王学を学ぶ前に現場で職務に当たらなければならない。
さらには、突然露見したウィーネ騎士団団長レイスと馬鹿王子の繋がり。
それを確かめる為に動いていたリュケイムが齎した真実は、そんな彼等にさらなる追い討ちをかける。

「お前の命を救ったのは、本当にその者だったのか？」

王は俄かには信じられなかった。
最早諦め、王子の契約精霊に全てを委ねるしかなかったところでの突然の全快。しかもそれが、謎の人物によるもので、さらに正体が悪魔だったとどうやって信じられるだろう。

しかしリュケイムは、その理由については察しがついていた。

「……王女様の精石盗罪が、関係しているかと」

「あの子は何故」

王にとっても王子にとっても、お姫様は賢く愛らしい子であった。
2人はリュケイムに、全てを話せと目で訴え、彼は憶測も混ぜつつ自身の持つ情報を包み隠さず言葉にする。――彼がお姫様を手に掛けたことも。

落ちる沈黙。支配する悲しみと嘆き。
それでも彼等は、人の上に立つ者として考え抜かなければならない。

誰もを救うでは無い。どれだけ犠牲を少なくできるか、をだ。
理想は掲げられるが、現実は待ってなどくれない。例え、自身を置き去りにしてでも彼等は立ち続けなければならなかった。

「あの子は、笑っていたのだな？　望んでそれを……」

「もしかしたら、私の件も」

暫く彼等は、消えてしまった小さな身体と、その中にあった大きな想いを受け取って憂いた。
そして、王は重い口を開く。

「リュケイム」

「はっ」

伏せられた瞳が開いた時、そこに立場が出現する。
立ち上がり跪いたリュケイムは、頭を垂れて王の言葉を待った。

「お前の件は、致し方なかったと不問にしよう。それが、あの子の意志を継ぐことにも成りおうぞ。一生、その罪を抱えて生きるのがお前に下す罰だ」

黙ってそれを受けるリュケイムの脳裏には、宙を舞う幼い身体と涙が蘇り、彼は静かに唇を噛んだ。

「そして、レイスに代わり、再びその任に就け」

「仰せのままに」

王も人である。しかし、人よりも王であらなければならない。そして、騎士はそんな王の剣として生きるのだ。それが彼等の矜持。

王の目の前には、一枚の紙に書かれた綺麗な文字による悲しみと覚悟の羅列があった。

「父上」

現在の頂点と、未来の頂点である2人は黙って頷き合い、そして王は決断を下す。

「確かに、その者はあの子の心と王子の命を救ったのであろう。しかし、我らそのものである民を傷つけ、歴史を壊したのも事実。その罪は重く、償えはしない。償いを求めもせん。――悪魔なのだ」

「そして、精石が精霊王そのものだとしても、我らの世界はそこにある。神は心の拠り所であって、全てでは無いのでしょう」

「我らは我らの生きる場所の為に」

其々の意志により、3人は得た情報を使えるものと隠すべきものに分ける。

それは責められるでも、褒められるでも無い。単純に、望み守りたいものの為だ。

「守りたい感情は同じでも、それが繋がるとは限らないのだ」

だからこそ、人の世に争いは絶えないのだろう。悲しいかな、心というものは最大の弱点にも武器にも成り得る。

生だけを真っ当できれば、どれだけ楽なことか。

風の国は破罪使の被害を受けた側として、国を隔てない悪魔討伐の軍勢を築くべきだと各国に訴えることを決める。
その書面は、すぐさま魔術師により各王の元へと渡った。

至る所に傷跡が残り、お世辞にも活気溢れるとは言えない街。しかし、つい最近までの状況を知る者達からは、よくぞこの短期間でと感動を与える。
そんな陽の国ムスイムの王が住まう城の一室では、1人の青年がぼんやりと考え事をしていた。

「疲れる……」

ぽつりと零されたものには、言葉通りに大きな疲労が乗っかっており、彼は豪華な椅子に沈みつつ溜め息を吐く。
無駄に重い服と、常に伸ばしていなければならない姿勢。圧し掛かってくる重圧は、彼の本来の姿を深い谷底へと突き落とす。

「昔は楽だったな」

ティルダは無意識に遠い記憶へ想いを馳せて、慌てて頭を振った。
未だに服に着られる状態な彼だが、それでも一国の王として立たなければならない。
その胸には、父の様な暴君には絶対にならないという信念と意地、覚悟がある。なにより、迷う時には何時だって、とある者の言葉がティルダの背中を押してくれるのだ。

「俺が、俺を決める」

そうやって、ティルダは決めた。――王になることを。
しかし、今まで王たる者の教育をしっかりと受けていない為、彼は他の王に比べれば試行錯誤をしながら政策をするしか無かった。
それ故、常に望むのは信頼のおける補佐であり仲間。

反乱軍に居た時の仲間は、其々が元の生活に戻っており、今やティルダは雲の上の人に近い。
それに、あの時の彼は自分を持っていない良い駒でしか無かった。

「……どこ、行ったのかなー」

ただ、そこで出会った1人は別だ。
その者だけは、ティルダにとってかけがえの無い存在となっており、最も隣に居てくれることを望んでいる。

立ち上がり、重苦しいマントを脱いで椅子に掛けたティルダは、備え付けの小さなワインセラーから適当なものを選んで、自らグラスに注いでそれをあおった。
自分には小洒落たワインより、ボロい酒場の不味い酒の方がお似合いだ。自虐しながら、ティルダは薄っすらと笑う。

「今度会った時は、叱られないようにしないとな」

使われるぐらいなら、使うか使わせてやる。その言葉通り、ティルダは前王の毒に犯された者を操り、打ち捨てた。

俺が、俺を決める。王である彼にとって、それは国そのものに直結する。

だからもう、後戻りはしない。

代わりに追うのだ。ティルダは、真っ直ぐに己の道を進んでいた憧れの人の背中を。

「元気かなー。……サイード」

金の瞳だということしか手がかりは無く、痕跡も掴めない冷静で淡白で不思議な人物。

ティルダは、そんな憧れの人物との再会を夢見ながら、今日も王として生きる。

「失礼します」

「入れ」

願わくば、その人物に褒められるように。

控えめのノックの音に答えたティルダは、少し頼りなさげな青年から生まれたばかりの威厳を携えた王へと表情を変えた。

「風の国から、早急にと魔法便が届きました」

同じ精石を破壊された国として、何か情報があるのだろうか。そう思いながら、ティルダは書簡を持ってきた騎士に礼を言ってそれ

を受け取る。
恭しく頭を下げる騎士に退室の許可を与え、彼は再び1人となった。

ティルダは、あの時リーダーと共に破壊される場面を見ている。
前王を打ち、その身体が床に倒れると同時に砕けた希望の欠片。それに驚く暇も無く、剣を向けてきた仲間だったはずのリーダー。
だが、ティルダにとって精石は暴君の象徴であり、砕けたことで新しい未来を造る勇気にもなっている。
サイードが不審な動きをしていたことに、彼が気付いていないわけでは無い。
もし、サイードが何かしら関係していたとしても、憧れの人だという事実は変わらないからこそ、ティルダは敵対だけはしたく無いと、書簡を確認するのを躊躇った。

それでも、見ない訳にはいかないのだ。

上質な羊皮紙には、正式な書面の証明となる風の国の紋章。丸められたそれを縛るのは、風の国の王の魔力が込められた緑色の紐だ。
ゆっくりと解かれたのは、ティルダと憧れの人とを結ぶ運命の糸だったのだろうか。

「……国を隔てない、軍の編成!?」

糸は綻ぶものだと、この時ほどティルダが実感したことは無いだろう。
彼以外誰も居ない部屋で、王として立ち続ける必要は無い。今だけは、ティルダがただの青年であっても許してあげよう。

「目的は、金の瞳の破罪使の討伐……サイードっ！」

ぐしゃりと握り締められた書簡にある名は、破罪使ルシエ。しかし、ティルダは確信した。

それが、サイードでもあるのだと。根拠は、と聞かれれば直感だと答えるしかないだろう。

ティルダにとって、王として初めて直面した重要な決断の時だった。

憧れを取るか、国をとるか。悩む必要など無いといくら他人が言ったところで、王とて人だ。

しかもティルダは、やっと王の自覚が出てきたばかりの新米。それに、国と自身を天秤にかけて死を選んだ者も彼は知らないが他国に居る。

サイードの言った、最期に笑った奴の勝ちだという言葉からすれば、褒められないそれも本人にとっては最高の選択だ。

皺の寄った書簡をきつく握り顔を埋めたティルダの身体は、小さく震えている。

出会いは繋がりだ。すれ違うだけでも縁を持つ。

1人の人物とのそれは、世界を左右する大きな選択となって様々な者に突きつけられた。

どれを選んでも、結局待っているのは破壊と救い。

それはまるで、坂を転がる石のように止まる術を知らなかった。

遊戯であれば、誰が嘆くものか

昼間であってもそこかしこで喧嘩が勃発し、女は男を探し、街全体が酒の臭いを漂わせているかと錯覚する。その奥にはひっそりと磯の香りが隠れていて、風に当たれば髪はぱさつき肌が染みた。

お世辞であっても快適だ、綺麗だと言えないその街は、アズレイから4日程歩いた比較的近い場所にあった。海の国、荒くれ者が集う場所。――通称ロウジャー。

眠ることを知らないその街は海沿いにあり、サイードは酔っ払いやごろつきに絡まれないよう気配を殺しながら歩いていた。

とはいっても、それは努力というよりも無駄な足掻きで、彼もまた喧騒の一部としてこの街のいつもの風景とはまた違った意味で目立っている。

サイードの周囲を避けて歩く人々。しかし彼等の目は、そこに縫い付けられたように動かない。

「ね、ね、あれ何!?」

「……娼館」

「じゃあ、あれは?」

「娼館」

今までのサイードからすれば、それは異様とも言えよう。目立ってはならないはずの彼が、諦めたようにそれを受け入れているのだから。

それもこれも、原因はその右腕の人物にある。――物体と言った方が良いかもしれない。

スカイブルーの瞳に、同色の腰まである絹のように細く滑らかな髪を揺らした、サイードより高くゼフより低い身長の者。この上なく旅装束の似合わないそれは、サイードにべったり張り付き、ゼフから苛立った視線を浴びせられていた。

ゼフが冷たい美だとすれば、緩やかな美を持っているといえよう。かなりの女顔だが、せり出す喉仏が男だと主張している。

そしてサイードだが、彼は最早諦めの色を瞳に映していた。

「うっはー！　ねぇ、寄っていこうよー」

「……せめて、俺の性別ぐらい覚えてくれ」

大きな溜息が1つ。普段であれば、まず殺してやりたいと思うはずのサイードが、まるで諭すように言う。

天変地異の前触れか、と淡々とつっこんできそうなゼフですら、哀れみをサイードに向け、その奥にはひっそりと、だから言ったのだと非難が込められていた。

「嫌だ、認めない。信じない、許さん！」

周りの視線も気にせず騒ぐ男は、何がそんなにも楽しいのか笑顔を貼り付けて声高らかにサイードを指差す。

自分からは絶対に関わらないであろうタイプの男に、サイードは我慢のしすぎで可笑しくなっているのだろうか。
突き出された腕を据わった眼で眺めた彼は、徐にマントを払ってあろうことか自身の細身な黒のパンツに手を掛ける。

「サイード！　お前、何をしようとしている！」

慌てたのはゼフである。衝突し一端側を離れた彼であるが、サイードが水の国を経つ時には戻ってきており、2人の間に険悪さは残っていない。

「何って、……証明？　言って聞かせられるなら、方法を教えてくれ」

サイードは、止めてきたゼフの腕を見て視線を合わせた。
その眼を見てゼフは思う。あぁ、限界を越えたのだな、と。
しかし、何をしようか分かっていて止めないわけがない。ゼフは、珍しく労いを込めてた言葉でそれを止める。2人には、騒がしい男のせいで絶望にも似たものが浮かんでいた。

「だったら、胸部でいいだろう？　こんな公衆の面前で、これ以上目立ちたいとでも言うのか」

「……胸部って」

横から茶々を入れてくる男は無視し、気持ちは分かると力説するゼフ。
それを受けたサイードは、ゆっくりと視線を下にずらしていき、途端にいつも以上に無表情となった。
どうしたのだろう、そう思ったのは男も同じ。ゼフと彼の視線が

サイードの見ている場所に集中する。そうしている間に、サイードがゼフの腕をそっと導いていた。

「平ら……だな」

「んだよー、やっぱ嘘じゃんよ」

「な？」

気まずそうに外されるゼフの視線。憤る男。何故か満足そうなサイード。悲しいかな、それ程まで、その身体に女性的特徴は皆無だった。

とはいえ、平らは言い過ぎな気もするのだが、思い出してみれば女のリルですら触っても気付かなかったのだ。そこで証明しようとしても無理なのも、仕方が無いのかもしれない。

「だ、だとしてもだ。少しは羞恥心を持て！」

「それよりも、こいつの鬱陶しさのほうが問題だ」

2人が男を見れば、彼は娼館に行く気満々で、美しいスカイブルーの瞳を期待で輝かせていた。

「……来い」

もう一度、深く嘆息したサイードは、そんな男の腕を取って路地裏へと引き摺っていく。

人気の無い場所だったからか、ゼフはそれをフードの奥で酷く疲れた表情をして見送った。

サイードだけでも制御不可能だというのに、あの男が加わってか

ら、さらにゼフには苦労が絶えない。

暫くして戻ってきた2人の表情は一変していた。

「そんな、そんなぁ……本当に付いてないなんてぇ。俺より格好良いのに、女の子なんてぇ」

嗚咽交じりに呟く男と、颯爽とゼフの横を通って足早に目的地へと進み出したサイード。

「馬鹿はほっといて行くぞ」

すれ違い様そう言われたゼフは、どこか釈然としないまま、その背中を眺めながら男の首根っこを掴んで引き摺って後を追う。

「せめて、せめてで良いから、その胸を俺に育てさせてぇ！」

「……低脳が。サイードなら既にあそこだ」

「はっや！？」

以前であれば、焦っていると感じていただろうが、今回ばかりは急く姿に文句は無い。

中身が安定していれば、慌てていなければ、無理している時だけ止めれば良いのだ。

彼等に許される時間は、目標を達成していく毎に短くなり、困難だけが増えていく。まるで、子供遊びの棒倒しの様に。

「ストッパーは、あんたの役割だからな――風の」

「だったら少しは、私の負担を減らせ」

ゼフに引き摺られ、ヘラヘラと軟弱そうに見える男の名はクランク。これもまた、ルシエが彼に与えたもので、その正体は水の精霊王だった。

高飛車な陽の精霊王が嫌うのも納得な、変わり者として仲間内で笑われるクランクが加わって目指すのは、彼と相性が良いらしい海の精石。

補助特化な水と違い、海は水に関連するものを凶器に出来る攻撃性の高い属性だ。例えば、空中の水蒸気に干渉して水を作ったり、氷として攻撃できたり。

ただ、海の国での精石の管理はとても特殊であった。

どの国も、精石を中心に繁栄してきた歴史がある。水の国の場合は、便宜上その場所を首都と出来ない背景があったりするのだが、それでも人はそこに集まりがちだ。

だが、海の国は少し違う。精石から一番近いロウジャーは治安が悪く、国に於いても誇れるものではない。

しかし、それは精石のせいで改善が困難だからだった。

遥か昔。他と同じく、この国も精石を城に保管し、ロウジャーは違う名で首都として機能していた。

人々は海沿いの首都で豊富な食糧を主に発展し、活気付き、健やかに日々を過ごす。それに終わりがくるなど、誰も想像すらしていなかった。

だが、異変は突然訪れる。

なんの予兆も前兆も無く、海は荒れて地が割れ、人々は土地を追い出されたのだ。

しかも、それだけでは終わらなかった。精石が保管されていた城が、まるでそこだけ急激に時を奪われたかのように崩れ、そこを中心とした大地だけが切り離されて、全てを拒絶するかのように孤島

となった。
何時しかその出来事は、海の精霊王の怒りとして語られるのだが、それにより海の国は首都を精石から離れた場所へと移したのである。
そして後に残ったのが悪意と欲望渦巻く土地で、その気配に導かれた荒くれ者たちがロウジャーを生んだ。
勿論、水の国のように、精石の警備だけは万全にしておこうと、孤島には幾人もの騎士や兵士が送られたのだが、彼等は誰1人その任を真っ当出来ず、島から戻ってくることも叶わなかった。

彼等は当然ながら知らなかった。海の精霊王が、精霊王の中でも特に人間嫌いな王だったことを。何がきっかけだったのかは本人にしか分からないが、長い年月静かに眠っていたはずの王は、突然拒絶を示して孤島の中心で孤独を望んだ。
そしてその孤島は、畏怖を込めて呪われた島と呼ばれるようになる。
一行が向かうのは、そんな不穏たっぷりな王のテリトリーだ。人が踏み込むことを許さない場所では、その妨害を警戒する必要は無いが、その代わり、それ以上に強大で予想もつかない王の力が待ち受けているかもしれない。

「人間嫌いの精霊王……ね」

「今じゃあ何故か、精霊嫌いでもあるみたいだけどねぇ」

「とにかく、今までとは違った危険があるだろう」

サイードは、小舟の上で今の説明を半ば無理やりゼフから聞かされた。
要するに、何時も以上に慎重に行けと訴えたのだ。その奥に、彼とクランクのお守りは嫌だと本音が含まれている。

「確かに、島に近付いていけば精霊の気配が薄くなるな」

それを分かっているのかいないのか、ロウジャーで強奪した小舟を精霊に動かせながら、サイードは小さな孤島だけを見ている。

バタバタと、全員のマントを騒がせる荒い風が、彼等の上陸を歓迎していないことをあからさまに伝えていた。

「あ、俺、攻撃系はまったく駄目だから、そこんとこよろしくねぇ」

「元から期待してねぇよ」

「サイード酷いっ」

騒がしいクランクを無視し、島を取り巻く暗い雲に何かを感じたのかサイードが眼を細める。

それにゼフが、嫌な予感を覚えて溜め息を吐いた。

「でもほんと、海のは聞く耳持たない癇癪持ちだから、気を付けた方が良いよー？」

そもそも、ゼフは2人が契約をするまでの経緯を知らない。だから尚更、自分の時はあれ程後から騒いでいたのに、と納得出来ないものがある。

騒がしいのを嫌うサイードにとって、クランクは許容できる一切を持ち合わせていないはずだ。現に、ロウジャーに着くまで、どれだけ邪険にし疲労を蓄積したことか。

何を考えているのか、まったく掴めなくなった。それが、衝突によって生まれたゼフにとっての弊害だった。

ゼフがそんなことを考えている間に、小舟は街と島の中間地点まで進んでいる。淵に腕を乗せて潮風に当たるサイードは、暇だと騒ぎ始めたクランクを鬱陶しそうに眺めていたが、突然バランスの悪さを厭わずに立ち上がって飛んだ。

慌てたのはクランクだけである。思考に浸っていたゼフも、気付けば舟から空中へと浮かんでいた。

「……へ？　2人とも、急にどったの？」

「お前、そのまま呑まれろ」

「警戒心すら持ち合わせていないとはな。気を付けろと言ったのはお前だぞ、水の」

クランクが不思議そうに2人を見れば、彼等は心底馬鹿にした様子で彼を見ていて、さらにサイードがその後方を顎で示す。

これでもまだ気付かない様子に、サイードは早々に見切りを付けたのか、反応を最後まで楽しまずに海上から空中へと場所を変え、移動を再開する。

一応、最悪の事があっては困るとクランクのお守りに残ったゼフは、素直じゃない世話焼きか何かなのだろう。

「のう、おうわあああああ！」

島にしか意識を向けていないサイードの背中で、クランクを残した小舟が突如迫った大波に呑まれ奇怪な悲鳴が響いても、彼が振り向くことは無かった。

「さっそく、感知された用だな」

「あぁ。流石、海の精霊王なだけある。精霊嫌いって言う割には、そこかしこにアウラネルクによる包囲網が敷かれてるな」

風に乗るように進むサイード。その隣に張り付いたゼフの手は、びしょ濡れになって咳込むクランクを掴んでいる。

スカイブルーの長髪は、しな垂れて彼の感情を表しているかのようだ。

ちなみにサイードの言ったアウラネルクとは、海の精霊のことである。

「い、言ってくれても、いいじゃん」

サイードは、徐にマスクとマントを脱いで素顔のスタイルになりながら、海面ぎりぎりにで抗議するクランクを一瞥した。

緩い雰囲気が常なクランクであったが、向けられた鋭い眼光にひっそりと生唾を呑む。

「自分の世話ぐらい、自分でしろ」

彼が出会ったのはルシエだけで、その人物に興味が湧いて、殆ど駄々を捏ねる形で同行を許可させていた。

だから、サイードについては、まだ図りかねている状態だ。ロウジャーに来るまでサイードと共にいたわけだから、ある程度分かってきてはいるが、こと精石に関しては今回が初。故に、その執着する姿を見たことは無かった。

「おい、風の」

「……なんだ」

吐き捨てるよう言われ、さっさと島に向かうサイードに聞こえないよう自分を掴むゼフに呟けば、クランクを離し、彼が纏わり付く水分を処理して隣に立つのを黙って待ってから、スカイブルーと翡翠は対峙する。

「あんた、本当に全部が別々だと思ってるわけじゃないよな」

「それは、我らの関知することか？」

精霊王には人と変わらない意思があり、性格も考え方もある。今までは、1人の精霊王と1人の人間だけだったから衝突もそれだけで良かった。しかし、そこに新たな色が加われば、さらなるものが生じて当然だろう。

ルシエにはルシエの抱えるものがあるように、どうやら精霊王同士にも何かがあるようだ。

「俺はあんたらと違って、重ねてなんか見てやらねぇ」

「相変わらず、甘いことだ」

フードの奥でサイードに似た鋭さを宿すゼフと違い、クランクはその顔の造りからか垂れ目のせいか、正直気が抜けてしまいそうな睨みを持って対抗している。

「そりゃ、俺は癒しの精霊ですからね」

「貴様は無駄に人間臭いだけだ。陽が嫌悪して当然だろう」

「あんたなぁ、そこであの高慢ちきを持ち出すなよー」

それに、2人は真逆と言っても良い。

ゼフは人間にほとんど興味が無い。それは、ルシエ達も知っている。

しかし、クランクについてはそうでは無いだろう。彼は、こよなく人を好いている。特に女性を、と付けるべきかもしれないが、そうでなくては癒しの力が人間にまで通じるわけがない。

ただ、人が気付いていないだけで、水の精霊は癒しと幻だけでなく、実は腐の能力も有しているのだ。

それには細かな条件があるので、水が持つ唯一の攻撃性ではあるが、実質便利さに掛け実用性は皆無。ただ、重要なのはそこではなく、それの意味するものである。

もう一度言おう。水の精霊王は、こよなく人を好いている。しかし、それと同じくらい嫌っているのだ。

関心が無いということと、嫌うということ。それは同じに思え、全然違う。

攻撃特化と補助特化という点でも、彼等は真逆だ。

「俺は、傍観に徹するつもりはないからね」

ヒラリと手を振りながら宣戦布告したクランクは、サイードに待ってーと気の抜けた声を掛けながらその背中を追った。

取り残されたゼフは、パサリとフードを落として珍しく顔を下げる。

人形のように無表情なのはいつもと変わらないが、瞳を伏せた様子は何かを必死に耐えている様にも思えた。

「……これ以上、私達の間に壁を増やさないでくれ」

落とされた言葉に返ってきたのは、不気味な小波だけである。

そうして彼等は、呪われた島へと上陸した。小舟を沈めた波が、待ち受ける騒動の始まりの合図だった。

精霊は、存在するだけで世界のバランスを保つ役割を果たす。では、具体的にどういった影響を及ぼしているのか。

生命は、其々に見合ったサイクルがあり、その調整をするのが精霊なのだ。例えば、人や動物は腹が減る。睡眠を欲し、性欲と共に種を存続させようとする。

では、問おう。それは誰が教え、我々は誰に教わっているのか。答えられる者は誰もいないだろう。

身体の造りがそうなっていて、遺伝子に刻まれているから。地球であれば、そう答える者もいるかもしれないが、アピスに於いてそれを論じれる者はいない。

つまり、精霊がそうさせ、精霊によりそうさせられているのだ。だからこそ、アピスでは精霊が必要不可欠だった。

しかし、だとしたら、何故精霊王という頂点が存在するのか疑問が生まれる。力の優劣が生まれるのはどうしてか、と。

精霊に雌雄は無い。だが、ゼフやクランクは確かに男だ。それは、物語に良くある擬人化というものでは決してあらず、そうなると察しがつくだろうが、精霊王とは精霊の中で唯一同種を生み出せる存在だった。

ただ、他の有性生殖とは違い、彼等は肉体の交わりによって個体

を生成するわけでは無い。
精霊王は、決められたパートナーとお互いの魔力を混ぜ合わせることで、精霊の元となるベースを作り出し、それに自然界の魔力が合わさることでどちらかの属性の精霊が生まれる。
だからルシエは、精石を破壊して精霊王を目覚めさせる必要があるのだ。
今はまだ全体的に精霊が少ないので、1つ壊すだけでも大きな効果を得られるだけで済む。しかし、何度も言うが重要なのはバランスだ。
陽が風を指定したのは、自身のパートナがゼフだったから。両者が目覚めたことで、その2属性が今後減少し続けることはないだろう。
魔力を混ぜ合わせるのは、何も両掌を合わせる等の動作が必要なわけではないのだから。
しかし、世界にその2属性が増えただけでは、全体のバランスは保たれない。
それに、十分に世界が精霊に満たされた際、彼等が幾ら力を混ぜ合わせようとも、精霊の元と自然界の魔力が馴染んだりはしないのだ。よって、陽と風の精霊だけが溢れるということも無い。

まったくもって、世界とは良く出来ているものである。

そして、力の優劣だが、これについては簡単だ。精霊は其々、世界の成分の象徴である。闇と光が無ければ星の輝きは大地に降り注ぐことは無く、空が無ければ風は行き場を失い、雷は陽を生まず、海は水の終焉。
それらの違いは、世界を占める支配の割合だ。淡水が、下れば塩水に呑まれてしまうように、其々は在るべき場所に必要なだけ存在する。
だからこそ、最も自由度の高い風が最強で、バランスが保たれな

ければ簡単に上下してしまう水が一番下に位置するのだ。空も風と同じくらい支配の割合は高いが、好き勝手場所を選べる風と違い、空は平等に空で無ければならず、その力は属性の一番真ん中にくる。

何故ここでこのような説明をしたかというと、アピスでは精霊によって成り立つということをより確かに伝えたかったからだ。

何を今更、と思うかもしれない。しかし、ルシエですら情報としてこれらの知識は持っていても、実感できないせいであまり現実味を持っていなかった。

海の精石のある呪われた孤島。人間嫌いで精霊嫌いな海の精霊王は、それを分かっていながら全てを拒絶している。

ということは、だ。島には精霊が居ない。

そうすると、先程の説明で大体の予想はつくことだろう。

「見事に、おどろおどろしい場所だな」

その一帯だけ光は当たらず、それを遮るまるで命が燃やされたように濃い灰色の雲が暗い雰囲気を醸し出している。

島へと上陸した一行はまず、砂浜に足を着けた瞬間に違和感を覚えた。意識は前方へと向いており気付くのが遅れてしまったが、普通であればサラリとした感触がするべき足裏で、パキンと何かが砕ける音がしたのだ。

サイードは、打ち寄せられた木の枝でも踏んだのかと思って最初は気にしなかったが、もう一歩踏み出せば再びその音がする。

「……砂が」

さすがに可笑しいとしゃがみ込んで砂を掬ってみれば、まるで其々が小さなガラスの欠片のようで、数粒摘んで力を加えれば、それ

は簡単に砕けてしまった。

「砂だけじゃない、島全体が空っぽになりかけてるね」

クランクの言葉で目の前に広がる木々に視線を移せば、同じ環境にありながら成長の度合いがまったく違い、どれも枯れかけというよりは徐々に風化していると言った方が正しいだろう痛々しい光景が広がっていた。

「これが、精霊を失った場所の辿る結末だ」

パキン、パキンと、耳を澄ませば島の到る所から不気味な悲鳴が響いてくる。

そうか、と流石のサイードも言葉を失った。

アピスに来てから常に傍らにあった精霊の気配が微塵も無く、地球で当たり前だったその環境。以前の彼なら、それを不気味に思う自分に嫌悪したことだろう。

しかし、今は違う。意識せずともその言葉は、とてもすんなりと零れ落ちた。

「まるで、縮図だ」

可能性のある、世界を待っているかもしれない未来の1つ。もしルシエが破罪使としての選択を取らなければ、アピスはこうやって終わりを迎えたかもしれない。

徐々に、徐々に、その身を構成するものを砕かれながら、後に残るのは何も無い荒野。いや、大地さえ精霊によって保たれているのだから、それすら朽ちて何が広がるのか想像が付かない。

そして、この先、彼等が志半ばで朽ちてしまった場合に起こりうる未来でもある。

初めて、その責任の重さを目の当たりにした時だった。

「こんな場所にずーっと居たら、俺達でもどうなるか分かったもんじゃないのにねぇ」

海は何を考えているのやら。この時ばかりは、クランクの暢気さに助けられた。

サイードが素顔を晒すスタイルを選んだのは、何処かで観察しているかもしれない海の精霊王の警戒心を少しでも和らげる為である。

しかし、呪われた島の状態を目の当たりにし、それが無駄だろうと思われる今、彼はクランクのお陰で冷静さを取り戻して新たな算段を立て始めた。

「なあ、精霊が居ないってことは、属性なんて関係ないってことか？」

「どだろ。空っぽだから、干渉は出来るかもしれないねぇ」

彼等は一歩も動かず、何時に無く慎重に事を進める事にしたようだ。

ゼフとクランクもマントを脱いで、より動きやすい状態へと体勢を整える。

「……海の王がこの状態になってから、どれくらいだ」

「石になっている間は、時間の概念から外れる」

「つまりは、分からないってことだな」

サイードは、とにかく少しでも情報が欲しいとクランクとゼフに

投げかけるが、2人ともが憶測しか持たず大して収穫を得られない。
今までに無い警戒の仕方に、少なからず戸惑っているのだろう。
気付けばサイードは、右手の指輪を弄りながらかなり険しい表情をしていた。

前方からは、絶えず耳を刺激する乾いた音。後方からは、嘲笑うかのように波が迫っては下がりを繰り返す。
精霊王の2人は、どうしてか海の王の性格については語らなかった。サイードが聞かなかったというのもあるだろうが、それこそ重要な情報ではないのか。

「サイードって、変な子だねぇ」

「お前に言われたら、この世の終わりだ」

「え、ちょ、君の中で俺ってどんな位置にいるの」

鼻で笑われ焦るクランクだけが、良く言えばどこか達観しており、正直にサイードの気持ちを表せば悉く空気を読まない発言ばかりしている。
それが結局、進んでみなければどうしようもないとサイードに思わせてくれるのだが、やはり彼とクランクは共に居て違和感を覚えてしまう。

「あまり、サイードを疲れさせるな。後が面倒だ」

「なんかその、あんたの俺は分かってますよー的な態度が、かなーり腹立たしいんだけど」

そして、ゼフとクランクの相性もだ。

サイードはひっそりと、クランクの同行を許したルシエに悪態を吐いた。そんな彼を慰めているのか、足元に波が来る。

と、サイードが一瞬にして驚きを浮かべながら後ろを振り返った。

「走れ！」

説明する暇もなく、サイードは片手を振って風の盾を展開させながら叫ぶ。

彼等は確かに砂浜に立っていたが、決して波が届くような場所ではなかったのだ。そして、とっくに海は満潮だった。

自然に殺気は生まれない。ゼフとクランクは、主人の命令に従うように、その言葉で林の方へと追い立てられる。

「大歓迎してくれてるみたいだな」

サイードも、気配なく忍び寄っていた海の王による攻撃に対応しながら、距離を取っていった。

小舟を沈めたのはただの大波で警告だった。しかし、今回のは確実に殺意がある。槍のように尖ったそれは、展開した盾にぶつかってあり得ない金属音を響かせる。

「嫌いって感情に忠実なこと、俺は嫌いじゃないね」

サイードは恐れる事無く、寧ろ嬉々としてそう言った。

彼等がその攻撃をどう感じているのかは分からないが、どうもそれはただの駄々に感じる。

来るな、来るなと叫びながら島の内部へと誘い、助けてと乞う矛盾を抱いた、そんな駄々。

「サイード！」

先に避難した2人の声がまた、サイードを高揚させた。

盾の防御が崩れ、彼の身体に海水の槍が迫った時、じゃれる様に軽やかに避けて跳んだ姿は、普段と変わらないサイードである。

しかし、ゼフも気付かない内に、その瞳に宿る挑戦的な光は日々強くなってきており、空中で回転した際に空に向いた視線は、確実に誰かに宛てられていた。

「そろそろ、駆け引きとか始めてくれたらありがたいんだけど」

攻撃が髪を掠め同行者2人が肝を冷やしても、サイードは哂っていた。

彼の見ている敵は、どこに居るのか。

世界は常に傍観者だ――その身を破滅に導こうとする存在にも、救おうと躍起になる存在にも、無慈悲な程に。

「あぁ、敗北を痛感する顔が早く見たい」

そんな憂いすら、吐き出された呼気の様に世界は流し視る。

「ルシエは、あの様に笑わないだろう？」

「あんた、歪んでるねぇ。1つの身体に、どうやったら複数心が宿るのさ」

――君達の奥底に潜む真実に、微笑む者はいるのかい？

腕を組み、ホッとした様子でサイードを眺める2人にそう囁いても、届くはずが無い。

常に傍観者でいることもまた、自身にも無慈悲だと世界は気付いているのだろうか――気付かない方が、楽な事だけは確かだ。

「さってと、期待に応えて魔窟に行こうとするか」

「あぁ」

「歩くのー？　俺、疲れるの嫌いー」

謎の会話をしながら待つ2人の前に、軽やかに着地したサイード。

鬱蒼とした木々と海を隔てる砂浜の幅は、島の中心へと歩き出した3人の背中でするすると元に戻っていった。

そして、パキンと響き続ける乾いた音の影で、自身の聖域を穢す彼等に堕天使は言う。

『可哀想な操り人形（マリオネット）に、安らかな慈悲を』

世界が一枚のキャンバスに描かれた絵画であったなら、幾らでも修正が利くのだろうか。ただ、その場合、美しい名画にはなれないのだろう。

島を魔窟と言ったサイード。そこに侵入したのは、太陽が頂点に達するぐらいの時刻だった。
それから時は進んで、今は太陽と月が同時に顔を出す夕方だ。
その間に彼等を襲った様々な出来事から、彼等は感じている――軽口では無くこの島は正真正銘魔窟であった、と。

「あー、疲れた……今日はもう、ここら辺で野宿しようよー」

サイードに目立った傷は無いが、3人ともに疲労の色が濃い。特にクランクは、そもそもが運動を好まないのか疲労困憊な様子だ。
現在地として、延々と数時間歩き続けた彼等は、そろそろ島の中心部に来ても可笑しくは無い。
しかし、海の王による妨害は姑息で凶悪で、そのせいで消費した時間の割に進んだ距離はあまりに短かった。

そのせいか、元から話題を振ったり周りに合わせたりしないサイードの口数は普段以上に少なく、ゼフも黙ってその後ろを歩くだけ。
クランクだけが、縦一列で進む最後尾でサイードに向けて文句ばかり垂れている。

「ねー、サイードー！　休もうよー」

パキン、とサイードの足元で朽ちた木の枝と湿った地面に張り付く苔が砕ける音が響く。
暗い雰囲気の木の葉が夕陽を遮る為、その破片は銀とも白とも言えない色を輝かせながら空気中に消えてしまった。

クランクに苛立つのは、態々言わなくとも分かることだろう。そして、絶えず耳を刺激する乾いた音もまた、サイードの神経を逆撫でしている。
さらに、歩けど歩けど目的地には辿り着かない。
実を言うと、サイードは先程から頭の中に浮かんだある事を無視していたりした。

島の中心で眠っているとは、海の国の歴史による情報だ。しかし、島に派遣された警備の者は全て帰らぬ人になったともゼフは言っていた。
では、どうして精石がそこにあると分かるのだろうか。
さらに、普段であれば正確な場所は精霊に聴けば分かることだが、今回は前例の無い精霊の居ない場所。
頼りになるのは、その足と情報、考える頭だけである。
精霊王とて万能では無い。それもまた、クランクを見ていれば分かりたくなくても分かることで、頼ることを知らないサイードにとっては、自分の選択だけが行動の要素だ。

決して長い付き合いとは言えないゼフであるが、彼はそんなサイードの性格を理解しており、気付きながら言葉にしない選択を取っていた。
だが、クランクは違う。
この時彼は、今になってやっとその疑念に気付いており、尚且つサイードを分かっていない。
無駄な意地を窘めるという点では、その選択は間違っていなかっ

たのだろう。しかし、身の安全を考えるのであれば、確実に口は災いの元であった。

「ていうかさ、場所、分かってないんでしょー？　だったら、少し休んでも」

「……なあ、ゼフ」

この時の乾いた音だけは、足元の何かが砕けたのでは無く、クランクの何かが砕けかける音だったのかもしれない。

馬鹿が、と同族を案じるのではなく見放したゼフに、サイードは抑揚の無い声で問いかける。

振り返らずにだったので、彼が今どんな表情をしているかは分からなかった。

「精霊王って、殺せるか？」

「え……え！？　ちょっと、俺、本当の事を言っただけだよね！」

やっと置かれた立場を理解したクランクであるが、本人を無視してゼフはありのままを口にする。

「消えることは……可能だな。ただしその場合、何かか誰かに力を移さなければ、世界の均衡は崩れてしまうが」

「チッ……手加減は苦手だ」

「手加減って何の！？　ていうか、舌打ち！？」

わりとそれ自体が重要な情報だったと思うのだが、サイードはそ

れよりも出来ない事の方が腹立たしかった。
冷や汗を掻きつつゼフに縋りつくクランクだったが、ゼフは我関せずを貫いてどうするのだとサイードを見る。
サイードは、諦めたように側にあった1本の歳若い木を蹴って砕き、ドサリと腰を下ろした。

「この子、怖すぎるんだけど」

恐らく、ゼフが先程の事を言わなければ、木ではなくクランクがその目にあっていたことだろう。
半泣きで自分の身体を抱く彼は、ぼそりとそう呟いていた。

「とりあえず、お前等のどっちか、一旦消えろ。……魔力が持たない」

パキン、パキンと手元の木の根や石を八つ当たりに砕きながら、それでもサイードは、しっかりと考えることにした様だ。
知らなければ考えなしに動けるが、分かっているならより確かな方向に進むべきである。相手が人であれば、逆に楽なのかもしれない。常識は違っても本質は変わらず、ある程度予想は付けられるのだ。
しかし、今回は何時も以上に分が悪い。
命は魔力を有しながら、同時に自然界に魔力を放出している。そして、精霊によってそれは増して循環する。
ただ、この島だけは違う。
形はあれど、木も土も何もかもが空っぽで、ゼフ達が普段実体化するのに必要な魔力は自然界のものを用いているのだが、今はルシエのものを使うしかない。
となると、限界が来てしまう。
かといって、1人で一夜を過ごすには危険が大きすぎた。

ここまでで、突然大木が落ちてきたり足場が崩れたり、そんな出来事が多々起きているからだ。
人間には睡眠が必要だが、精霊王は協力はしてくれど代わりに動いてくれるわけでは無い。
それは、ゼフと行動を共にするだけで一目瞭然だった。

彼等は彼等の意思と、契約を結んだルシエに付いて何かの下で生きている。故に、信用はしても信頼はしない――しては、ならない。

「……しっかり働け、水の」

「ちょ、相談ぐらいしよーよ！」

ゼフ達も、サイードの負担を知っているからか、常に側に居ようとしている割に今回はすんなりとその指示を受け入れた。
どうやら先にクランクを残す事にした様で、サイードが一回瞬きをした瞬間、何の動作も無しにゼフは景色から消える。
彼等のいうところの、精霊のみが立ち入ることを許された世界の空間に行ったらしい。
攻撃特化のゼフが残るべきだと思うのだが、機嫌の悪いサイードと一緒に居る息苦しさを知っている彼は、我先にとクランクを生贄に逃げたのである。
サイードとしては、是非ともゼフに残って欲しかった。万一の時にというよりも、自身のストレスがこれ以上溜まらないようにだ。
残念ながら目の前に居るのは、消えたゼフへ必死に助けを求める使えない奴だけであるが。

「1時間だけ気張ってろ。それで十分だ」

深い溜息の後に仕方なくそう零し、マントを敷物に横になったサ

イード。クランクの返事も聞かずに、彼に背を向ける形で瞳を閉じる。

怒られる、と勘違いしていたクランクは、その様子についていけずに頷くのが精一杯だった。

しかし、彼は盲目では無い。歩き続けた身体。自分達が実体化していることで、延々と魔力が垂れ流しになっていたこと。その疲労が、たったの1時間で回復するわけが無いと、気付いて当然である。

それに、鍛え抜かれた精神と肉体ならまだしも、幾ら装っていようとも、その身体は過酷な生活を十数年の間知らなかったはずだ。

「……君は、どうしてそこまで出来るのかな」

空色の羽毛を耳に掛け、ゆっくりと腰を下ろしながらの言葉に返ってくる声は無い。代わりに、聞き飽きた乾いた音がクランクに応え、彼は垂れ目の瞳を悲しそうに細めた。

「力が欲しい気持ちだけなら、分からなくもないんだけどねぇ」

何かに凭れようにも空っぽなせいで危なく、両手を後ろに付いて体重を掛ける体勢が最も楽な状態である。それは良いが、人懐っこく好印象を与える顔には、胡坐を掻く姿が笑ってしまう程似合わない。

そうしながらクランクが見つめるのは、モヤシみたいに頼りなさそうな体格をした青年――いいや、か弱い少女だ。

寝に入ってから微塵も動かないくせに、恐らくサイードは、クランクの独り言の全てを逃さず聴いているのだろう。

「風が居たら、止められただろうから言えなかったけどさ。海は、嫌になっちゃったんだって」

クランクも、分かっているから言葉を止めない。
地についた彼の長く美しい指は、無意味に動いて空っぽな欠片を削り出していた。

「王の義務も、何もかもがぜーんぶ、疲れたらしいよ」

水面に浮かぶ花弁のように儚い声で、クランクはそう言った。それでもサイードは何も返さない。
仕方なく、虚しい気持ちを隠すように嘆息したクランクは、膝に腕を置いて前のめりになる体勢へと変わり、ふふっと1人不気味に笑った。

「君(サイード)じゃあ、話にならないみたいだねぇ。ルシエ、出してよ」

挑発にもならない挑発を受け、サイードの身体がピクリと反応した。

風が吹かない。それはつまり、悪戯妖精(シルフ)が居ないということ。木も大地も中身は空洞で、人も立ち入らない場所。
それは、ルシエ達に様々な障害を生んでいるが、考えてみれば、この世界で唯一敵も味方も存在しない自由な空間だった。
勿論、海の王による見えない攻撃には警戒しなければならないが、それ以外で彼等を監視する者も盗み聞きする手段も無い。

クランクは、反応を見逃さず、ふわりと春に舞う綿毛の様に柔らかく微笑んだ。

「……真実を、教えてあげるよ？」

最弱の精霊王。彼は、精霊の中で最も人に近しい存在なのかもし

れない。いや、人の心を理解出来る、と言う方が近いか。
人間は、自らの子を愛することができる。しかし、精霊王は生み出した眷属を道具とさして変わらない目で見るしかしない。
しかし、水の精霊王は、虹色の雫（オンディーヌ）のみならず他の属性の精霊までもを慈しめた。
だからこそ、同族である精霊王に変わり者だと笑われるのだが、それはもしかしたら、最弱だからこそなのかもしれない。

「初めから、寝る気なんて無かったくせに、素直じゃないね」

その囁きは、サイードよりもとても人間らしい気がした。

ノスタルジア

「子供、なんだろ」

「……ルシエをお願いしたんだけどねぇ」

クランクの希望空しく、サイードはサイードのままであった。

のっそりと起き上がった彼は、右膝を立て右肘を乗せて剣呑にクランクを睨む。

幾度も剣を交え、生死を感じてきた結果、その鋭さは確かに強烈だった。まるで、研ぎに研いだ名刀のように。まるで、誰もを拒絶する絶対不可侵の結界を作り出すが如く。

しかしクランクは、それ以上に悲しかった。

そこまで彼等を駆り立ててしまう何かと、そうさせてしまった切っ掛けに対して、目の前に自身の無力さを提示されたかのような色を宿してサイードを見る。

「海の王がお前の言った通りであれば、相手は子供だ」

「しかも、そこに食い付くんだ」

疲れているのだろう。サイードは眠たそうに時折目を閉じて、無意識に浅い息を何度も吐いた。

それを申し訳なく思いつつ、クランクはこんなチャンスは2度と

こないだろうと、彼等と1対1で向き合いたいと願う。

「真実、知りたくないの？」

クランクは、知りたかったのだ。彼は、誰よりも人の傍に居る。立場も思考も、全てに於いて。だからこそ、どうしても納得がいかない。

人の性格（なかみ）は、生まれついたものよりも置かれた環境が大きく影響する。それは人間だけじゃなく、犬や猫にしても同じ。

ゼフは大した問題だと思っていないだろうが、ルシエ達の価値観の元に気付かなければならないと、クランクの心は切実に訴えてくる。

しかし、それを覗くには、こちらも曝け出さなければ微塵も警戒は緩まないだろう。

だから、彼は揺らがせる為にそう持ち出した。

睡眠の邪魔を怒るでもなく黙ってクランクの言葉を聞いていたサイードは、そんなに言いたいのかと呆れながら、伏せていた瞳を開きそれに合わせて口角も上げていく。

そこには、躍動する煌きがあった。かかる銀も相まって、まるで月が零（ムーンドロップ）した雫のようだとクランクは感じた。

「俺達の苦労を、無駄にするって言うのか」

その時、サイードの瞳に宿ったのは、愚かしさを愛する感情というのが一番相応しいかもしれない。もしくは、ノックをしようとも扉は決して開かないという表明か。

それでもクランクは引けないのだが、彼は分かっているのだろうか。真実、と言っている時点で、現在に偽りがあると明かしている事を。

「俺はね、人形劇を見ても楽しいと思えないんだ」

さらり、さらりと空が揺れる。髪も瞳も、爪まで彼は空色だった。
それをサイードに向けて伸ばしたところで、月を掴む事は叶わない。零した雫さえ、受け止められない。
分かっていながら、クランクは言った――知りたい、と。

「何を」

「君の、歴史」

彼等は、ここまで直球な誰かに出会った事が無かった。しかもサイードは、特にこうやって踏み込んでくる無法者を嫌う。
だからこそゼフが心地良く、だからこそヒントを与えようと思うのだ。それをどう処理するか、観察するのが楽しいから。

しかし、アピスに来てから短期間で様々な事柄と遭遇し、様々な心情と対面してきた彼等。
人はそう簡単には変われない。されど、見解とは常に変動していくものだ。
サイードは最近、その中でも大きな分岐点を向かえている。

真っ直ぐ真摯に向かってくる空に、月の雫は触れることを許した。
掠る程度、ほんの少しだけ。

「俺の歴史、ねぇ。……っっても、陽の国から語れば良いか？」

「笑えない。言っておくけど、こう見えて俺は真剣なんだよ」

「ははっ、垂れ目ってのも困りもんだな。緊張感がまるでない」

三日月を真似る空に、サイードは髪をかき上げながら笑った。

「なら、もっと分かりやすく言うね。河内紗那の歴史が、俺は知りたい」

「俺達は、確かにそいつを元に生まれたが、本人（オリジナル）はとっくに消えてなくなってるぞ」

もし、今のサイードを見て、丸くなったと感じる者がいたとしたら、それは完璧に彼に騙されているということになる。

覚えているだろうか。サイードがサイードになった時、彼は奪う者と定められた。

それは何も、命や物だけでは無い。心、も当てはまるのだ――ただし、この場合は奪うというよりも惑わすと言った方が正しいのかもしれないが。

「捨てた、ということ？」

「あぁ」

しかし、クランクには、サイードの仕草全てが本物に見えていた。

彼は幾多もの人の感情に触れてきた。だから、好きであり嫌いとなっている。

ただ、それは睥睨（へいげい）しているとも感じられることで、誰をも理解できると思っているのであれば傲慢でしかない。

「だったら、俺が拾うよ。それなら、文句無いでしょ」

それでも、クランクはそう言った。
それに対してサイードが零した失笑は、一体何を含んでいるのだろう。
歴史は、学ばせてはくれど教えはしない。そこにあるのは、事実と欺瞞に満ちた声や言葉の集合体。
彼は、その中から掴み取ることが出来るのだろうか。

「仕方が無いな。後で、つまらないとか文句垂れるなよ」

そのものであるクランクにさえ癒しも腐敗も及ぶのだと、彼は結末になってやっと知るのだが、それはずっと先の話。
そしてこれは、ルシエ達にとっての敵へと向けられた最も大きなチャンスだったのだが、君は気付けるだろうか。
思い出す為、月は瞼の裏に隠れた。一言も聞き漏らすまいと真剣な空に、月の光に染まった雲で紡がれた糸が揺れる。ゆらゆらと、それは猫がじゃれるよう誘ってくるかのように。

「……雨ばかりの、憂鬱な季節だ」

サイードが語り出した瞬間、乾いた音さえ黙ったのだった。

河内紗那。彼女は、梅雨真っ盛りの湿った日に産声を上げた。
標準体重、母子共に健康。何の問題も、特筆するものも無い普通の赤子であった。
そして、その成長過程にも、これといって特別なものは何も無い。
周りと同じように立つことを覚え、言葉を覚え、成長していく。
しかし、平凡な彼女の両親が、周りとは少し違った価値観を持った人間であったのは確かだ。
2人は極々一般的に、恋愛結婚の末に彼女を生み落とした。
彼等は、夫婦二人三脚で会社を経営する者であった。

それは、別に可笑しい事では無いだろう。確かに平均以上の収入を得る富裕層の人間ではあったが、それは違いにはならない。

彼女に影響を及ぼしたのは、彼等が特別を好む人種であった点だ。

平凡は劣等、秀でることが優等。つまり、彼等は自分達が勝ち組みで、尚且つ優秀で、だからこそ、そんな親を持つ娘もまたそうでなくてはならないと考えていた。

それにより彼女は、同年代の子供達が泥に汚れて遊ぶ時間、教科書片手に机に座り、遊ぶ事が仕事だと集団行動を学ぶ時期に、様々な知識だけを詰め込まれる幼少期を過ごすこととなる。

だが、それもまた、彼女のみが特別変わった人生を歩んでいることにはならない。

確かに、平凡とは言い難い環境ではあったが、言ってしまえば余裕のある暮らしの代償でもあるからだ。

同じような境遇を持った子供は、地球にもアピスにも数多存在するはずである。

人には、得意不得意がある。人だけでは無いが、生態としてではなく社会で生きる上でもそれは出てくる。

言語に長けるが、数字に疎い。料理は美味いが、掃除が苦手。千差万別種類があるものだが、何か1つでも不得意だったら劣等とはならないことぐらい、わざわざ説明しなくても大丈夫だろう。こんなこと、言葉にする必要を感じない程当然のことだ。

河内紗那。彼女にとって不運だったのは、両親が数字でしか優等を認められない事にあった。

そう、テストの点数。成績だ。

彼等の子供は、決して劣等では無かったはずである。そもそも、子供にも大人にも、そんなものがあるのだろうか。

この問題を考えはじめれば、話が逸れてしまうこと確実なので無

視するが、彼女は残念ながら興味ある分野には存分に力を発揮できたが、その反面、湧かなければ悲しい程に無関心となる性質だった。
それ故、成績はどうしても平均から抜き出ることが出来なかった。
ある意味素直すぎて、不器用だったのかもしれない。

それでも、両親は諦めずに様々な手段で教育を施す。しかし、どちらにとっても残念な事に成果は出なかった。
そして、そんな親子にとうとう終焉は訪れた。彼女の両親は、完璧に彼女を諦めたのだ。
馬鹿な話である。成績が良ければ、未来の可能性は広がるかもしれない。
しかし、悪ければ生きていけないと、自らの子供でいる資格は無いと何故言えよう。

河内紗那。彼女が親と最後に過ごしたのは、小学3年生の社会の小テストが返却された晩だった。
それ以降、彼女は食事を自分で用意して独りで取ることとなり、行事も常に独りで出席することになる。
卒業式も、入学式も、運動会が体育祭に変わるまで成長しても、ずっと、ずっと。

「お金は出してくれてたし、捨てられたわけじゃないから良いよ」

これは、彼女がいつか零していた言葉だ。
しかし、家を追い出されないから捨てられていないと言えるだろうか。
社会的に禁忌として、非難の対象になるからそうはならなかっただけで、彼女は法律に触れない姑息な方法で見捨てられたのではないか。
思うのだ。確かに、虐待というには些か大袈裟なのかもしれない。

しかし、嫌われているで済ますには無理があり、当てはめるなら無関心。

それが物事であれば、幾らでも感じて構わないだろう。しかし、人に対してその感情は憎しみよりも残酷で、愛より軽やかで。言葉よりも隙間無くびっしりと、存在を否定してしまう。

それでも、彼女は笑って言ったのだ。

「でも、それが今の私を作っているから。私が私を好きなんだから、それで良いでしょ？」

返す言葉が見つからなかった。本人が良いと言うのであれば、彼女以外が評価しては駄目なのだろう。

しかし、それまでの間に、普通に愛らしく普通に笑う子供だった彼女は表情を欠いて、捻くれ者と言われて他者と中々相容れない人物になってしまっている。

そうさせたのに、少なからず育った環境は影響しているだろう。もっと、他者に好かれる者になれたはずなのだ。

「仮に、人に好かれる性格だったとして。それで、私が私を好きと言えなければ価値は無い。だから私は、満足してる。好きと言えている間は、今の私のままで構わないよ」

そして彼女は、興味は無いと読書に励むのだった。

河内紗那。彼女はそういった人物に成長した。

それが、彼女の簡単な歴史（じんせい）である。哀れで、平凡で。捻くれる理由にはなれど、世界を捨てて幾つもの命を軽やかに奪える心の要素にはならない歴史。

「そうして、オリジナルは神の試練によって捻くれ度を増した後、俺達を作って消えたのでした。めでたし、めでたし」

時間にして、２０分程。

本人にとってはつまらない話を語り終えたサイードは、大きな欠伸で締めくくった。

世界を捨てた捻くれ者の結末は、あまりに呆気なくあまりに簡潔。

聞き終えたクランクの表情は、俯いていて分からない。しかし、納得していないのだけは確かだろう。

彼が知りたいのは、あくまで歴史だ。これだと、ただの生い立ちでしかない。

そんなものから、どうやって学べと言うのだろうか。どこに、彼等の動力源があると言うのか。

「……空っぽじゃん」

しかし、サイードは月を隠したままで面白そうに笑っていて、ぽつりと落とされた言葉でさらにそれを増す。

空色の髪は、まるで山奥で静かに流れる小川のせせらぎのように揺れながら、クランクの表情を隠し続けた。

「彼女は、綺麗な言葉で飾るだけで、まるで空っぽだよ」

人に好かれるには、まず自分を好きでなくては。自分で自分が嫌いなのに、人が好きになってくれるわけが無い――よくある言葉だ。

でも、とクランクは思う。

「自分が好きだから、それで良いってわけでもないでしょ」

クランクとて、精石（じぶんたち）を壊す上で、人と争うのは避けられないこと

だと重々理解しており、さらにルシエが人を殺さないといけない理由も知っている。

地球とアピスは天秤に乗った関係だ。それには、命の数も含まれている。

アピスで減少し続けてきた精霊は、確かに命である。しかし、命の前に成分なのだ。

崩れてしまったバランスの影響を身代わりの如く受けた地球。相次いだ災害で、まさか猫の子一匹死んではいないと思えるだろうか。

救世主なのに悪。なにもそれは、精石を破壊するからだけでは無かった。本人には不本意かもしれないが、人を救う為に人を殺すことも含まれている。

だから、クランクはそれを責めることは出来ない。

だからこそ、彼はルシエ達の動力源を知りたい。

精霊王云々を抜きに、快楽主義者に救われる世界だと皮肉を笑わなくて済むように。

「俺に言われてもな」

「だって、そんなことで、そんな人生が、君たちの根本になるとは到底思えないじゃん」

それに対しサイードは、英雄だって昔は荒くれ者だったりするだろと笑うのだった。

精霊王が、世界の為に生きているわけでは無いのと同じように、切っ掛けとは些細なもので十分なのだと。

「でも、空っぽか……なるほどねぇ」

サイードは、今度は声を出しながら笑った。くつくつと、クランクの感想を嬉しそうに反復する。
項垂れていたクランクは、怒らせたかとヒヤリとするも、その反応に違和感を感じてやっと顔を上げた。
「俺は、この島を縮図だと言ったが、ルシエ（あいつ）は違った」
乾いた音は、いつの間にか元通り耳を刺激している。近くの石を拾ったサイードは、わざとそれを砕き、どういうことかと見つめてくるクランクに首を傾げながら告げた。
「なつかしい、ってさ」
ふとした仕草がやっぱりどこか男らしくない、と関係無い事を頭に浮かべながら、クランクはそれを受け取った。
途端、彼の頬にサイードには決して流れることのない月の雫（ムーンドロップ）が伝う。
突然の反応に驚いたのは、サイードである。ぎょっとして、思わず身を引いていた。
罪悪感とか、そういったものからくる反応では無く、心の底からひいたのだ。
「お前なぁ、まじで意味がわかんねぇ。ルシエが良いなら、あいつが出てくる時にだけお前も実体化しろよ」
やりにくいったらありゃしねぇ、とぼやくだけで慰めようとしないサイードに、クランクは頭を振るだけで言葉を発しなかった。
彼は何を想い涙したのだろう。
罪の重さに対し、痛める心があまりに少ない事実に打ちのめされたのか。たったそれだけで、この大役を引き受けてしまったのかと

浅はかさを嘆いているのか。感じる心を培えてない幼さを、悲観しているのか。

――この子達は、愛を知らないのだ。

それが、クランクの結論であった。

さめざめと、彼の涙は止まらない。自分を見つめながら黙って泣かれる、というある種の拷問を余儀なくされたサイードは、深く嘆息して立ち上がる。

その際、下に敷いていたマントを手に取って、容赦なくそれをクランクの顔目掛けて投げつけた。

「うぶっ」

「あー、もー、ほんと調子狂う。お前さ、俺が馬鹿正直に……素直に、一から十まで全部話したと思ってるのか？」

奇妙な声をあげるクランクを無視し、さらに彼の背中に足を乗せて身体を地面につけさせたサイードは、足元で聞こえてくる悲鳴を完全に無視している。

可哀想なクランクは、くぐもった悲鳴が高くなる毎に背中にかかる体重が増していることに気付いていなかった。

「河内紗那はな、分かってたんだよ。気付いていた」

「ぶ、うふー！」

とりあえず足を退けて、と叫ぶも、マントのせいで残念ながら意味が通じない。嬉々と、分かっていながらサイードは、何言ってるか分からないとすっ呆けた。

「少なくとも、どうやったら親に見捨てられなかったか。どうやったら、ごっこ遊びが続けられるか分かってた。あの女は、自分本位な親に振り回されている風を装って、上手い事立ち回ってただけの捻くれ者に過ぎない」

声色は楽しそうだったが、そこには恨みにも似たものを感じる。誰に対してかは分からないが、言葉にすることがまるで許されないかのようだ。

大それた何かを望んでいたわけではなかった、と空耳が聞こえた。

「お前が、俺等に後ろめたい何かを持っているにせよ、この罪は俺等だけのものだ。例えこの世界に来た当初は、まだオリジナルが残っていたとしても。そのオリジナルが、そこら辺にいる極々平凡な女だったとしてもな」

「え、じゃあ陽の精石は」

「そん時はとっくに俺だ」

ダメージによってか、次第に抵抗が薄まってきていた足元の物体を気にかけず、さらに独り言を続けていたサイードだが、さらりと言われた重要な事をクランクは聞き逃さなかった。

慌てて身体を起こそうとしたが、非道にも足の力を緩めなかったサイードのせいで、中々に美しい海老反りを披露することとなったクランク。

意外に身体が柔らかいんだなと噴き出すサイードに、彼は笑えなかった。

「でも、この世界で一番最初に殺しをしたのは、俺でもルシエでも

無い。あの女なのは、嘘偽りの無い真実だ」

「……なんで、一番最初に俺を解放してくれなかったのさ」

「さあね。ま、そもそも、こうやって俺等を生み出した時点で狂ってるってことだろ？　環境が内面を作るのは確かだろうが、良い人が実は殺人鬼でしたってのはどんな世界でもザラにあることだ」

周囲も本人も、気付いていなかっただけで。

現在、デルの想定通りに難易度の順に精石を壊していくこととなり、今更理由を説明する必要は無いとはぐらかしたサイードに、それでも俺が最初だったらと力尽きながら零すクランク。

そんな彼に、サイードは冷たく吐き捨てるのだった。

「現実は誰にも微笑まないんだよ。良い勉強になっただろ？　精霊王様」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1238y/

その背に黒の羽根を

2012年1月10日04時52分発行